



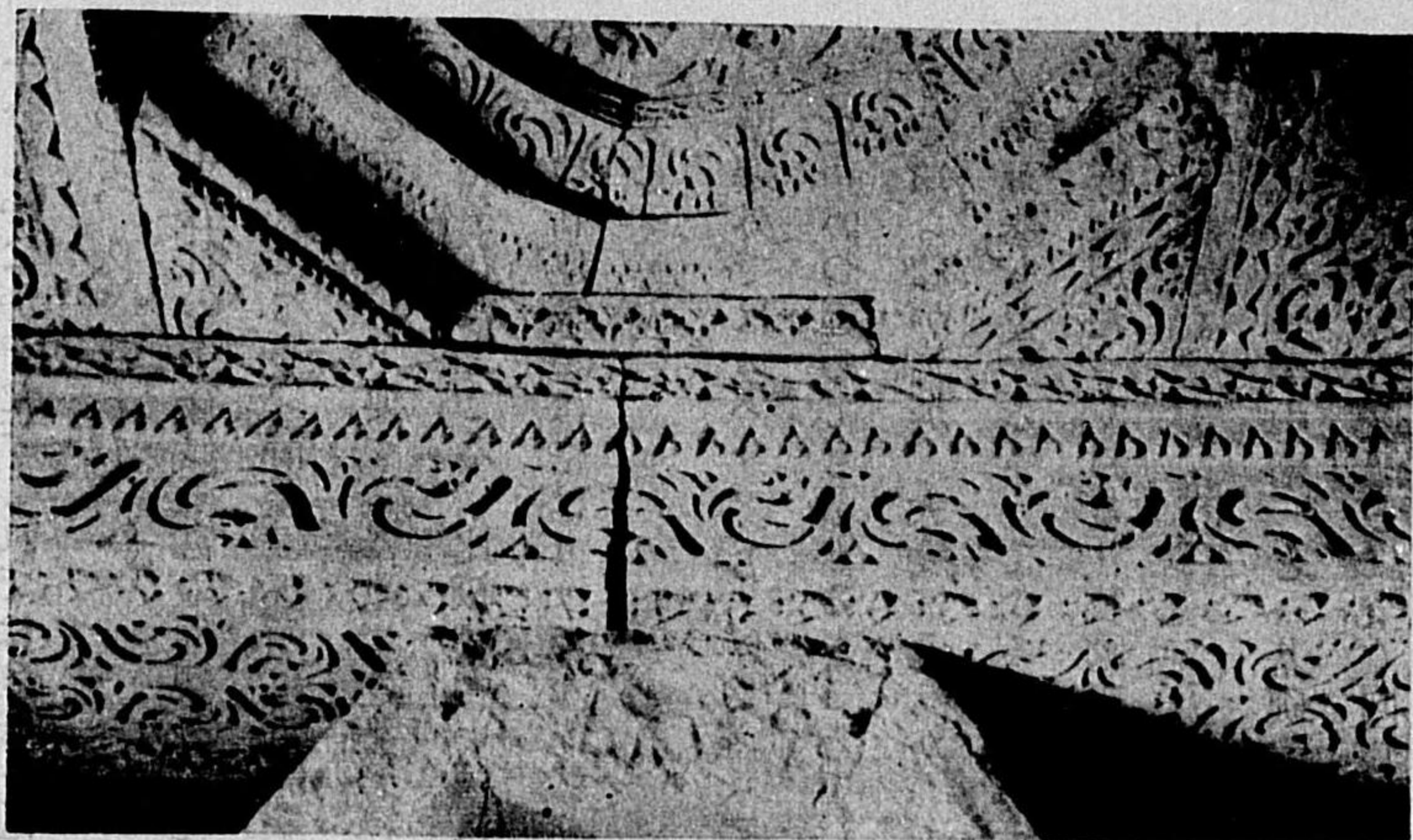
（昭和十一年一月二十五日）
グワリヤ城塞内テリ・カ・マンデル側面出入口
出入口の中央にある縦の石は欄の墜落を防ぐために入れたもので、いふ迄もなく後補。其欄の中央に飛び出してゐるのは、兩方に翼をひろげた伽樓羅天で、ナガは居ないが出入口の上につけてゐるのが、後に示すネバルの祠堂の夫れと一脈相通するものがないこともあるまいと思ふ（第481—484頁参照）。正面の入口を入ったところの天井に近く連続等脚三角様の飾りがあること、サンチ丘上の東方廢堂（第129・131・132頁）及びサス・パフ堂天井（第183頁）の如し。

てきた。船長・事務長・機關長だけは止むを得ず制服をきてゐたが、部屋に歸るや否や直に上衣をぬぎ捨ててしまうのが常習であつた。實際あつてやりきれないのである。下級船員に至つては一層露骨、ショート・パンツをつけてゐるのは上等の方で、もつとひどいものもあつた。勿論あとは全部裸體といふ有様だつた。暑いところではかうしなげればやり切れないので、強いて衣服をきてゐるのは、反て衛生上有害であらう。南印の人人や乃至亞弗利加の人を素裸で野蠻だと一概には言へまい。成程彼等は文明開化の程度に於いては、遙かに歐米人には及ばないが、はだかは止むを得ない。はだかの點に於いては、燕尾服や大禮服と同等に見るべきである。全身白病にかかり色素の全く缺亡せる歐米人に、國にゐて裸で暮せといつても出來ないのと同じであらう。但し日本にゐて裸體は不作法である。これ位であつたといつて裸になるのは、忍耐力缺乏症患者と見なして差支ないから、私は賛成はできない。

二日間の見學で得る所が多かつたのは幸であつた。そのうちの一つは是非ここにかいておきたいと思ふ。既に記した様に、サンチ丘東方廢堂の内部天井に近い石の側面に、切れを三角にたたんだ様な飾があつたが、あれと同じものが、この城塞内の建物なるテリ・カ・マンデル（Tei-ka-mandir）及びサス・パフ堂（Sasu Bahu Temple）にあつたのを見出したときは、少なからず驚かされたのであつた。此等の建築は一八八一—一八八三（明治十四年より十六年）にかけて、一一六二五ルービーをかけて大修理をしたさうで、その事が前者の門の銘文に刻んである。

殊に後者は一〇九三年(寛治七年)建造といふ明らかな銘文があり(……THE INSCRIPTION RECORDING THAT THE EDIFICE WAS COMPLETED BY MAHIPALA A KACH HYAHA RAJPUT PRINCE OF GWALIOR IN THE YEAR 1093 A. D.)、其唐草文様の中に、先年鹿野苑で發掘されたばかりで、現場にあつた僧坊軒飾(第28頁)と稱するものと、全く同一種と認められるものであつたので、先年あれを少なくとも五六世紀頃のものではないかと思つたのは、どうやら誤であつたらしく、あんなことをかいたのは(印度旅行記)2(挿繪及記事)大失敗であつたことが判つた。あの僧坊軒飾は決してその様な古いものではない。既に大概同時代のサンチ丘上東方廢僧坊内にある重層佛殿天井に近く現はれてゐる通り、もつと時代は下がる筈である。あの時サンチへは行つたが、前號に告白した通り、氣がつかかなかつたし、グワリヤは見學しなかつたので、誤つたのである。其まゝ今迄持ちこしたのであるが、夫れにしても揚げ足取りの盛な時代に、攻撃する人がなかつたのは、齒牙にかけるに足りなかつたか、或は誰も氣がつかかなかつたか、何れか其一であつたらう。ここに其圖を掲げるといいのであるが、いろいろの都合で略してをく。先年施本として印刷した書物には入れてある。

城塞の入口の一なるアラムギタ(Alangiri)門を入つたところの大きな建物、グジャリ・マハル(Gujari Mahal)の一部を考古陳列館にあて、主としてグワリヤ州出土品を出陳してゐるが、當分閉館とのことで一見さへ出來ないとあきらめたが、二十五日には前一〇・三〇迄開館してゐるといふことを門で聞いた。何でも此州にきた歐客接待のため、特に開館したさうであつたが、時計をみたら残りは僅に三



上。グワリヤ城塞内 サス堂一部
下。同 パン堂一部

(昭和十一年一月二十四日)
下圖物差は曲尺の一尺

上圖に於いては天井に近い三角飾、下圖に於いては壁面及び柱形に刻してある唐草文様に注意し、上圖と比較せよ。三角飾はサンチ丘東方廢堂天井に近くあるものと同様であり、上下圖に刻せる唐草文様は以前は法隆式と思つたが、これ等の建物が第十一世紀末(一〇九三(寛治七年))の建築といふ證據があるので、もつと後れてゐることが判つた。第129・132頁参照の事。

十分しかなかった。これでは到底一巡さへ覺束ないから、翌日來るといったら開館するや否や不明とあつたので、入つてみた。

二十五日の午後は王宮の拜觀をした。これはつまらぬと思つたが、ワッサンが連りに勧めるので行つてみる氣になり、宿屋の番頭に電話をかけておいて貰ひ(ただこれだけの手續で拜觀は許可される)出かけたところ、二三室の案内を受けたが、要するに歐米建築の模倣に過ぎず、旁旁輕薄だといふ感がしたので、早急に退出して町の觀光をしたところ、比較的古い家は全然モスク(回教寺院)の如く、例の窓があるので大變に面白かつた。大きな新建築ではやはりサラセン式を取り入れた警察署の建物がよくできてゐた。

城塞外ではムハマッド・ガウス (Muhammad Ghaus) の墓が有名であり、また事實美事な建築であつた。いつ迄あつてもあきるところではない。此直ぐ傍に音楽家タンセン (Tansen) の墓もある。私はまるで知らなかつたが、大變にゑらかつたさうだ。だから今でも音楽を以て志を立てようとする青年男女は必ずお参りをするさうである。此等大小廟墓の後方に多數の回教墓がある。その前には殆んど總て一基の石燈籠がたつてゐる。我國の墓地にあるのと殆んど同じ様な簡單なものだが、其形は小回教建築をみるが如く、「火袋」(軸部に當る)の上に大きな「笠」(軒の出の深い廂に當る)があり、最上部は「寶珠」(葱花屋根)に終つてゐる。これで「中臺」と「基礎」とあつたら、ビジャプールのジャーマ・マスジッド其他に於いてみることもできる石燈籠と、全く同じものになるのであるが、印度の石燈籠として、まことに面白い例を提

供してゐるのである(第166頁)。

城塞内には既記の三角飾を有する建物の他に、いくらも見るとすべきものはあるが、其内に群を抜いてゐるものはマン・マンデル (Man Mandir) 宮で、堂堂たる大建築。夫れに並べるビクラム・マンデルと共に、懸崖に面して建つてゐる。前日に一度内部を見學したが、翌日は寫眞を少しとりたくてもう一度入つてみたとき、番人は地下室へ案内をした。不思議に思つて理由を尋ねた所、歐客接待のため、マハラジャの命により地下室へ電燈をつけたが、まだ消さずにあるから、消えぬうちに見ろといふのであつた。

多少勿體をつけて禮金にありつかうといふ寸法らしいが、とにかくめつたにない事らしいので、直に入つてみた。地下室は二階になつてゐて、一階(即ち上層)が半屋で二階(即ち下層)が風呂場ださうである。嘘か實かマレー等に全然書いてないのでみると、一般に公開してはゐないのであらう。此宮殿は一八九二年(明治二十五年)に大修理をなし、新に一基の塔を建てたいことが銘文に刻みつけてある。尙ほこの建築はラジャ・マン・シン (Raja Man Singh) の治世(一四八六—一五十六年)に建築されたもので、我國なら正に室町時代の大大建築である。

三〇、グワリヤからラフル・ピンチ (Rawal Pindi) へ

遂にグワリヤの最終日がきた。二十六日は朝第一に驛へ行き、デリー驛長宛寢臺予約の電報を打った。然るに此日は日曜日だからとて、料金二倍をとられた。次に前日僅か三十分間みた考古陳列館へたのめしに行ったところ、此日は開館してゐたのでゆつくり観覧をした。汽車は一五・一六にでたが大分こんでゐて、ニュー・デリーで漸く下の寢臺が得られた。アグラでは超満員で乗れずに困つてゐた人もゐた。一等でこんな有様は、どこかの國の汽車にも、外國人ばかりのせて其國の人をこんな目に遇はせる場合が、近頃は知らないが、以前にはよくあつたのを思ひ合はせ、氣の毒に思った。デリーでワッサンに今朝の電報につき、驛長に談判させたが、まるで要領を得ず。遂にそのまま其汽車に居据はつた。此朝料金 Rs. 2 As. 2 (約二圓七十七錢) 拂はされた電報は全く無駄になつて了つた。

汽車は夜通し走りつめ、二十七日朝時間表より二十分後れてラホール (Jn.) についた。ここでベシヤワール (Peshawar) 行のフロンチャ・メール (Frontier Mail) 列車へのりかへた。此汽車がでるのは九・三〇と思ひ込んでゐたのに、丁度九・〇〇であつたので、僅か十分間のことで間にあつた。併しながら此汽車は昨夜若しデリーで乗換へておけば、其ままでよかつたのである。とにかく汽車中は唯一人、食堂車へ行つても一人、だから大分いい氣持の旅をすることができた。

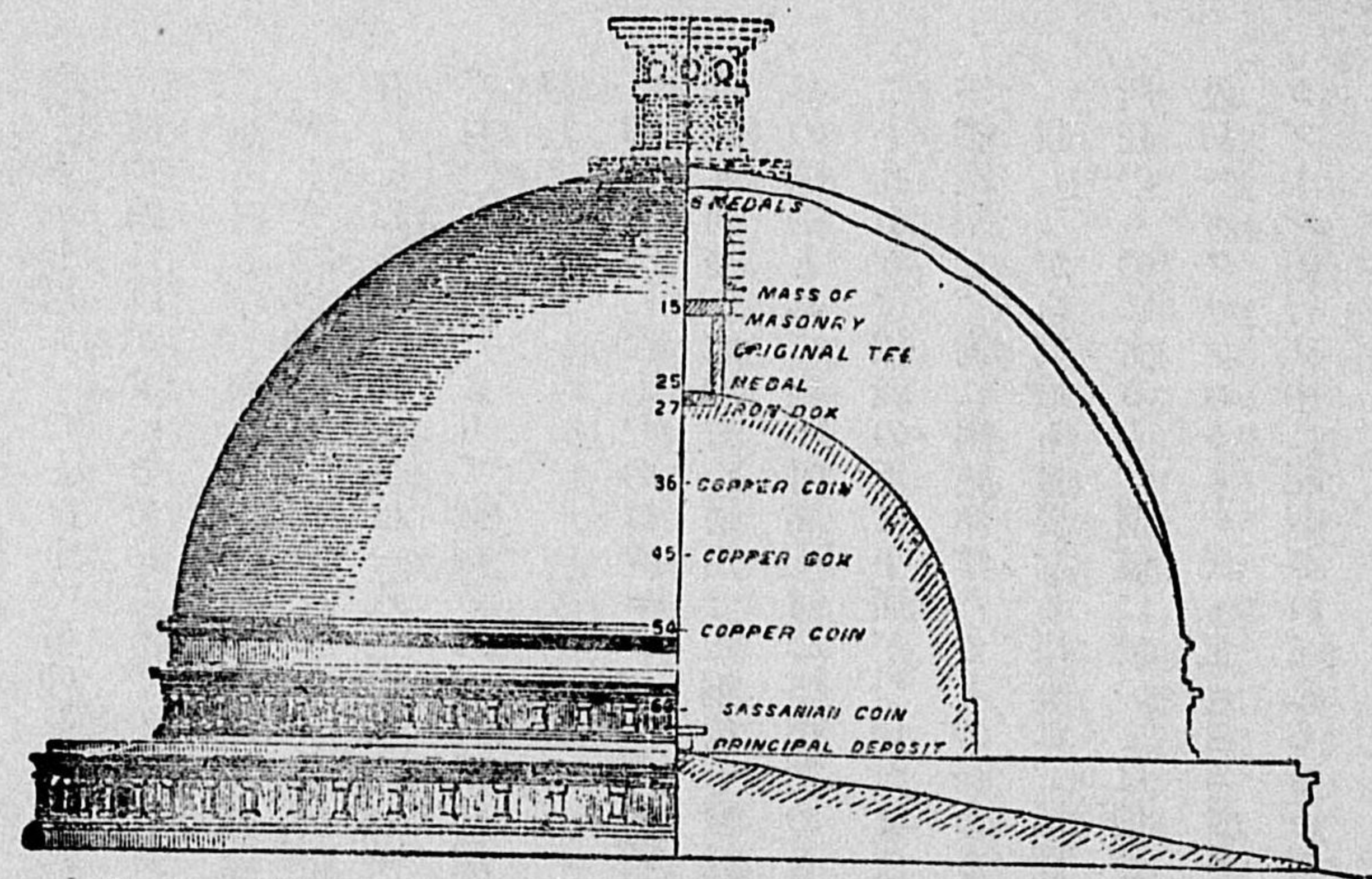
マニキヤラ・トープを見學するためには、ラフルピンチまで行つた方がいいか、或はもう一つ前の急

行の停る驛たるマルダン (Mardan Jn.) の方がいいか、大分迷ひながらも、どうもピンチの方が大驛だからよからうと勝手にきめて其通り實行した。マルダン驛をでて暫くして線路の右側に、而も間近かに大きな伏鉢型の塔が見えた。時に一四・五五。透き通る様ないい天氣であつたので。塔身全體に日光を受け、はつきりと青空に建つてゐた。急いで雙眼鏡を取出したが、汽車が動いてゐたのでうまく見ることができなかつた。

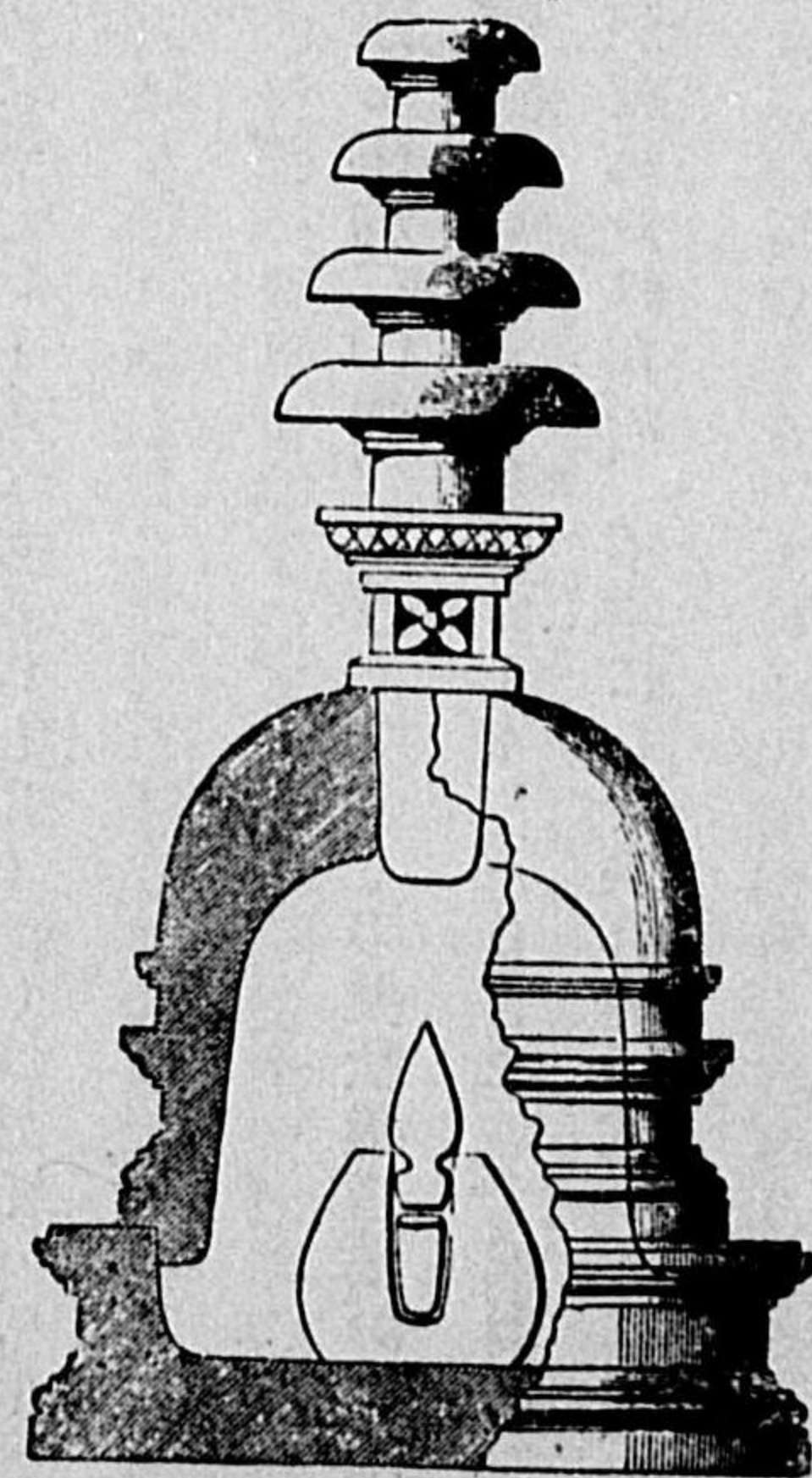
ラフルピンチに下車するなり、驛員にマニキヤラ塔のところ迄自動車が行くかときいたが、どうもはつきりしなかつた。けれども最早致し方がないので、マントの案内記でみてゐたフラッシェマンス・ホテルへ行つてみたところ、非常に工合がよく部屋も何もすっきり氣に入った。さうして直にワッサンに車の談判をさせた。かうなるとどこから、臭きつけてくるか、車屋が四人も来てゐて、往復 Rs. 16—20 を主張してゐるとのことに、先づ Rs. 10—12 が至當だといつて再び談判させたら、其内の一人が Rs. 12 で引受けて歸つた。翌日の天氣豫報は「曇少雨」とあつたが、ラホールからこつちは非常な好晴であつたから、これが日本なら知らぬこと、天竺ではまさか一夜の間にさうは變るまいと勝手に決めておいた。此ホテルには毎水曜日にダンスがあるのださうな。私が泊つたのは月曜日ではんとうに幸であつた。

三一、マニキヤラ塔 (Manikyala Tope)

昭和十一年一月二十八日朝、好晴、フラッシェマンス・ホテルの私の室の前へ車が停つた。此車は舗



Restored Elevation of the Tope at Mānikyāla. Scale 50 ft. to 1 in.



24. Relic Casket from Tope at Mānikyāla. (Found and drawn by Gen. Cunningham.)

上。マニキヤラ塔復原半立面及半断面圖
 下。マニキヤラ塔内發見の遺物容器
 (兩圖共ファーガッソンの『印度及東洋建築史』よりとる)
 上圖に於いて平頭は全く推定復原でさうで、これは點線を以てかいてある。舊塔婆、後の擴張塔婆、及び埋藏物の種類と其深さとが記入してある。下圖は塔婆型をしてゐる遺物容器で、平頭と相輪とが栓とあり、内部に遺物があるところ等がよく判る。どうも此繪では内部の「天神様」の様なもの、どういふ工合になつてゐるのか判然しない點もあるが、面白いものである。

装した幅の廣い道路を全速で走り、途中ラワットといふ町で回教式建築の廢墟を見(こまで十)、更に約十五分ばかり走つたら目的の塔の下まで達することができた。私のいい加減(だが併し細心の注意はした)な計畫が正に當つたので、至極簡單に塔に達したのであった。但し途中で三十分ばかり手間どつたせい、ここに達したと同時に曇りだした。洵におしいことをしたが今更如何とも致し難いが、とにかく此塔の前に立つたときに、仰ぎみて感激を新にしたのであった。抑も此塔は私が大學一年生の時分、印度建築史の大意を故N先生から伺つた際、初めてきいた名である。何か印度語の意味もあらうが、餘り變な名なので、ざつと四十年前の事だが實によく覚えてゐる。そのマニキヤラ塔の前に車から下りて立つた時は、どうもまるで夢の様な心地がしてゐた(八四)。

塔は平頭の部分を失つてしまつたが、伏鉢内からいろいろなものが発見されてゐる。そのうちから塔婆形をした遺物の容器もでてゐる(挿畫)。圖はファーガッソンの建築史からとつたのであるが、これと同じ圖が同氏の名著『龍樹崇拜』にものせてある。さうしてそれには「カニングダム大將所藏」と註記がしてある(同書第95頁)。神聖なる塔婆をほちくり返すのは甚だ以て怪しからんことであるが、信仰が他に移つて了ひ事實上佛教はなくなり、そこへもつてきて異教徒が學術研究の爲にするのなら、場合によりては止むを得ないどころではなく、大に獎勵すべきことたるのはいふ迄もないが、その内から出たものを私するのは沙汰の限りといふべきである。それも茶碗とか茶筌とか何とか焼とかいふ類の骨董品なら、個人の所有慾を満足せしめても差支はないが、貴い舍利容器の様なもの私するは、事實の如何を問は

すどうかと思ふ。たとひ全く信仰を離れた残骸に等しいものであるにしても、いふ迄もなく貴重品として博物館に陳列すべきであらう。

マンキヤラ地方はラワル・ビンヂを東南に距る事約二〇哩、さうして多くの健駄羅塔婆が此地方に散在してゐるが、其大部は一八三〇年(天保元年)の頃、ベンチュラ及びゴート(General Ventura and M. Court) 兩氏によりて發掘され、貴重な遺品が發見されたが、不幸にして夫れ等に就いては何も記録を残してない。

挿圖下方にだしたのはカニガムが一塔婆から一八六三年(文久三年)に發見せる舍利容器で、遺物室に耶蘇紀元前後に此地方に通用せる銅貨を發見せるにより、凡そ其頃の建立と推定し得たのであるが、此以外の遺物と共に徑 $4\frac{1}{2}$ 吋高 $8\frac{1}{2}$ 吋の塔婆型のものに收藏してあつたといふ。今圖に就いてみるに、伏鉢の上に小孔あり、相輪の下に平頭がついたまま、栓になつて伏鉢の孔に挿込む様になつてゐる。此即立派な塔婆模型で、洵に興味津津たるものがある。

併しながら其最も重要な塔婆は、挿圖上方に其復原圖を示したもので、其大きさに於いては、錫蘭嶼所在のものに劣るも、價值に於いては伯仲の間にあるのである。其寫眞は八四に掲げてあるが、此塔は最初エルフンストーン氏(Mountstuart Elphinstone) により發見されたもので、一八〇九年(文化六年)カプール紀行文中に記載されてゐるさうであるが、後一八三〇年ベンチュラが充分に調査し、其後更に

P. W. D. の吏員によりて精確なる實測圖が作成されたさうである。

塔伏鉢は眞の半球形で、直徑127呎、基壇徑約160呎、四方に階段があり、幅16呎の禮拜道に登ることができる。禮拜道の上下、即ち基壇及び伏鉢下部側面には、等間隔に配置された片蓋柱を以て裝飾されてゐるが、これはつまり周圍の玉垣を簡略したものと考へられてゐる。此等の片蓋柱は随分磨滅甚だしくなさない状態にあるが(一例は八六)、其柱形は塔を形成せる石から刻みだされてゐること、藥師寺金堂須彌壇の束石の如くである。さうして其一に「一八九一年(明治二十年)復原」(Restored in 1891)と三行にかいてある。大部分は推定復原ではないかと思ふ。

塔の復原圖は挿圖上方のであるが、平頭は全くの推定だが、他は左程でもない。其右半の断面圖に明らか通り、内部各深さを異にして各種の貨幣が發見されてゐる。然るに最下部から遺物の容器が發見され、其蓋に銘文があつたが未だはつきり判らないけれども、カニシカ王時代と認めらるる一金貨と六銅貨があつたといふことである。故に若し他に發見物がなかつたとすれば、内側の小塔はカニシカ王の御代に建立され、平頭も残つて居つたが、第八世紀(深さ二十五呎のところから第七・第八世紀の貨幣が夫れ夫れ一つづつ出た)に原塔婆に厚さ25呎の覆ひを建設し、禮拜道も擴張したと見られるのである。

所が困る事に深さ64呎のところから薩珊朝の貨幣が發見されてゐる(前頁上圖)。從來發掘等の形跡は絶無なのだから、塔はどうしても第八世紀まで時代が下がらねばならない。ところがその薩珊朝の貨幣なるものは至極小破片であるさうだし、發掘者たるベンチュラ氏が自分で見出したのならとにかく、さうで

もなければ上層から出た同時代のものと混淆せぬとも限らない。けれども破片にせよ三つもある以上、どうもかうばかりは考へられぬ。結局いろいろな事が想像できるが、何れにしても現在塔婆の外廓は、恐らく第八世紀の初葉の再建だといふことだけは確かにいへるやうである(以上H. J. & E. A. 記事の意を採る)

三三、ラワル・ビンチからタキツラ (Taxila) へ

マンキヤラには多くの塔婆があるさうだし、殊にマレーには北方二哩にもう一基可なりの塔婆をあげてゐるから、それへも行く様に前日から談判をしておいたが、扱てそれを見に行く段になって誰も知らない。自動車屋が前日二つ返事で承諾したのは、いい加減なでたらめであつた事が知れたが、今更如何とも仕方がない。そこいらに居た村の衆にワッサンをしてきかしたら、彼は判つたといつてもかくも北を指し、さんざん悪路を走つた後、遂に判らずにしまった。天氣は漸く曇つてきたのでいやになつてあきらめて歸途に就いたら、間もなくラワットにでた。

ビンチに近づくに従ひ天氣は再び持ち直し遂に日がでた。かうなると惜しいが、マンキヤラ邊はやはり曇つてゐるかも知れぬし、とうとう塔婆一つ見ることができずじまつたけれども、餘りうまく行き過ると魔がさす虞がなくもないから、魔よけに曇天位は止むを得まいと観念したが、午後一時頃からここも亦遂に大曇りになつてしまった。其曇つて風が吹いてゐるなかを、一五・三八の下り列車に間に合ふ様に驛へ行つたら、汽車は正に一時間延着の掲示がでてゐた。

仕方がないから驛の食堂へ入り、茶をのんだりして時間を消す事にした。此日——昭和十一年一月二十八日——は英國の先帝ジョージ五世の御大葬の日に當つてゐるので、一六・〇〇から五分間黙禱をするのださうな。ところが汽車が遅延のため驛で其時刻に出あつた。日本國の老朽無能なる草莽の一微臣が、印度國西北方の重要都市なるラワル・ビンチの驛乗降場に於いて、かういふ場合に出遇ふのは全く不思議な因縁といふべきである。仍て數ならぬ小生は帽をとり外套をぬぎ、敬みて直立不動の姿勢をとつた。大曇りのいやな天氣で少し寒い。グワリヤであひの肌着にあひ服で丁度よかつたのに、ここでは下にスエタを着、上に雨外套を着なければ薄ら寒い。勿論昨夜も今朝も宿屋では石炭をとりよせて、英國風のファイア・フレスで火を焚き暖を取つたのであつた。

タキシラ迄は途中停車せぬ。此汽車はつまり前日ここ迄乗つてきたのと同じ時間ので、フロンチヤ・メール列車である。下車はしたが待合室へ泊る氣になれぬ。ここは先年苦い經驗をもつてゐるので(「印度旅行記」第140—142頁)、なるべくバンガローにしようと思つて出かけた。ここは都合が悪くI・B・だから、豫め許可を受けておく要があるのに、つい孟買領事館から照會をして頂くことを忘れたので、多分駄目だらうが、まあ行つてみよう位の考へで行つたところ、果して満員で泊れず。それから一二ヶ所あき間をさがしたが、遂にいろいろの都合でやはり驛にとまることにして逆戻りをした。其待合室の有様は先づ前の時と大同小異で、やはり不愉快であつた。將來ここへ行つてみようと思ふ諸君は、二人以上一所に行けば待合室で我慢ができなくもないが、左もなくば前以て手續をしておき、I・B・へ泊る工

風でもしないと、私と同じ様な目に遇はぬとも限らないから、其覺悟が必要である。但し驛には食堂があるから、食事に不自由はない、その點は安心である。

三三、タキシラの遺跡 (地圖)

タキシラは古への咀叉始羅國 (Tachashilo, Takhasia) で、先年拙著【印度旅行記】に割合に詳しくかいたから (同書第140頁)、今回は省略して塔婆についてのみ記しておく。

三四、クナール塔 (Kunala) 塔

クナール塔はシルカッパ (Sirkap) の遺跡東方高地に、僧坊と並んで北面して建つ。【大唐西域記】卷第三に

城外ノ東南、南山ノ陰ニ空塔婆アリ。高サ百餘尺、は無憂王ノ太子拘浪拏ガ、繼母ニ誣ラレ目ヲ抉リシ處ニシテ、無憂王ノ建ツル所ナリ。盲人祈請セバ多ク明ヲ復スルコト有リ。此太子ハ正后ノ生レナリ。儀貌ハ妍雅ニシテ、慈仁夙ニ著ハル。正后終没ノ後、繼室ハ姪ヲ僞ニシ、其愾愚ヲ縱ニシテ、私ニ太子ニ逼レリ。太子ハ泣ヲ瀝シテ責ヲ引キ、身ヲ退キテ罪ヲ謝セシガ、繼母ハ違フヲ見テ彌イヨ忿怒ヲ増セリ。……

といったやうな次第で、結局「……旃茶羅ニ乗ジテ其眼ヲ抉リ去ラシメ……」たので、クナール皇子は

其後大分困難をされたが、遂に王妃の悪事が露見し、死罪に處せられて了つた。「……時ニ菩提樹伽藍ニ瞿沙大阿羅漢ナル者アリ、四辯無礙ニシテ三明ヲ具足セリ、王ハ盲子ヲ將ヒテ其事ヲ陳ベ告ゲテ曰ク、唯願クハ慈悲ヲモツテ明ヲ復スル事ヲ得シメヨ。……」と、そこで、瞿沙 (Kusha, Ghosha) の盡力によつて皇子は「眼遂復明」となつたのである。皇子の事蹟を要を撮めば右の通りで、其記念塔がこれだといふ。

其玄奘がタキシラへ行つた時は、既にシルカッパの町は五〇〇年來荒廢に任せてあつたさうで、彼はシルヌク (Sirskh) の町に滞在したさうである。此廢市の近くに有名な佛教記念物が四つある。

- 一、醫羅鉢阻羅 (Ilo-poto-lo, Elapatra) 龍王池
- 二、龍池東南三十餘里無憂王所建塔婆 (高百餘尺。是釋迦如來懸記。當來慈氏世尊出興之時。自然有四大寶藏。即斯勝地。當其一所。)
- 三、城北十二三里無憂王所建塔婆 (或至齊日。時放光明。)

四、拘浪拏塔

以上のうち(一)と(二)とはカニンガムが其位置を發見したが、残りの二つは所在不明のままになつてゐた。併しこのうち(三)はバーラー塔 (101・102) でなければならず。(四)は即ちクナール塔、即ち今

* 堀謙徳氏著【解説西域記】には「王子拘浪拏の傳説」題下に【西域記】の本文を掲げ、【考證】欄に……【阿育王傳】卷三……には阿輪迦の王子を拘那羅 (Kunala) とし、【阿育王經】卷四……には鳩那羅とするが故に、【西域記】の拘浪拏は拘浪拏の誤寫なりと認めらるゝとある。

問題にしてゐる塔に當る筈である、さうして若し玄奘の記事が正確ならば、シルカプの町よりも寧ろモラー・モラツ(第19頁)方面に此塔を求めなければならぬが、種種の點から考察して、どうしてもこれではなれないとマーシャル氏はいつてゐる。

塔婆は東西63呎9吋南北105呎1吋の基壇上に建ち、北面に階段がつけてある。基壇は八七・八九に於いてみる如く三段より成り、最下段の側面は短いコリント式片蓋柱を以て飾つてある。第二段は何等裝飾はないが、最上段の下部に少し線形が現はしてあるところをみると、やはり片蓋柱でもあつたと思はれるが、これが若しイオニア式であつたら大分に面白いのである(八九・九〇)。とにかく現在は随分ひどくなつてはゐるが、當初の形式は——此塔の位置から好晴の日は遙か南方によく見えてゐる——パーラー塔と同一であると推定しても、至極安全であるといふ結論に到達し得るのである。従つて雙方共同時代であらねばならぬ。

此塔は基壇の側面が少し内側に凹んでゐるが、これは他に類例がないさうである。一例を擧ぐるならば、西側に於いて引渡74呎10吋、中央の凹み3吋(即約七十四尺八寸に對して二寸四分)ださうだが、つまり錯視修正を逆にしたのである。尙ほ此塔は後第三四世紀頃と推定されてゐる様だが、其西北隅に近く一小塔が發掘されてゐる(九一・八七・八八)。高さ9呎8吋。基礎は方形で其上に圓形の基壇あり、上は半球形に終つてゐる。元からかうなつてゐたのか、或はある程度迄は復原したのか知らぬが、何れにしても元は平頭も

相輪もあり、全部飾漆喰で塗込めてあつたことは確かである。九一は塔婆西方に並んで建つてゐた僧坊との關係をみせるのと、兼て此高地から西南方の平地を貫流せるタムラ川(Tama Nala)を隔てて、其先の高地ビル丘(Bhir Mound)をみせたつもりであるが、相不變の拙寫で朦朧として了つた事、例により例の如くである。

三五、タルマラージカ(Dharmarajika)塔

タルマラージカ塔は一にチル塔(Chir Tope)といふ。タムラ川に浴へる丘にあり、クナーラ塔より東南方に當る。此小丘上の佛塔のたぬ以前は、村落があつたらしく、希臘王の肖像を印せる貨幣がH印の建物(九二上)の基礎下より28個發見されたさうである。大塔は丘阜の中央にあるが、九三・九四・九五にみる様に上の方は全然崩れてゐる。既に五十年前から外側は全部とれたのかとつたのかまるでなく、地上に現在破壊の状態にある「しん」だけが見えてゐたといふ事である。併しながら最近更に三十尺ばかり發掘をした結果、圖の下部に見る如き元の化粧壁の部分が出現したのみならず、其他の小塔婆等も多數にできたのである。

大塔は四方に石階があつて、上方に登る様になつてゐる。其周圍の裝飾彫刻は東側に於いて最もよく保存されてゐること九三の如くである。この圖は小さいけれども、其意匠は「茨」二個を有せる三葉拱と梯形拱とを交互に配したもので、其間にはコリント式片蓋柱をたててある。尙ほ三葉拱龕内に佛像を

安置したのは、**九五**にも見えてゐる。而して大塔は古くスキタイ人や安息國人が勢力を有してゐた時代に建立され、貴霜王朝時代に修理擴張され、更に後四世紀の頃にいたり外部の修築が行はれたと観測されてゐる。

塔の東側昇段の傍に柱の下部が残つてゐる。これは阿育王柱の眞似をしたもので元は上部に獅子か何かのつてゐたことが想像できるのは面白い。平面圖の右方、塔と周圍をとりまいてゐる小建物の間に點線を以てかいてある禮拜道の内側に近く、小黑點が印刷してあるが、これが即ち柱の殘闕である。

三六、ピバラ (Pippala) 僧坊の小塔婆

ピバラ僧坊はジャウリアン (Jaulian) 僧坊へ行く途の右手、少し入ったところにあるから、分れた所から先は歩かねばならぬ。大正十一年十二月十八日に初めてここへ行った時には、まだ發掘中であり、偶ま誰も居なかつたので、入てみたら面白い塔婆が半分ばかりでてゐたから、寫眞をとるにはとつたが、何にしる小さい室内にあつた事、次に示すモーラー・モラーツの小塔の如くで、あれよりもつと

* スキタイ王マウエス (Maues) タキシラを征す (前八五—八〇年)。

** 安息國王ゴンドファルネス (Gondophares) アラコシヤ (Arachosia) 及タキシラ國を征服す (後二〇—三〇年)。

*** 貴霜王朝 (インド・スキタイ王朝) Kushan (Indo-Skythian) Dynasty 後四五—一二二五年。アンドラ王朝の終りは後二二—三六故、貴霜王朝の終りと約十年の差である。

一ぱいになつてゐたから、全景をとる事等は到底出来なかつた。**九六**に掲げたのは其時の寫眞で、面白いのは其基壇の圓形部側面にイオニア式とコリント式との片蓋柱が一つおきにたち、其間に蓮花の正面向をつけたので、非常に變つた意匠の塔婆ができたのである。

健駄羅建築に於いて、大きなイオニア式柱が建つてゐるのはジャンヂアル・テンブル (Jandial Temple) だけで、あとの小塔婆乃至小堂基壇の片蓋柱は、殆んど悉くコリント式だといつてもいい位である。然るにこのピバラ小塔は、イオニア柱が用ひてあるから、それを見せたのである。或人に或時この寫眞を見せた所、何故この蓮花を正面から寫さなかつたのだと言はれたが、これは其人が現場を御承知ないからで、私としても無論さうしようと思つたが、できなかつたのである。

今回はもう暮方で、太陽も正に没せんとして、漸く最後の光線が屋根(相不變生子板で臨時に不恰)と壁との間から入り、内側の壁にあつた反射で側面の厚肉佛像がよく浮上つて見えてゐた。晚いため番人も居ず、餘りに其像がよくできてゐたから、とつておいた寫眞を**九七・九八**に掲げておいた。製版の時の工合か何かであらうが、少し頬がやせすぎてゐる。併し原物は洵に申分のない美事な作である。

三七、モーラー・モラーツ (Mōhā Morādu) 僧坊の塔婆

この塔婆も僧坊の一室内にあること**九九**に示した如くである。珍らしい塔婆故保護のため扉を吊つてある。總高さ約十二尺、總て圓形で、基壇は五層に分れてゐるが、最下層には「象」と「アトランテ

ス」(Atlantes) (男像柱)と交互に配し、其上は例の如く三葉龜及び梯形龜に佛像を安置したものを以て飾り(100)、其上の三層は何れも圖の如き裝飾を施してあるが、當初は紅・青・黄等を以て彩色した痕跡が残つてゐる。塔身と平頭とは完全であるが、檼は鐵棒より成り相輪を夫れに貫通してあつたので、鐵が腐朽したため、相輪は何れも下に落ちてゐたさうである。さうして各輪の縁に穿孔してゐるのは、當初瓔珞を懸垂したことを物語てゐるのである。

モラー・モラーツ塔婆基壇厚肉彫刻の一



(大正十一年十二月十八日)

尙ほモラー・モラーツ僧坊の傍に二塔婆がある。それはこの僧坊内のもので小規模ではないし、其基壇には飾漆喰の立派な佛像の厚肉彫刻がある。ジャウリアン僧坊の多くの塔婆の基壇にも、亦何れも美事な彫刻があるが、此等の内、特に優秀なるものは、其まま陳列館内に移し、現場には其うつしを据

えたのもあつた。此はかうしなければ保護ができぬからであらう。前頁に掲げた厚肉彫は洵に優秀な作で、先年其位置に寫したものが、今は眞物は陳列所にもつてゐる有様である。かかる彫刻ある塔婆の基壇を周り、以前は鐵條網を廻らしてあるだけであつたが、今はその内部に茨の様なものを鹿砦の様におき、絶対に近づけぬのみならず、夫れに防げられて、折角の彫刻もまともに見えぬ様にしてゐるのは、まことに困つたことである。いたづら者の多いのも、各國共通だといふ事の確證である。

三八、バーラー (Bahalar) 塔

バーラー・スツーパーはシルカッブの遺跡から南方遙によく見える。私は昭和十一年一月三十日八・三五にタキシラ驛をトンガで出かけたが、一通りみて歸着したのは一一・三〇であつた。充分にしてはきりがないが、先づ往復三時間あつたら、一通の見學はできる。塔はタキシラからハベリアン行の支線の最初の驛なるウスマン・カッター (Usman Khatar) から1½哩位といふ。トンガ片道タキシラから45分かかつた。【大唐西域記】に

城ノ北十二三里ニ窰塔波アリ、無憂王ノ建ツル所ナリ。或ハ齋日ニ至リテ、時ニ光明ヲ放ツ事アリ、神花ト天樂ヲ頗ル見聞スル事アリ。諸ヲ先志ニ聞クニ曰ク、近頃婦人アリ、惡癩ニ嬰リシヲ以テ、竊ニ窰塔波ニ至リテ、躬ヲ責メテ禮懺セリ。其庭宇ヲ見ルニ、諸ノ糞穢アリ、掬除シ灑掃シテ、香ヲ塗リ花ヲ散ジ、青蓮ヲ採リテ、重ネテ其地ニ布キシニ、惡疾ハ除キ愈エ、形貌ハ妍ヲ増シ、身ヨ

リ名香ヲ出スコト、青蓮ト馥ヲ同クセリ。斯ノ勝地ハ、是レ如來ガ在昔菩薩行ヲ修セシトキ、大國王トナリテ、戰達羅鉢刺婆 (Cher-ta-lo-po-la-po (Chandraprabha, Chandapabha)) 唐ニ月ト號シ、菩提ヲ志求シ、頭ヲ斷チテ惠施セシ所ニシテ、此ノ若ク捨スルコト、凡ソ千生ヲ歷タリ。

捨頭窣堵波ノ側ニ僧伽藍アリ、庭宇荒涼シ、僧徒減少セリ、昔經部ノ拘摩羅邏多 (Keu-mo-lo-to-to (Kumarabaddha, Kumaralata)) 唐ニ童受ト云 論師ハ、此ニ於イテ諸論ヲ製述セリ。

とあるが、マールシャルはバーラー・スツープは即ちこの「捨頭窣堵波」だとしてゐるのである。丁度タキシラから北に當るし、里數(六里約一哩として)も先づこれでよささうである。私は當分この説に従ておく。

塔は大きな方形の基壇上に立ち、數段の圓形基壇があつて其上方にコリント片蓋柱を以て周圍を裝飾した部分がある。塔の南半はよく残つてゐるが(一〇二)、北半はまるで崩れてゐて、恰も縦に塔を切り割つた様な状態であるが、そのため反て上方に、伏鉢内に設けてある遺物奉納室が見えてゐるのは幸である(一〇三)。此塔に一心をこめて祈つたため、L病の婦人が快癒することができたといふ奇蹟があつたし、また此塔の隣りにある僧坊(此所は既に玄奘の行つた時「庭宇荒涼」であつたが)で、拘摩羅邏多論師が諸論を製述したさうであるが、一〇三は、この僧坊廢墟からとつた寫眞であるのである。

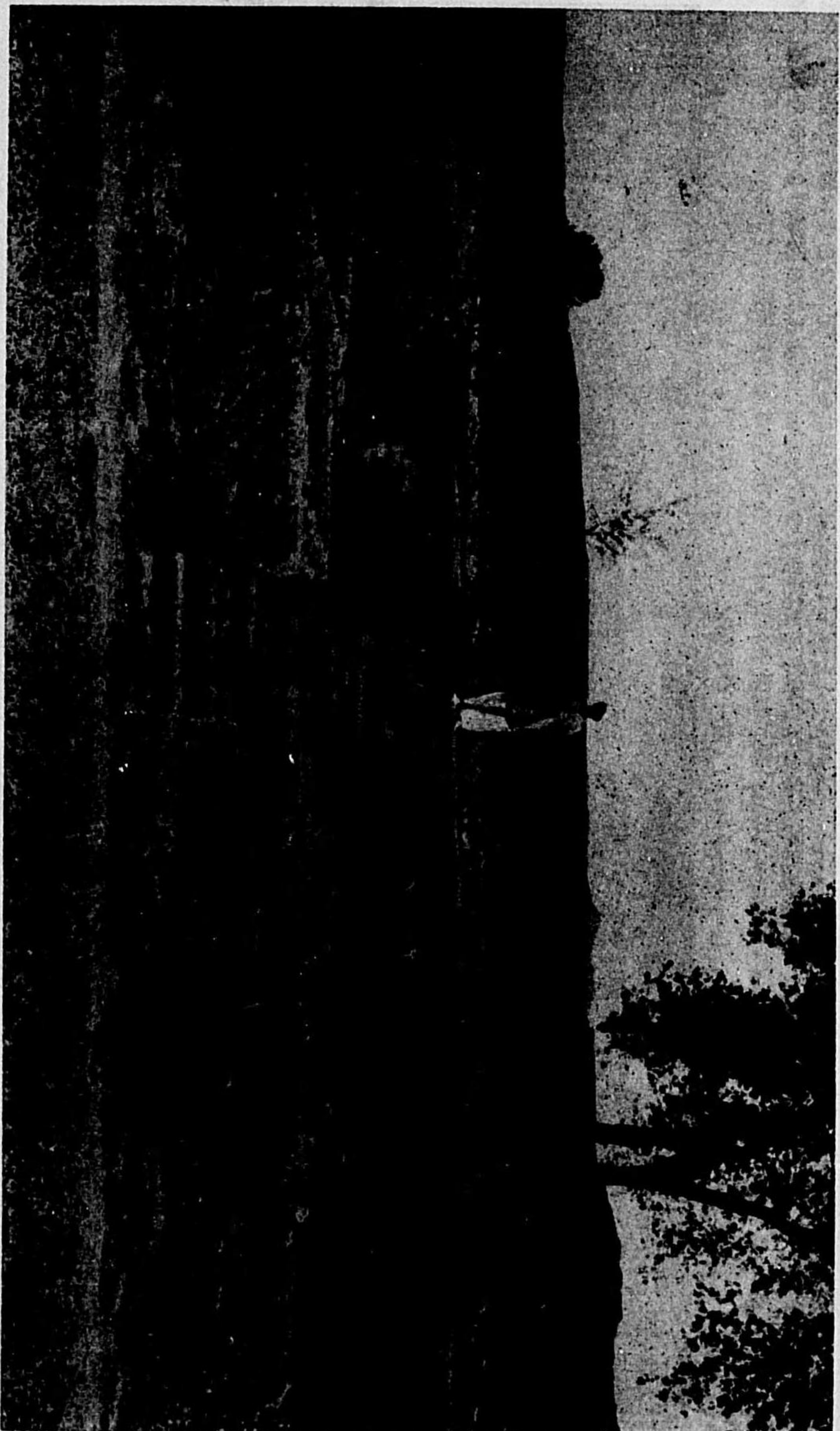
三九、タキシラの氣候

一月二十八日の夕刻着し、其夜と次夜と驛の待合室に宿泊し、三十日夕にノウシエラに向つて出發し



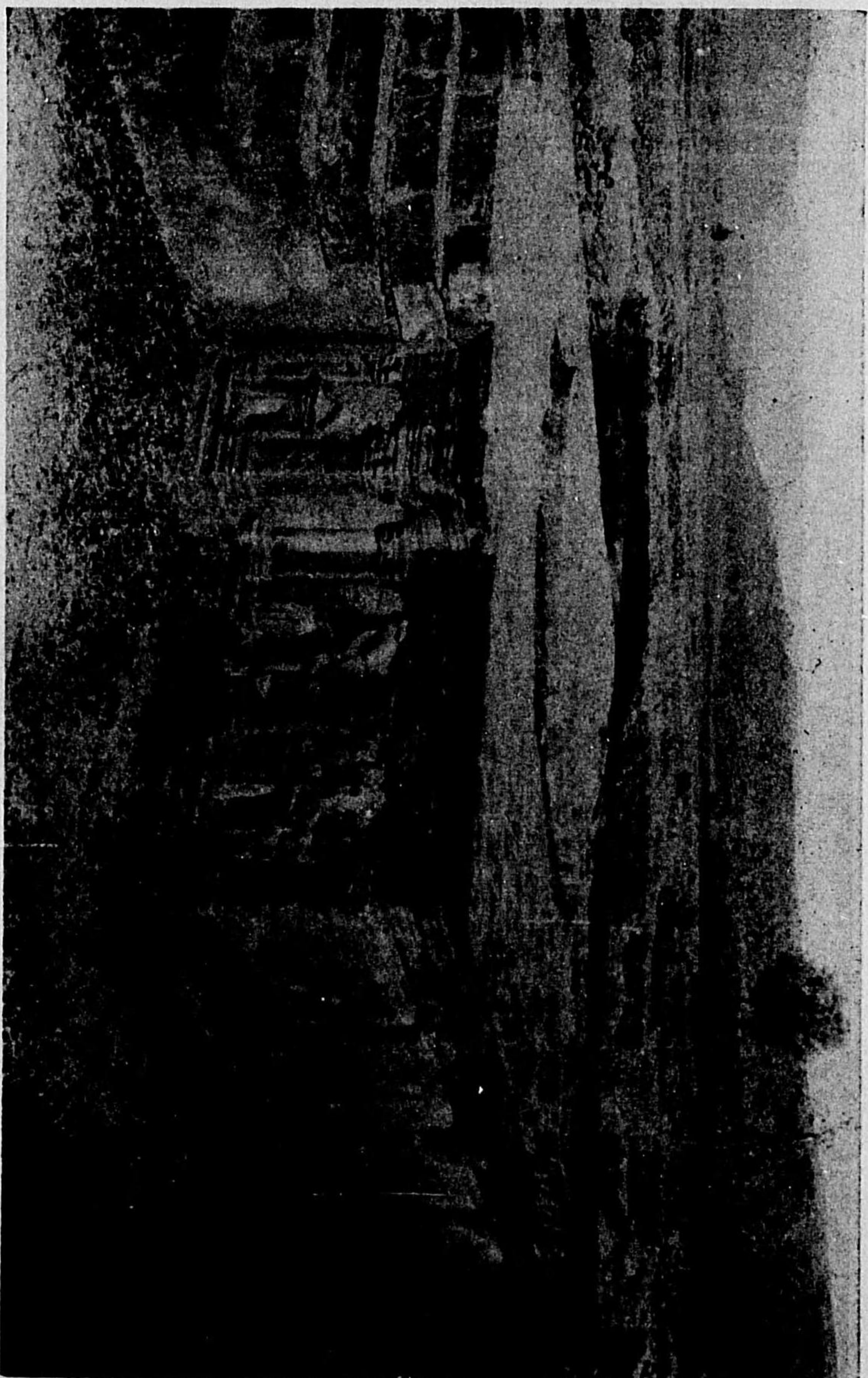
タキシラに於けるシルカツプ廢墟の一部 (昭和十一年一月二十九日)

シルカツプ (Sirkap) の廢墟は略長方形をなし、東西に狭く南北に長い。クナーラ塔は其南端高地にあるので、昔の町の跡は悉く低く位置してゐる。此圖は以下數圖に示す興味ある希臘印度式建築なる雙頭鰐殿の位置を示すために掲げたもので、圖の向つて左方、渠の内の隅に大樹のあるのが即ち夫れである。此寫眞は西から東を向いてとつたものだから、此建物は西面してゐたのである。圖の右端に近くよく似た建物があるが、少し小さいし、これではない。



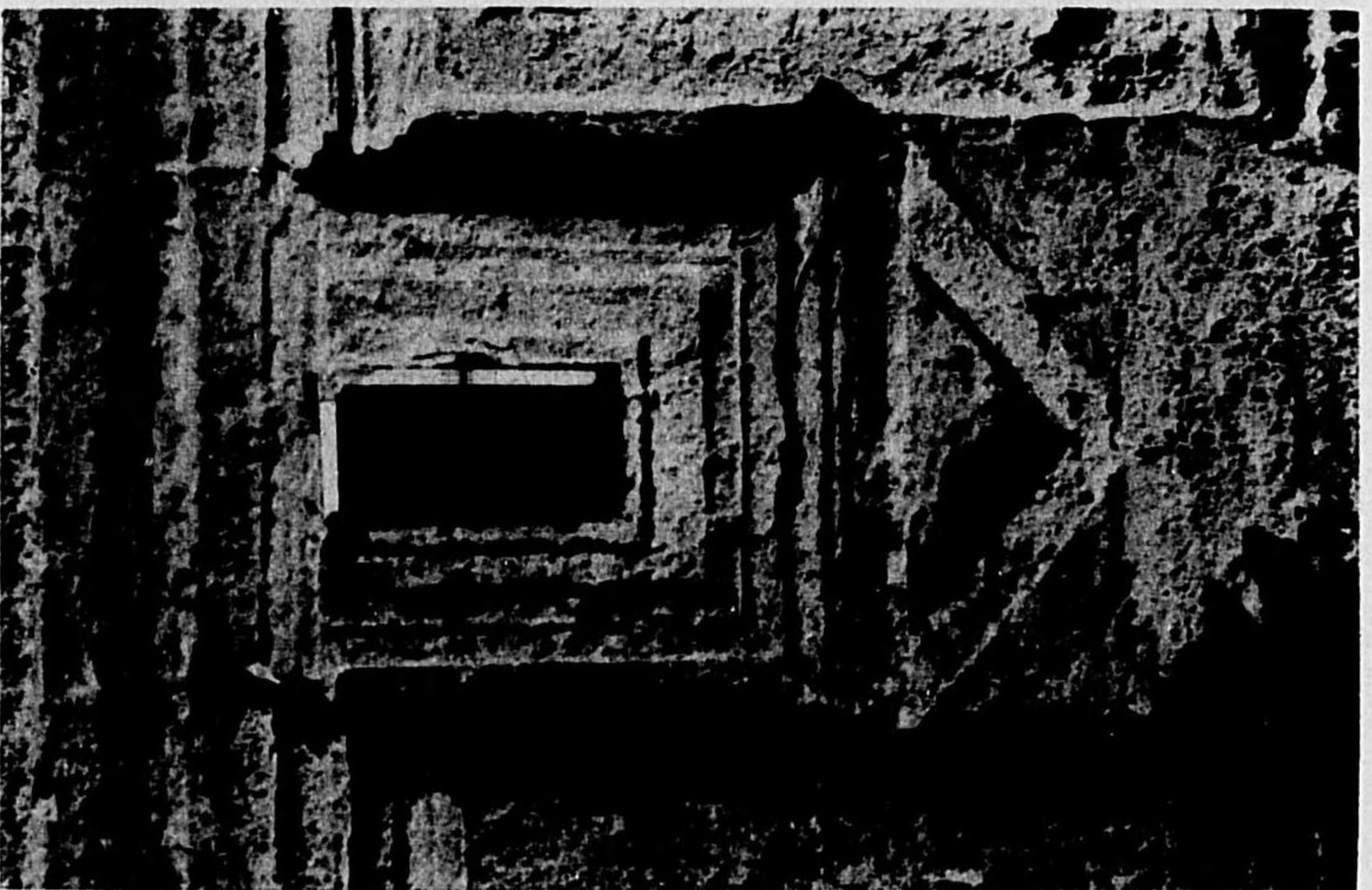
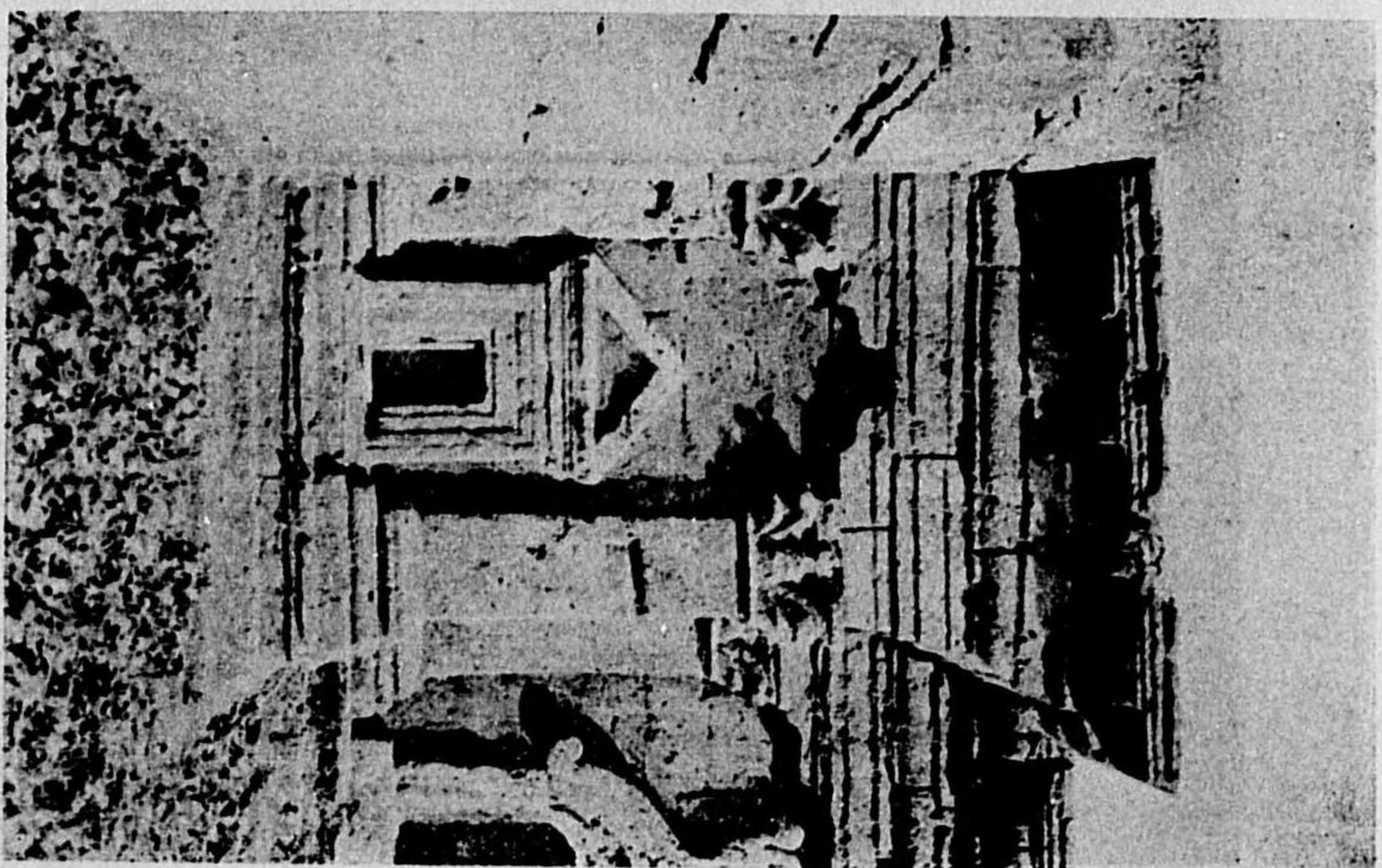
シルカッアの雙頭蓋殿 其一 (昭和十一年一月二十九日)

其平面は凸字形をなし、正面コリント式片蓋柱の間には興味ある輪郭の小龕をつくり、正面中央に階段を設け、基壇に昇降し得る様にしてある。基壇上中央に當初は多分半球形の塔婆があったのであらう。以前には土を盛り其形を復原してあったが、今は除去して敦眞にみる様にしてある。



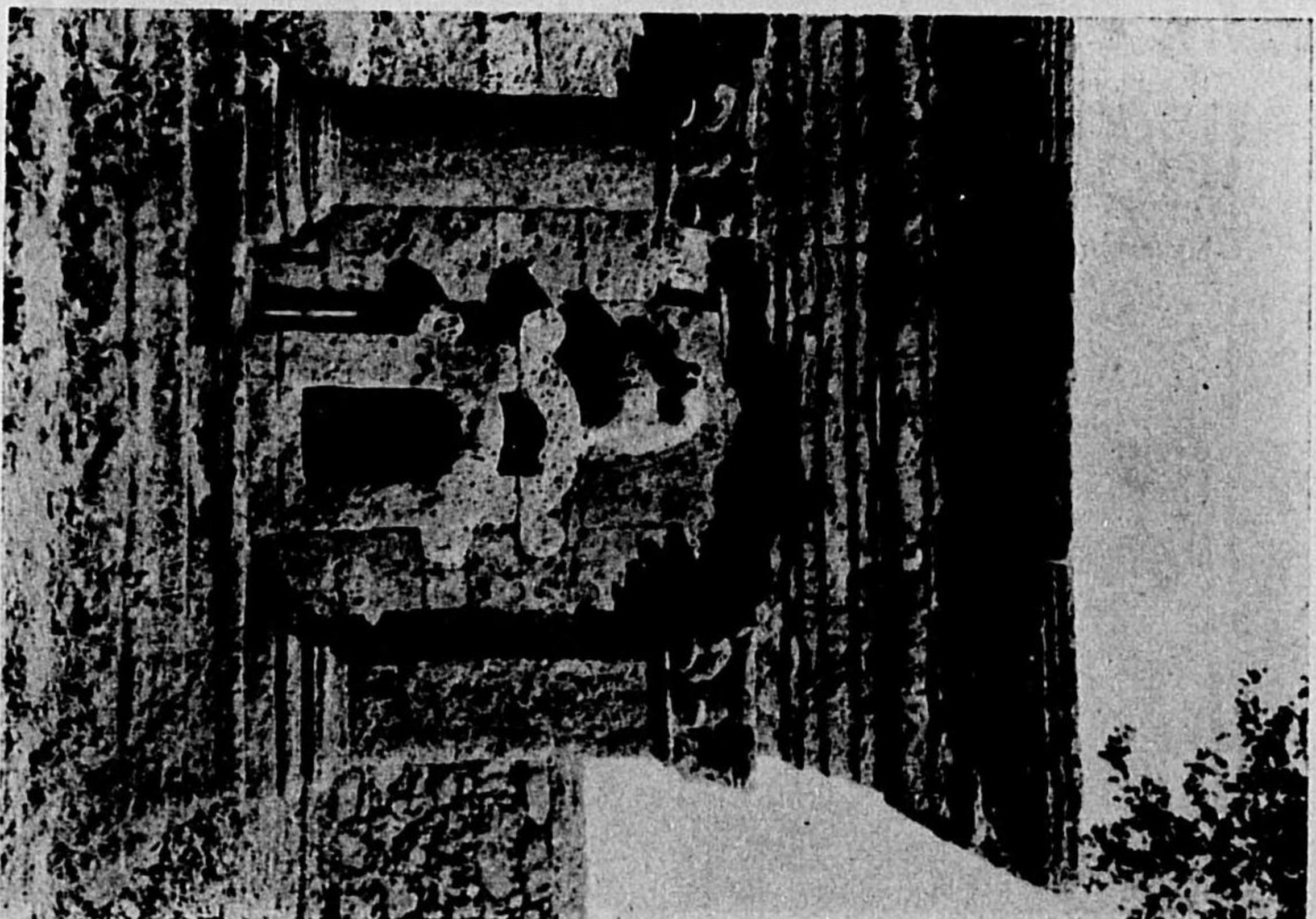
シルカッアの雙頭蓋殿 其二 (昭和十一年一月二十九日)

東南方からみたところ。側面には柱間に裝飾なき事と、圓形の柱身の片蓋柱は僅に二本しかないとがよく判るであらう。



右。雙頭鷹殿正面一部 其一
左。同 籠 其二

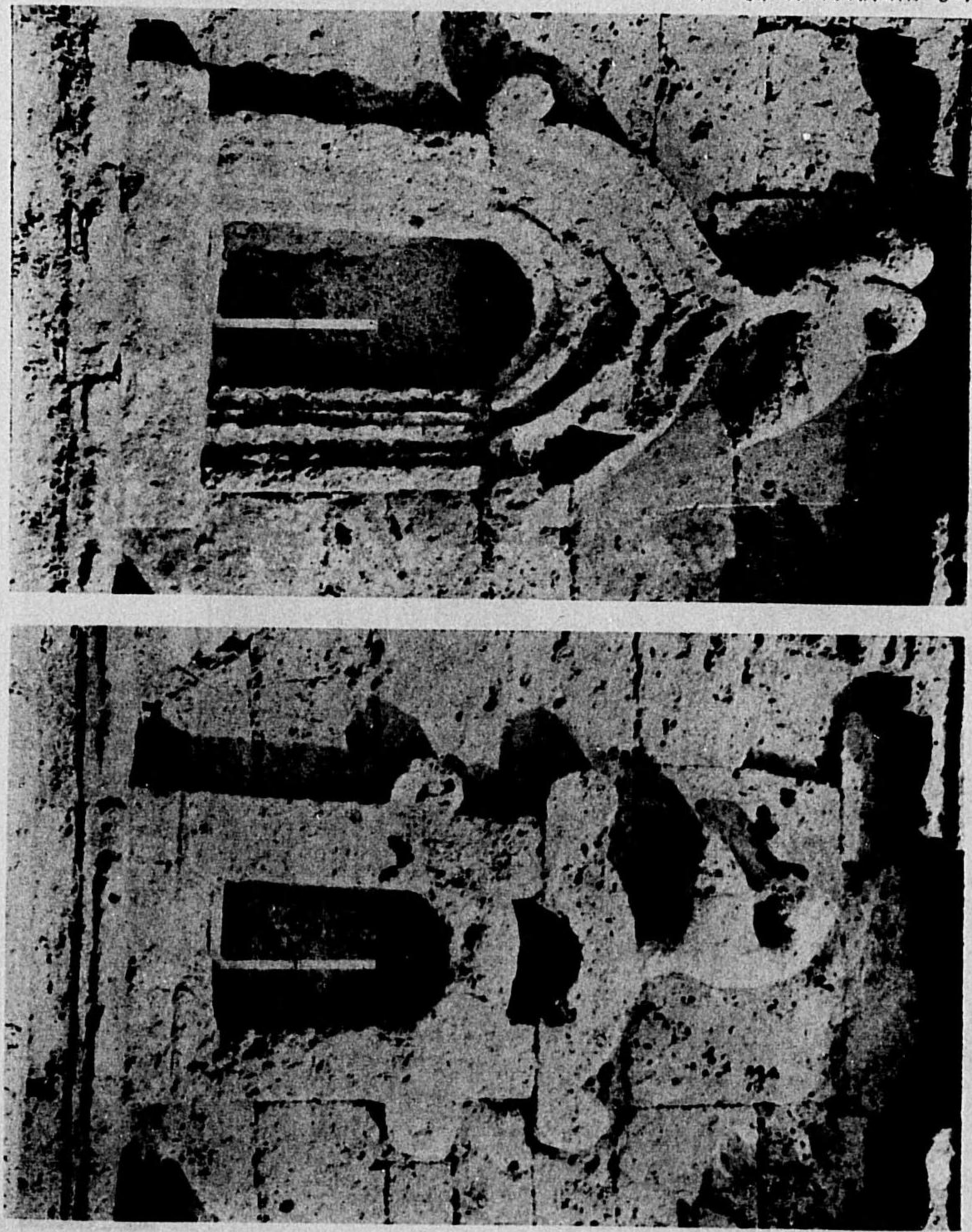
前前頁及前頁の圖で充分判つてゐるではあらうが、これ等は建敷羅地方の謂はゆるギリシヤ・インド式 (Girg Indis) を最もよく現はしてゐるから、數圖を挿入して、この廢堂の籠だけで、其如何なる様式であるかを、讀者諸君に徹底的に了解して貰ふつもりである。此籠はペチメント (Pechment) の笠石に縁形がなく、勾配も急に過ぎ、従つてチュパナム (Tupnam) の形は甚だ不満足であるが面白い。



左。雙頭鷹殿正面一部 其二
右。同 其三

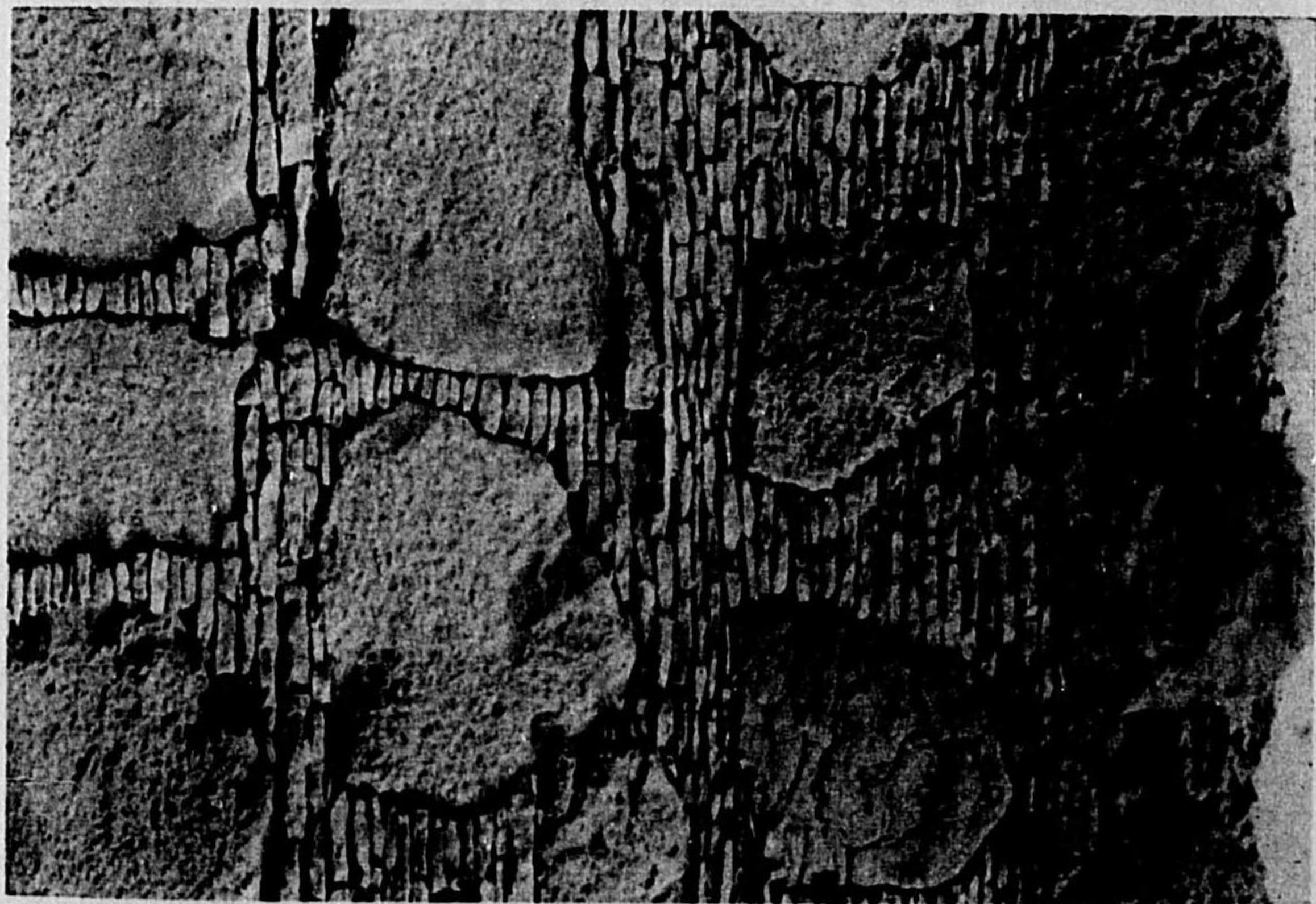
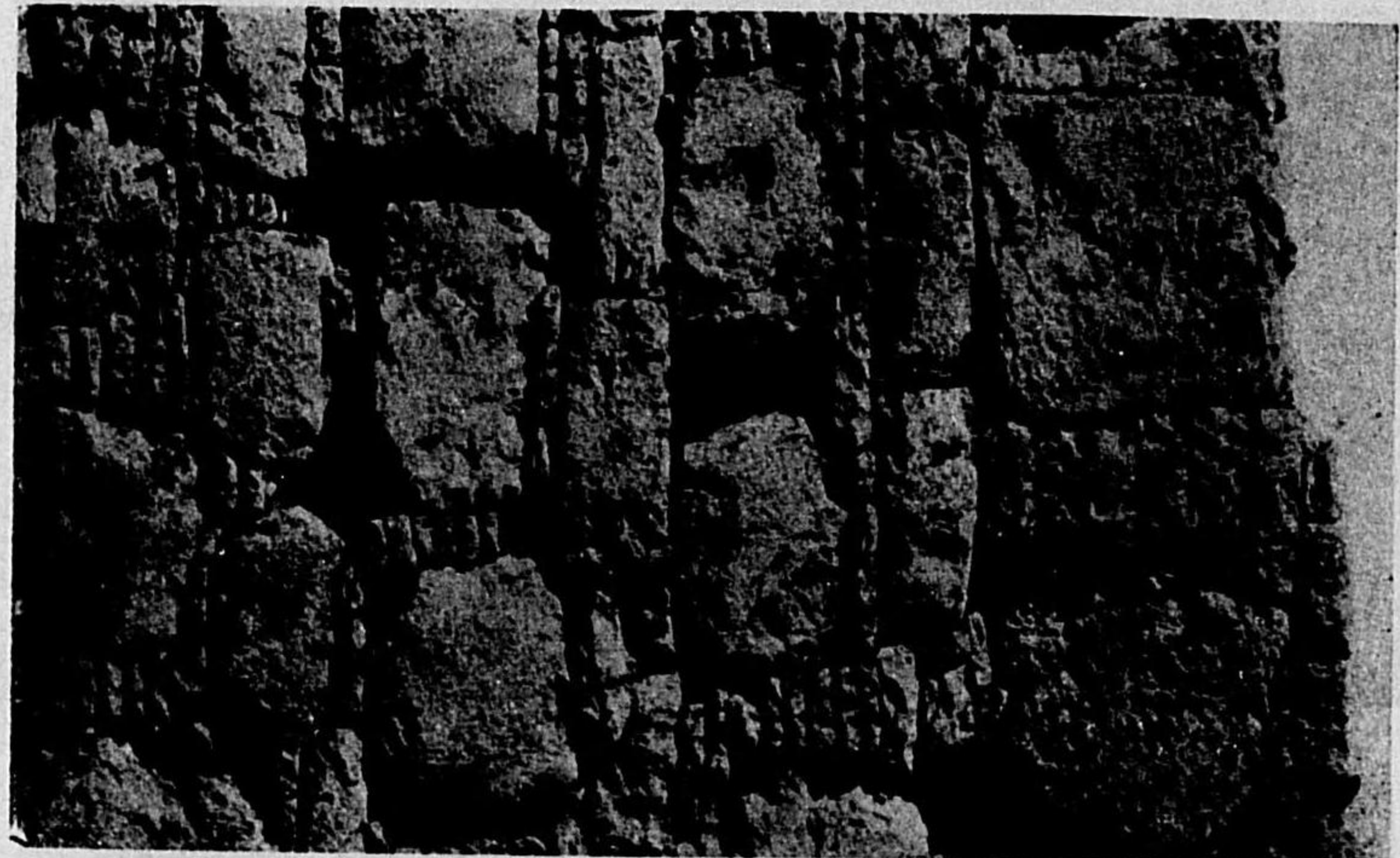
壁面の片蓋柱は何れも方形だが、正面左右二ヶ所つゝ圓形がある。柱頭は總てコリント式で基礎には謂はゆるアチツク・ペリスがついて居り、右端の籠は正にトリアンに象つたもので、どこ迄もギリシヤ・インド式のところ面白い。

(時) 昭和十一年一月二十九日
共に物指は曲尺の約五寸(六)



右。雙頭髻殿正面龕 其二
左。同 其三
(時・昭和十一年二月二十九日)

前眞の龕の大寫し。龕の様式は共に印度式であり。右はトラン型、左は蕙花線より成るもので、これも亦珍しくない。ギリシヤ式のペヂメントと印度式のトランやベンチール屋根と並んでゐる上に、この二種の上には髻がある。さうして其一は兩頭である。この兩頭の髻は古代ペチ人(Wings)の彫刻に現はれ、其後スキタイ人に貸用され、而してタキシラ地方に輸入したのはスキタイ人であらうと思はれる。後南下してヒジャヤナガ1王國及錫蘭島に現はれ、歐洲に於いては獨逸の皇帝の紋章につけられた所の興味ある彫刻である(タキシラ案内記による)。



タキシラに於ける石壁二種
右。グルマララシカ塔壁體(物指は曲尺の約一尺二呎、昭和十一年一月二十九日)
左。クナ1ラ塔の僧坊壁體(物指は曲尺の二尺、昭和十一年一月三十日)

此地方に於ける石壁の積み様は、大體に於いて四種ある。圖に於いて右と左とは似てゐるが、大石の距離間隔は、右の方が左より多い。従つて出来上つてからは、右の方が大石は細く見える。右のが「大散し積」で左が「小散し積」といふことになる。

タキシラに於ける石壁三種

右。シルカッテのある建物の壁面

中。同

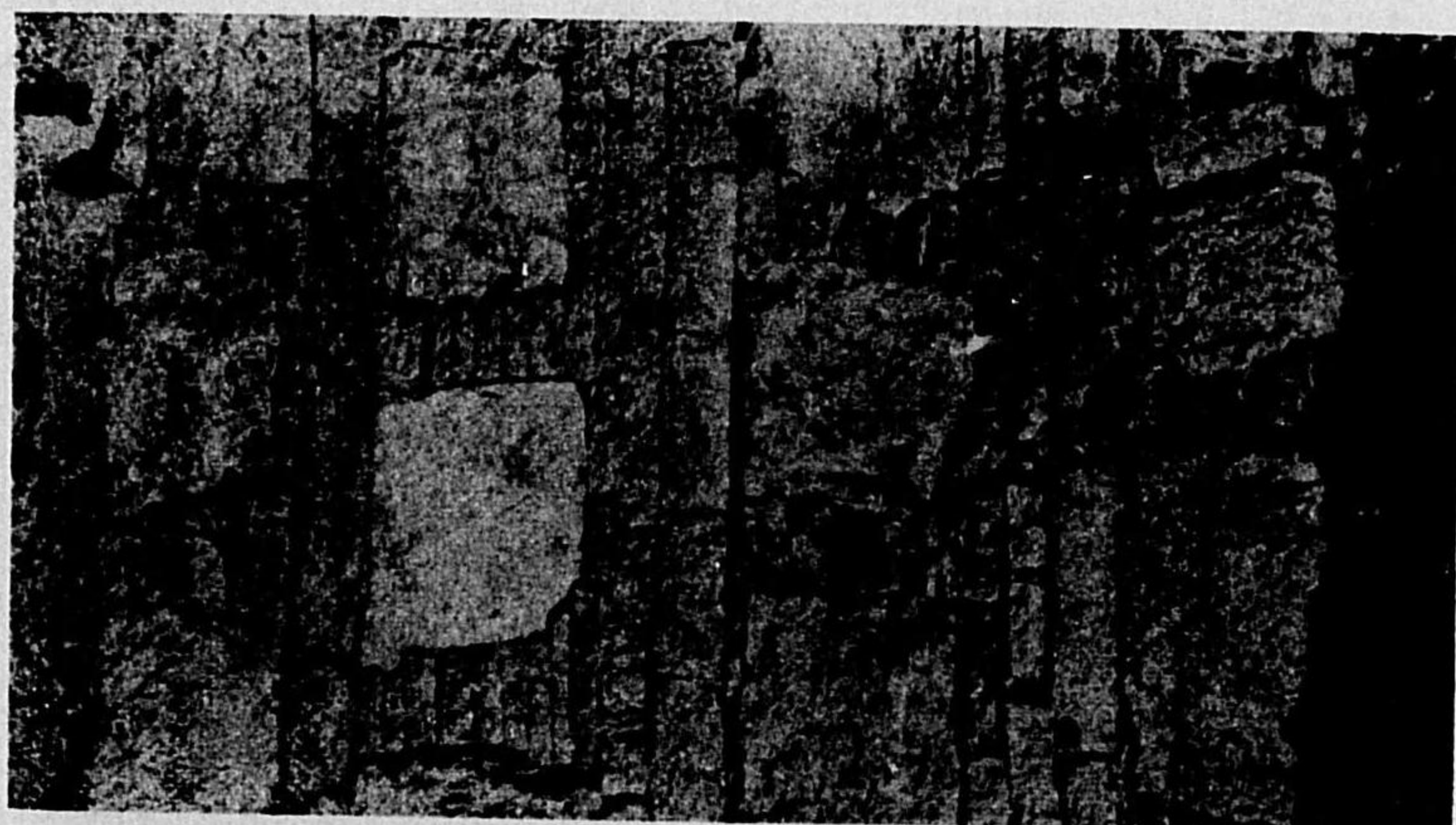
左。パーラー塔壁面

此分だと右の二つが「亂積」(ランツミ)、左のは「切石積」(キライシツミ)である。

(物指は曲尺の二尺・昭和十一年一月三十日)

(物指は曲尺の約一尺(一呎)・同)

(昭和十一年一月二十九日)



た。此間晝間は相當に暑いけれども、夜はまことに寒かった。夜ばかりではない、朝も可なりこたへた。ここは焚くものがなかったたので、何もなしでがまんしたが、二夜共寢返一つしても、背中から水をかけられた様に寒さを感じた。十二月九日以来、蚊帳を用ひなかつたのは、ピンヂの夜が初めてだったし、背中が寒くてゾーゾーしたのはここが初めてであった。厚い毛のスエッタを着、冬外套を一着に及び、厚い襟巻をしてマスクをかけ、三十日の朝トンガでパーラー塔へ行った時は、寒くて手が出してゐられぬ位であった。一月二十日夕孟買をたつ時、ワッサンは冬の手袋を持って行く様に勧めたが、一笑に附してしまつたところ、ここで初めてあの注意は尤も千萬であつた事が判つた。スエッタも襟巻も冬外套も實はTさんが貸してくだされたのだから、手袋も一所に頼めばよかつたのだ。ワッサンは黙まて自分のをだして両手にはめ、私をみて「寒いですな」といつて笑つた。正にざまみろといふところ。日本にゐると印度といへば年百年中あつてあつて眞つ黒な人間ばかり住んでゐる様に考へるだらうが、成程南方はともあつた。併し北の方は實際驚くべく寒いから用心が肝要である。精確に調べたのではないから、間違があらうが、凡そ日本にすれば阿波の徳島乃至下關か門司邊と同緯度だから、これでは寒いにきまつてゐる。後の旅行者の注意迄に記しておく。

タキシラからノウシエラへ行き、タクチ・バハイへ往復し、ベシャワーに出て、再びシャー・ジ・キ・デリーに迦賦色迦寺址を訪ひ、ラホールに引返して、それからインダス河流域に沿ひて南下したのであるが、都合により、それを次回に延期し、ここにはラホールから南下の記事を先にすることにした。

四〇、ラホール (Lahore) からモンテゴメリー (Montgomery) へ (地圖)

ペシャワール (Peshawar) をたつてラホールへ着いたのは、二月四日の早朝であったが、豫て孟買の日綿支店長鈴木富二郎さんから手紙をだしておいてくださったので、此朝驛迄態モンテゴメリーからYさんが来てゐてくださった。前日からラホールへ来て泊つてゐたとの事で、同道して先づ直にファレットス・ホテルといふ宿屋へ行つたところ、大入満員で先年宿泊した時からみると家は三倍位に大きくなつてゐて、とても繁昌してゐるのに驚かされた。客が多くて入りきらないので、庭にテントを張つてそのうちに迄收容してゐる始末であった。一二泊ならここはやめた方がいい。ここから程近いところにネドゥス・ホテルといふのがあるから、それに行つた方がゆつくりしてよからう。これも亦後の旅行者のために書つておく。

二月六日の朝は雨が降つてゐた。昭和十年十二月二十三日、マドラス市を距る五十哩のママラプラム (Mamalapuram) で雨にあつたが、それ以来のことであつた。此朝九・二〇ラホール驛發のカラチ・メール (Karachi Mail) 列車に乗つたら大變な人で、漸く後ろの方の不景氣な一等車内に座席を得られた。汽車は一二・〇八にモンテゴメリーに着くべきのが八分早く着いたので少しまごついたが、Yさんは家族總出で驛まで来てくださった、直に日綿宿舍の客となつた。この日午後七時頃、隣りの町のオカラ (Okara) から江商出張所員Iさんが来てくださった。Iさんはハラッパへ案内してくださるためである

さうな。Iさんは近江の産、大阪高商出身ださうで、純大阪辯で盛にまくしたて、愉快に話をされたので、どうも印度にゐるといふ氣になれなかつた。夕食は座蒲團の上に座つた家族的のもので、Iさんは盛に飲み盛に談じ、ついゆつくりと座り込み、室に引あげて寢に就いたのは一〇・三〇であつた。

四一、ハラッパ (Harappa) の遺跡 (地圖)

前日朝からの雨は、午後になつて晴れ、夜はいい天氣であつたが、七日の朝は大曇りで、出發豫定の十時になつても其状態を續けてゐた。例ひネバル行は失敗しても、「ハラッパ」と「モヘンジョ・ダロ」とは是非一見を希望してゐたのが、遂に時節到來、目的を達し得るのも最早四〇分位後といふ所迄漕ぎつけたのである。喜び勇んでIさんがオカラから乗つてきた車にのつて出るには出たが、空は大曇りで降らないのが不思議な位であつた。

ものの十五分位走つた頃、前日來の豪雨で水が出て、道路の上に二尺もでてゐるから、車は行けぬといふ往來止がしてあつた。そこに道路工夫らしい男がゐたので、それと運轉手と何か問答してゐたが、再びモンテゴメリーへ引返し、ここから別の道を通つて、やがて運河に沿ひて直線路を走りだした。運河長さ一〇〇哩以上、灌漑用のためインダス河の水を引込んでゐるが、此運河に沿ひて廣い立派な道がある。カナル・ロードといふ。こんな日には當然通行ができるが、理由なしに通つて見つかるとRs. 50の

* Harappa = "Hara-Pada" = "The foot of Shiva" (Mahan-jo-Daro, p. 18)



ハラッパの哩標と陳列場（昭和十一年二月七日）

ハラッパといふ村があるので、この遺跡を其名を冠して呼ぶのである。陳列場は遺跡の其一端にあり、發掘せるあらゆるものを陳列してある。膝を抱へて上を向いてゐる豆人形は實によくできてゐた。面白かったのは、「白澤」らしいものを刻した印章があったことである。

罰金ださうな。

遂にハラッパ零とかいた哩標の所に達した時、前方に四角な小さい建物が見えた。ここが陳列所で發掘品全部並べてある。前から通知がいつてゐたせいか、所長（らしい印度人）が待つてゐてくれ、すっかり案内をしてくれた。極小さい破片迄保存してあった。一巡したうちに、両手で兩膝をかかへ、尻と足の裏とを地につけ、上方をみてゐる様な姿勢の、高さ二三寸の泥人形が澤山にあったのが目についた。勿論作は粗末であり、首から顔へかけては、小さい豆位の土のかたまりをつけたに過ぎない程度のものだが、實によくできてゐた。かういふ場合私は實物を所有したいといふ考へはないが、先方から若しやると思つたら、この豆人形なら貰つても悪くないと思

つた位、よくできてゐた。こんな氣のきいた人形を、よくも今から5000年も前につくつたものだと、大に感嘆したのであった。

其次には小形の印章が注意を惹いた。このうちにはどうみても「白澤」と思はれるものがあつたからである。胴體は多少變つてゐるかも知れないが、とにかく頭が人間で鬚を生やして居るから、さうに違ひないと考へて所長にきいてみたが、象だといつて承知しなかつたので、いい加減でやめておいた。併し館内の列品について、簡にして要を得た説明振りは、今でも有難く思つてゐる。外へ出たら丁度天候恢復のしかけで、雲切れがして青空も少し見えてゐた。所長はあとは自由にみてくれといつて、ここから引あげてしまつた。

夫から随分ゆつくりとみた。Iさんは前に一度きたことがあるさうだが、半分みて歸つたさうである。此日はIさんにとっては大悪日で、私とつきあひに殆んど全部を歩かされた。相すまぬとは思つたが、私としてはここだけが目的できたのだから、さうして二度と來る見込はないのだから、できるだけあちこちを歩いた。廢墟はかたまつて一ヶ所にあるのではなく、方に散つてゐるから、随分歩かねばならぬ。勿論辨當は持參したから、ハラッパの村落の見える小山（發掘した土を積んで）の上で食事をしたが、此時附近は全體青空となり、日がカンカン照りだした。食後も亦できるだけ歩いて見、一五・五〇に愈よ分れを告げ、來た道を逆に走り、一六・二〇に歸着した。遺跡で煉瓦の大きさを測つてみたら、平均94×46×24（單位）あつた。もう少し大型のものもあつたが、これは測らなかつた。二一・五〇空はよ

く晴れ、星が一ばいにでてゐた。

四二、モントゴメリーからラルカナ (Larkana) へ (地圖)

旅客列車——どれでも客を運搬する汽車はさうだが、郵便列車でも急行列車でもないのを Passenger Train とさふ——は毎日一一・〇〇にでる。ノロ行で一つ一つ停つて行くのだが、此にしないと先で困るから、さうきめたところ、Iさんは前夜も泊つてくださった、驛には着いた時同様Yさんの家族とIさんとが見送つてくださった。昨日恢復した天気はまた逆戻りで、大曇りの陰鬱な中を出發をした。カネフル驛 (Jn. Stn.) に二時間停車してゐた間に、先日私が乗つたカラチ・メールが追ひ越して行つた。この邊になつてからまた好晴に轉じたが、何にしろ一つ所にあるのではないから、いろいろに變るのも當然であらう。ねる時分には満月らしい眞圓の月が、シンドの砂漠を照らしてゐた。

二月九日六・四三ローリ (Rohi Jn.) 着、のりかへ、ルク (Ruk) 行のが九・一五にでるので、此間に驛食堂で朝食をすましましたが、好晴なので天氣に心配はなくなった。しかしこの汽車は、黙まつて乗つてゐれば、バルチスタン (大地震のあつたケタの方面) へ連れて行かれるので、四驛いつてまた乗りかへ、さうして漸く一一・五ハラルカナ (Larkana Jn.) へつき、直にD・B・へ行つてみたら満員であつた。既に數日前にYさんから手紙をだしておいてくださったが、夫れは何にもならなかつた。何でも警察署長の一行が占領してゐるとのこと、これでは仕方がないから驛に戻り、直に自動車でもヘンジョ・ダロへ往復

し、夜汽車でカラチに出ようと決め、ワッサンを車屋へ走らせた。

此町には車が二臺あるが、此日は偶ま回教の祭禮日に當つてゐるので、町を距る六哩のモスクへ參詣者を運んでゐるから、到底駄目だときかされ、遂にあきらめて驛待合室に一泊することにした。幸なことに此驛には一等と二等と待合室が別であり、小じんまりしたい室で且つあいてゐたから、早速助役の承諾を得て占領して了つた。漸く泊るところだけ出來たのである。前以て萬全の策を講じておいても、かういふことになるのでまことに困る。百計盡きれば軒下へねる覺悟が必要である。泊る所はできても食物がないのだから寢具と食器と食料と従僕とは絶対に必要なのである。讀者諸君若し入笠されるならば、相當に用意していかないと進退谷まる時があるかも知れない。注意が肝要である。

ワッサンは夕刻にもう一度車屋へ行つたさうだ。夜になつてから、回教の祭禮は翌日もつづく、夕刻になつても車屋は歸つて居ないから、夜八時に驛へ來る様にいつてきたとの報告を受けた。これでは見込がないから、一層の事翌朝六・二〇の汽車でドクリ (Dokri) 驛まで行き、あるか無いか判らぬが、ここからトンガで往復をしようと決心してワッサンに其旨を話したところ、實は驛員も左様にいふし、他にも其方をすすめる人もあるといったので、愈々さうきめて早く就床した。

然るに九時すぎで車屋がきたさうで、談判させたら九・〇〇發一五・〇〇驛歸着として、往復の時間を入れて六時間Rs.15との申出であつた。實はこの車に逃げられると困るが、運賃は足元を見られてゐるので何とも仕方がない。そこで出發を八・三〇とし、歸りは都合で一五・三〇になるか一六・〇〇にな

上。ローリとルク間 インドス河に架した鐵道及人道橋 (昭和十一年二月十日)
下。ラルカナ驛風景 (昭和十一年二月十日)

上はインドス河に架した橋で、中央は汽車、兩側は人が通る様にしてある。橋上は汽車の時速三哩以下と規定されてゐるので、進行中の客車の窓から得た寫眞。下はラルカナ驛風景、突き當りに見えてゐる建物の左手の窓は私の泊った室の夫れで、右手の半圓拱は室前溝椽の夫れである。右手の高いのは本線の乗降場、左手の線路は支線の夫れ。



るか判らないが、Rs.15でいいから行けといったので、談判成立した。距離はマレーに16哩とあるが、これはうそらしい。車屋は24哩あるといった。どれがほんとか知らぬが、これで安心してねることができた。殊に心配は明日の天氣だけである。

ローリとルク間でインドス河を渡る。其橋は頗る美事で、中央を汽車が通り、兩側は人が渡る様にしてある。餘り速力をだしては危険なのか、一時間三哩、といふ札が立ててあつた。そのせいか随分のろかたので、橋の上で停るかと思つた位であつた。それで汽車の窓からとつた寫眞のうち、一枚を挿繪にしておいた。ベシヤワーへ行くとき、二回渡つてゐるが、いつも夕刻か夜かではつきりしなかつたが、今回下流では速力ものろかつたし、天氣が大變よかつたので、景色を充分鑑賞することができた。楽しい思出の一つ。

四三、モヘンジョ・ダロ (Mohenjo-Daro.) 往復 (地圖)

去る大正十二年二月十日には印度の第一回旅行を了り、孟買から大阪商船の貨物船ヒマラヤ丸で歸朝の途に就いたが、それから滿十三年後の昭和十一年二月十日には、ジョン・マーシャルの名著【モヘンジョ・ダロ及インドス流域の文化】(MOHENJO-DARO AND THE INDUS CIVILIZATION) で益益有名になつた西紀前3000年の遺跡を見學のため出かけたので、甚だ愉快であつた。さうして其上に其時から滿

一年を経過した昭和十二年二月十日に其記事をかいてゐるのだから、愈以て不思議な因縁がつき纏つてゐると思ふのである。

車は正に八・三〇に驛へきたが、其車たるや實に稀代の古品であつたため、ワッサンは私の顔をみて唯一言「ベリー・オールド」といった。此言には一點の誤りはなく正に其通り、よくもかう酷使できたものだと思ふが、これは後にノウタンワ (Nautanwa) からルンビニ園 (釋迦降) 行の時のに及ばなかつた。だから常に上には上がることと思ふべきである。これでも此土地にある二臺のうちの一臺で、もう一臺 (もつと美) の方はD・B・を我物顔に占領してゐる署長さんが、サーベルの威力で占領してゐるさうである。Very oldだからだらうが、Not so oldだらうが人民は有難く心得べきであらう。

其「ベリー・オールド」車へのつて出かけたが道路は甚凸凹が多い。併し他に何にしる車はないのだが、邪魔はなく全速で走りドクリ驛にでた。といったところで、停車場に行つたのではないが、直ぐ其傍を通つたので、そこに「モハン・ジョ・ダロ^{8 1/2}哩、ドクリ⁰哩」(小標上)といふ哩標があつた。ドクリ驛から近途をいつたらもつと少ないだらうが、車を通ずる道路だと^{8 1/2}哩の三里半といふことになるだらう。途中で従僕と運轉手とが辨當を買つたり車に水をのませたりして、一〇・〇五に廢塔の下に車をとめた(七九。スツバ・セクションとある上) (方點線路の交會點に158とある附近)。

先づ第一に廢塔と其周圍の僧坊址から見出し、南方から東北を一巡して車内で辨當をすました。此日は大分暑かつたし、適當な木蔭はなし、それで車内ですましたので、さうするより仕方がなかつた。暫



モヘンジョ・ダロ出土印章に現はれたる「白澤」]

(M. D. & I. C. 附圖復寫)

原圖の倍程に擴大復寫したら、必要な部分が大部分消失したので、止むを得ず少しく補筆し、縮小してこれを作ってみたが、これでも

原圖より少しく大きい。

其解説に、身體は牡羊 (ram) の如く、人面で牡牛 (bull) の角と、象の鼻と牙とがある。この獸の全半身の長い房房した毛は牡羊の如く、後身は虎の如くである。とあるが、この繪でみると下がってゐるのは象の鼻 (trunk) ではなくて、首へ巻いた飾りの結んだ端とも見られ、鼻はやはり人のと同じで顎鬚が生えてゐるのである。身體が鶴式なのは、やはり地方的變種とみるべく、私はこれを「白澤」とするに躊躇しないのである。ハテッパ陳列所長が象の様な長い鼻だといひ張つたのは、“……a human face, and the trunk and tusks of an elephant.” とある解説が先入主になつたものと推定する。

く休憩してまた廢墟巡りをなし一四・四〇に終つておいた。此間晴曇相半ばし遂に曇ってしまったが、寫眞は思ふだけとつたし安心ができた。午後には陳列所もみたが、膝をかかへた豆人形を除いては、ハラッパと殆んど同じもので、これでは全くかういふ方面に無關心な人人でも、普通の頭をもつてゐるならば、兩遺跡が同時代だといふことを認めずにはゐられまい。以前からいろいろな本や雜誌で、ここから出土した顎鬚を生やした頭のないような、餘程特徴のある半身像の實物をここで見たとき、おそろしく小さいものだといふ感がした。これが餘りに小さいのは意外であつた。

曇っておそろしく不景氣の中を疾走してラルカナの町に出で、カラチのTさんへ明到着の至急報を打ち、驛へ歸つてみたら、昨夜一泊した待合室は西洋人が占領してゐた。仕方がないから隣りの二等待合室で休憩することにした。ワッサンは早速夕食の調理に取かかった。私はその寢臺の上にスーツ・ケース一個をのせ、それを机代用として勝鬨院の奥田さんへ手紙をかけた。出發の時から時々様子を知らず様にといふ依頼があつたので、それを實行したので、まあこんな所へ行きましたといふことをお知らせしたのである。其土地からだせば、記念にもなると思つたから。

遺蹟の見學を終つて歸りがけに、前方から一臺の自動車が走つてきた。すれ違ひさまに、ワッサンは日本人が二三人乗つてゐるといつた。彼の見誤りでないとすれば、まことに不思議なことである。とにかく私が歸る時分に行つたのでは一巡もできまい。折角行くのに勿體ないことである。夫れにしてもどこで自動車を得たらうか等と考へたが、其場限り忘れてしまつた。然るに私が手紙を書いてゐる最中に、一七・五〇、三四人同じ待合室に頼れ込んだ。同時「お客さんがあるな」と日本語をいつたから、扱てはワッサンの眼が正しく、先刻のは正に日本人であつたのだと思つた。歸りにすれ違つてから三時間。してみと往復に二時間餘りかかる筈だから、正味現場に一時間足らずゐたことになる。あの人達は何をみてきたのだらうか。

後にカラチへ行つてから判つたが、此等の人人は何れもさういふ方面に没趣味な日本人であつた。ワ

ッサンはどこからランプを持ってきてくれたから、スーツ・ケースの上に新聞紙を敷き臨時の膳をつくつて夕食をした。私がいつ迄も背を向けてゐるので、彼は日本人の旅客が三人ゐるといつて注意をしたが、私が知らん顔をしてゐるので、もう何も言はなかつた。私はかう考へたのである。例ひ挨拶をして日本人の癖である名刺の交換をしたところで、其場限りでもならぬ。餘計な手數をするより手紙でもかいて出した方が、記念にもなり時間の儉約にもなる。此夜二〇・五一につくべき汽車は二一・一〇にいつた。私はこの汽車にのつてカラチ・カントメント驛に向たのであつた。三人の日本人は一九・四四に私のきた方向へ行く汽車にのつて出發していつた。彼等が餘りに目立つたせいか、私までも巻添えをくひ、巡査に職業姓名等を尋ねられた。

四四、モヘンジョ・ダロの塔婆及僧坊廢墟

モヘンジョ・ダロはドクリ驛から僅かに7哩(6哩・8哩と、距離に三種ある)、ラルカナの北方(七八では正に東南方)25哩にある廢墟に、現在命名されてゐる地域を指すのである(「マヘンジョダロ」第一頁書き起しの文)。此地域はシンド地方にはよく知れてゐて、何度も郷土史家の踏査を経たりしたが、ここが史前の大遺跡であつた事は、一九二二年バネルン(R. D. Banerji)氏が發掘を試みる迄、知なれなかつたので、寧ろ夫は當然といへる。理由は古い廢墟から採つた煉瓦を以て築造した塔婆と僧坊のみが、地上高く現はれてゐただけであつたから、他の遺跡もせいせい耶蘇紀元を距る遠くない佛教建築と、同時代位だらうと推定してゐたからであつた。だか

らバネルジ氏も初めは史前廢都の大發見をしよう等とは全然考へてゐなかつたといふ事である。所が偶然にもハラッパに於いて發見したと同様な、不可解な文字を刻せる印章を發見するに及び、これは容易ならぬ事實が秘められてゐるのだらう。といふ様な事が口火となり、重大な結果が現はれてきたのであつた。斯る次第で塔婆僧坊は高い所に以前から現はれてゐたのである(八二・八三)。

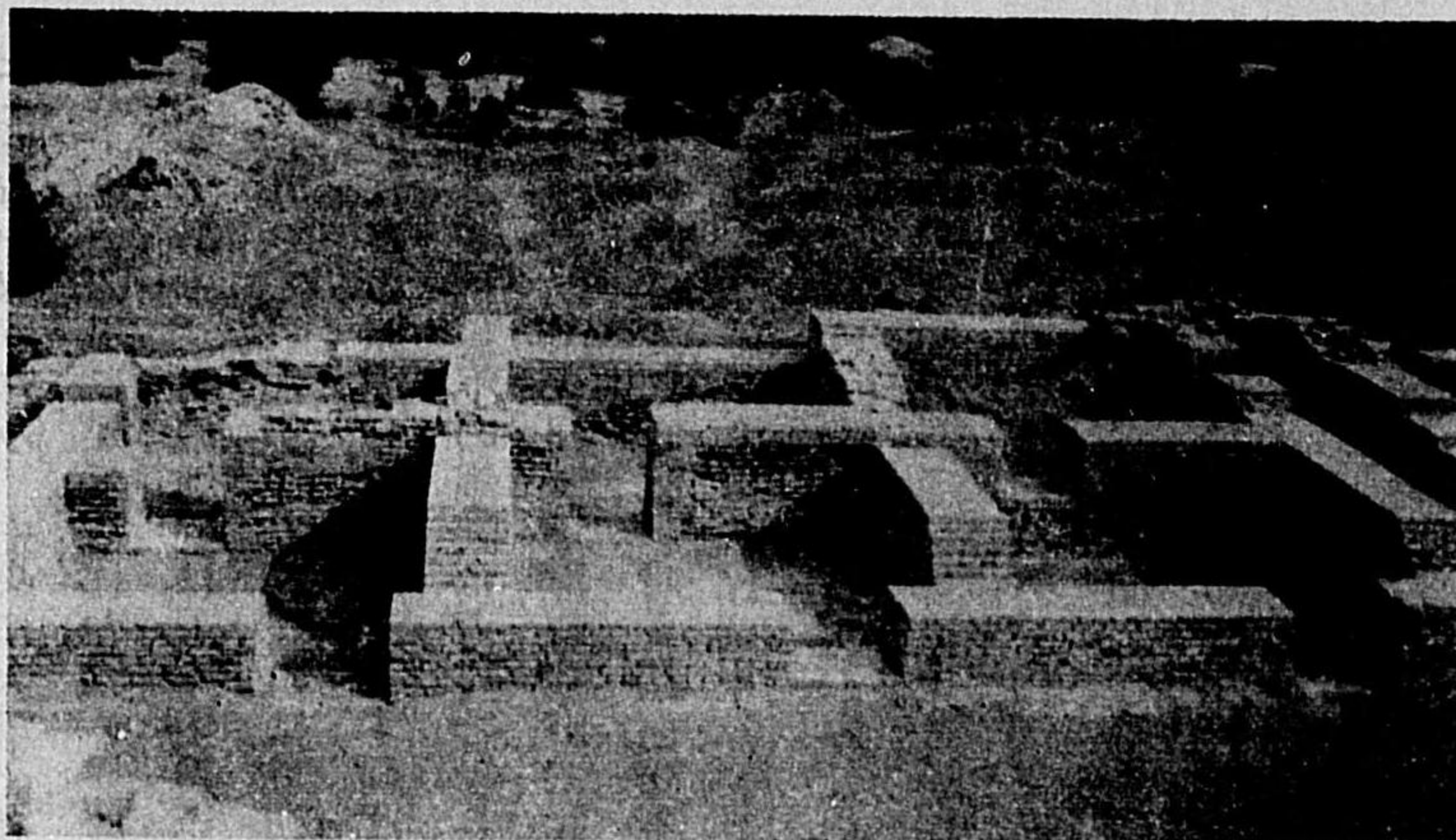
塔婆は周圍にある僧坊で形成せる中庭の中央になくて、少しばかり後方に建つ。塔婆の基礎及び圓形の基壇は東方から最もよく觀察し得べく(八〇)、南北徑は凡そ50呎あつたさうである。東西徑はよく判らぬが、東西に残される階段を入れて約74呎。塔婆の建築材料たる煉瓦の漆喰としては泥土を用ひ、煉瓦は長手と小口と一つおきに積んである。

基礎高約20呎、登口は東面からで、最初に踊場と階段とがあり、次に小室次に通路、最後に左右に階

* ほんとうは何とよむのか知らないが、普通はモハンジョ・ダローといふ場合にふらしい。私の知つてゐる綴り方には、*“Mohen-jo-Daro”*、*“Moham-jo-Daro”*、*“Mohan-jo-Dero”*、*“Mahan-jo-Daro”* と四種類ある。どれでもいふのだらう。一九三三年、カラチで出版された手頃の案内記 MAHAN-JO-DARO には

The word *maho* (Formative singular *mahay*, plural *mahan*) means “killing”, “slaying”, or “slaughter”, being derived from the Skt. root *mush*, (Prakrit *muh*) “to kill”, or “destroy”. In Sindhi, *Daro* signifies “a mound”, and with *jo*, the genitive suffix, the word *Mahan-jo-Daro* means, the “Mound of the Killed”.

とある。此書のかき起しに考古局幹部は “Mound of the Dead” と翻譯されてゐるとかつてゐる。



塔婆をかこめる僧坊の一部(昭和十一年二月十日)

塔婆の基壇から東僧坊の一部を俯瞰したもので、どれだけ推定が入つてゐるか知らぬが、整然と復原ができてゐるので、見學には都合がいい。

段がある(八〇に南側の階段が)其階段に登らうとするところの踊場の正面からみて突き當りに、嘗て一度佛像を安置した小龕がある。形から見ても明らかであるが、一層確かな事には、ここでバネルジ氏は佛像足部の殘闕を得たさうである。これは塑像で塑土を以て仕上げたもので、當初は極彩色が塗金がついてあつた筈である。

廢塔の高さ現在地盤より72呎、東面は急勾配、南西北の三面はなだらかな高地に建つてゐる。既に記した様に此遺跡は一九二二——三年(大正一二年)にかけて、主としてバネルジ氏により發掘され、其下方の史前時代に屬する層も亦、同氏が着手をしたが、主としてジョン・マーシャル氏(Sir John Marshall)監督の下にダマ氏(B. L. Dhama)が調査したものださうである。

バネルジ氏により明らかにされた部分は、僧坊に

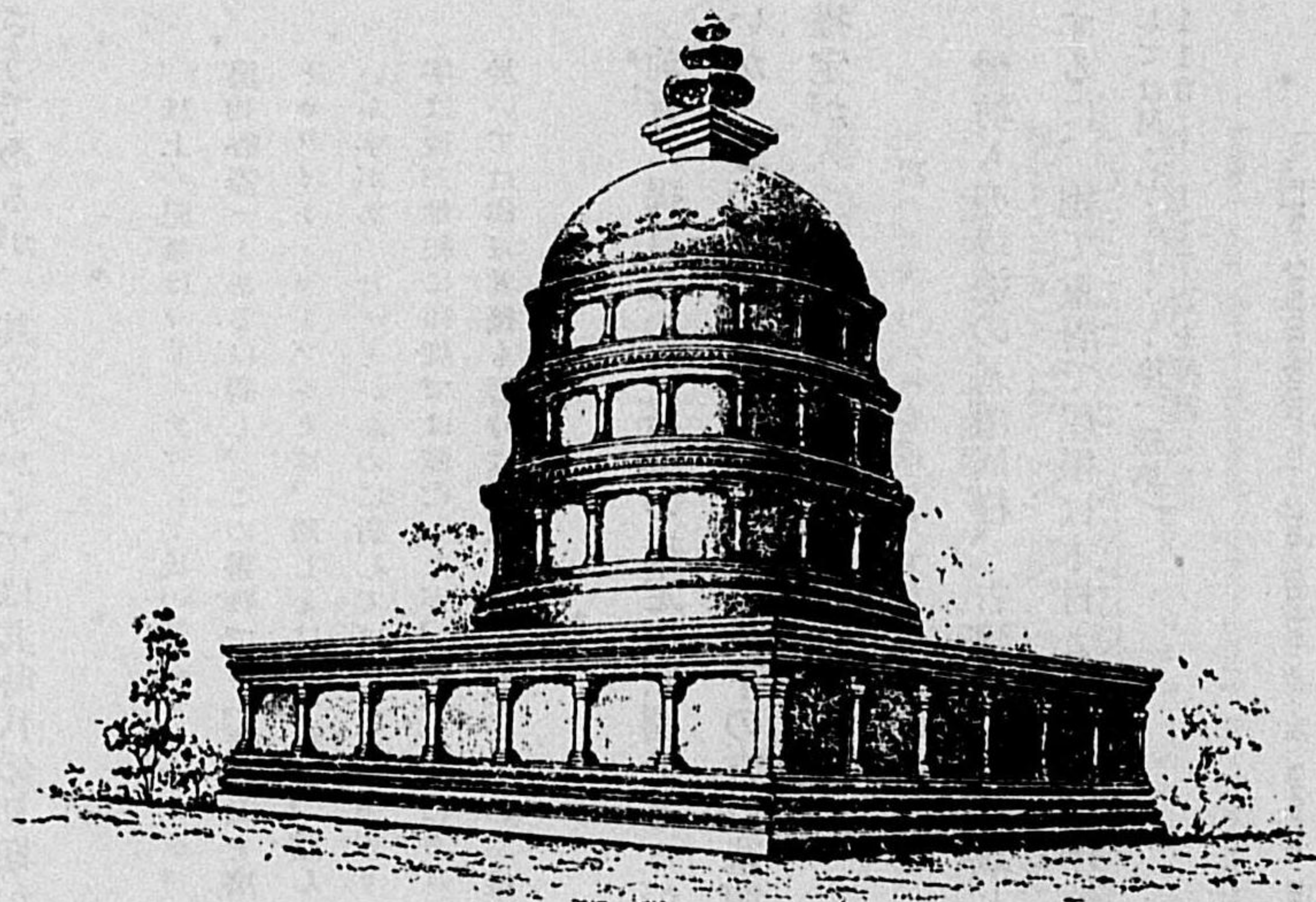


FIG 9.—Conjectural restoration of stūpa at Mohenjo-daro

モヘンジョ・ダロ塔婆推定復原圖
(M. D. & I. C. 挿圖複寫)

を整理の際、彩色せる飾漆喰を發見したので、これによりこの空虚の部分は當初は相當に裝飾されたものだらうといふ説も、一應は理由はあるようだが、此漆喰の破片が塔婆内部にあつたといふ證據もなし、また印度に於ける塔婆で内部空虚になつてゐた例が他にないし、またこの上の大伏鉢を如何にしてもたしかといふ事も考へれば、どうも初めからかういふ風に造つたとは考へにくい。だからこの部分は、他の多くの例にみる様に、土石瓦礫を以て埋めて全體を固め、その上に大伏鉢を築造したものともみて差支ない様である。

此發見された彩色漆喰は、青・黄・赤・赭等で彩色され、其上に各種の繪畫があつた痕跡が見え、又貴霜朝時代の文字でサマナ(Samāna (Skt. sramana))といふ言葉があつた

して四方を取り囲み、中央に大塔を有する一區劃で、ここは修覆再建等數回に及んでゐるが、いつも其上上といふ風に建てられたため、層をなして高くなつたので、中庭の原地盤は現塔圓形基壇の下20呎ださうである。次の地盤は上方1乃至2呎の高さにあり、其上に少なくとも時代を異にしてゐる三重の地盤があつて、さうして最後のは最初のの床上6呎といふ。併し勿論此等の床の間は水平ではない。といふのはある原因から床が沈下すれば、そこを埋めて新しく水平ならしめたといった様な有様であつたからである。最下の舗装は古建物より採取した煉瓦を用ひてつくり、其下に厚約1呎に粗煉瓦を敷いてあつた。第二床も同様であつたが、其上から最早これ程の注意をして施工してなかつたさうである。

正面の階段は幅3呎11吋・踏面10—11吋・蹴上8吋、現在南方には八北方に七段を有するも、この段を昇りつめて直に基壇の上に出られたか、或はそれそれ右又は左に曲つてからであつたかは全く判らない。併し正面には階段をとつたのだから、基壇上に達する充分な餘地を得るため塔婆の前面をあけたのであるが、現在重要な伏鉢以上はいつの頃か亡くなり、漸く其下の圓形基壇が高さ8呎だけ残つてゐるのである。此部は徑約33呎、内部空虚で大きき92×44×22(單位尺)の乾燥煉瓦を用ひてある。パネルジ氏が調査に着手以前に、副葬品を得る目的で村人が盜掘を試み、約14尺掘り下げたところ、石花石膏(アラバ)製の遺物容器を得たが、其破片が後に附近が發見された。併し遂に推定復原をなし得る迄には到らなかつたさうである。

圓形基壇の内部空虚になつてゐるところは、最初からかうなつてゐたかどうかといふに、基礎の西方

さうであるが、其文字からでは其時代の初期から末期か未詳ださうである。

以上の記事はマヒルチャンド氏の著「マハン・ジョ・ダロ」の記事と少しく相違してゐるようである。例へば「石花石膏の遺物容器」とあるに對し、この書物では「法螺貝を磨いて造つた蓋のある白大理石の遺物容器」とある如きで、アラバスタアとホワイト・マールとは、同じとは思へぬが、讀んでみたのでは何れが真か判らない。又「貴霜王朝時代の文字でサマナといふ字があつた」といふのに對しては、「デバナガリとカロシユチ (Kharoshthi) 文字の銘文があつた……このカロシユチ文字は後三世紀に印度では滅亡したが、後一世紀にカニシカ王の印度に於ける帝國の一部であつた支那土耳其斯坦の西部地方に於いては尙ほ其後も暫時は使用されてゐた」といふ様なことが書いてある。

前頁に掲げたのは塔婆の推定復原圖であるが、貴霜王朝時代には此様な形で建つてゐたのではあるまいか、といふ位の程度である。最下の方形基壇は煉瓦の崩壊甚だしく、原高を測定し難いので、多分の推定が入つてゐる。

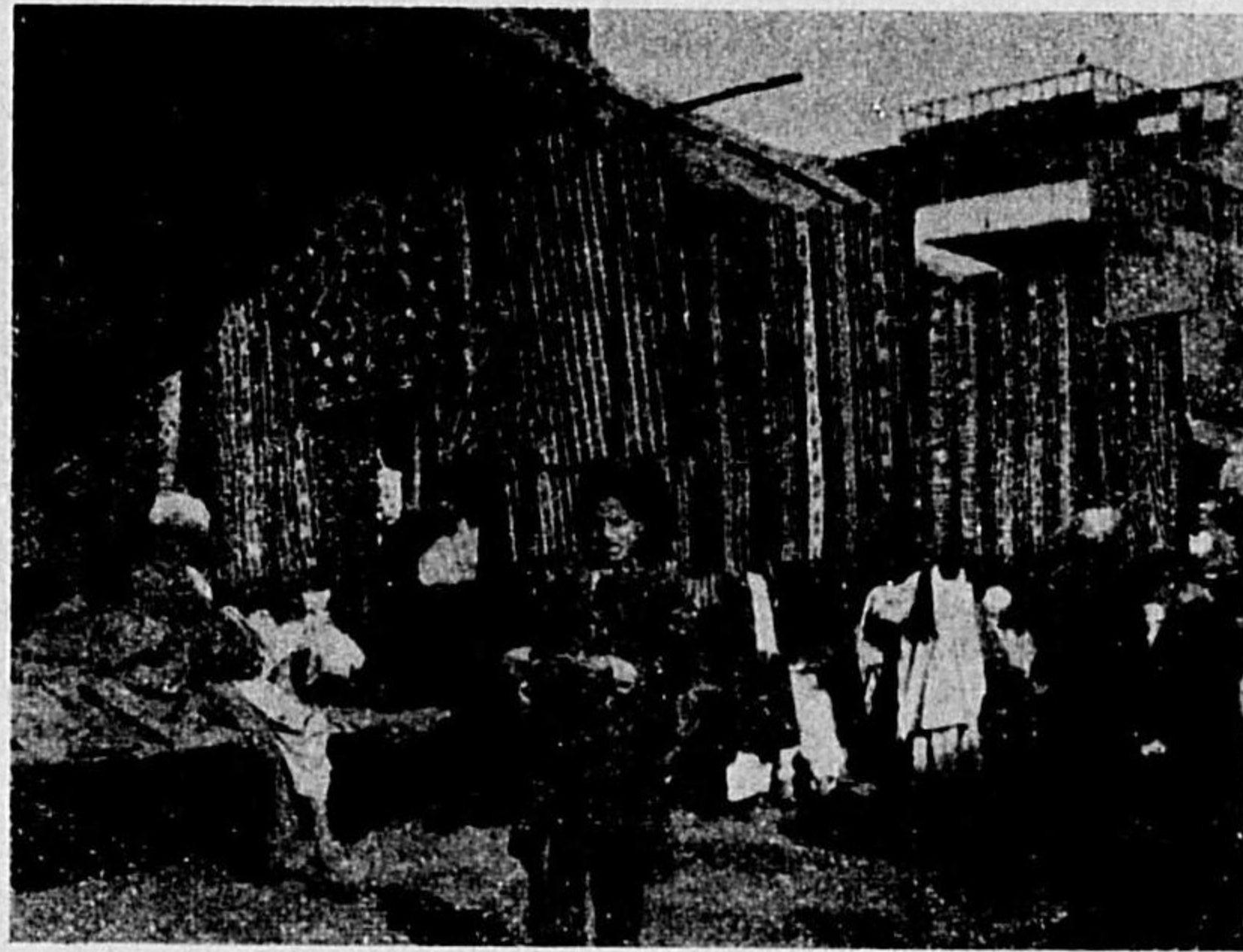
僧坊も亦塔婆の基壇同様、古建築から採取した煉瓦を以て築造してある。此時代の他の僧坊から考察するに、總て重層で屋根は木材より成り、中庭に向つて緩勾配をなしてゐたものと考へられる (塔婆及び僧坊に關してはM・D・&I・C・第一卷第113—117頁を抄譯した)

(昭和十二年二月十日稿了)

* "The restoration of the stupa……is meant merely to give the reader a rough idea of the appearance it is likely

to have presented in the days of the Kushans. So far as the drum and crowning features are concerned, the sketch is based on data gleaned from more or less contemporary monuments at Thul Mir Rakhan in the same District of Larkana. at Mirpur-Khas (ツール・ミール・ルカーン及びミルツール・カーンの塔婆は "THE ARCHITECTURAL ANTIQUITIES OF WESTERN INDIA" の圖版第10及び11にある。其詳細は "ANTIQUITIES OF SIND" 圖版第XXVIII及びXIX, XX, XXIにある。此等の圖により大凡の形は判る。尙ほそれそれ本文を参照せば一層明らかならう。圖版XIXの平面圖のうち小さく推定復原見取圖を掲げてゐるが、前頁掲出のモヘンジョ・ダロの塔婆の復原圖は、大體これによりて作成されたものの如くである), in the Thar and Parkar District, and at Taxila in the Panjab, but the elevation even of the plinth is little more than suggestive; for the brick work is so denuded that it is impossible to be sure of its original contour."

印度佛塔巡禮記



ペシャワー市所見（大正十一年十二月二十一日）

反物屋の店頭で、下げてあるものは黄と赤の二色の染分けが多い。

（第六回）

四五、タキシラ發ノウシエラ (Nowshera) へ

昭和十一年一月三十日の午前で殆んどタキシラの見物をすまし、午後は陳列館へ行つてみた。先年はこの邊に考古局の出張所があり、遺跡觀覽許可證を貰ひに行つた(現在遺跡の所在は遺跡の所
在地でくれる)時、取次の印度人からこちらへお入りなさいと言はれ、不思議に思ひながら行つて、故スプーナー博士に面會し、同博士がこの陳列所の入口のところまで私を送つてきて、若い館員に紹介をして歸つて行かれたことがあつたが、その時の陳列館とはどうも反對の方向をむいてゐる様に考へられてならなかつた。

館内で丹念に列品をみてゐたら、一人の印度人が背の高さ七尺もあらうかと思はれる雄大豪壯なる西洋人を連れて入つてきて、直に特別室へ案内をしたが、其時私にも入つてみないかとすすめたので、入つたところ貴重品ばかり竝べてあつた。西洋人は印度人の説明をききながら、「ワンダフル」を連發してゐたが、私が入口のところまで備付の帳面にかいた名をみた見え、私に日本から来たか、自分は獨乙から来た、二人とも随分遠方から来たものだ、といつて愛想よく笑つた。一五時半になつたので、印度人に禮を述べたあとで、獨乙人に別れを告げたら、此時彼はしゃがんで何か見てゐたが、面白い手つきをして愛嬌を振り蒔いた。大男でも惣身に智慧はまはつてゐた。申す迄もなく何事にも例外例はあるものである。

十六時四十一分タキシラ發の汽車でノウシエラへ行くため、馬車屋に金を拂つた。ワッサンは一日に

つきRs. 3の約束だといつたが、大分遠方へ行つたし、これでは安過るから、一日につきRs. 1を増し、二日分としてRs. 8とした。前日晚くまで追ひつかつた心附として既にRe. 1やつてあるのだから、つまりRs. 3ましたことになつた。これで充分の筈なのに、いろいろ理屈をつけて更にRs. 2を要求した。其馬子根性がけしからんで、餘り慾張るなといつて、それっきり拂はなかつたら、彼は驛長や驛員に連りに何かいつてゐた。さうしたら驛員が私のところへ来て、もうRs. 2ほしいといつてゐると告げたから、約束よりRs. 3増してあるのだといつて撃退してしまつた。一昨夕此地着以來、觀光については割合に面白く過したのが、これで駄目になつてしまつた。

汽車は一八・四七にノウシエラについた。分岐點で大きな驛であつた。豫てグワリヤ行の汽車中で老少佐から聞いてゐたので、早速ジョージス・ホテルといふのへ行つてみた。靜かな廣い場所に建つてゐる大きな家で、玄関に宿泊人の名が掲示してあつたが、大概軍人ばかり、さうでないのは婦人客二名だけといふ有様。出てきた番頭は何となしに蟲がすかなかつたが、幾日泊るかときくので、二日と答へたら、それなら空室があるが、三日目には豫約があるので、とめる事はできないといつた。これでいや氣がさしたが、ともかくも室を一見したところ、氣に入らないので、然らばD・B・へ行つてみる、若し満員だつたら来て宿泊するといつてここを出で、D・B・へ行つたところ、空室があり大變に居心地がよささうなので直にきめた。少佐と大尉ばかりで占領してゐるメージョア・キャプテン・ホテルに比べると、室の體裁や設備は比較にならぬが、洵に靜かではんとうによかつた。よくホテルを飛びだしたこ

とだと思った。タキシラ程寒くなかったので、ストーブを焚く面倒はなく、暖かにゆつくりと安眠ができた。

四六、ノウシエラ滞在、タクチ・バハイ (Takti-Bhai) と シャール・パール (Shar-i-Bahol) 見學

タキシラで大分に無理をしたのでねむかったが、一月三十一日は、大正十一年十二月から懸案のタクチ・バハイ (Takti-Bhai, Takti-Bahai) へ行くので早起をした。ワッサンは前夜何といひつけたのか、馬車屋は暗いうちから来た。それが朝の六・三〇であったから、何ほ何でも餘り待たせるのは氣の毒なので、七・一五に驛へ出かけた。汽車は八・〇五發だから、それ迄の45分を乗降場で暮した。汽車が目的の驛に着かうとする邊の右手に、禿山が見え、頂上に何か廢墟の様なものがあったので、多分あれがさうだらうと思った。

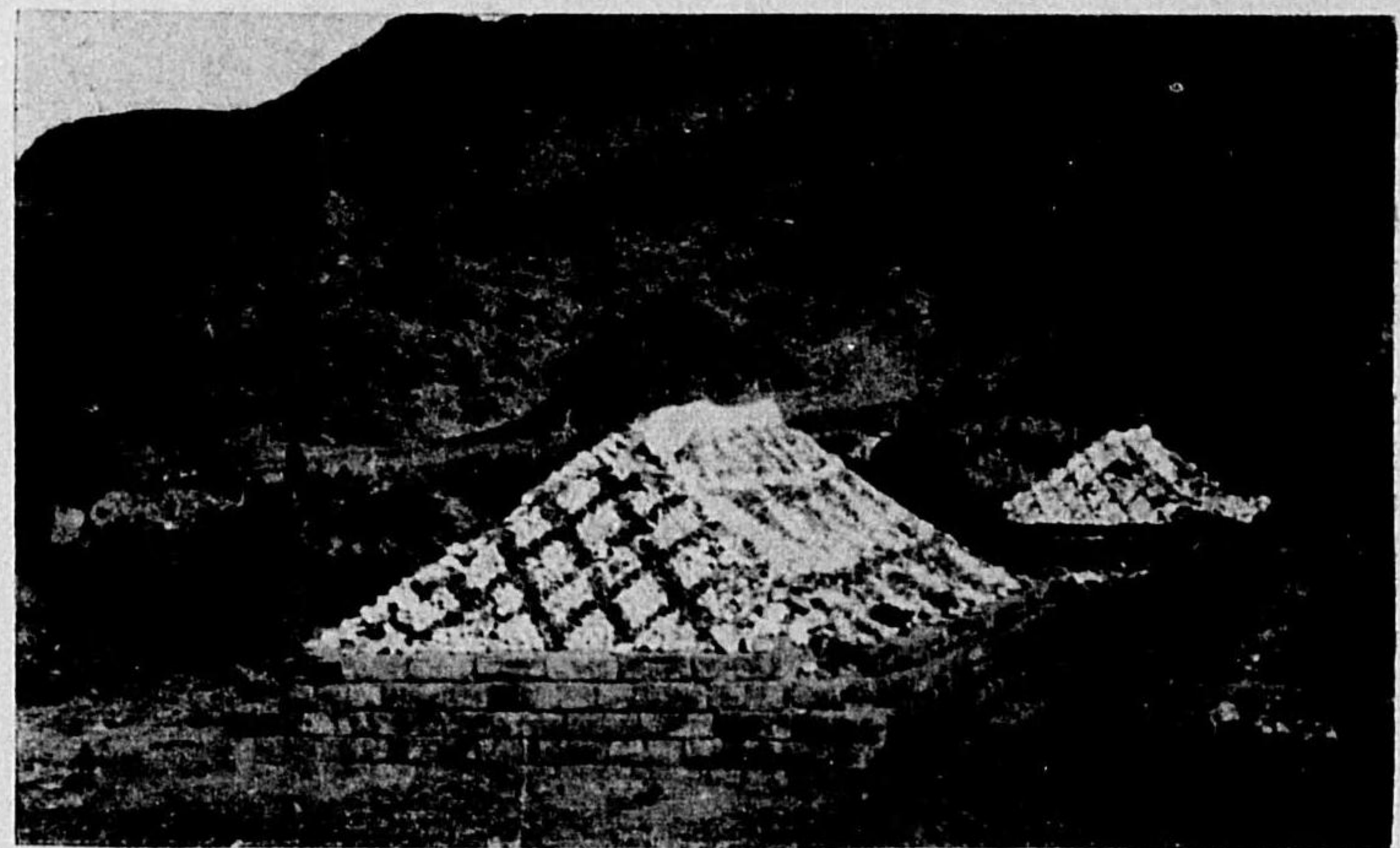
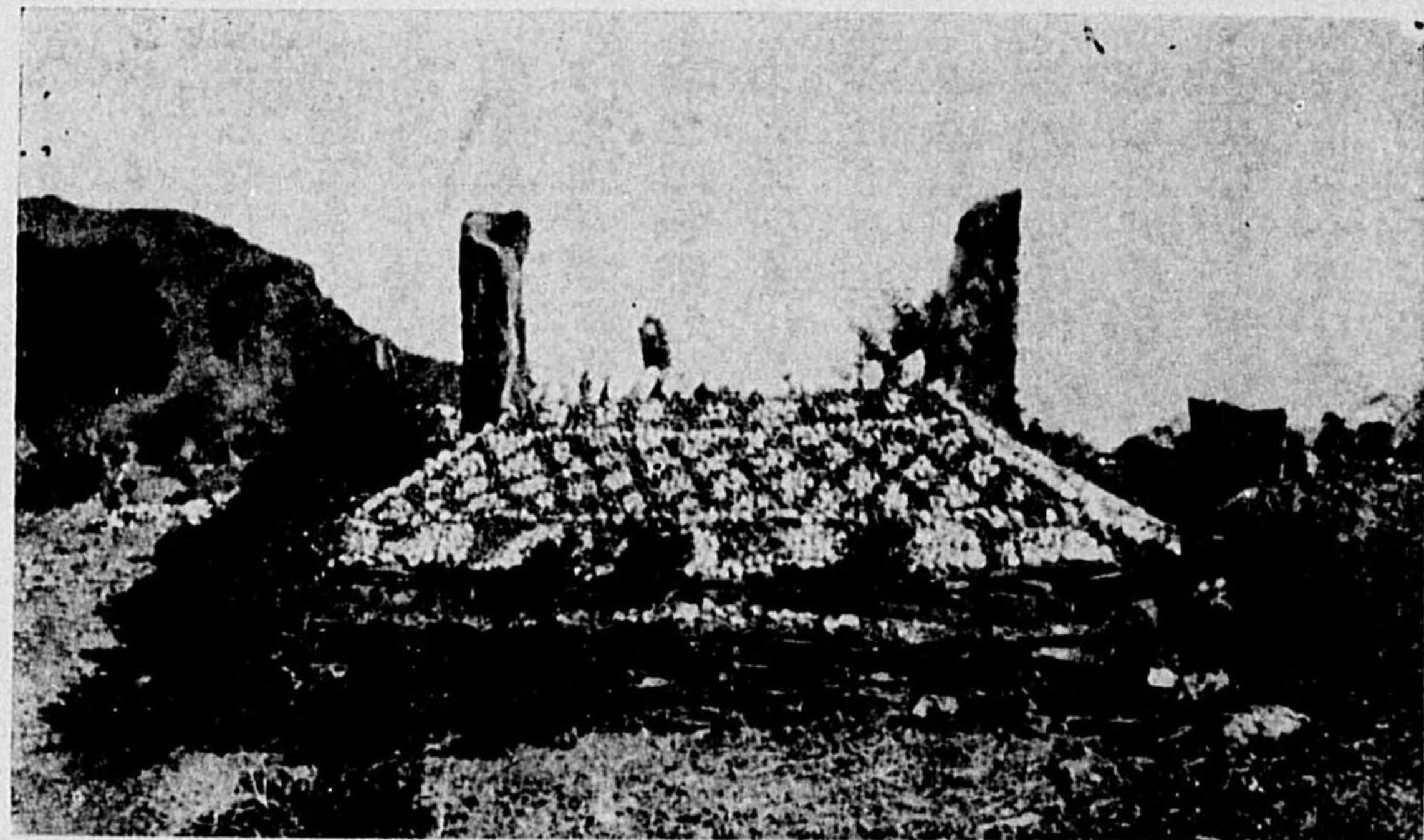
驛へ着てから、不圖思ひついて、荷物——といったところで私の辨當と藥罐に汲んだ清水とだけだが——荷持ち兼道案内のために、驛手か仲仕を一人連れて行った方が便利だらうから、驛長に世話を頼まうときめ、ワッサンに談判させたら、間もなく中年の人のよささうな男を連れてきた。少し自慢の様だが、これは正に妙案であつた。驛を出たのが正一〇・〇〇、汽車中から見えたのは別のもので、目的の僧坊は頂界線の向ふ側だから、山のこちらからは見えない。



上。タクチ・バハイ驛風景 (昭和十一年一月三十一日)

下。タクチ・バハイの町一景 (昭和十一年一月三十一日)

N. W. R. (North Western Ry.) のノウシエラとツルガイ間の支線、前者から六つ目の驛が即此。ここいらの驛の乗降客は大概跣足の三等客で、まともに改札口をでるもの等はさうなく、どこでもすきなところからでて行く。切符なんかどうなるのか、貨錢等はいくらでもごまかすことが可能らしい。上圖は男女一群の降客が勝手な所から町へでる所。下圖は町の光景で其交通が如何に亂雑であるかを見よ。但し高速度の車はつめたにないから至極安全。



タクチ・バハイの回教墓（昭和十一年一月三十一日）

回教徒の富豪は大理石を以て立派な墓を造つてゐる。實に立派でそれ自身が建築の模様の様なものであるものもある。その代りさう有福でないものは、それはそれは簡単で、これでも墓かと思ふ様なものばかり。朝鮮の鶯餅の様に、よく隣りのと間違はないものだと、餘計なことながら心配になる位である。此所に圖示した二種類は何れも家型で、軸部に相當する所を、上のは平たい石を積み、下のは煉瓦を長手と小口と一段おきに積んである。家根に當るところは、白と黒との小石を以て、寫眞にみる如く洵に美しく並べてある。大棟の末端に平たい石をたてたものもある。

驛を出て少し左へ行き、右へ曲り更にもう一度右へ曲り、少し行くと人家がなくなり、線路と先づ平
行して歩くのである。つまりあの禿山（一〇三）を左に見ながら暫く歩くと回教徒の墓地の傍を通る。
ここのは家型四注造の墓標だが、勾配をもった家根に當るところに、白と黒との砂利を連続して菱形の
様に並べたので、見たところが非常に美しい。そのうちの或ものは大棟の末端の、建築なら鴟尾か鬼瓦
を置く位置に、面白い文様を陰刻した板碑をたてたのがある。これまで回教徒の墓は随分みたつもりで
あるが、こんなのは初めてであった。簡單で美しいから二種圖示しておく（次頁挿圖）。この墓地を通過して暫
く行て左に曲り、それから爪先上りの途になり、扱てそれから山にかかるのである。

登山道は羊腸たる小徑だが、割合に歩き易い。政府で始終手入をしてゐるものと見え、道路人夫が數
人で路普請をしてゐた。峠を越して東側にでると、道は自然に右へ行くようになってゐる。さうすると
直ぐ眼下に大廢墟があつた。すき通る様な青空に、半面に日を受けた部分がはつきりと浮び上り、遙か
遠景にはヒマラヤ山脈の一部であらうが、雪を頂いてゐる連峯が紫色に淡く霞んでゐた。こんな景色は
いつ迄みてもあきることはない（一〇五・一〇六）。

此僧坊が掃除も行届き、餘りに美しくなつてゐたのと、未だみたことのない切妻妻入の建物が竝んで
ゐた事と、無類の上天氣であつたこと等も手傳つて、よく來たと思つた。先年來れば尙ほよかつたが、
今でも決しておそくはない。洵に健康に恵まれ、時間も充分もつてゐるから、大概の人が見すにしまさう
ものを観る事ができたのは、どうかんがへても有難い次第である。と暫く天を仰いで感謝の黙禱をした

が、次の瞬間には、變化が多過ぎて、どこから觀たらいいか、眼移りがして困り、あっちへ歩いたり、こっちへ歩いたり、まごまごしてゐるうちに正午になったので、僧室の一部(一〇四「C」)に、番人の用ふるらしい簡易な寢臺を借りて腰をかけ、持ったアセチリン焔爐に點火して藥罐の水を沸かし、番茶を入れて晝食をすました。場所が場所なので、私の一生に忘れる事のできない楽しい晝食であった。

食後またあちこちを歩いたが、どうしても歸る氣になれなかった。ならう事ならこの僧室の一に泊をしたかったが、これは到底出来ないから、愈思ひ切つて一三・四〇に分れをつげた。振り返り振り返り、これで見えなくなるといふ所で暫く立ち停つて、名残を惜んで歩き出した。さうして案内の男に、ワッサンを通じてシャーリ・バーロルの所在地をきいてみた。此兩所は相距ること遠くないといふ見當をつけてゐたから。

峠からよく見えた。周囲は荒地で、そのうちに小高い所があり、あんな所から多くの佛像等が出土したのかと思はれた。とにかくここへ行くのには一度驛へ出ねばならず、さうして驛で馬車を雇つて乗りつけるのが最もいいが、行つたところで何もないから、全く無駄であらうとのことであつたが、是非行つてみると主張し、驛から馬車で出かけた。

驛前を今度は右へ行く、大分行つてから右折し、鐵道線路を横斷すると、前方小高いところに民家がある。ここが即ちシャーリ・バーロルの部落である。洵にここは平野から特立した丘で、石壁を廻らし

た民家があるばかりでもものならず、先年大規模の發掘があつた事も、勿論其場所も知つてゐるものではなく、これでは何のために來たのか判らないので、困つた揚句が殆んど絶望に迄なりかけた。何か知らぬが異人種が來て、そこいらを見てゐるので、利にさとき村民は、健駄羅彫刻の小片——といつても首や手ばかりではなく、床の間の置物になりさうなもの——を持つて來て賣りつけようとしたが、こちらはそれどころではない。さういふものの所有慾のないものに賣りつけようとしたのは、彼等の認識不足である。だから見向きもしないでゐるうちに、從僕と案内者とがいろいろ村民にきいてゐたが、遂に白い鬚を生やした村の長老、埃及あたりだと正にビレージ・シェイクとでもいふところの、立派な老人をつれてきた。この老人は遙か向ふの、丁度驛の方向であつたが、ある一點を指して、あそこが昔で發掘のあつた所の一つだと教へてくれたので、直に見に行つたが、さうと言はれば成程さうか知らんと思へるだけの所であつた。要するにこの見學は失敗に了つた。

最早みるところもないので驛で汽車を待合はせることにした。シャーリ・バーロルの高地からタクチ・バハイ廢寺のある山脈全體がよく見えた。驛へついたら丁度十六時で、一八・〇一の發車迄に二時間あつたが、仕方なしに待つことにした。腰掛一つない田舎の驛でも、きつと誰かがどこから椅子をもつてきてくれるから始末はよろしい。ノウシェラに歸つたところ、非常に疲勞したので翌早朝の出發は思ひもよらず、午後の汽車にすることにした。だから午前中は市中の觀光でもしようと思ひ、馬車屋には十時に來る様に命じ、直に入浴、夕食をすまして二一・〇〇就床した。

斯の如くして充實した昭和十一年一月は過ぎ去ったのであった。一月一日は錫蘭嶋のアナラジャ市に
ゐたが、三十一日は西北印度なる古への健駄羅國の一部なるノウシエラの町にゐたので、南から北へ斜
に、正三形の頂點から底邊の一角へ無事に旅行をして、心中言ひ知れぬ満足をして一月の末日を送る事
ができたのであった。

四七、タクチ・バハイ寺の塔婆

西北印度、阿富汗王國に近き重要都市なるベシヤワの東北36哩にジャマルガリ (Jamalgari) とい
ふ所がある。既に早く第十九世紀の中葉に多數の彫刻類を發掘したか、此等の貴重な標本は、一八六六
年(慶應三年)火災にかかり焼失して了った。其後其西方8哩のタクチ・バハイ及南方10哩のシャリー・バー
ロールに於いて大發掘が試みられ、出土品は英國・マドラス・孟買・蘭貢等に送られた。他に伯林にも巴
里(ルー)にもあるが、英國博物館のは個人の寄附にかかるものだけだといふ。出土品はかく諸所へ運搬
されたが、寺其物は動かすことができないから、依然としてこわれたまま舊位置にあるのである。

一〇四はこの廢寺の平面圖である。健駄羅地方の伽藍はこればかりではなく、大概はさうだが、常
に塔婆と僧坊とからできてゐる。先づ最初に方形(又は圓形、ジャマールガリは其一例)の一劃があり、中央に塔婆があつて
周圍に小龕が並び、ここに佛菩薩の像が安置してあつたのである。次に多くの彫像をまつるため、小龕
で圍んだ一區域があり、さうして其次に例により例の如く僧侶の住居があるのであるが、此場合も正に

さうなつてゐたのである。圖はフアーガッソンの著書からとつたので、大分古いから簡單だが、其後
にできたのは、發掘完了後であつたためか、非常に精しいもので、即ち現在の有様の實測圖である。餘
り精しいから、反て混雜を來すといけないので、今回はやめて簡單なものにしておいたのである。

圖に於いて左端のが伽藍の中心をしてゐる塔婆區で、中央に方約十五尺の塔婆の方形基壇があり(一〇七は
其寫)、其前方に基壇に昇降するための石階がある。一般に健駄羅及びパンジャブ (Panjab) 地方の塔婆
は、必ずこの基壇に昇降するための石段を有するのは注意すべき事である。尙此石階は常に僧坊に面し
た方につくるので、此場合は僧坊は北方にあり、従て階段も北面をしてゐる。さうして北面だけについ
てゐるが、二方にある時も四方にある時もある。クナラ塔もモヘンジョ・ダロ塔も、何れも階段は一
所だけであつたが、前者は階は僧坊の方を向いてゐず、後者は僧坊で取圍んでゐるせい、少し後退さ
せて前方に餘地をつくり、そこから昇降する様にしてあつた。だからこれ等は除外例とみてよからう。
ジャマルガリ寺亦、僧坊に面した方に石階をもつた圓形基壇の塔婆がある。さうして基壇側面は片蓋柱
を以て裝飾してあること、一〇七に於いてみるが如くである。

塔婆區の北隣に多くの小龕の並んだ一區があり、其中庭に數多くの奉獻小塔婆がある(一〇八・一一
一)。此はほんとうに多數あつて中庭は所狭まき迄に竝んでゐる。勿論現在は基壇だけが残つてゐるの
で、伏鉢以上のあるのは一基もない。一〇八は併列せる小龕と奉獻小塔婆の一部をみせたもので、かか
る状態で東・南・北の三面を龕で取圍んでゐると思へばいいのである。この一區劃の北が即ち僧侶の寄

宿舍のところ、例の如く周圍に室が多く並び、中庭の一隅に井戸がある。

一〇五の左右の中央位で、下から1/2位のところに瓦葺の新しい屋根が見えてゐるであらう。これは多くの塔婆のうち、其基壇の最も美しく飾られたものを、保護のために造った假屋である。このうちにある塔婆のうちの代表的のものを一一乃至一四に掲げておいた。これは寫眞が大變に拙いが、實は光線が甚だ不十分なため、日光を反射させたところ、一人で照明係と寫眞師とを兼ねられなかったので、私の意志通りのものをつくる事ができなかった結果、始末に悪いものになってしまった。併しながらコリント式片蓋柱の間に佛菩薩の座像があるのと、上の方には例の梯形をした龕内に——首は皆缺けてはゐるが——同立像を入れたところが明らかであらう。あとの二圖は同じくコリント式片蓋柱の間の佛座像と双像とを見せたもので、双像の向つて左が佛像であることは、この二圖を比較してみるとよく判るであらう。双像は王及び女王と稱してゐる。すべて健陀羅式を最もよく現はしてゐる。このあたりの全景、ペシャワー博物館で買得た寫眞を復寫したものを、嘗て雑誌【建築學研究】へ掲載したから、これも亦ここには略しておいた。

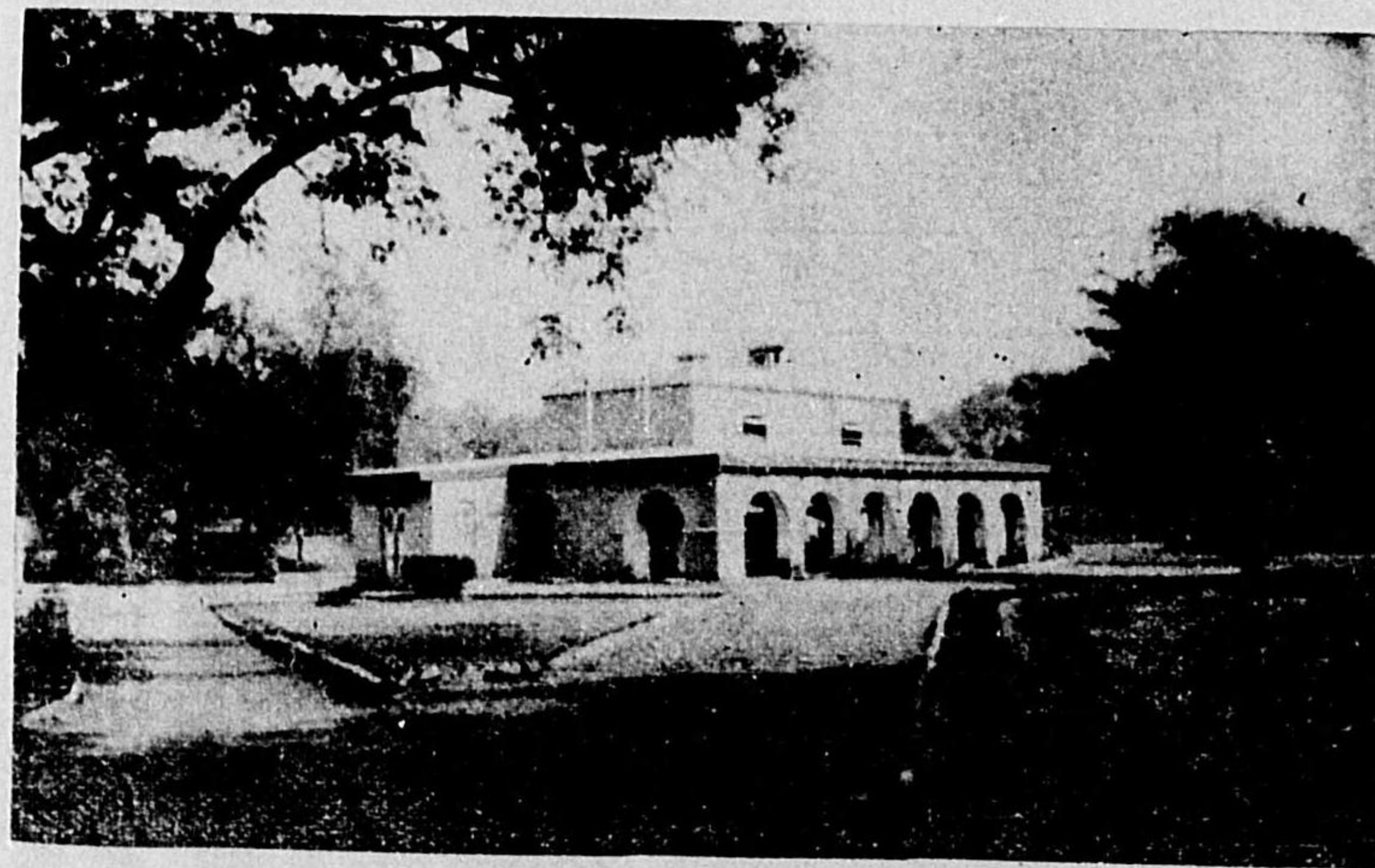
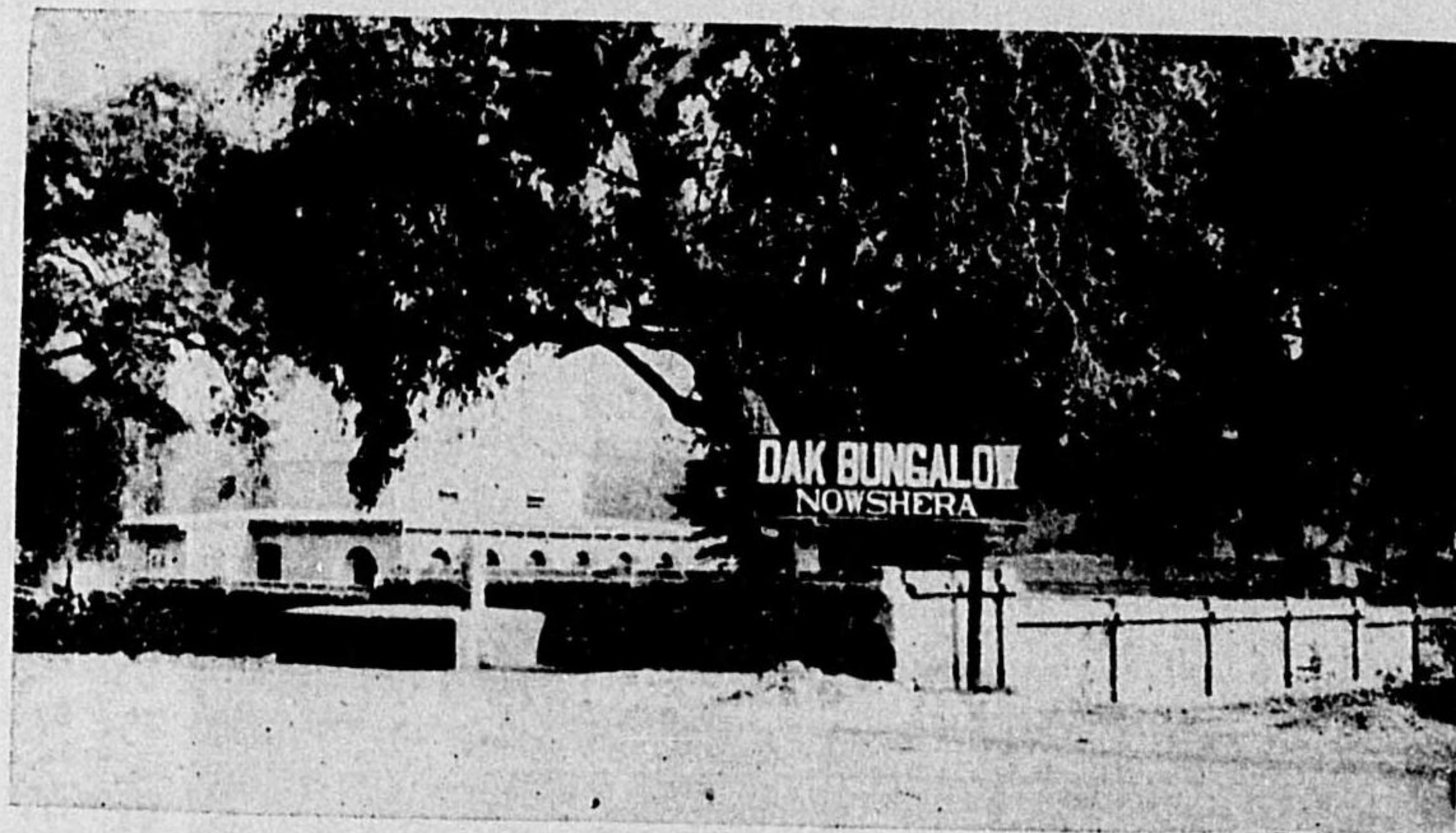
一〇四に於いて、其西北の隅に大室(印)がある。此は四方に高壁を廻らし、東南隅に唯一の出入口を有するのみ、現在は屋根も何もない状態で、ただ壁の所に小さい凹所を設けてある。これは多分夜間に燈火をおいたのであらうと思はれる。尤も必要があれば、大規模に中庭で篝火を焚いたらうが、こゝはただ單に手もとの用を足すための「かんでら」位を置いたのであらう。此大室は會議室又は食堂等に用ひられ、當初は木造屋根で覆はれてゐたと考へられてゐるようである。併し決してここ全體に寶形造の屋根等をかけたのではなく、中央には相當大きな中庭がとつてあつたとみるべきである。

今試みに此廢寺の平面を、我國に於ける寺院の夫れに比較してみると、「A」が塔婆、「B」が金堂、而して「C」が講堂及び僧坊、「D」が食堂に當つてゐるのは面白い。「B」が最も低いので、「A」や「C」へ行くためには何れも石階を昇らなければならない。一〇六の下縁に近いのは塔婆區で、中庭の中央に主塔婆の基壇が見えてゐる。最上部のは僧坊であるが、塔婆區から降りる石階と僧坊中庭へ行くため昇る石階とが一直線上にあるのがよく見えてゐる。ただ明暗の度が強すぎて、甚だ不満足な寫眞になつたが、原寫眞はこれ程ではない。版におこしたら白い所と黒い所とが何れも度が過ぎて、不明瞭になつて了つたのである。

四八、ノウシエラからペシャワーへ

D・B・はまことに靜かで、氣が落付いてゐたのと疲れとでゆっくりねた。正に九時間半寢通したので大變に心地がよかつた。起きてみたら薄曇り。若し前日の朝がこの様な天氣であつたのだと、あの様な軽い氣持では出かけられなかつたらう。洵に運がよかつたのだ。

どこへも行く所がないので、モスクを見に行った。ところが此邊にはろくなものはなく、最劣等品は



ノウシェラ D. B. 二景 (昭和十一年二月一日)

周圍にまるで境界がなく、あけっぱなしのD. B. はどうも印度の様なところでは何となしに不安に思はれる。この上圖にみる様に煉瓦塀があることはあるが、門に扉がないので、圍いのないのと同じだが、それでも纏ってゐてよろしい。何にしるあたりが廣いので、ほんたうに心地がよろしい。角に DAK BUNGALOW と大きくかいた看板がでてるのは、大に目印になる。ハンピ (Hampi) の廢墟のあるカマルプール (Kamalpur) のは、門の立札に BUNGLOW とかいてあった。

かりなのでいや氣がさし、ただ何のめあてもなく市中を探りまわして歸宿をした。晝食を了り十四時に驛へ行き、一四・三五發の汽車へ乗り、豫定より少し後れ、一六・一〇にベシヤワー・カントンメント驛着。この時迄は此所で唯一のデーンズ・ホテルへ行くつもりでゐたが、D・B・が丁度通路に當るので、若し室があつたら泊らうかと思ひ、通りがけにきかしたら幸ひ空室があるとのことで、それにきめて裏向きの室に落着いたが、少しばかり纏りのよくない室であつた。ノウシェラで晴れてゐたのが、ここでは大分念入の曇り方でいやに暖いから、明日は前回同様顔色迦寺址行はまた大曇にならねばいいがと思はざるを得なかつた。

裏は謂はゆるサーバンド・クオーターで、長屋が短手に建つてゐて、ウヂヤッ、コイ程子供がゐる。それがまた飛んでもない大聲で騒ぎたて、人の顔が見えない位に暗くなつても未だ歸らない。その上にと

* ベシヤワルノ……市街ハ最モ著名ノ地ニシテ中央亞細亞諸國ノ商賈輻輳シ頗ル雜沓ノ區タリ除商毎週一回往來スト云フ市中現ニ浩干、薩馬爾干、波哈拉等ノ種屬ヲ見タリ皆ナ回教ヲ信ズ市中ノ人口大約七萬餘ニシテ概ネ亞富汗人トス性暴戾ニシテ爭鬪絶ヘズ本若全省ニテ一年ノ暴殺大約四百件中其四分ノ一ニ此ベシヤワル縣内ニ屬スト既ニシテ午前八時太陽ノ光線炎ノ如ク寒温儀九十五度ニ昇レリ……印度ニ於テ暑氣ノ酷烈ナルハ第一ヲシンド (Sinde) トシ第二ヲムルタン (Mooltan) トシ第三ヲ即チ此ベシヤワルトスト故ニ日中一二時ノ頃ハ室内ニ在ッテ居所ヲ求ムルニ苦シミ只ダ呼吸シ居ルニ過ギズ。他ノ地方ハ既ニ降雨ニ向ヒタルヲ以テ暑氣大ニ減ゼシト雖モ印度河以西ノ地ハ九月ニ至ラザレバ降雨ナク今ヤ炎暑ノ眞最中ナリアラハバッド以來ノ暑氣ニシテ實ニ想像ノ及フ所ニ非ルナリ (『印度紀行』明治十九年七月七日の項。二〇—二一頁)。

うしたのか電燈もつかぬ。困ってゐたときに、前刻出かけた従僕が漸く歸つて來たので、帳場に談判させて少し暗いがもう一つの室の方へ移った。此室は最初に案内されたのだが、家のまん中で窓がなく、外部との交通はバスとW・Cの室を通らねばならぬから、薄ぼんやりした光が戸口を開けた時に入ってくるだけで、直接にはクリヤストーリーから採光してゐるのみである。夫れも大きければ効果もあらうが、小さい四角なスプレイド・ウインドウでは、ただ天井のあたりが明るいただけで、まことに始末がよくない。これがいやなら他に室はないのだから、往生して直に入浴を試みた。其入浴中に漸く電燈がついた。二月四日午前八・〇五ラホール驛着の電報をモントゴメリのYさんへ打ち、同時に三日夜當地發ボンベイ・メールの寢臺の豫約もすましたので、大安心ができた。

四九、ヘンジャー市及郊外の觀光

二月二日七・一〇眼がさめた時は、クリヤストーリーから申譯の様に日が差込んでゐた。數日前の寒氣凜烈は頓にゆるみ、ここでも暖爐の必要はない位であつた。だから前夜から用意させた石炭が無駄になつたのは幸であつた。九・〇〇に宿をでて先づ第一にシャー・ジ・キ・デーリ (Shah-ji-ki-Dheri) の迦膩色迦寺址へ行つてみた。今回は好晴に恵まれたので喜んで出かけたのである。馬車で約一時間かかり、一〇・〇〇に廢寺の前についた。

先づ第一に深い溝——實は溝ではないが、壁體の一部を現すため壁面に添ひて深く掘り下げてあつた



隊商宿の中庭の午後 (昭和十一年二月二日)

隊商宿 (Caravanserai, Caravansary, Caravanseya, Caravansera) の有様が見度いと思つて行つて見た。かういふ所を視察するのは、單身ではうまく行かぬ。どうしても土地の人に連れて行つて貰はねば充分のこととはできない。夜は駱駝は中庭でねるので、人は周圍の覆の下に、汚い蒲團——日にほしてあるのがよく見えるのであらう——にくるまっでねるのである。中庭の狀態は前に圖雜で、頗る非衛生的である。但し隊商宿にも、もっと美しく整美したものもある。

ので、溝の様になつてゐた——の底に近く少しでゐた僧坊の壁をよく見ようと思つて、薄い記憶を辿り、此邊だらうと思ふところへ見當をつけて行つてみたが、いくら探してもそんなものはなかつた。遂に大きな址を丹念に二度巡廻したが、やはり見付からなかつた。思ひ切つて塔婆址へ行き、先年印度考古局西北支部次長モハメッド・ワシ・ウツ・ヂン (M. Wasi-ud-Din) 氏が、自身監督の下に發見した舍利容器(今ペンシャワリ博物館にあり)のでたとふところへ行つてみたが、これは直に判つた。夫れから塔址の周圍を歩いて、多くの寫眞を撮り、その邊の墓地も歩いた。無論あひ服に冬外套を着てゐたが、天氣がよくて暖くて、あるくには丁度よかつた。ただ壁體を見られなかつたのは遺憾であるが、これは若し面會ができたならワシ・ウツ・ヂン氏にきいてみようと思ひながら、晝食のために歸宿をした。

午後は二時に宿をでて市中の觀光をした。ゴール・カトリ (Ghor-Khatri) にも登つて、アフガニスタンの連山をみた。此度は午後の三時で、日がカンカンあたつてゐたから、はつきりとよく見へた。白衣を頭から冠つた婦人も、いくらも歩いてゐた。正面からみたところはすこしちがふが、後ろ向きは朝鮮開城の婦人とどれだけ異ふか。二人並べてみても、少し離れて後ろからみたのでは區別はつかない。それから呉服屋の店頭と隊商宿 (キャラバンセライ) をみるべく出かけた。前者には面白いに出會はなかつたが、後者は前掲の寫眞の様な有様をみる事ができた。

此種の建物が市内に幾棟位あるか知らぬが、大概この邊ではどこでもこの程度だといふ事である。随分粗末で且つ汚い。中庭は駱駝と人と荷物とで一ぱいになつて居り、日のあたる方にはそれはそれは實

に汚いしみだらけの蒲團がはしてあつた(第24頁7頁)。

人物は何れも大して人相がよくない。寫眞をとつてゐたら、寫眞機の前に恐ろしい顔をした熊襲の様な筋骨逞しい男が立塞がつた。ワッサンにどかせろといったら、あの男は寫眞をとつてはいけないと言つてゐるのだといつて、先方の肩をもつので、仕方がないから別の方を向いてとり出したら、今度はそこへ来てじゃまをするのみならず、おそろしい顔をして睨みつけた。まるでいたづら子供の様で始末に悪いが、どうも先方の人相を見ると、長居をせぬ方がよささうに思つたので、いい加減にして退去をした。尤もそこにゐた人間全部がこんな事をしたのではなく、五六人のものがいけないらしい。金をやる位は氣がつかなくもないが、態と知らん顔をしてゐたのである。考へてみればこちらは黙まつて入つて行き、黙まつて寫眞をとりだしたのだから、どちらが悪いのかは冷靜な態度で研究してみないと判らないが、中中いちが悪い。ワッサンになせ彼等をどかせなかつたのかときいたら、あの様なカブール(アフガニス)あたりから出てきた野獸の様な奴(彼はジャングル・ピブルと)
いた。うまい言葉を使った)は何をするか知れないからやめておいたと辯解した。獐猛な大男に睨まれて辟易したのである事、一點の疑を挿む餘地がない。

歸りに博物館前を通つたので、不圖思ひついて馬車を下り、館外に陳列してあつた健駄羅彫刻をみてゐたら、洋服を着た印度人ができて、挨拶をしたが、何だか判らないので知らん顔をしてゐたら、彼は自分は館長である。特に開館するといつてくれた。私は日本からきたものだが、改めて明日來るといつた。さうしたら彼は再び私の紹介狀がラホールから轉送してきたので、待つてゐたといつた。

日曜日は休館だが、旅行者は時日に制限があるから、成るべく便宜をはかり、特にあけることにしてゐるのださうである。丁度此時西洋人の夫婦が来た。館長は時間がなければあけるといつたら、彼等は喜んで好意を謝し館内に入つてゐた。このあたり洵に融通がきく。どうもどこかの國の博物館とは少しばかり違ふ様である。

館前で立話中、ハーグリーブス氏(前館長)が退職したこと、ワシ・ウツ・ヂン氏が二年ばかり前に死去したことをきいた。前年タキシラであつたジョン・マーシャル氏も退職し、スプーナー博士も亡くなつたのだから、大分に變りがあつたのである。十五年の一昔半には、相當に世の中は變るものだといふ事を、今更の様にしみじみ感じた。

大正十一年十二月二十二日午後、時の館長ハーグリーブス氏の厚意から、ワシ・ウツ・ヂン氏を案内につけてくださった。同氏は當時既に相當の年輩であつたが、氣輕に來てくだされ、先づ第一に僧坊壁の露出してゐるところから、塔址を廻り舍利容器發掘の個所を指示し(一一七)、市に戻つてゴール・カトリへ登り、市中の光景を俯瞰しながら、バクダッドへ行つたか、テヘランは、カブールは、と聞かれたのも思ひ出の種である。歸りに一緒にホテルへ來て、茶をのみながら神道の事を質問したから、それは祖先崇拜だと答へたあと、それからそれへと矢つぎ早に疊かけられ、忽ち落城して左様なことは存じ不申といったところ、あなたはプロフェッショナルだから知つてゐるだらうと言はれたに對し、いくらプロ

フェッショナルでも専門が違ふから、さう詳細にきかされると判らなくなると答へたら、あきれたと見えて早速歸つて行つた後姿は、まだありありと眼についてゐる。濃厚なるスプーナー博士逝き、好好爺なるワシ・ウツ・ヂン氏逝き、洵に淋しいことである。大正一一・一二・二二ここで初めて同氏にあひ、昭和一一・二・二同氏の訃をきいた。妙な因縁だと思はされた。

前夜は暖かであつたのに、此夜は薄ら寒かつた。湯ぎめで風を引くといけないから、ストーブを焚いた。パニワラの間抜けが一度に大事の石炭を全部くべて了ふところを、あぶなく見つけて半分助けた。今日は可なりの満足と淋しい氣持と、半半位で就床した。

二月三日も前日同様好晴であつた。やはり前日の通りクリヤストーリーから日がさし込んでゐた。九・一五に博物館へ行つたら館長が既にきてゐて、館内を一通り案内をしてくれた。迦膩色迦塔址出土の舍利容器がもう一度見度いといつたら、自分の室へ連れて行つて、後ろの金庫からだしてくれだ。金色だと思ひ込んでゐたが、金は全部剥げて了つて、銅色(といつても實は黒っぽい色)をしてゐた。さうして上の方に花輪の様なものを銜へたハンサが、同じ方を書いて六つ附けてあつた。

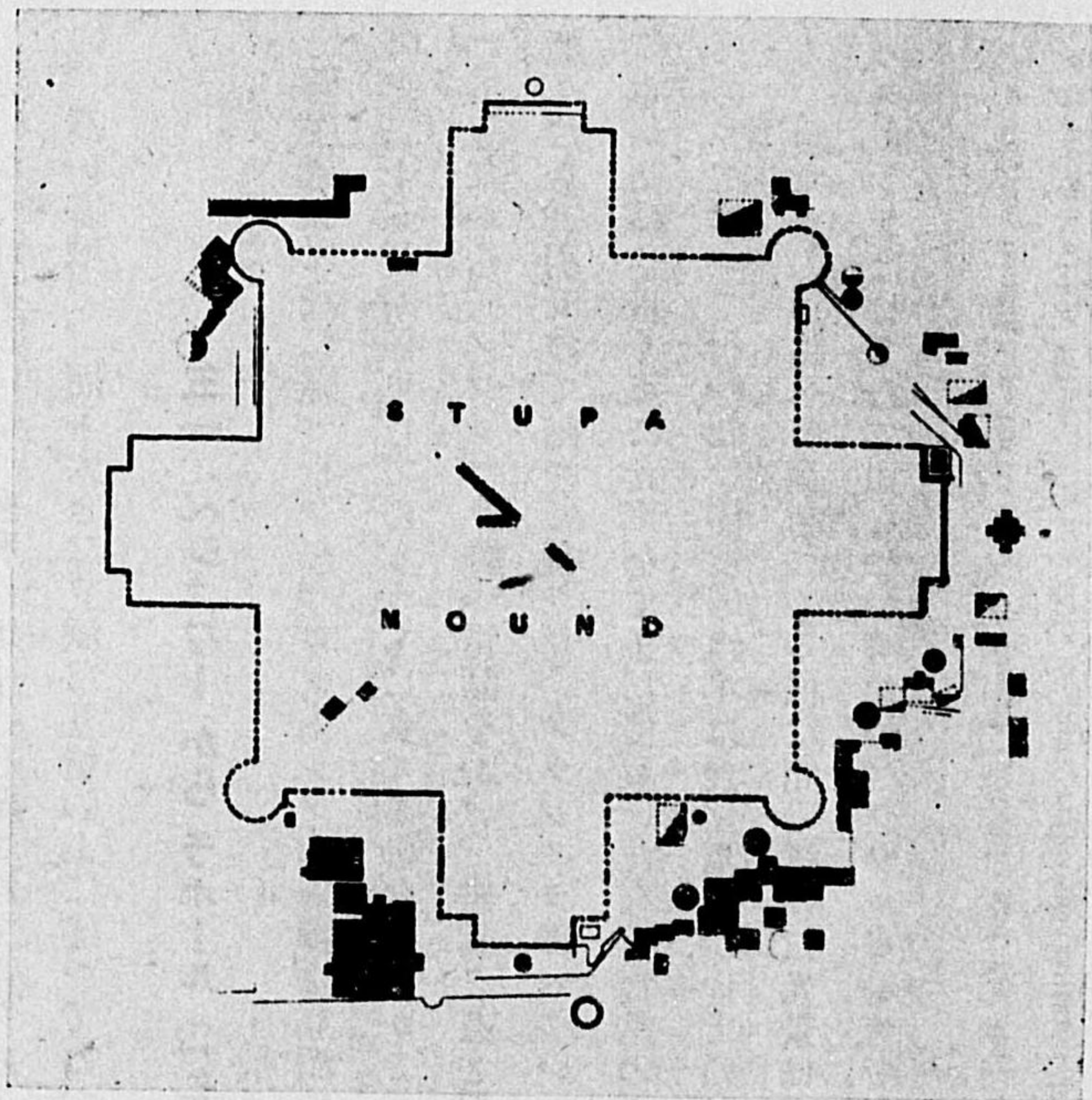
館長ヂラワル・ハン氏(M. Dilawar Khan)と相對して、この舍利容器を中に話をしてゐたうちに、先年ここでラホール博物館から、私あてに送つてきた寫眞を渡してくれた若い館員を思ひだし、どうも此人らしかったので、其事を話してみたところ、最初はまるで記憶になかつたようであつたが、漸く少

し思ひだしたものの如く、そんな事もあった様だと半ば肯定したりした。彼は佛像に就て議論するといつた。つまり自分一人で説を述べるから、私にきいていろいろといふのである。いくらでも傾聴するといつたら、先づ第一に佛像の三十二相をこきおろした。三十二相に就いては、館長さんの高説を承らな
いでも、小生にも少しは判つてゐるが、老館長は身振手眞似面白く話をすすめ、結句あんなものは皆で
たらめだといふ結論をのべた。其謂はゆるチスカッションがすんでから、私は迦膩色迦寺僧坊壁體の事
をきいてみたら、あの地主がどうも頑固で値段が折合はず、買へないので發掘を続けることができなく
なり、折角掘出した壁の一部も再び埋めて了つたといつた。これではいくら探してもない筈である。
次にシャーリ・バーロルの發掘のあとの事をきいたら、あれも全部埋めてしまつたから、今ではまる
で判らなくなつたといつた。館内ガレリーに多くの寫眞を掲げてある中に、私がとつたと同じ方向から
とつた此部落の引伸寫眞がかけてあつた。

五〇、廢迦膩色迦寺塔婆

其詳細は【印度考古局年報】の一九〇八——一九〇九年 (Archaeological Survey of India, Annual Report 1908—9) の分、第三八—五九頁に互り、詳細に記されてゐる。本文中には塔婆壁體の一部、奉
獻小塔婆、發掘前の光景等の圖が入つてゐる。大に参考になるが、複製はやめておく。

此所の發掘は故スプーナー博士指揮の下に一九〇八年(明治四十一年)一月十六日着手、小塔婆と壁體の下部



廢迦膩色迦寺塔平面圖

此はベシャワー博物館にて買得した寫眞を複寫したものが、印度考
方局年報にも同じのがのせてある。

とを發掘し、更に翌一九〇九年
(明治四十二年) 續いて發掘調査をしたの
であつた。其結果塔は四方に突出
部を有し、四隅に圓形の小塔を有
する、一邊286呎の方形の平面の構
造物であつた事が判つた。

現在塔址の中央に方42呎の大孔
を掘つて調査を進めたところ、塔
址の中心に放射形に積まれた重厚
なる壁體を發見したので、細心の
注意を以て發掘を續けてゐたら、
此壁體がつきた所に遺物室が見つ
かつた。さうして其内に貴重なる
舍利容器があつたのである。容器

直径5吋、高4吋、蓋上には釋迦三尊の立像があり、全高7 $\frac{1}{4}$ 吋。内に大き
さ2 $\frac{1}{2}$ 吋×1 $\frac{1}{2}$ 吋の六方形の水晶が
あり、他に迦膩色迦王の印章と小骨片三とがあつたさうである。「此三骨片はいふ迄もなく佛舍利で、

迦膩色迦王の手によりて收められたものである」と年報にかいてある。

とにかく此場合には、舍利は地中に收藏されてゐたので、平頭にも伏鉢にも——勿論此塔は健駄羅式の、高い基壇で、而も大きな立派な基壇の上に建つてゐたのであらうが——何もなかったのである。

五一、ベシヤワーからラホール (Lahore) へ

愈よ退去に決し驛へ行つた。カントメント驛は立派に改築され、美しい大驛になった。夕食はある驛で二十五分間停車してゐるうちに食するのときかされ、それでは困るといつたら、従僕は車掌を連れてきたから、ノウシエラ驛へ電話をかけ、辨當と茶と曹達水とを室内へ持つてくる様に命じてくれと頼んだら、引受けて歸つて行つた。ノウシエラ驛へついた時驛の食堂から其通り運んできた。さうして汽車が次驛へ着く迄に食事をすましておいたら、食堂の男が一緒に汽車への上つて来て、からをもつて逆ののつて歸つて行つた。印度の汽車は食堂車のない時は、こんな事ができるから大に便利である。食堂車の通路へ行列をつくる様な間の抜けた光景は、印度の汽車では見られない。

タキシラはねてゐて知らなかつたが、ラワルピンデでは眼がさめた。同時に西洋人の男の聲で、「どう

* "These consists of three small fragment of bone, and are undoubtedly the original relics deposited in the stupa by Kaniška which Hiwen-Tsang tells us were relics of Gautama Buddha."

か開けてください』(オープン・フロム・インサイド・ブリーズ)といふのが聞えた。驛は常に左側だと思ひ込んで、右の戸口に錠を下ろしておいたので、外からは開かなかつたのである。直に起きて開けたが別に誰も入つても來なかつたので、戸はあけたままにしておいたら、また外から誰か閉めた。それ限り幸に一夜一室一人で占領ができた。

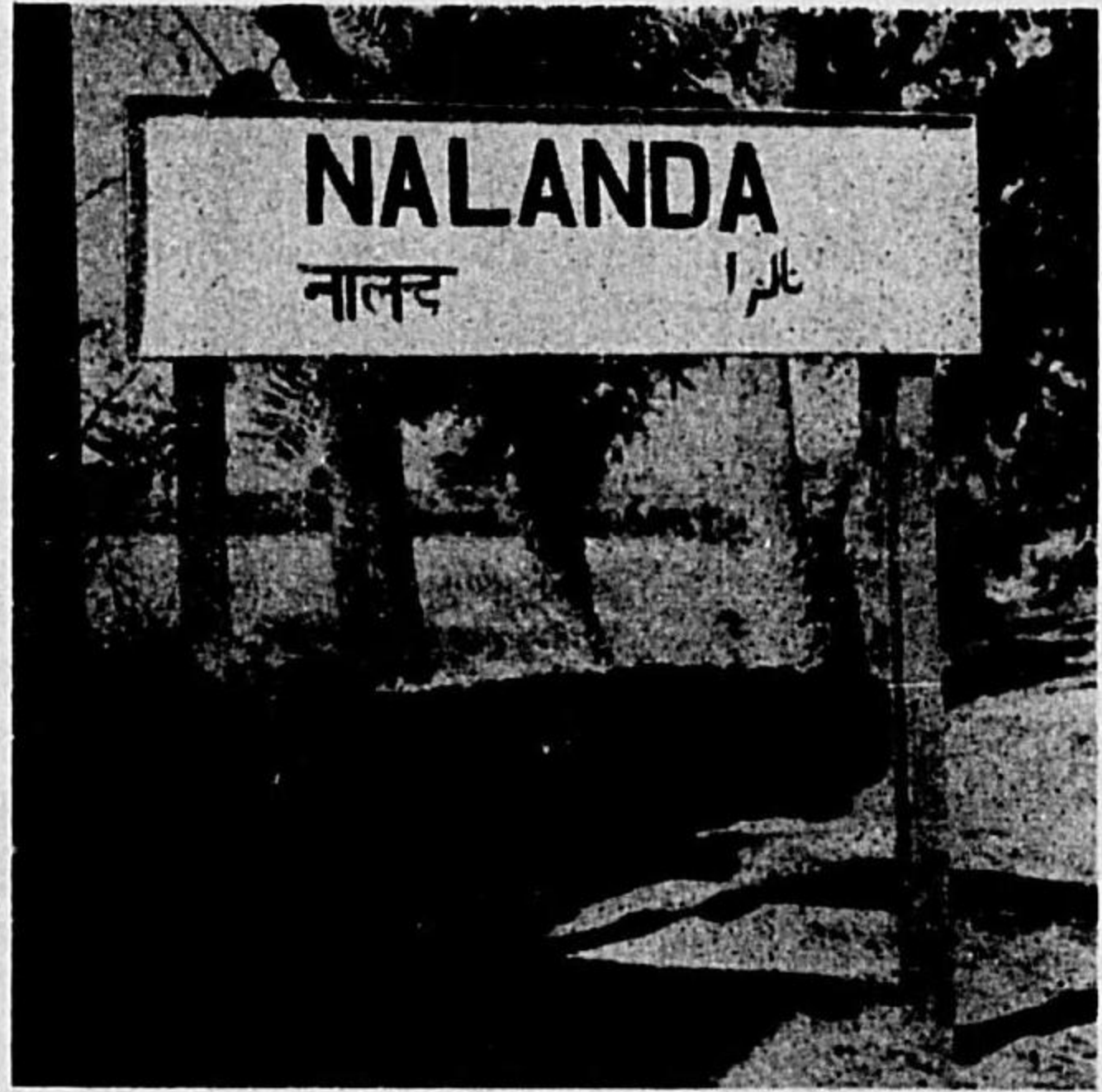
二月四日節分の朝は曇つてゐて寒かつた。ラホール驛へ着いたら、モントゴメリからYさんが態態來てゐてくださった。それからファレッチス・ホテルへ行つた事は前に記した通りである。

(昭和十二年三月三日稿了)

四六・四七に「タクチ・バハイ」といふ名がでてゐるが、これは「Tacht-i-Bahi」「Tacht-i-Bahai」等と綴り、發音は「タクチ・バハイ」ではなく、これでは不通で、chは獨逸語のchの發音に似て、「タハチ・バハイ」でなくては判らないといふ説がある。さうかも知れないが、私は現地でもベシヤワーに於いても、共に「タクチ・バハイ」でよく話が判つた。だからchを「ク」の様に記しておいたのである。

印度佛塔巡禮記

(第七回)



ナランダ驛立札二種



(昭和十一年三月十一日)

五二、孟買から甲谷へ

二月二十一日朝、アーメダバードから孟買へ歸着したと同時に、江商支店の宿舍から東綿の夫れへ移轉することになった。先方からいへば保管轉換であるが、こちらにしてみれば、どちらにしても居候たる資格に變りはない。居候といつても萬事に氣兼して、さう小さくなってばかり居なくてもいいので、外出にはいつも支店長用の自動車がちゃんと玄關に待ってゐるといふ、極度に自由のきく高等居候であった。従僕もお馴染のワッサンは江商へ返納申上、新しくマンガと呼ぶのを雇入れた。マンガは極く好人物であつた。併し殆んど英語の會話ができないので、南蠻駄舌ではどうかと思つたが、他に人が急には見當らなかつたので、これにしておいた。實はワッサンをもう一度借用することを申出、Tさんの承認を得てゐたが、急に事故ができて沙汰止みとなつた結果である。

昭和十一年二月二十八日一七・五〇孟買V・T・驛發、ナグプール(Nagpur)經由甲谷他行の急行列車の客となつた。前夜英國から客船が孟買港へ着いたので、甲谷他へ直行する客が多からうから、小室は得られまいとの事で、少しく頭痛にやんでゐたが、幸に得られ而も相客はなかつた。此日は何にしる例の二・二六事件後二日なので、乗降場には大きな見出しを掲げた新聞紙を抱へた賣子等は勿論のこと、西洋人も印度人も、あらゆる人が私の顔をみるので、聊か困らざるを得なかつた。此汽車は二日目

の朝六・一五に目的地に着する豫定であるから、ざつと三十二時間で、運賃123/16從僕に分18/12/6合計141/14/0となり、日本金に直すと約¥184.43といふ巨額である。だから一時間につき運賃ざつと五圓七十六錢餘となる。これだけの負擔は樂ぢやない。それならよせばいいが、よすのはいやだから仕方がないとあきらめた。

四年目に一度といふ二月二十九日を、極めて平凡に汽車中で暮して了つた。食堂はいつも満員の盛況であつたが給仕人のいぢの汚さは特別であつた。インダス河に沿ひて南下したとき、ローリ驛食堂で朝食を認めたが、その食堂の給仕と ベニコール・ナグプール・レイルウェイ B・N・Rの食堂車の給仕人とは、同じ位の慾張りで、まことにいやな感じがした。

三月一日朝は豫定より正に一時間後れ、七・一五ホウラー(Howrah)驛に着いた。早朝にも拘らず東綿の出張所からYさんとMさんとが来てゐてくださった。ところが此朝は珍らしいことに、大きな船が通るとかで、フーグリ河に架けた橋の途中が開くために、渡ることができず、渡船で河をこすより方はなかつた。どうせ數日後にはここから出發するので、甲谷他滞在中不用の見込のついた輕便寢臺とランチ・バスケット二個とは、驛へ一時預けにしておいた。

東綿出張所の宿舍は驛から五哩ださうで、靜かな大きな氣持のいい家であつた。午前休憩、午後は車で植物園・エデン園・日本山妙法寺等を一巡した。この日本山妙法寺といふ寺は、どこかで其設計圖を見た事があつた様で、その時は少少變なものだと思つたが、實物は割合によくできてゐた。折から一貫

三百の太鼓が異様な響——といふ意味は印度の空気には餘りよく調和しないといふことだが——を傳へてゐた。寺は外から見物しただけで歸りに驛へよつて二日夜プーリ (Puri)迄の往復切符を買ひ、且つ寢臺の豫約をした。

五三、甲谷他の數日

三月二日は總領事館へ出頭して、前年九月二十五日古倫母に於いて別れた柳悦之さんに面會し、同氏の紹介で副總領事野野村雅二さんにも面會した(總領事は賜暇
歸國中で不在)。さうして初めて私の旅行の許可につきネバル國の當局と交渉の顛末を知ることができた。第一回の交渉で如何にして先方から斷つてきたが、私が一月中旬孟買から出した手紙により、如何にして交渉をしてくださったか、さうして辛うじて入國の承認は得られたが、其間如何にして手違が起つたか等がすべて明白になった。私は總領事館員諸氏が、公務多忙の折柄、史料の羅列ばかりしてゐても、何の役にも立たないではないかと、ある方面からの酷評を甘受せねばならぬ状態に置かれてゐる、停年免職の眼前に迫れる憐むべき老書生に對し、とつてくだされた勞を衷心から感謝したのであつた。さうして尙ほネバル國の當局其他へ照會を願つたところ、何れも心よく引受けてくださったのみならず、困るだらうからとて、館員(印度)の周旋により、ネバル人の從僕雇入の世話までしてくだされた。此機會にいろいろ世話をしてくだされた方方に敬みて厚く御禮を申上げておく。

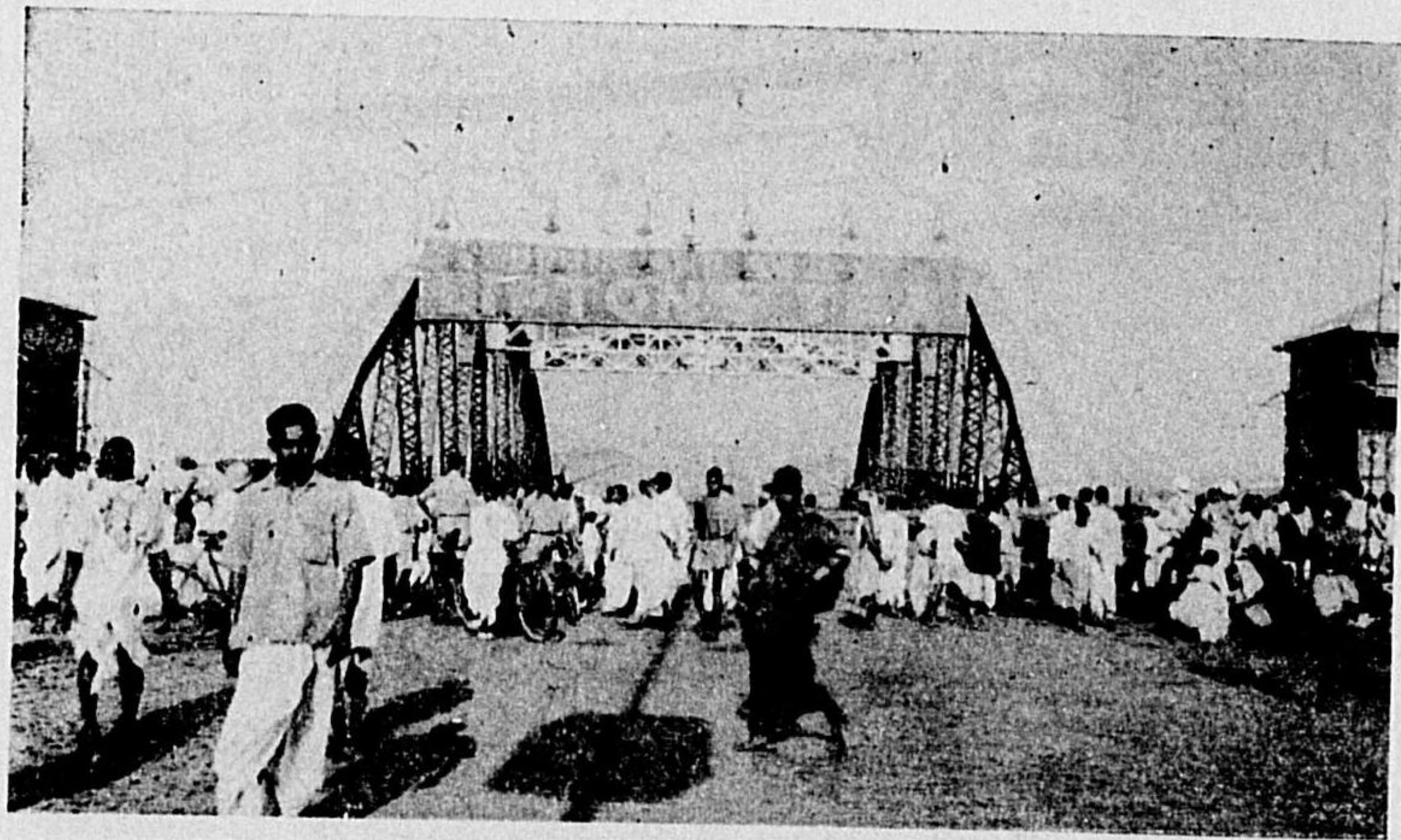
家の正面に FIRPO とかいてあるのは、屋號か何か知らぬが、大きな料理屋である。晝食は Y さんがここへ案内してくだされた。料理はさすがに味覺神經發達不全症の私にも、特等の味をもつてゐたことが判つたが、建物が回教式でないのが惜しいと思つた。これが印度サラセン式か何かで、中央に大きな圓屋根があり、鍾乳隅弓かなにかで手際よくやつてあつたら——寺ではあるまいし、そんな料理屋はなからうが——定めて食べる事を忘れて、ぼんやり眺めてゐたらう。まあ併しそれは慾張りすぎる。料理のうまかつたので満足満腹で退去し、歸途に丁度當地で開催してゐた野生司香雪畫伯の個人展をみた。此夜プーリ (Puri) へ向け出發、五日歸着をした(此記事は次
回に掲ぐ)。

プーリ滞在中見學した各所であつた寫眞は、私にとっては金銀財寶に勝る此上なき貴重品で、正にいのちから二番目である。この現像はめつたな所へもつて行けぬので、孟買でやらせることにきめた。孟買に中村といふ日本人の寫眞師がゐて、優秀な伎倆をもつてゐる。東綿支店長の S さんの推薦で、西北旅行のときの寫眞の現像を依頼したところ、まことに申分のない上出來であつたので、Y さんに其話をしたら、Y さんも中村寫眞師をよく知つて居られ、それがよからうとて、荷造をして書留小包として送ることまで全部引受けてくださった。どこでも皆さんが親切に世話してくださるので、愉快に其日其日を送ることができるのは、大きな喜びである。

三月六日午前は、同地で有名なカリガート・テムブル (Kaighat Temple) を見に行った。繪葉書で

みると至極新しく塗りたててある様で、大して面白くもないが、ただ軒が例の下へ反った謂はゆるベン
 ゴール・ルーフといふのになつてゐるので、實物を見ておかうと思つたからである。境内へ入つても狭
 いところに建つてゐるので、全景は見にくいし、それに正面のところでは小羊を犠牲にしてゐるので、
 頭が轉がつてゐたり、血が古いのは石にこびりつき、新しいのは流れてゐたり、臟腑をぶら下げて賣つ
 て(？)ゐたり、生臭い匂がしたり、まことにたまつたものではないし、裏へまわれば社殿の下から流れ
 だす汚い水を、汚い手で掬つて飲んだり顔へ塗つたり、トラホームの第三期位の眼を洗つたりしてゐる
 ヒンヅウの男女絡繹——は少しお負だが、おとなしく順番を待つてゐるのがいつも二三人はある——と
 いった有様。我國の邪教淫祠からだす「お水」は、例ひボー、フラ、が泳いでゐてもまさかこんなに汚くは
 あるまいと思はれる位。其上に附録としてL系か何か知らぬが、とろけた様な乞食もゐるのだから、見
 に行かない方が賢いのである。併しながらここに建築の参考になるから、寫眞を掲げておく。寫眞では
 そんな汚い穢はしい所は見えないからよからう。

早々にカリガット堂をすまして、耆伊那堂 (Jain Temple) を再び見に行つたが、先年は左程迄とは
 思はなかつたのに、今度見直したら洵につまらぬものであつた。午後は博物館へ行き、玄關にあるラン
 プルワ出土の阿育王柱頭彫刻からパールハット塔婆玉垣(後)、次に彫刻類を主として見學したが、マツ
 ラ玉垣の女人像と、ブバネスワールからの鬼子母神像(拙著『印度旅行』口繪参照)は、位置を變更したので、光線の
 工合あしく、よく見えなくなつてしまつた。これではとても寫眞はとれない。



上。 ホウラー橋を甲谷他側よりみる
 下。 カリガット・テムブル

(昭和十一年三月一日)
 (昭和十一年三月六日)

上圖は私が甲谷他へフーグリ河を隔てたホウラー驛についた三月一日の朝、偶
 ま橋を開いたので止を得ず渡船で甲谷他に渡つたとき記念にとつておいたもの。
 橋の開いたのが珍しいので、其處に見物人が蝟集したところ。リプトン茶の廣
 告は効果一〇〇パーセントであらう。

下圖はカリガット・テムブルを外からみたところ。軒反りに注意せよ。

三月七日午前中領事館へ行き、ネバル生れの従僕一名雇入の約束をした。午后再び博物館へ行つた。何れにしてもこれが最後と思はれたので、二度三度くり返して観覽し、殆んど全般に亘り一巡した。發掘品としては、モヘンジョ・ダロのは可なりあつたが、ハラッパのは一つもなかつた。連日の好晴は此日の夕刻から下り坂となり、曇りだしたので、翌日の天氣が多少心配になりだした。夕食には赤飯を炊いて門出を祝つてくださった。これは餘り日本人の行つたことのないネバル國の旅行が、幸多く無事にすむやうにと、Yさんと奥さんとがしてくださつたことと拜察する。此夜一〇・〇六ホウラア驛發のデラ・ダン急行 (Dehra Dun Express) で愈よ甲谷他に別れを告げた。

五四、佛陀伽耶往復

Gaya (Gaya) にはイースト・インヂアン・レイルウェイ・ホテル (E.I.R.H.) といふのがあるときいてゐたが、D・B・の方が安價で氣樂だから、それにするつもりで驛から馬車で出かけた。ところが馭者はどう間達へたものか、サーキニラー・ハウス (といつても圓形) といふ立札をした、大變に美しい家へ連れて行つた。ここはやはり許可なくては泊る事はできないので馭者の誤りであつた事が明らかとなり、直にD・B・に向つた。

昨夕から曇りかけた空は、Gaya邊が最もあしく、途中から降りだし時時雷鳴あり、D・B・について隅の一室を占領し、荷物を按配してゐたら、ひどい驟雨に可なり大きな雷鳴がきて、當分の間はとうも



上。伽耶驛所見 其一 (昭和十一年三月九日)
下。同 其二 (昭和十一年三月九日)

昭和十一年三月八日朝此驛に下車、佛陀伽耶へ往復し、D・B・に一泊したが、翌九日は天候恢復し、前日の驟雨雷鳴に引かへ朝から好晴であつた。汽車は6.42に發車するデラ・ダン急行で、それ迄に15分ばかり時があつたのでこんな寫眞をつくつてみた。上は跨線橋に驛名をかけたもの、下は乗降場の立札。上が水平線で夫れから下にぶら下がつてゐる字は、私の友人で梵字の大家なるOさんを、破顔一笑せしむるに足らば望外の幸である。

胸の内に板ができて了ひ、大して愉快ではなかったが、朝食をしてゐる間にいくらか静かになったので、晝の辨當をつくらせて馬車で出かけた。併し空はやはり眞つ暗で雷鳴はやまない。ブダ・ギャ迄七哩の間は全部舗装ができ、最早先年の様に箱馬車の柱へ頭をぶつける心配はなくなったので、極めて安全に塔に達することができたが、扱て大塔其物はどうかといふに、黄土色の上に萌黄の苔が一面について了つたので、天気でもよくて日があたつてゐればとにかく、眞つ暗なおつかぶさつた様な天気で、お負に神鳴りの景物では、可なり不景氣に見えた。

此度は道龍師の名前入の石を見つけて寫眞をとつた。ここに掲げたのが即此で、丁度道龍師が往かれた時は、大塔修理のため石工がゐたので、それ等に彫刻させたため僅かの時間で出来上つたさうである。文字は上の方に三行に『日本開闢來』余始詣于『釋尊墓前』とあり、下中央に大字で『道龍』、其左右に『明治十六年』十二月四日』とある。【天竺行路次所見】に

大墳の右側に龍が碑文を建る話

余「ダークベンゴ」氏に請ふて云く我れ爰に來りて此の大墳に詣することは我が日本建國以來の大初なれば庶幾くは此時日を石に勒し之れを大墳の側に建てて、日本人も亦た來至せることを全地球上の人に示さんと欲す氏其れ之れを許すや否や云く我れ將に他日之れを政府に云ふべし師其れ之れを建てて君の清操を千歳不朽に示めし玉へかして幸ひ六尺有餘の堅石を附與されける故に左の小文を記したり(即大墳の修營には石工の爰に在るを以て彫事幸に速成せり)

日本開闢以來余始詣于釋尊之墓前明治十六年十二月四日道龍

右き碑石は佛尊大墳の右側に建てたれば他日我が日本人の重ねて行く者あらば幸に一覽せよ即ち其の該圖を今爰に繪示す(是れは印度の白布を以て其の碑而を覆ひ余自ら之れを模寫したる者なり)

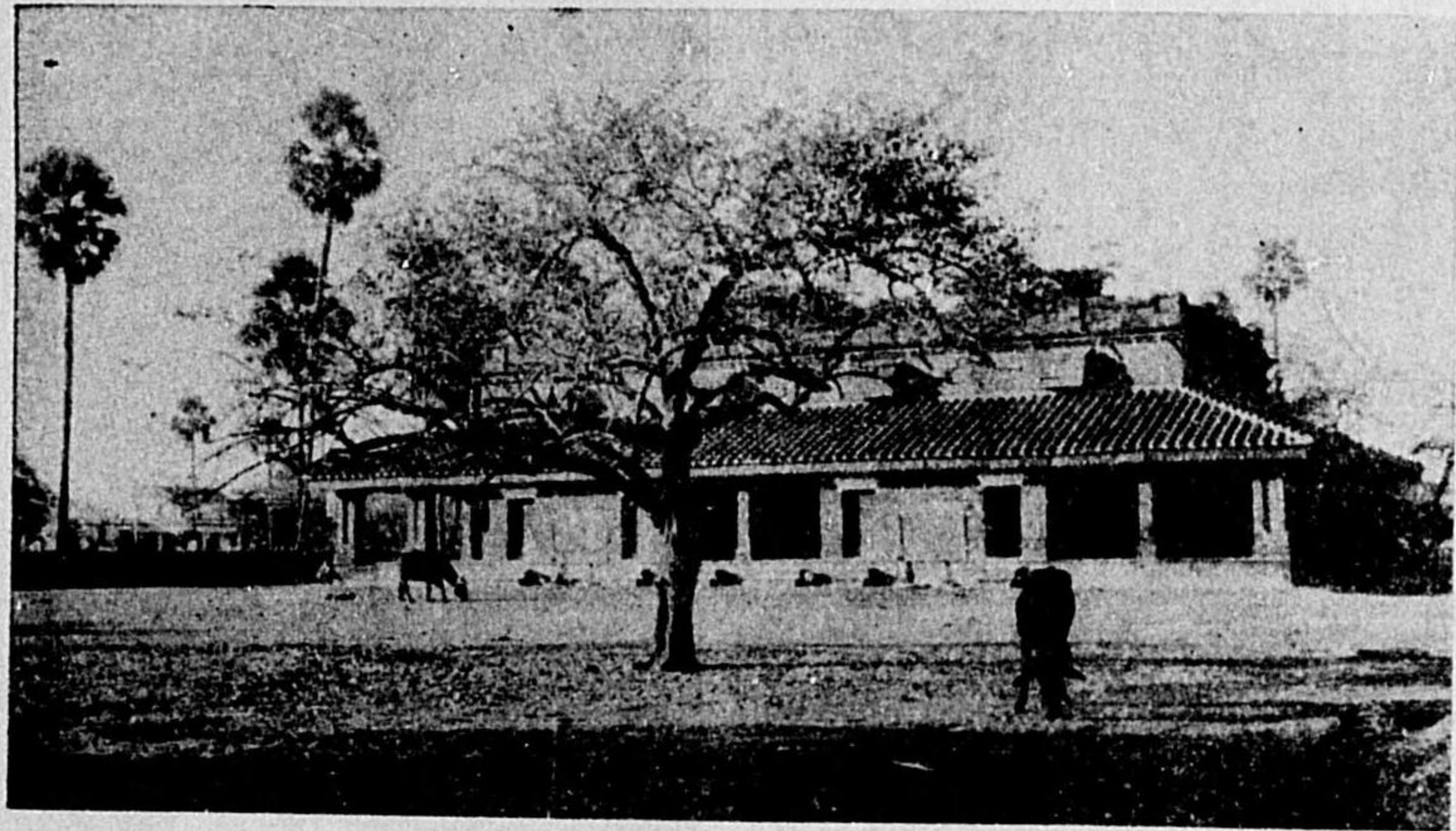


北島道龍師の碑(ブダ・ギャに在り)
(物指は曲尺の一尺・昭和十一年三月九日)

とある。併し原は確な拓本であらうが、書物の挿圖はそれをみて職人が書いたものと見え、挿入の寫眞とは相當の隔りがある。尙ほ夫によれば大塔の右側に建つてゐなければならぬが現在はその裏手の方に敬遠されてゐる。但し打くできて石垣に積み込まれてゐないのが幸と思はねばならぬ。

るまい。實に道龍師の言はれた如く、日本人で重ねて行つて、幸に一覽したから、寫眞にとって掲げたのである。私は此石をみて洵に感慨無量であつた。

今回は天候が不良であつたので、折角のブダ・ギャは不愉快であつたが、そのため圓文の寫眞は両面から由自にとることができた。塔の内部は本尊も脇侍も何も彼も、身體に金を塗り眼鼻をかき、丁度小兒がいたづらした様に、まるでめっちゃめっちゃにして了つた。餘りひどくしてあつたので尋ねてみたら、ダージンから來たビルマ僧が——昭和十一年三月から——一月ばかり前にしたのださうである。前回ここに參詣した時は、佛像はすべて黒っぽい石のままで、遠方からでも随分古い五・六世紀頃の作の様に拜せたのに、なさけない有様になつてしまつた。



伽耶のD. B. (昭和十一年三月八日)

大正十二年一月七日八日、伽耶へ泊ったときは公立旅舎は「R. H.」と呼び、せこましい所に建ち周囲も狭く家も小さく、古くて汚なくて随分なさけない状態であったが、今は「D. B.」といひ廣闊な區域を占め、家屋も新しく建て直したので、大分美しい上に明るい電燈がつくし、カンサマが居るので
食事萬端何の不自由もない。

要するに今の様な状態では、ここは大塔周囲の玉垣と奉獻小塔婆とを除いては、まあ大したものではない。背面の金剛座の前の佛足石は二個ある。其内の一つの方即足跡を刻したものは、第十一・二世紀頃と認めらるる小塔の塔身上部、饅頭型のところを水平に切り、ひっくり返してそこへ足跡をほったもので、どうも大して敬意を表しかねるもの。他の一つは右足だけだが、やはり同じ様な石に刻してある。併し「魚形映起」の条件だけはよく充たしてゐた。

D・B・へ歸った時は丁度雨の晴れ間で、日がカンカンあたつてゐた。そこで裏へでて記念の寫眞を一枚とつておいた。此家の向て右端の室を占領したのである。ところが間もなく復曇り雷鳴一しきり驟雨が來た。折角甲谷他でRs. 3

だして買った寒暖計は、此日は僅に77°しか昇らなかつた。英國製の華氏寒暖計で76°の所にサンマー・ヒートと書てある。してみると *Homo sapiens Linnaeus var alba* の國ではそんなものかも知れない。95°以上にもなればあつくて黒焦げになる虞があるのであらう。

D・B・は室が廣くて明るい電燈があつて大變氣に入つたが、蚊のある事驚くばかりで、どこへでも止り、止るが早いか螫す。言語同斷な奴は鼻の先へでも止る。まことに以て怪しからん次第である。凡そ今回の印度旅行に於いては、上陸以來ラウル・ピンヂ以北を除いては、隨所で蚊に攻められたが、此所のは特別であつた。D・B・に備附の蚊帳がないので、此夜は私が持参した輕便寢臺用の小さい蚊帳を、工夫をして應用し漸くねることができた。夜もやはり驟雨雷鳴が續いた。

五五、佛陀伽耶と北島道龍師

例ひ大塔を釋迦の墓標と誤つてゐたにせよ、師自らいつてゐられる様に、ここに參詣したのは恐らく最初の日本人であらう。同師の著【天竺行路次所見】は、以前もつてゐなかつたので、拙著【印度旅行記】には引用できず、附録として其一部を終りに引き、その最後のところへ

もう少し早く此旅行記を得たのだと、此等圖版も復寫を挿入し本文中へこの中の記事を抜き書きをして、同師の旅行の有様を偲ぶことができたのであるが、いまとなつては他日の好機を待つほか、最早如何ともしがたいのを遺憾とするものである。

とかいたが、その「他日の好機」がここに來たので、左に少しく同書から引いておく(三三・一)

以下正しく佛尊の墳墓を偵察するの語

*翌二十三日「パトナ」を發するに付き是れまでは多分鐵道に乗して來りしなれども今は専ら釋尊の墳墓を弔問し參らす可ければ鐵道而已にて沿行してはとも偵察の詳細を悉すこと能はざれば是れよりは或は牛車（馬車は之れ無し）を用ひ又は歩行をも爲す可しと路次の行計を議定し先づ取り敢えず牛車一輛を傭ひ「パハル」や「ガヤ」は西南の方に在りと聞けば其地方へ行くと可しと方針を定めて午前八時「パトナ」を發して悠々たる知らぬ田舎の方へ向ひつゝ「ガヤ」の里へは何ふ行くや釋氏の墳墓は何れに在りやと英語を以て尋ねつゝ山を越え水を渉り村あれば尋ね人あれば問ひつゝも尋ね行く程に日も早や西山に春きければ今日は速く宿す可しとて山の手の小村なる百姓の家を叩いて我々は日本人なり今夜は一宿をさせ玉ゑかしと英語を以て懇に依頼せしかども最早や此の邊は英語さゝも通ぜざるにやまつぱり解らぬ體に見えければ……

困り果てて日本語と身振り手眞似で宿を頼んでみたら皆斷はられたが、漸く最後に柴部屋の様な所を借りうけることができた。さうして宿の主人は「小麦の蒸したる物に白砂糖を掛けたる食物を」くれたので、漸く餓をしのぎ得、つかれ果てて熟睡してしまつた。翌朝食後

我等主人に向ふて（英語を以て）釋迦の墳墓は何れに在すや又た「ガヤ」の里は何れの方に在りやと尋ねければ彼れ全意は解せざれども唯だ「ガヤ」と云ふ而已は分りし由しにて遙か西南の方を指して云く「ガヤ」と是に於て我れ等深く主人の懇到を謝し其れより名さへ分らぬ村を發して之れより前きは長路悠々唯々手合摸合ひと諸共に「ガヤ」「ガヤ」と而已尋ねつゝ山を越え水を渉り日落れば孤山の下に宿し日出れば一水の涯を發し宿々既に五宿遂に十二月三日午後第十時頃「ガヤ」の里に着しけり（路次の苦惱等は爰に詳悉す可からざる也）扱て其れより兩三家を叩いて一宿を依頼せしに例の如く皆な相ひ斷はられれども……百方遂に一つの納家體の者を借り受けたり是に於て篋を下し座を占め先づ「ガヤ」まで來りし上は佛墓の有尤も日ならずして決す可きことの近きを悦びつゝ遂に洋氈に巻かれて寝たり。

正しく釋迦佛尊の大墳に詣至する話

* 明治十六年十一月二十三日 * * * * * *
* * * * * * * * * * * * * * * *
* * * * * * * * * * * * * * * *
* * * * * * * * * * * * * * * *
* * * * * * * * * * * * * * * *

明て四日の朝第七時起床し食事畢りて然して後……宿の主人を呼びて云く我々は「イヤッパンニス」（日本人）にして釋迦佛尊の墳墓を弔問し參らせん爲めに來りり庶幾くば御墓の所在を知らせ玉ゑかしと英語或は獨逸語を打ち交えて陳しけれどもさつぱり解らず……是に於て余自ら日本語中に手合ひ摸合ひを差し加ゑて種々之れを諮問すと云へども彼れ尙ほ之れを解すること能はず實に百尺竿頭之れを如何せんと思ふ所より一種の工夫を回らし墳墓の形を諷して「サキヤモニー」「サキヤモニー」と云へば彼れ稍やく之れを解せし體にて頻りに點頭しける故に然らば其の地方に行く可し牛車一輛を傭ひ玉はれと「ロビー」（印度の臺圓）を出して種々依頼しけれども其意少し了し兼ねし體なれば是れ亦た牛車の形を諷して示しければ忽ち解せし姿にて大いに笑ふて點頭しつゝ戸外を指して出て行くはくありて一輛の牛車を率ひ來り之れに乗れと云ふ形を示す然らば之れに乗れば宜しい歟と手合ひ摸合ひを以て尋ねければ唯だ點頭して遙に西南の方を指さしける故に左すれば其の地方にこそ或は御墓の在すならんと思察せしかば兎も角試みに行く可しと卒然ながら其の車に乗れば主人其の丁夫に向ふて遙か西南の方を指さし何にやら云ひ付けたれば丁夫も了承せし形にて我等を引ひて陋巷の外かに出て行く實に如何んとも云ふ可からざる漠然の至りぞかし

此れは全く漠然の至りであつたらう。私も多少この様な目に遭つた事があるから、此時の道龍師の心持はよく判る。師の連れてゐた日本人の同伴者兼從者格の黒崎といふ男がいろいろ心配して、墓は遠いかとときいたに對し、百里あるか二百里あるか判らないが、行くといふ決心した以上、「千里萬里も何んの辭することか之れ有らんや」と答へながら

益々山手の方を行く程に午後第三時頃連山の麓に衝き出でたる一つの土山の下に至りたり丁夫爰に於て牛車を止めて何やらチンブンカンと云ひつゝも手を振り回はして車より下よりと云ふの形を爲す故に何に事やらんと思ひつゝ車を下りければ我れに従ひ來れと示すの體なれば唯だ其の云ふままに是に従ひ其の山の上に登れば豈に圃んや土山には非ずして宛も周圍二丁餘り

有りつ可き大なる指鉢の端の如き所に立つたり然して其の底を見るに宛も塔の形ちに似たる石造の建て物ありて近頃土中より掘り出せし者の如く尙ほ男女百二十三人計り土を掘り土を荷ひ袂掌絡繹たり余丁夫に問て云く之れ果して何に物ぞや丁夫何やら云へども更に分らず故に黒崎に向ふて云く兼て聞く所に由れば即今釋尊の墳墓を掘りて居るとか云ふ蓋し之れならん歟然し墓にしては餘りに大なれば亦た塔ならん歟何れにせよ彼の多人數中には或は英語の出来る者もあらん兎も角行ひて問せられよと云へば黒崎即ち諾して直ちに石階(四十五六段も有る可し)を下り彼の群中に入りて往々問せしかども更に分らず……稍やありて彼の小高き所に少し偉大なる黒人(印度人は皆な黒人なり)の種々指揮するを見占て問訊しければ天幸にも彼の黒人は英語を自在に話せり即ち云く是れは斯れ釋尊の大墳墓なりと是に於て黒崎手を舉て大呼して云く是れ即ち釋尊の大墳墓なりと余之れを聞ひて宛も狂人の如く石階を兼下りて思はずも黒崎を懐き抱え跳て云く嗚呼大聖世尊の墳墓なり大聖世尊の墳墓なりと多日の千苦を打ち忘れて喜跳悦躍相ひ止まざれば土人之れを周匝して太だ奇怪の看を爲しにける也稍やありて黒長云く我れは即ち當修營所の奉行なり先づ我が修營小屋に來り玉ゑかしとのこと故に敢て敢えず其の小屋に誘れて狂氣漸く清整端正なりさて此の所はもと加耶の驛地にして佛陀加耶と名くと加耶の里よりは十二三里も有り云ふ也

黒長我々に向ふて君等は何れの邦の人にして何んの爲めに爰爰は來りしぞと問はれし故に前日に鋼買の「アデレツフェ」及び比拿力の「バネルゼー」氏等に答ふ如く陳しければ黒長大いに感喜いたされて云く然らば君等は日本人にして我が釋迦教を信奉するの人なる歟我れは即ち「ダークベンゴ」と云ふ者にて此大墳修營の奉行を命(印度政府より)せられし者なれば之れに關せし事なれば渾て配慮し參らすべし何んなりとも托せられかしと懇に云ひ呉れる故に我れ等も深く陳謝し然らば何にはともかく先づ釋尊の大墳に詣せ令め玉はれよと云へば然らば我れ自ら指切す可し來り玉ゑかしと云はれし故に余即ち法衣を着し經巻を持して大墳の前に至れば大墳巽然として其の高き宛も九丈餘其の周圍十餘丈も有る可しと思はる實に世界無比の大墳と云ふ可き也……迺ち其の墳戸より凡そ一丈八尺計奥に入るに其の奥中太だ暗淡模糊たり然るに其の正面に三尺四五寸許りの黄金の釋尊を坐し其下に圓大なる穴を鐵の圓板を以て蓋ふて有り云く此の内に釋尊の金棺を收むと……其の大墳の概形は寫眞を爰に繪して劉覽に附す其の中の第一圖は五年以前に掘り出せし儘なり其の第二圖は五年以後修營の形也委詳は他日辨ず可き也

とある。ここに第一圖といふのは一二一、第二圖とあるのは一二二を指すので、共に甚だ珍らしい寫眞である。私の知れる限り(と云つたところで手許にある)の書物には、これ位詳しい大きな而も古い寫眞はのせてないから、成るべく大きく複製をして掲げておいたのである。

私の讀みようが悪いかも知れぬが、本文の記事は發掘最中の様である。然るに寫眞は五年(多分明治十
逆算であらう)前だといふのに完全に露出してゐるので、其邊幾分の矛盾がある様であるが、或は地面に近い所は尙ほ未發掘なので、その邊をほつてゐたのかも知れない。とにかく千辛萬苦の末、あんな時分にここ迄辿りつかれた事に對し、絶對の敬意を表するものである。普通のものでは到底なし得ない事である。

それにしても現今だつて土方人夫の輩謂はゆるクリー等には、ヒンドスタニ以外に判らないのだから、あんな時分に發掘に従事せる男女の人夫に英語できいても、其答は道龍師口癖のチンブンカンに過ぎないのである。併し遂に「黒長」——此字の右に「こくちやう」と假名をつけ、左に「くろんぼうのかしら」と意味までつけてある。實にうまい言葉で、發掘最中の所で私の出遇つた指揮者は何れも「黒長」であつた。今日ではバブー(Babu)で通用してゐる——を見つけたから、畢竟早く埒があいたのである。こんな所では氣を落つけてバブーを見つけるに限る。従僕を連れてゐたら、先づ彼をして發掘中の人夫にバブーはどこにゐるかときかせ、そこへ行って談判しなければものにはならない。

今回は一度も左様な場合はなかつたが、前回には那爛陀寺と鹿野苑とが發掘中であり、殊に前者は約五六十人の男女人夫が作業中で、謂はゆる「黒長」のバブーが監督をしてゐた。此時はタキシラで故ス

ブーナー博士から貰った紹介状を此ブーに手渡し、大分手数をかけたのは今でも氣の毒だと思つてゐるが(『印度旅行記』第321頁)、こんな事で道龍師がブダ・ガヤへ行かれた時の光景が眼前に髣髴としてゐて、私にはよく判る。やはり石炭のバインスケ(この言葉は今の若い人には判るまい)の様なものに土を入れて、大原女のように頭へつけて、黄色いきものを頭から被り、はだして運んでゐたのが絡繹としてゐたのであらう。

前に引いた本文は、尙ほ其次に「ダークベンゴ」氏大墳瘞堀の概話が、次は碑文を墓前に建てた話、次に寫眞を貰つたいきさつ、さうして次は小塔婆と佛像とを刻した石片(挿入の石版圖でみると時代は遙に後れるやうである)とを貰つてきた話をのせ、

以上墳墓の概狀此の如し其の詳細のことは他日續編を製して示す可き也

とあるが續編は出たか出なかつたか、とにかく私はもつてないから、詳細は判らない。それからあとは

是に於て本月十一日午後第二時「ダークベンゴ」氏に別れを告げ習十二日加耶の主人にも留中の懇到を謝して午前第十時加耶を發して「バンクボート」の方を向ひける此の回は「ダークベンゴ」氏教系に由りて大ひに便路を得たれば路次の勞苦は先かりけり午後第六時「バンクボート」に至著せり今夜は取り敢ず爰に一泊する也

翌十三日午前第七時同所より船車に乗り午後八時東天竺の甲谷陀の港に着し「ミニセボッフイス・ストレート」と云ふ街の「ノンマグライ」(第三番地)に投宿せり爰に止ること六日間日々「プロキーン」と云ふ印度の駕に乗りて府中を點見せし也：

といった様な次第で大團圓であるが、右に引いた文中「バンクボート」といふのが不明である。併し翌日ここから汽車へのつてゐるところをみると、これは「バンキボーツ」(Bankipore 今の Patna Jn. 驛のある所)らしい。果してさうだとすると、ガヤ (Jn.) とバトナ (Jn.) との間は69哩あり、汽車で二

時間五十分かかる。故に牛車位では例ひそれがブロック・トンガであつても、午前一〇・〇〇にガヤをでて夕の六・〇〇にバトナへつくことは不可能で、どのみち途中で一泊せねばならなかつたらう。一時間平均12哩の速力はとても出まいと思ふ。この邊のところは少しく判らない。

以上割合に詳細に道龍師の記事を引いた理由は、印度旅行なるものが、今日でも大して樂ではないので、普通「お上りさん」の行くところだけなら、大概は設備の行届いたホテルがあるから先づ何でもないが、少し田舎へ入ったが最後、意外の困難に出會ふ覺悟がなくてはならぬ事を、明らかに讀者諸君に知つて貰つておいて、さうして今から60年前に黒崎といふ日本人の同伴者を一人連れて、大塔へ參詣された道龍師の艱難辛苦を察して貰ひ度いためである。私は拙著の終りに

道龍師の辛苦は、私には幾分の想像はつくと思ふが、外國へ行つてもたゞ歐米を自動車や汽車で乗り廻して歸つてきた人々の夢想だもせぬ、またする事もできぬ所である。道龍師が漸くガヤに着した時、路次の苦惱等は爰に詳悉すべからざる也」と

かかれてあるが、私は此一句に對し滿腔の敬意を表するものである。實際書けもしなければいへませぬ事であらねばならぬ。とかいておいたが、今でもさう思つてゐるのである。北島道龍といふ坊さんは、實は慄悍激烈手がつけられないので、日本へおいては始末に悪いから、印度へでもやつたら虎に喰はれるか蛇に吞まれるかし

* 今大阪市のある所で漢學の先生をして居られる方から承つたのでは、其方が幼少の時分、もう大分の老體——多分八十歳以上であつたさうだが——で晩年を大阪市北區紅梅町の寓居に淋しく送つて居られた事が薄い記憶にあるといふことであつた。

て、終りを告げるだらうといふ想定の下に入竺させたのだ、といふ様な話を耳にしたことがなくもないが、そんな人であったからあの時代に、あらゆる困難に打勝つことができたのであらう。もうとうに示寂されたことと思ふから、冥福を祈ると同時に大塔參詣の大先輩として再び敬意を表する次第である。

*

*

*

*

*

道龍師の印度行の動機等について、できるだけ知り度く思つてゐたところ、同師在世中親しく其教を受けたといふ淺井善太郎翁が健在なる事を知り、筆者は昭和十七年三月五日、同翁と親交ある大脇正一

道龍師筆蹟

大脇正一氏寫眞

此翁道龍師書

淺井善之助氏藏に係る道龍師筆法華經の一部の終りの署名。昭和十七年三月八日の寫眞。

氏と共に、豊中市大字南刀根なる淺井邸を訪ひ、翁より直接に左のお話を承つた。

道龍師は和歌山縣人で本願寺僧籍にあつたが、本願寺の改革につき卓抜なる意見を有し、當局に其方針につき上申した事一再に止らなかつた。そのうち西南役が勃發したので、平定する

迄のいはばいきぬきに洋行する事になり、其歸途印度に立寄り、萬難を排して佛陀伽耶の大塔に參詣されたのである。其不在中本願寺では對策をねり防戦大に努めた爲、歸朝した時は師の目的は既に大頓挫を來し、策の施し様もなく、一敗地に塗れ、剩へ僧籍も剝奪されてしまつた。かくて師が衣食に窮するにつけ込み、師の持する宗教改革案を放棄する條件を附して、本願寺から赦免の特使を受けたが、自分の意見に聽従しなければといつて、斷乎として退けたさうだ。

こういふ風であつたから、晩年は會計が甚しく不如意となり、糊口の資を得る途もなくなつた事を自分(淺井翁)の親戚が知り、北區紅梅町の寓居から同區信保町一丁目の叔父所有の貸家に移轉を乞ひ、少なくとも住について後顧の憂をなくしてあげる事ができた。其頃自分は未だ三十に満たない時代であつたから、當地方の青年會を中心として修身會をつくり、二三年の間は毎月日を期して老師を請じて説話を乞ふた事があつた。この間自分は何度も信保町に老師を訪ふたが、老師が漸くの事で佛陀伽耶の大塔へ辿りつき、自身の名を刻みつけた石を記念に塔の側にたててきたといふ話を親しく聞いたのも、このときであつたさうである。

淺井翁は尙ほ語をつぎ、當時一流國學者に五常につき二時間餘り講義をされたり、漢學の大家と大議論をして先方を説破したり、又日清戰爭の間、態態廣島に趣き、要路の大官に忌憚なき意見を開陳したり、國語・漢文はもとより、政治上にも卓見を有し、あらゆる方面に非凡な人であつたと、道龍師の人となりに就いて約一時間話してくだされた。

かく非凡であつた道龍師は、明治三十五六年の頃、約九十歳の高齡で永眠されたさうである。私はここに道龍師の寫眞を掲げ得ないのが甚だ遺憾である。

五六、佛陀伽耶大塔及玉垣 附奉獻小塔邊

【大唐西域記】卷第八に

菩提樹ノ東、精舎アリ、高百六七十尺、下基ノ面ノ廣サ二十餘歩、疊ムニ青キ甃ヲ以テシ、塗ルニ石灰ヲ以テシ、層龕ニハ皆金像アリ、四壁ノ鏤作ハ奇製ニシテ、或ハ珠形ヲ連ネ、或ハ天仙ノ像アリ、上ニハ金銅ノ阿摩落迦果亦寶瓶トイヒ又寶壺ト稱スヲ置ケリ、東面ニ接シテ重閣ヲ爲レリ、檐宇ハ特ニ三層ヲ起シ、椽柱棟梁、戸扉窓牖、金銀ヲ以テ彫リ鏤メテ、以テ之ヲ飾レリ、珠玉ヲ廁ヘ錯ヘテ、以テ之ヲ填メタリ、奥室ト邃宇ニハ、洞戸三重アリ、外門ノ左右ニハ、各龕室アリ、左ニハ則チ觀自在菩薩ノ像、右ニハ則チ慈氏菩薩ノ像アリ、白銀ニテ鑄成シ、高サ十餘尺アリ、精舎ノ故地ハ、先ニ無憂王小精舎ヲ建テシヲ、後ニ婆羅門アリテ、更ニ廣クシテコレヲ建テタリ。

といった工合に大塔の記事がある。

何といつてもここは四大靈跡の一であらねばならぬ。釋迦は六年の苦行の後ここに來て、卑波羅(Bipala)樹下の金剛寶座で魔王(Mara)を降し、初めて佛陀となつたのである。そこへ最初に阿育王が金剛寶座を中心に、十字形の殿堂を建てたが、後に其位置へ建てたのが此大塔であつた、さうして最後に(一八八〇年)に修理をした時に現在の様にしてしまったので、古い寫眞と比較してみても、これも亦他の多くの例に洩れず、洵に惜しいことをして了つたものと思ふのである。寧ろ手をつけずにおいた方がどの位よかつたか判らぬ。

其證據には、専門書には殆んど總て修理前の圖を掲げてゐるのでも判るであらう。ただある書物には

* T'se-shi Bodhisattva = 梅丘麗耶 (マインクレーヤ) (Maireya) = 聖物

ほんの申譯的に頗る朦朧たる網目版、先づ新聞紙の挿繪程度のをに入れてある位である。尙ほ此大塔の位置には、以前に阿育王の建てた殿堂があつたので、それは前に引いた

精舎ノ故地ハ、先ニ無憂王小精舎ヲ建テシヲ、後に婆羅門アリテ、更ニ廣クシテコレヲ建テタリ。

とあるので判るが、此を實際に證據立つるものは、この阿育王建立の殿堂の發見である。此殿堂はカニンガムの復原によるに中央に金剛座があり、其後方即ち西に菩提樹があり、建物は十字形をなして其周圍に造られ、其外に東西に短く南北に長く、長方形に玉垣が一廻してゐたのである。其玉垣の對角線を求むる時は、金剛座の中心は丁度玉垣對角線の交叉點と一致する。此事は玄奘の記事に菩提樹垣正中。有金剛座。

** Unfortunately, instead of carefully preserving this very interesting monument, the Government of Bengal was advised to "restore" it, and this was carried out under the superintendence of General Cunningham and his assistant, by which—as might have been anticipated—it was materially modified, and from an archaeological point of view seriously injured. (Fergusson:—H.I. & E.A. Vol. 1, p. 79.)

*** The old Burmese inscription, which records the successive repairs of the Temple, assigns the original building to Asoka..... Unfortunately we possess no description of it save a brief mention by the pilgrim Hwen T'sang, who says that it was "a small Vihara", and that Asoka "surrounded the Todhi Tree with a stone wall about 10 feet in height," which wall still standing in A. D. 637, when he visited Mahabodhi. (Cunningham: "MAHA-FODHI" p. 4).

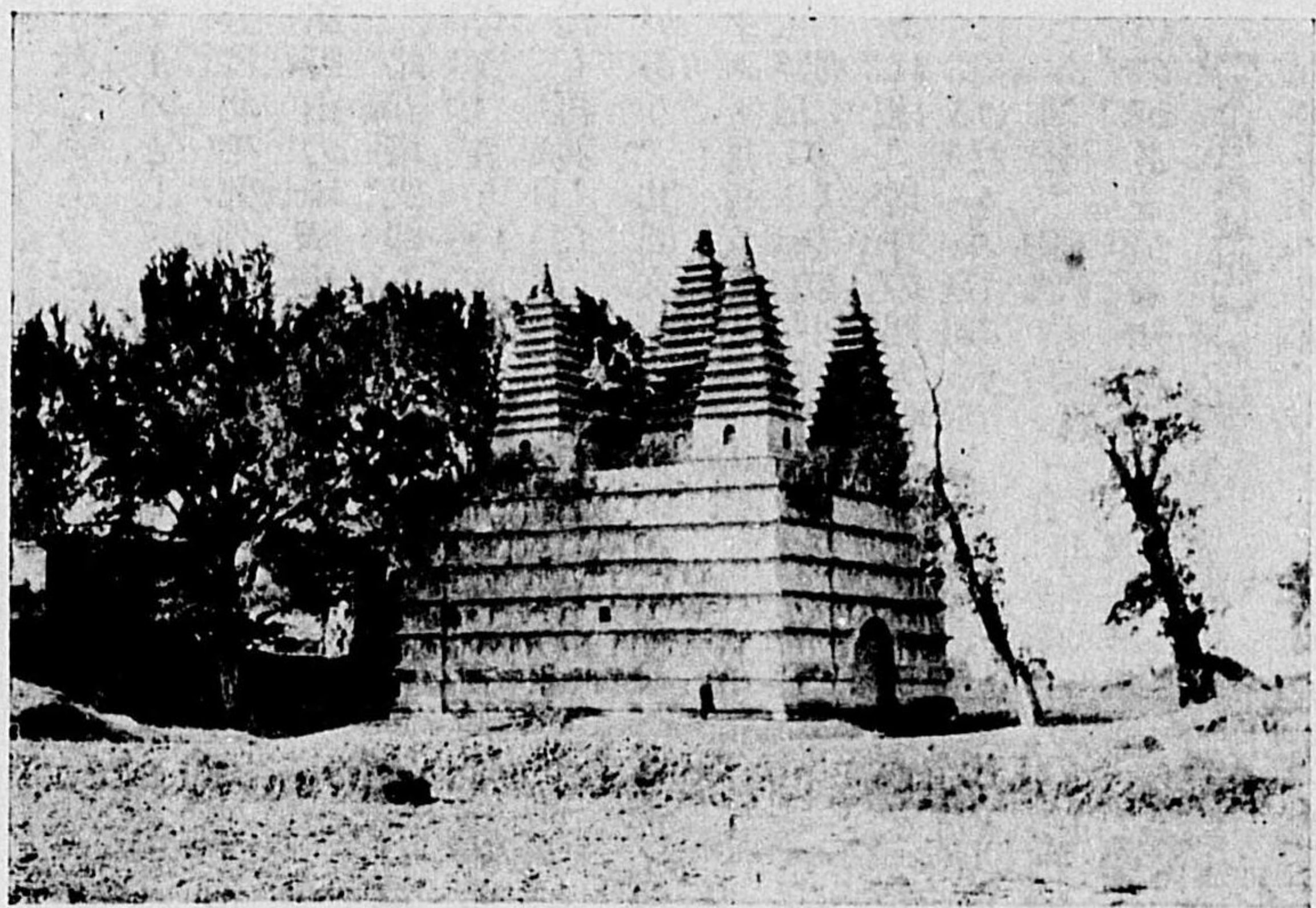
といふのと符節を合するが如くで、^{*}之を以て觀ても、^{*}玄奘の記事の誤りでないことを證するに足ると、カニンガムは言てゐる（『マハ・ボー』^チ圖版第二）。

併しながら周圍の玉垣は、從來阿育王時代と考へられてゐたが、最近はその時代を後れること約一〇〇年と推定さるるに到つた。さうして略ぼ舊位置に近いころへ建てられたが（一二〇）、併しカニンガムの推定復原した玉垣の位置とは大分の相違がある。此大塔は第十四世紀の初頭（^{一三〇六—一三〇九年}徳治元年—延慶二年）にビルマの佛教徒によりて修理され、それから一部地下に埋没したりしたのを發掘し、明治十三年から翌十四年にかけて、ベンゴール州廳の手で再び修補されたのである。だから外觀は非常に新しくなつてゐるようだが、大體の形はさう變つてゐないことは、圖版をみても判つてゐるだらう。

塔は九重であるが、それは外觀だけの事で、事實は二階へ昇り周圍が一巡できるだけのことである。四隅に小塔がたつてゐるが、發掘したてにはそんなものは一基もなかつたことは、一二二を見れば明らかであらう。併し一二〇左上T印の所には斜線が引いてあるが、^{*}例ひ全部破壊されてゐたにせよ、^{*}其平

^{*} As these two lines cross exactly on the middle of the polished sandstone Throne we see the accuracy of the pilgrim's description that the Diamond Throne was placed in the middle of the Bodhi-munda, a Holy Enclosure which surrounded the Bodhi Tree. (Cunningham "MAHA-BODHI" p. 7.)

^{**} We see also the remains of some corner towers, of which traces still existed on the terrace itself in our days. The plan of the Tower marked T, and shaded in Plate XI, was quite distinct on the S. W. (Cunningham—"MAHA-BODHI", p. 26).



五塔寺 (Wu-ta-szu) 全景 (大正十四年十一月二日)

本名は大正覺寺。明の成化九年十一月建つ。基壇高さ約50尺、塔婆各高25尺。永樂年間印度僧版的達(Bandida)が寄進したものださうで、内に五佛を安置すといふ。

面により當初建物があつた事は明らかであつたさうである。だから四隅に附屬小塔があつて、本塔と共に賽の目の五の様に配置されてゐたことは確かである。さうして大塔の修理中は一二二に明らかなように、小塔が二基あるところをみると、此時既に二基だけは、本塔を參考して復原をしたものとして差支なささうである、果してさうなら本塔修理の腕前では、まあさういつてはよくないかも知れぬが、知れたものだから、従つてこの小塔の價値もまた知れたものとしておいてもよからう（一二三・一二四）。

中央に大きな塔があり其四隅に小塔を配したのは印度國のみならず、東洋に廣がつてゐるようである。先年の地震で大概顛倒破壊してしまつたが、ネバル國の首府には、ヒンヅ

一教であらうが、例の二重の塔を中心にして、四隅に同形の小さいものをもったのがいくらもある。スツバとしては同國の首都カトマンヅに隣接せるバータンのタンクの傍らに代表的のがある(後出)。支那では北平郊外の五塔寺、我國では法隆寺金堂内多聞天所持の小塔の相輪が恐らく最古のものであらう。高野山の瑜祇塔の相輪また然り。

此五塔式即ち賽の目の五(●●●●)式のものゝ敢て佛塔のみに限らないのは、回教徒の廟をみれば判るだらう。さういふ風に考へてくると、佛陀伽耶の大塔は修理をして反て拙くしてしまつたが、四隅の小塔迄も再興したのは、まことに好都合であつたと言はねばならぬ。さうして尙ほ且つ此大塔には古い玉垣があり、其圓文が大變に面白いので、人魚・翼馬・翼象・翼獅・翼山羊・象魚・人獅・馬人・スフィンクス・馬首女と男・女の顔・蓮花等々等、いつ迄もあきるところではない。

他に多く奉獻小塔婆がある。一一五——一二八が即ちそれで、非常に高い基壇の上に乗つてゐるのもあれば、塔身の四方に刻まれた四佛の龜が、特別に手の込んだものもある。此度圖示したのは何れも前著に掲げたものであるが、今度の方が製版が上等だから、あの書物の挿圖よりはずっと鮮明で、よく判るであらう。何れも第十一・二世紀頃のものばかりの様に思ふが、全部みたのではないから、或は意外に古いのがあるかも知れない。

【大唐西域記】卷第八に

前正覺山ノ西南、行クコト十四五里、菩提樹ニ至ル、垣ヲ周ラシ輒ヲ疊ミ、崇峻ニシテ嶮固ナリ、

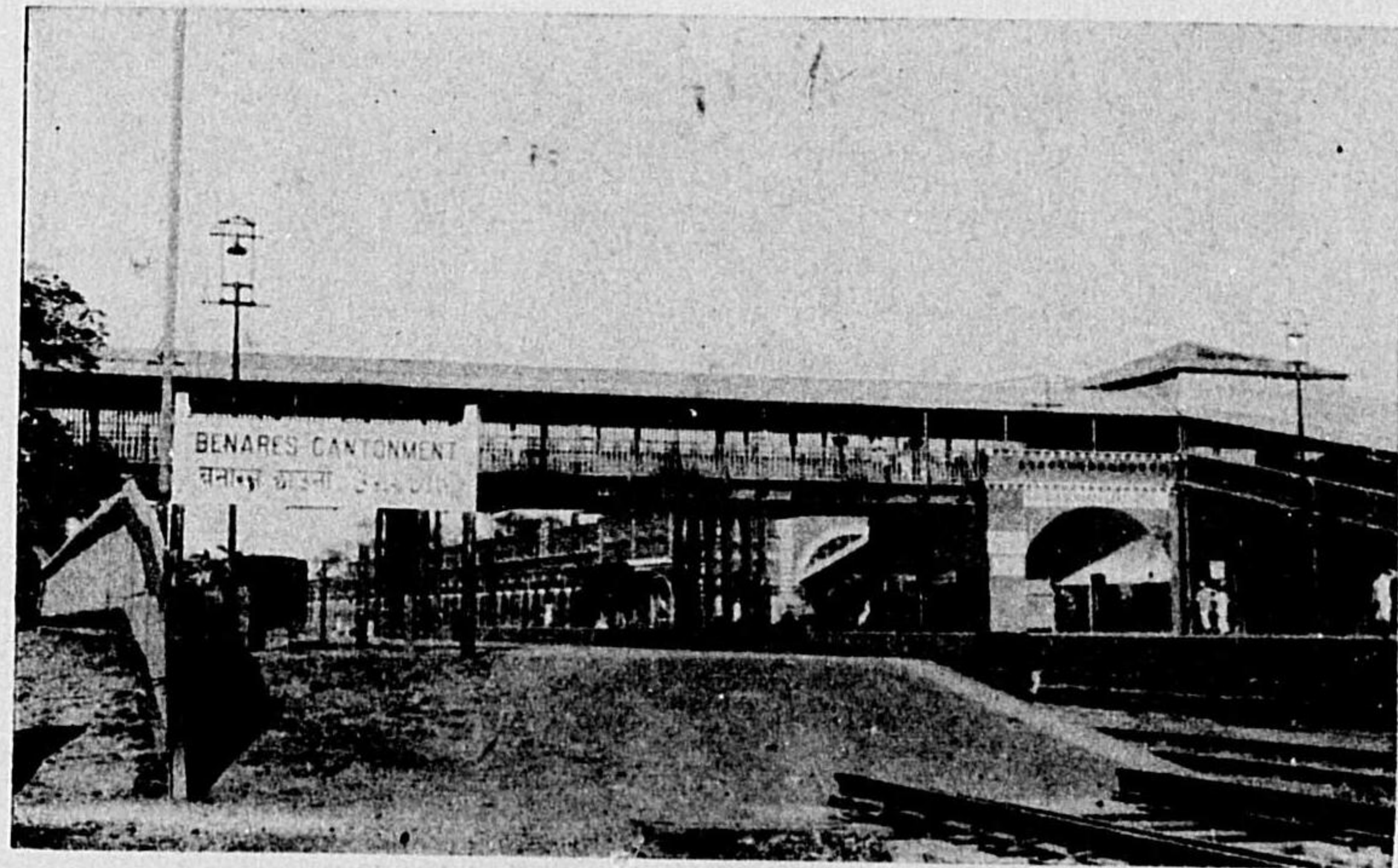
東西ハ長ク、南北ハ狭シ、周五百餘歩、奇樹名花、陰ヲ連ネ影ヲ接シ、細沙異草ハ、彌漫シテ綠ヲ被ラシム、正門東ハ關キ、尼連禪河ニ向ヒ、南門ハ大花池ニ接シ、西ハ嶮固ヲ阨シ、北門ハ大伽藍ニ通ゼリ、堀垣内ノ地ニハ、聖迹相鄰、或ハ窰塔波アリ、或復精舍アリ、並ニ瞻部洲ノ諸國ノ君主・大臣・豪族、遺教ヲ欽シミ承ケテ建テテ以テコレヲ記セリ。

とあるが一一八はここにいふ大花池の方から大塔を遠望したもので、頗る絶景である。此度もう少し變つたところから寫してみたが、天氣が悪くて素人にはものにならなかつた。さうして一一九とこの記事と對照する時は、現場とよく一致してゐることが判るであらう。

五七、ガヤからベナレス(Benares)へ

三月九日は早起したところ、前日から夜にかけての雲と神鳴りはどこかへ行き、好晴であつたので最早胸の内に板のできる虞もなく、六・四二ガヤ(II)驛發のデラ・ダン急行列車へのつた。前日の朝ここへ降りたのと同時刻で、一日後の汽車である。下車してから前年通りクラークス・ホテルへ行かうと思つたが、不圖思ひついて試みにD・B・へ行つてみることにした。幸に室があいてゐたので直にきめた。チンネベリと同じくまるで塀も何もなく、往來といつても、どこでも通れる様な廣いところに

* 玉垣内、金剛座を中心とし、菩提樹を其後方にせる十字形殿堂は、「東西は長く南北は狭い」が、周囲の玉垣は其反對で、東西に狭く南北に長い。



ベナレス驛風景 (昭和十一年三月十日)

前回の時とは此驛の建物も驛頭もまるで見違へる位に大きくなってゐた。非常ないい天気、日が一ぱいあつてゐたので、一枚とつたのがこれ。立札の下に列車の後尾のところが見えてゐるが、これはベジャワール・カルカッタ間を運轉してゐる Calcutta Mail 列車である。ある旅行記に「ベナレス・カント」驛といふ様な字をみた事があるが、そんな名はない。この驛名は BENARES CANTONMENT といふので、CANT. 又は CANTT. 等とかいた立札もある。それでさう思ひ込んだのであらう。「カントンメント」とは、印度に於いては軍隊所在地・兵營地といふ意味である。これと對して、もう一つ CITY 驛がある。ベナレスには「ベナレス・シチー」驛もある。大體シチー驛は住民町だから、ホテル等へ落つく氣なら、カントメント驛へ下車しないと不便至極である。

地下の建物 (Subterranean Temple) 等もほり出されてゐたが、塔に關係がないから圖示は見合せしておく。殊に主殿——とでもいつたらいいだらうが、メイン・テムブルといつてゐる大きな建物——の附近に發掘された小塔婆は、著しい數に上つてゐた。次に陳列館へ行つてみた。ここでは初めから寫眞はとらぬつもりでゐたが、やはりみるとさう行かないので、正面を入つた廣間に陳列してあつた、例の有名な初轉法輪座像其他菩薩像等、いくらか寫したが、そのうちに玉垣の殘闕で佛塔と緊那羅 (Kinnara) か迦陵

建つてゐて、大變に氣に入つた。かうあげつばなしは何となく不安でいけないが、建物が廣くて氣に入つた。晝食をすましてから、第一に鹿野苑へ行つてみることにした。今日は約三十五分かかつて迎佛塔の前についた。前回の薄い記憶は、往來に面した方に小さい森か何かあつて、古塔はまるで小山の如く、その上に新しい八角塔の基部が見えてゐただけで、事蹟はともかく、塔其物はまるで興味を惹かなかつたから、近づいても見なかつたが、今度は大分發掘もできたし、上まで樂に登れる様にできてゐたので、上つてみたら鹿野苑の遺跡で最高のダメーク塔も、野生司香雪畫伯が繪をかいてゐるといふ新しくできた寺も、一目瞭然であつた (一一三五)。

塔を下りて愈よ遺跡に向つた。先年きたときは殆んど誰もゐず、遺跡はまことに静かであつた。その誰もゐない靜かな草原に座して晝辨當をたべながら、犬に分けてやつた。樹の上には鸚哥の様な緑色の鳥が飛んでゐて、あたりの風物がまことによく廢墟に調和してゐたので、ほんとうにいい所だと思つたが、今日はいけなかつた。まるで遊覽地の如く、有象無象がブラブラ歩いてゐて、それが甚だじやまになる。どこでも段段あんなに俗化して行くのだらう。

其昔しジャガット・シン (Jagat Singh) 塔と呼ばれてゐたものは、ダルマラージカ塔と名が變り、其周りに澤山の小塔がでてゐた。僧坊も多く發掘され、先年僅か四五本の柱が見えてゐた所は、全部ほり出され、身廊と翼廊になつてゐるところが明らかに見えてゐた。蓮花の正面向きをほつた天井石 (格間に當る) と稱するものや、僧坊軒飾といつてゐた石片は、どこへもつて行つたか見當らなかつた。面白



鹿野苑陳列所出陳塔婆玉殘闕(?) (昭和十一年三月九日)

中央に玉垣を周らし、平頭及び一個の相輪を有する塔婆があり、此塔婆に向て二人が最初に供物を持ちて進み、次にキンナラか迦陵嚩伽かが續き、其後方には獅子にのつてゐる(から文殊菩薩か何か知らぬが)ものと同じ方向に行くところがほつてある。其後方はどうであつたか今記憶してゐない。私がここにこの寫眞を掲げたのは、人頭鳥身のものに興味をもつたからで、彫刻は幼稚だが、人頭鳥身の動物は既に古く埃及にバア (Ba) として現はれてゐるのに、多少の關聯があるのではないかと思はれるからである。蓮の彫刻でもサンチャパールハット塔婆玉垣に刻されてゐるものは、埃及の夫と全く同じ形式であるし、其他ホーラスを抱けるアイシスは鬼子母神に當るし、いろいろ面白いことがあるからである。此玉垣は名札がつけてないので、どこからでたのか不明なのは遺憾である。

畫伯が殆んど犠牲的精神を以て、學生の力を振つて釋迦一代記を新築の寺の壁にかいてゐられるのはここであつた。

最初ここへ來たときに、馭者は私をのせたまま、廢墟の前で下ろさずに、もつと先迄行かうとしたので、車をとめさせて下りた。其時馭者とマンガとの間に何か話があたが、勿論私には何も判らなかつた。廢墟を見學してゐるあひだに、ダメク塔の北方に佛陀伽耶の大塔をまねた様な新しい大してうまくない建物があることは氣がついてゐたが(上參照)、妙なものができたと思つた位で、別に行つて



鹿野苑出土軒飾 (大正十一年十二月二十八日)

僧坊軒飾といつてゐたか彫刻を有する石片は、掘出されて未だ間がないと見えて、こんな工合にそこいらに積重ねてあつた。これを初めてみたとき、三角飾は法隆寺の天蓋と同じで、唐草の方は少しばかり玉蟲厨子の飾金具の文様に似てゐるから、あの模様は印度が元で、支那を通り日本へ來たと思つたが、どうもそれは、少なくともこの模様からはさういへないやうであることが今度判つた。既にサンチ丘上の東方廢堂内部、グワリヤ城塞内テリ・カ・マンデル内部、及びサス・パフ堂の文様に於いてみた様に(第129, 132, 183頁)、第十一二世紀頃の建物に用ひられた文様とみべきで、第五六世紀まで溯らぬらしい。

頻伽 (Kalavinka) か、人頭有翼鳥身で兩手のあるものが、供物を持つてゐるところが半肉に刻してあるのが注意を惹いた。このキンナラらしいものはサンチの塔婆玉垣にも現はれてゐたし、まだ他にもゐる。これ等はここの列品としては、他の優秀品に壓倒され、餘り見向くものもないやうだから、紹介に及んだのである。

陳列所で可なり時間を費して外へ出た。そろそろ歸らうかと思つたとき、繪葉書行商人がうるさく付纏つたので、何氣なく彼の手にしてゐたものを見たら、そのうちに *Life of Buddha in Fresco* といふ小冊子があり、價 As. 4 との事で買ひとつた。野生司香雪

初轉法輪寺正面

(昭和十一年三月九日)



鹿野苑に新築した「初轉法輪寺」(慕羅健陀俱毘毘鉢羅、(ムラガンダクチ・ビハラ)は、側面から見ると、ブダ・ガヤ大塔の様なものが目立って、私は大していい形とは思はないが、正面はこんな風で、スツーパー型のもので合計六つも見え、左右相稱で堂堂としてゐて非常によろしい。釋迦在世の砌、夏安居をされたといふ建物の名をとってこの新築の寺につけたのかも知れない。さういふことは私はよく知らない。

入つて行くあとについて直に拜觀に出かけた。

此寺は側面からみたよりも、正面からの方が私は氣に入つた。ここに掲げた寫眞は即ち夫れである。住民は跣足のままきて平氣で上つて行くが、あとは全部脱靴させられる。印度教の建物がすべてさうだ

見ようとも思はなかつた。佛陀伽耶へ行つたとき、實は野生司さんが繪をかいであらつしやるだらうと思つて、新しさうな建物を探したし、巡査にもきいたが判らなかつた。それがここであつたのだ。さうして此新しい建物が即ち初轉法輪寺(ムラガンダクチ・ビハラ) (Mulagandhakuti Vihara) なることが判つた。馭者は最初ここへ連れて行かうとした事も想像できた。マンガが英語の會話がもう少しできるのだと、もつと早く判つた筈である。かう判つた以上は、歸りの少し晚くなるくらゐは問題ではないから、是非一見したくなり、多くの人人が

が、住民はきれいきたないの區別がつかないので、これが洵にいやで拜觀を斷念したところがいくらもあつたが、ここはさういかないので孔があいて指の先と踵のはみ出してゐる靴下の汚れる位はがまんして入つてみた。多勢の見物人で中賑はつてゐた。

繪は洵に美事にできてゐた。孟買の當時の東綿支店長Sさんの室で、香雪さんの描かれた降魔の傑作を見たし、甲谷他の同畫伯個人展でも、降魔及び夫に類似の作を三點みたが、何れも正面向きの釋迦の顔が同型で、且つ何れも獨特の容貌であつたが、ここでも一代記のうち、やはり降魔の圖が一番よかつた。あの正面向きの顔は、誰が何といつても、私は大すぎである。正面の入口を入つた直ぐ右手の隅——そこだけが未完成であつたが——に大きな足場をつくり、紺足袋をはいた肥滿した香雪さんらしい畫家が、一生懸命壁面に向つて筆を動かしてゐて、そばに助手らしい若い人がゐた。其足場に而も二枚英語で「揮毫中は會話を御遠慮ください」といふ意味の札が下げてあつた。實は孟買では勿論、マドラスでも甲谷他でも、在留日本人にあへば必ず話がでたのだから、できたら御挨拶を申上げたかつたが、一面の識もなし、下げてあつた會話謝絶の札に敬意を表し、正直に會話を御遠慮申して引下つた。繪具が少し薄くはないかと思つた外、繪には充分満足して。寺を出るとき番人が帳面に名をかけといつたので、書いてきた。

昭和十二年の夏ある雑誌へ、その編輯員の希望により、ネバル紀行をかいたが、畫伯も嘗てネバル國

へ旅行されたことを承知してゐたし、且つ其國の首府についた時、役人からもその事をきかされたので、香雪さんのことを少しそのうちへ書いたし、また太田喜二郎さんが美校で同期であったことも歸朝後太田さんから伺ったから、それではお互に多少の因縁がなくもないし、鹿野苑で後ろ姿だけ見てきたのが如何にも残念であったから、太田さんを介して、抜刷一部を贈呈したところ、畫伯は既に私が昨年一月下旬サンチのD・B・へ泊ったことを知ってゐたから、いつか鹿野苑へも来るだらう、さうしたら面會の折もあらうと思つてゐたが、ある日參詣人の署名簿の中に私の名を見出し、もう来てしまつたのかと思つた、といふ手紙を頂いた。そんなことなら思ひ切つて足場の下から御挨拶を申上げればよかつたと、甚だ残念に思つたが、あとの祭りでも何ならなかつた。

D・B・のカンサマも其下の助手兼スウィーパー兼バニワラも會話が勿體ない程うまいので、マンガの拙いのが一段と明らかである。此バニワラが夕食後日本製渦巻型の蚊捕線香に點火してもつて来て、日記をつけてゐた私の足のところへおいた。ビジャマをきてゐたので、足の先が痒くて困つてゐたところだから、大に禮を述べたら、彼もうれしさうに笑つた。これは勿論彼の心中謝禮を豫期してゐたには

* スウィーパーは掃除人夫、バンガローにつきもの。Sweeper とかく。

* * バニワラは水汲人夫、洗面や行水の湯や水を運ぶ男。これも同じくバンガローには必ずある。従僕は常にかく呼ぶので覺えた言葉。ヒンドスターニであらう。ローマ字で Paniwalla とかく。

違ひないが、同時に蚊がゐるてさぞ困るだらうといふ同情心もあつたことは確かだ、まあ四分六か七分三分位の關係であらう。此D・B・のランプは未だ昔てみぬ位に明るかつたし、食事も大變にうまかつたし、何から何まで氣に入つた。殊に蚊捕線香のお蔭か何か知らぬが、蚊は大變に少なかつた。

五八、鹿野園 (Sarnath) の廢墟

鹿野園は今サルナートと呼び、ベナレス (Benares) の北方4哩にある。昔五百の仙人が王の采女をみて神通力を失ひ、墮落したので「仙人墮處」といつたさうだが、我國の久米仙の様に飛行中墮落して墜落したのかどうか、その邊のことは知らない。また跛羅哈摩達多王^{ブッハマダ}がこの樹林を麋鹿に施與したので「鹿施林」ともいつたさうである。さうしていふ迄もなく初轉法輪の地である。ところが我國にも、奈良市の東(今は多分市に編入されたらう)に接して同じく鹿野園といふところがあるが、土地の人は「ロクヤオ」又は「ロッキヤオ」と發音してゐる。今は何もないが、寺址であらうと推定してゐる人もある様である。(「地名辭書」に「昔梵福寺」といふものありきとある)。また同じく奈良市の東郊、添上郡田原村の大字に「誓多林」といふところがあり、これも「セタリ」・「セタリー」等と發音してゐるが、これはジェタバナ即ち祇園のことで、あれと同じ意味であらねばならぬと思ふが、何れも本場のと比べものにならないのは、何事によらずイミテーションは何といつてもイミテーションたることを如實に物語つてゐるのである。オリヂナリチーを出さなければいけないことが判るであらう。

【高僧法顯傳】迦尸國の部に

迦尸國波羅捺城 (Bārāṇas) に到ル。城ノ東北十里許、仙人鹿野苑精舍ヲ得タリ、此苑ニハ本辟支佛 (Pratyēka Buddha) アリテ住シ、常ニ野鹿アリテ栖宿セリ。……世尊成道シ已ツテ後人アリ、此處ニ於イテ精舍ヲ起セリ、佛ハ拘隣 (Ajñāta Kaundinya) 等ノ五人ヲ度セント欲ス。五人相謂フテ言ク、此瞿曇沙門 (Sramana Gautama) ハ六年苦行シ、日ニ一麻一米ヲ食シテ、尙ホ道ヲ得ズ、況ヤ人間ニ入りテ身・口・意ヲ恣ニシ、何ノ道カ之レ有ランヤ、今日來ラバ慎テ與ニ語ルコト勿レト。佛到ル、五人皆起テ禮ヲ作セシ處アリ。復北ニ行クコト六十步、佛此ニ於イテ東ニ向テ座シ、始メテ法輪ヲ轉ジテ拘隣等五人ヲ度セシ處アリ。其北二十步、佛彌勒ノ爲ニ記ヲ授ケシ處。其南五十步、翳羅鉢龍 (Elāpātra) 佛ニ向ヒ、我レ何時カ此龍身ヲ免ルルヲ得ント問ヒシ處アリ。此處皆塔ヲ起シ見在セリ。中ニ二僧伽藍アリ、悉ク僧ノ住セルアリ。

とあるが、これだけではその建物等のことに就ては、はっきりとは判らない。然るに【大唐西域記】には

婆羅痾 (Vorāṇā) 河ノ東北、行クコト十餘里、鹿野伽藍 (Lu-ye (Mṛgāḍava sangharama)) に至ル、區界ハ八ニ分レ、連垣周堵、層軒重閣アリ、麗規矩ヲ窮ム。僧徒一千五百人、並ニ小乘正量部ノ法ヲ學ベリ。大垣中ニ精舍アリ、高サ二百餘尺、上ニ黄金ヲ以テ隱起シテ、菴沒羅 (An-mo-lo (Amra)) 果ヲ作レリ。石ヲ基階ト爲シ、輒ヲ層龕ト作シ、翕シテ四周ヲ巾ラシ、節級百數ナリ。皆隱起

ノ黄金佛像アリ。精舍ノ中ニハ、鍮石 (teou-shih. 土產の銅) ノ佛像アリ。量ハ如來身ニ等シク、轉法輪ノ勢ヲ作レリ。

精舍西南、石窣堵波アリ、無憂王ノ建ナリ。基傾陷スト雖モ、尙ホ百尺ニ餘レリ。前ニ石柱ヲ建ツ、高サ七十餘尺、石ハ玉潤ヲ含ミ、鑿照映徹セリ。瞻懃ニ祈請セバ、影衆像ヲ見セシム。善惡之相、時ニ見ル者アリ。是如來正覺ヲ成シ已テ、初テ法輪ヲ轉ゼシ處ナリ。其側遠カラズ窣堵波アリ。是阿若憍陳如 (O-jo-ki-o-chin-ju (Ajñāta Kaundinya)) 等、菩薩ノ苦行ヲ捨ルヲ見、遂ニ侍衛セズ。來至シテ此ニ於イテ自ら定ヲ習セシトコロナリ。其傍ノ窣堵波ハ、是五百ノ獨覺、同ジク涅槃ニ入りシ處ナリ。又三窣堵波アリ、過去三佛ノ坐、及ビ經行ノ遺迹之所ナリ。

三佛經行ノ側、窣堵波アリ、是梅咀麗耶 唐ニ慈ト言フ、則チ姓也、舊ニ彌勒ト曰ハ訛略也 菩薩、成佛ノ記ヲ受ケシ處ナリ。……とある。

以上二大旅行家の記す様に、法顯が第五世紀の初頭に行った時には、四塔婆と二僧坊とを記し、玄奘が第七世紀前半の終りに行った時は最盛時であつたらしく、轉法輪像を安置した二百尺の精舍、無憂王の石塔婆及び石柱、高三百尺の大塔婆、千五百人の僧侶のゐた事をあげてゐる。かく隆盛を極めた鹿野苑も、ベナレスが後一一九四年 (建久五年) にクツブ・ウツ・チン (Kutub-ud-din) の爲めに攻略された時に廢墟となつたのであらうと考へられてゐる。とにかく印度に於いて佛教が滅亡した以後は當地も亦荒廢に歸したことはいふ迄もあるまい。

鹿野園への入口より少し手前、道路の左側に、小山の上に八角塔の建つてゐるのが見える。「フマユン」の塔といふ。一五八八年(天正十六年)にアクバ大王 (Akbar the Gr.) が父フマユン (Humayun) のためにたてたので、それは新しいサラセン式のものであるが、その下の小山は、實は山ではなく【法顯傳】にある通り拘隣等五人が佛を迎へたところに建てた謂はゆる「迎佛塔」で、それを基礎にして八角塔を建てたのであつた。この小丘の古名はチョウカンヂ (Chaukhandi) といつたが、これは「四角な丘」といふ意味ださうだ。方形の壇として残つてゐたからであらう。一三五はチョウカンヂの上にアクバアの建てた八角塔の頂上からダメーク塔を中心にとつたもので、ダメーク塔が何といつても此廢墟の盟主であることが、一目瞭然であらう。

五九、塔 婆

1) ダメーク (Dhanekh) 塔

ダメークといふ意味は明らかでないが、ダルマ イークシャ (Dharma-iksha) の意であらう、さうしてここは、彌勒菩薩受成佛記處だといふ、といふことが【印度佛跡實寫解説】にかいてある。本塔【一三六】は一八三五—三六年(天保六—七年)にカニンガム氏が調査し、舍利を收藏してない塔婆又は制多たることが判つた。續て一九〇四—〇五年(明治三十—三十二年)にエルテル氏 (Mr. Oertel) が研究をしたといふ。

塔は基礎の直径93呎、高さ43呎迄は石の場合に鐵金物を用ひて補強してある。其上は高さ110呎迄煉瓦を積んであるが、平地から測ると128呎に達してゐるさうである。其部は各21呎6吋の幅を有し、15呎の間隔をもつた八つの突出部があり、各部に小龕がつくられてゐるのは、元佛像を安置してあつた事は疑ふの餘地がない。さうして其左右及び下部は唐草模様や幾何模様を刻んである。模様は完成してゐないため、全體の裝飾が如何様に計劃されてゐたかは想像はできかねる。

上部は下部より後に補加されたものの如く、さうして完成はしなかつたものらしいが、若し出來上つたとすれば、やはり上は伏鉢型となり、平頭と相輪とを有したものと考へてよささうである。カニンガムが此塔を發掘調査したとき、頂上から10 $\frac{1}{2}$ 呎のところから、銘文を刻した石を發見したさうで、其文字が第七世紀頃のものとして推定されるところから、塔は第六世紀頃建設されたものであらうといふことになつたが、第十一世紀だといふ反對説もある。とにかく最下部の煉瓦を積んだ部分が當初のもので、後に擴張されて現在の形になつたと考へられるのである。

□) ダルマラージカ塔

從來ジャガット・シン塔 (Jagat Singh stupa) といふ名であつたが、今度行つたらダルマラージカといふ名になつてゐた。何でも煉瓦採取のために、ジャガット・シンといふ人が大分破壊をしたので、その名の呼ばれる様になつたさうだが、夫は不都合とあつて多分變へたのであらう。一七九四年(寛政六年)

初めて此塔が発見されて以来、寶物採集者がここへ集ってきたといふ事である。此塔の直径(最小)44呎といふ。今回はこの塔の周囲が発掘され、壁の一部や小塔婆の基壇等が多く現はれてゐた。

(八) 「本殿」側面の小塔婆 附奉獻小塔婆

謂はゆる「本殿」(Main shrine)は廢墟の約中央にあつて東面し、正面に長い參道があり、其參道の北側には多くの奉獻小塔婆の基礎がある(一三七・一三八)。それから漸く「本殿」に近づくと、以前にはまるでなかつた小塔婆が數多く發掘されてゐた(一三九—一四二)。初めは一つ一つを丹念にみてゐたが、終には餘りに數が多いのでいやになり、叮嚀にみる事を遠慮して、時には小高いところから望見しておく様になつてしまつた位、多數にでてゐた。「本殿」の大き95呎×90呎、現在の高さ18呎。石材及び煉瓦を以て築造されたもので、其状態からみると、随分大きな建物であつたと想像されるのである。

其南側面に小塔が発見されたが、此小塔は一石をくりぬきて作られた玉垣が附屬してゐる(一四三)。洵に驚くべく精巧な仕事があるので、全部石が水磨になつてゐる。後第三又は第四世紀よりは溯り能はぬ二銘文が其石面にあるが、施工の状態から見て石欄はやはり阿育王時代(前二七二年—前二三二年)のものと考えられてゐる。

六〇、ベナレスからバトナへ

三月十日好晴。早起。東向きだから朝から日が一ぱいにあたり、心地のよき事此上なし。同じく窓なしのD・B・でも、ベシヤワーのと異なり、室は大變に明るい。

鐵道橋と平行してもう一つ橋がある。此橋の上に立てば恒河に沿へるガート(Ghat)は一目に見える筈である。だからさうしようと思つたところ、それよりはガートの一なる Desasamedh ghat へ行か、そこから小船を雇つて河を上下した方がいときいた。これはD・B・のカンサマもバニワラも同じ意見であつた。このガートは先年觀光した時も、小船へのつたところなので、ことによつたら觀光客のため、特にここだけ開放してあるのかも知れない。とにかくここへ行くのが上分別と思つたので、出かけて行つてマンガに船の談判をさせた。とにかく一番上流の Assi ghat と最下流の Palivad ghat との間を全部みるのだから、最初上流へ行つて河を下り、更に元のところへ戻るか、或は其反對に廻るか、どちらでもいいから、必ず全部みるといふことを條件としたところ、船頭はRs. 4 As. 8 だといつた。こちらもRs. 5 だすつもりなら、先方もそれがけ貰ふ氣で談判成立し、乗船したところ、少し下つて直に戻らうとしたので、直に抗議を申込み、最下流のところ迄行かせ、今度は上流の果のガートをみて戻つたのであつた。何分のところの中頃なので、簡單には行かないのである。偶ま手帳と鉛筆とを宿舍へ忘れ

* Ghat, Ghaut [Hind.] A Stairway, often monumentally decorated, or a path on a river-bank, leading to a temple or pagoda; a landing place or wharf.

Burning ghat, [Hind.] A wide step or space on a ghat on which the Hindus burn their dead.

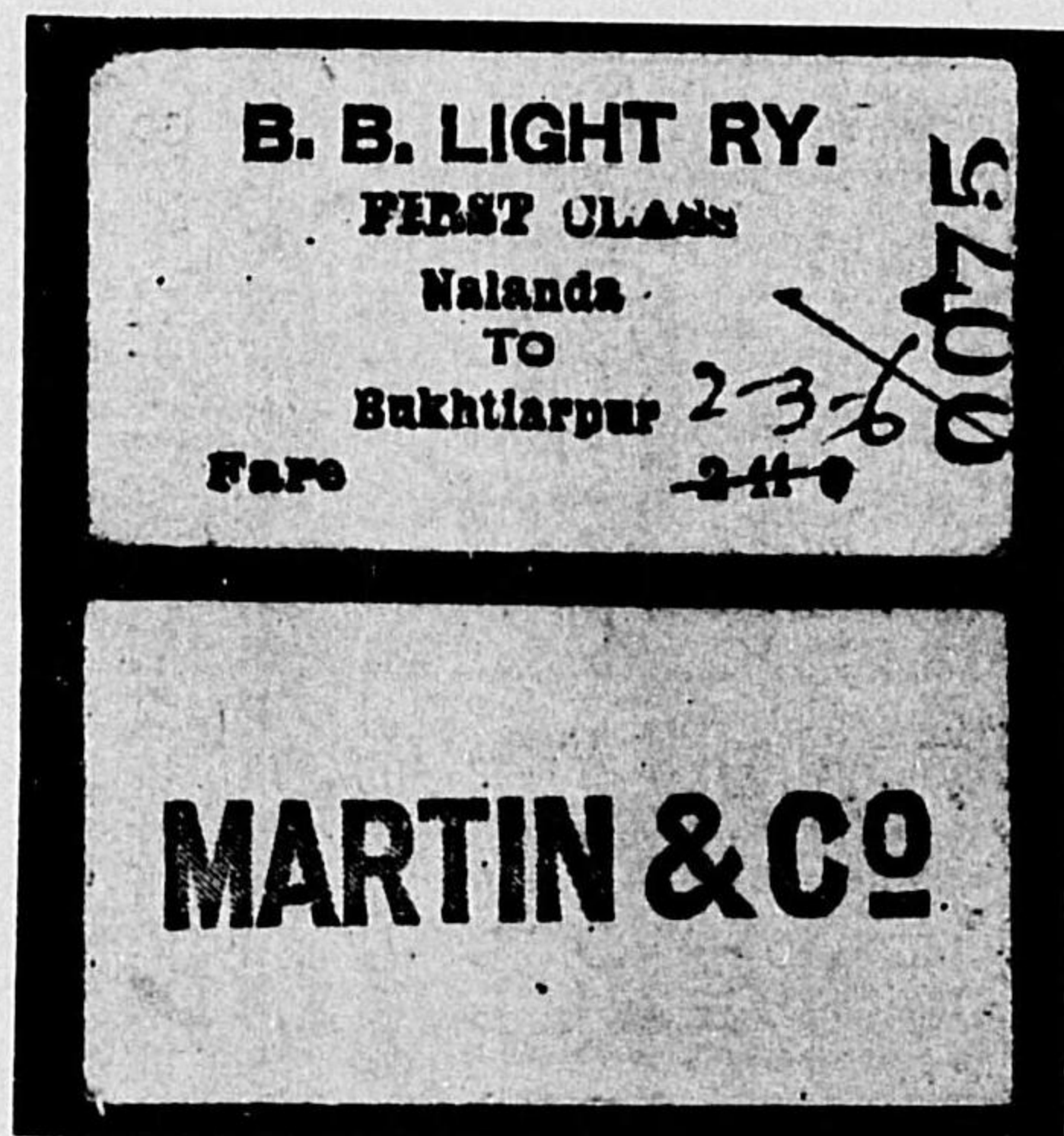
たので、ガートの名と建物の形式とを心覚えに書きつけることができなかったのは、洵に遺憾であった。千慮の一失ではなくで、これはたしかにほんやりした罰であった。折あしくいつもマンガは鉛筆をもつてゐるのに、此時に限って忘れたといった。マスターもサーバントも共に間拔、まるで狂言の大名と太郎冠者そっくりだと苦笑せざるを得なかった。

お上りさんのする通り、歸にりは有名な Golden Temple をみた。参詣したのでなくて見物したのである。歸宿入浴。此夜も次の夜も、ことによつたらラクサウル (Raxaul) (翌日即ち十二日の夜は、如何に泊らねばならぬ) の夜も入れないかも知れぬから、それで少し早出し、あとから復一汗かかねばなるまいが、行水をしておいた。一六・三〇に驛へ行った。汽車は此朝六・三〇にペンシャワーをでたカルカッタ・メールで、一七・二八發のもので、バトナ (Bh.) には二一・二七着の豫定だから、食事を命じたところ、食べるものは可なりあつたが、其高價なること古往今來東西を通じて (?) 未だなきところ、Rs. 3 As. 8 (邦貨約四圓) を請求した。ヨーロッパの國際列車か何かなら仕方がないとあきらめるが、印度の田舎の食堂車では怪しからん。それでも無事豫定通りバトナ驛についた。先年宿泊したバンキポーアの D・B・へ行けば安眠できることは確實だが、翌朝が早いから待合室へ泊る事にした。

六一、ハトナからナランダ經由モカメー・ガート (Mokameh Chat) へ

三月十一日も前日同様好晴、五・〇〇起床、驛の食堂から紅茶と焼麩と半熟の玉子を取寄せて朝食

を終り、六・二〇バトナ驛發七・一五ブクチャールプール (Bukhtiarpur Jn.) 驛着、乗換。七・四〇同驛發九・四九那爛陀驛に着し、徒歩那爛陀大學兼僧伽藍の址を訪ふたのであつた。前回はビハール・カッチェリ驛前の I・B・へ泊り、可なり憂き目をみたので、今回は其轍をふまぬ様、頭を少しばかり働かして、日歸りとしたのである。要は三十年計畫で發掘をしてゐるときいたので、其半分の十五年たつたから、どの位發掘ができたか見たかつたからである。折折印度考古局の年報でみてゐたのでは、どうも満足ができなかったからである。



ブクチャールプール・ビハール輕便鐵道
(BUKHTIARPUR BEHAR LIGHT RY.)

乗車券。上。表。下。裏。

此はナランダから歸りののであるが、勿論往復共運賃に變りはない。一等賃金は2/11/0であつたが、いくらか値下げて2/3/6にしてある。一事といつても、丸珍商會の經營にかかる事で、資金も充分でないと見え、設備は甚だもってよくない。餘り見つけないせいか、裏のマルチン・アンド・コンパニーの文字が切符とまるで調和してゐない。

前回と今回とは、道がまるで異なつてゐたので、最初は見當がつかなくかつたが、終りには漸く思ひだした。つまり前に行つた方と直角をなした方から行つたのである。最南端の其當時第一塔と呼ばれてゐた小山の様な丘は、全部掘り出されてゐて、立派な塔等が現はれてゐた (二九・一三〇・一三一)。

理由は不明だが、寫眞禁止の札がでてゐたので、事務所へ行って話をしたところ、どうしてもいけな
いさうで、そこにゐた所員は許可の権能は自分にはない。デリーにゐる考古局長 (Director General)
のみが其權がある。先年東京帝大の何とかいふ教授が来たときも、同様に困つてデリーへ電報を打ち、
許可の返事を待つてから目的を達して歸つたから、是非とりたければ、さうするより仕方がないと、當
方の申出を一蹴してしまつた。こちらにしてみれば、遙遙とここまで出てきて、少くとも七八十枚のお
みやげ寫眞をとるつもりでゐたのが、一蹴されたではどうも納まらない。そこで境外へたち、その内
外の境のところから、とつたのが 130・131 の二圖で、他は止むを得ずあきらめてしまつた。電報
を打つにしても近所に電信局はないし、日もないし、何としてもしかたがなかつた。あとからここへ行
つて寫眞をとらうとする諸君は、印度へ上陸するなり考古局長へ電報を打つて許可をとつておくか、或
は現場で番人に鼻藥をやつたら、或は寫す間横を向いてゐるかも知れない。

*

*

*

*

*

遺跡を一巡して辨當を開いた。遺跡の一部に番人の貸してくれた吳産を敷いて、其上に休み、パトナ
驛で求めた麵麩と腸詰の罐詰と、魔法瓶に入れた紅茶とですました。從僕が氣がきかない時は、何から
何まで自分で氣を配らないと、時には干乾になる虞が多分にあるのである。食後陳列所をみて驛に引あ
げた。驛で發車を待つてゐる間に象にのつた客が來たので、其人々が象から下りるところを初めてみ
た。象使ひが命令をすると、象は直に後脚を折つて半分座る、さうすると客は後半身の斜面に沿ひて下

り下るので、あれは馴れないとできない思はされた。それから象の鼻と尾とは、實に自由自在に動く
から、少し眼の悪いものが遠方からみたら、どちらか頭だかしりつぽだか判らぬ位に同じ様に、絶えず
8字型の曲線を描く如く動いてゐるのに少なからず感心をした。

その象使ひが象の首へのつて腹這ひとなり、兩手を顎のところへ持つてきて、兩足をあげてゐた
が、やがて平たくなつて暫くゐた。私はこれを見て象にのる事になれたものは、時にかかる姿勢をする
ものだといふことを知つたのである。印度のお伽話 "Toomai of the Elephants" のうちの挿繪は、あ
れは事實あり得るので、決して作者の想像ではないことがよく判つた。全くあの繪の通りの形で、ただ
子供か大人かの差だから、何でもみなければいけないものだといふ事を、今更の様に感じたのである。

*

*

*

*

*

ナランダ驛長はヒンヅツで、頭のまん中の髪を五六本(實は二三
十本だが)五寸位の長さにしてゐた。これこそ
ほんとうのビッグ・テイルである。清朝時代の支那人を、ヨーロッパ人が馬鹿にしてビッグ・テイルと
いつたが、ヒンヅツの方が遙か高級のビッグ・テイルである。さうして熬豆か何かを嚙つてゐた。驛長
——としてもスウキーパーと二人きりだが——兼出札係兼驛手の室に NALANDA とほつた鐵印があつた
ので、はがきに押して記念にだすことにしたり、大分いたづらをしたので、發車の時豆かちりの好漢に
汽車の内から挨拶をして出發、ブックチャールブルに着いて本線にのりかへ、一九・三三分發、モカメー
・ガート驛に二〇・五六着、待合室に入り寢臺をつくつた。ここに宿泊した理由は、ここから連絡船が

でて對岸のセマリア・ガート (Semaria Ghat) に渡り、ナルカチアガンジ (Narkatiaganj) 行の汽車へのり、途中サガウリ (Sagauli) で乗換れば、夕刻ラクサウルにつき得るからで、さうしてモカメー・ガートをでる船は朝六・三〇とあつたからである。この邊のことは、いづれ後日後の旅行者の参考のため、記す折もある筈だから、今回はやめておく。

六二、^{*}那爛陀僧伽藍 (Nalanda sangharāma)

【大唐西域記】卷第九に

城ノ南門ノ外、道ノ左ニ空堵波アリ、如來此ニ於イテ法ヲ説キ、及ビ羅怛羅 (Lo-hu-lo, Rahula) ヲ度セリ、此ヨリ北行クコト三十餘里、那爛陀唐ニ施無
駄トイフ僧伽藍ニ至ル。之ヲ耆舊ニ聞クニ曰ク、此伽藍ノ南、菴沒羅林中ニ池アリ、其龍ヲ那爛陀ト名ク、傍ニ伽藍ヲ建ツ、因テ取テ稱ト爲スト。其實議ニ從ヘバ、是如來在昔、菩薩行ヲ修セシトキ、大國王ト爲テ、都ヲ此地ニ建テ、衆生ヲ悲愍シ、好ンデ周給ヲ樂メリ、時ニ其德ヲ美メテ、施無駄ト號セリ、是ニ由リテ伽藍、因テ以テ稱ト爲スト。其地本菴沒羅園ナリシヲ、五百ノ商人、十億ノ金錢ヲ以テ、買テ以テ佛ニ施セリ。佛ハ此處ニ於イテ、三月説法、諸ノ商人等、亦聖果ヲ證セリ。佛涅槃ノ後未ダ久シカラズ、此國ノ先王ニ鑠伽羅阿逸多 (Shi-

* The word Nalanda would thus appear to 'be derived from *na+alam+da*, "not giving enough", or "not having enough to give." (Beal: Buddhist Records of the Western World, Book II, p. 168, fr. nt.)

kialo-o-tie-to (Sakrāditya)) アリ、唐ニ帝日
ト言フ。一乗ヲ敬重シ、三寶ヲ遵崇シ、式テ福地ヲ占シテ、此伽藍ヲ建テタリ。

といった工合に非常に精しく記してゐるが、この寺の事に就てはいろいろの書物を引いて、【印度旅行記】に記しておいたから(第二〇七頁より
第三三九頁まで)、今回は略しておく。

併しながら以前に第一・第二・第三塔と稱してゐた土饅頭は、實は發掘の結果ブダ・ガヤの大塔式の大堂であることが判つたらしく、その様な謂はゆるテムブルが南から北へ一直線上に三つ並んでゐるのは、何といつても壯觀であり、その東方には大僧坊が軒を接して建てられてゐたらしく、それ等が何れも發掘を了して、室の配置等も整然として、修理保存が完成されてゐるから、其昔の那爛陀大學の講義室の有様、即ち時の教授が學生に講義をした時の様子を、ある程度迄眼前に髣髴せしめ得るのである。この様子は、南塔の上から一目に見える。

既に記した様に、やかましくて何といつても寫眞をとらせないのでから、私は私の立場から、及ばずながら多少なりとも考へてとつた寫眞はない。だから止むを得ずやめておくが、これとよく似てゐるのは、嘗て【祇園精舍址と舍衛城址】の附圖として、祇園精舍址發掘僧坊の寫眞を掲げ、雜誌【四天王寺】に記しておいたから、それを以て間に合せることもできなくもないと思ふ。

(昭和十二年三月十九日稿了)

印度佛塔巡禮記

(第八回)



マムラブラムのナギニ

(物指は曲尺の一尺・昭和十年十二月二十四日)

六三、甲谷他とマドラス

(イ) 大正の甲谷他と昭和の甲谷他

大正十二年一月九日午後ホウラー驛着、其夜から十二日迄スペインス・ホテルに滞在、殆んど毎日博物館へ行って、出来るだけ寫眞をとった。重にバルハット (Bharhut) 塔婆玉垣文様をねらひ、其他彫刻類も可なり蒐集ができた。市中の観光は僅にエデン園と耆伊那堂位であった。そうして十四日の夕刻ホウラー驛から乗車、東海岸に沿ひて南下し、一日半がかりで十六日正午近くマドラス・セントラル驛に着いた。ところが今回は昭和十一年三月一日朝ホウラー驛着、二日夜ブーリに向ひ、三日朝着、其日と四日とを附近の見學に費し、宿屋一泊汽車中二泊といふ工合にして小旅行をなし、あとは市内の観光と博物館の一巡とに止め、七日夕ガヤに向つて出發したことは前に記した通りである。

多くの人といふよりは、寧ろ殆んど總ての人が行くダージリン (Darjeeling) は二度共行かなかつた。私は如何なる旅行の際でも遊覽だけの遊覽は決してしないことにしてゐるので、其通り實行した迄のことである。ダージリンへ行けば、夫には必ず何か得るところがあると同時に、金と暇とをかけた——といつてもせいせい二三日だが——割合、思ふ様に行かぬことも知つてゐる。繪でみると、制服の様な着物をきたブータン人にかつがしたダンヂイへのつて、キンチンチャングを見物に行くのは、金と暇と

に恵まれた人か或は自分の負擔でなければよからうが、天二物を與えざる原則により、暇だけを頂いてゐるものには、原動力不足の結果うまく行かないから、一も二もなくやめにしたのである。誰か金をだしてくれたら、今直ぐでも喜んで出かけるかも知れない。

(ロ) 大正のマドラスと昭和のマドラス

前回マドラスへ着した時は、荷物を一時預けとし、直に博物館へ行き、アマラバチ塔婆遺物をみて、いい氣持になつた以外は、怒り通して其日のタエグモア驛から乗車、タンジョウワ (Tanjore) に向ひ、マヅラ (Madura)・チュウチコリン (忠竹林 (Tuticolin)) 經由錫蘭嶋へ旅行して、歸りは一月三十一日の朝歸着し、再び博物館へ行き塔婆殘闕の寫眞をできるだけとり、同日夕刻出發孟買に向つた。だから博物館以外には何も見ず、又泊りもせず、ほんの通り抜けであつた。マドラスといふところは、博物館のアマラバチ・ガレリーをみる以外、私には用事のないところと決めてしまつた。停車場のクーリーも寢臺車の豫約係も驛前の人力車夫も、どれもこれも金をほしがつてうるさい事お話にならず、中でも博物館の看守ときは、事情が許すならば棍棒か何かで、起立のできない程に背骨でもなぐりつけなければ、到底矯正のできぬ位にうるさくて且ついぢが汚いのである。だから徹頭徹尾怒り通したのであつた。

今回はビジャプールからガダグ (Gadag Jn.)・グンタカル (Guntakal Jn.) 經由、昭和十一年十二月

二十二日セントラル驛着、三井物産支店社宅に居候として住込み、印度旅行で何をおいても是非見ようと思つた所の一なるママラプラム (Mamallapuram) へ往復し、それから既に第一回に記した様に、ダヌシニコチ經由錫蘭嶋を一巡して翌十二年一月九日歸着、十日から十一日迄^{*}コンジールベラム (Conjeeveram) 滞在、十二日四度マドラスへ、十三日朝發、十四日午前孟買へ歸着したことは、これも亦既に早く記したところである。

六四、甲谷他からブーリへ

三月一日は日曜であつたから、YさんもMさんも休みである。午前はつかれたからとて休憩、午後は世界一の大榕樹があるといふ植物園をみに行つた。それからあちこちを走り廻り夕刻歸着。随分あつかつた。何にしろめつきり暑くなつた様である。

二日朝總領事館へ行つたが、Yさんが同行してくださった。ルンミンデイとゴラクプールのI・H・とバルランプールのG・H・と、それから最も大切なのは、ネバル入國につき種種便宜を得る様當局とに、何れも手紙をだして頂く事になつたので、大に安心することになつた。

カルカタ・タイムといふのは、孟買の標準時より24分早い。つまり甲谷他・孟買間、地球の回轉は24分ですむ。然るにB・N・R・の急行でざつと32時間かかる事は既に書いたが、これを分に換算する

* Conjeeveram=Kanchipuram (Pallava Capital) 建志補羅=建志城

と2分となる。尤も汽車は兩地點の間に一直線に線路が敷いてはないから、まあさう理屈はやめにする
と、これを一直線と考へて、約80倍である。いくら汽車が早いといつても、これではいやになる。といつて他に乗物はないから仕方がない。飛行機が行くかどうか知らぬが、若し飛ぶとすると何時間かかるか、まるで調べたことがないから知らぬ。とにかくそのカルカタ・タイムといふのに時計を合せておきながら、すっかり忘れて了つて、汽車は午後八・〇八發だから、七・四〇にあはてて出かけた。時刻表には總てスタンダード・タイム(孟買時間)でかいてあるのだから、小一時間前に飛び出したことになつたのである。

ホウラー驛の混雑は實に大變であつた。ただ人が多いのみではなく、隨所床の上——少しでも空地があればそこ——へ座り込み、人の歩くところが有らうが無からうが、そんな事に一切頓着なく、それで大きな聲で喋り通しだから、喧囂囂其やかましい事は到底筆紙に盡し難いのである。其上に大概同じ様な時刻に、何本も各方面への急行列車がでるのだから、一層混雑である。併し私の乗つたブーリ・エクスプレスに於いては、私の室は例により唯一人であつた。ネバル行がうまくいって、五打買つておいたフィルムを皆寫して、皆うまくいくと、8枚つぎだから總計480枚となる。ネバルの寫眞480枚は、つぶしにしても相當なものだ、といふ様な、丁度インツプ物語にある乳搾りの娘の様なことを考へながら靜かにねた。

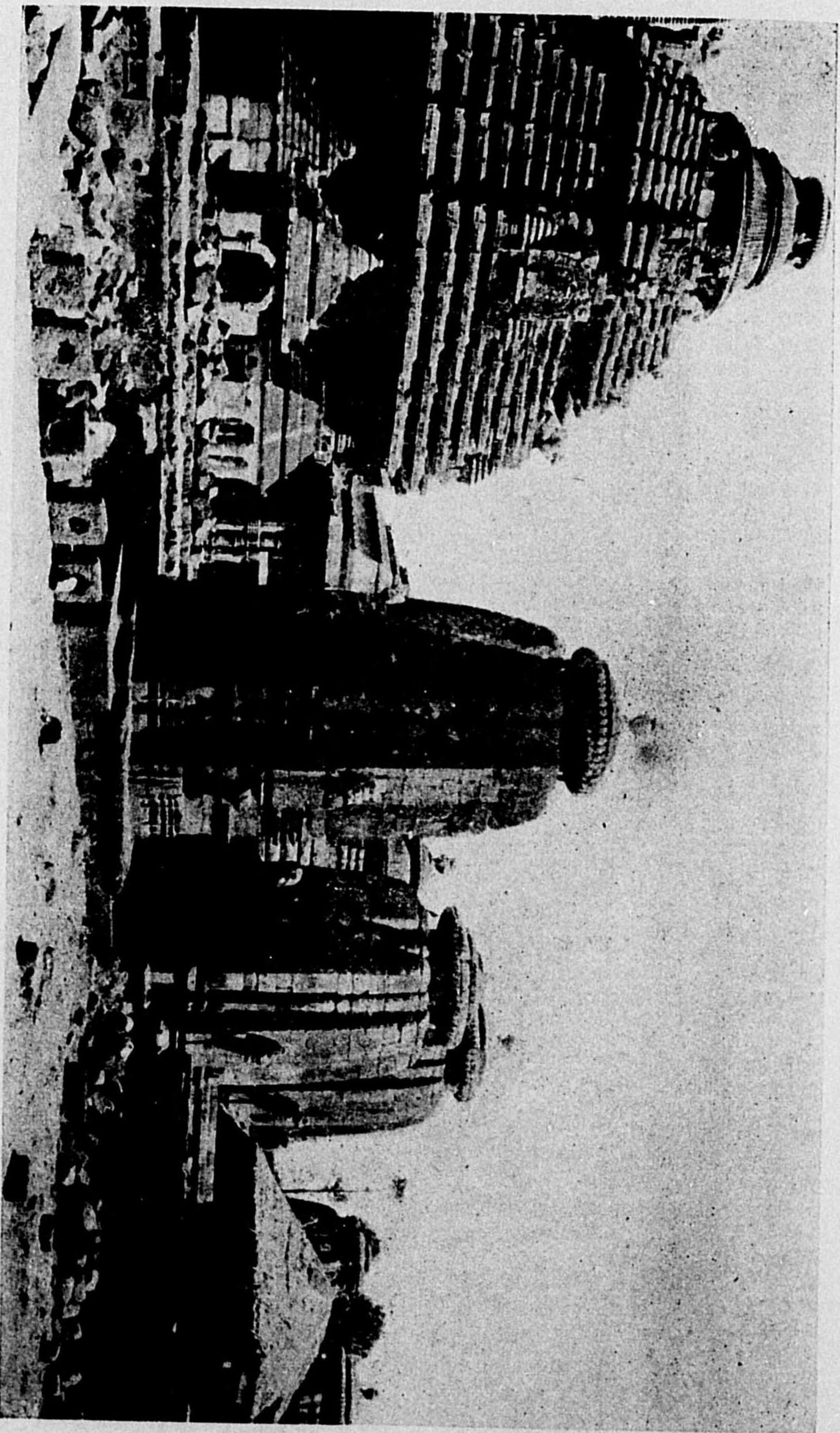
六五、プーリ及び近郊の見學

三月三日早朝プーリ着。驛へは印度人が二名来てゐた。一人は土地の紳士で一人は自動車屋の主人(といふ事がある)。何れも前日Yさんから電報で私が行くことを通知してくだされた結果である。そこで直(とから判った)に其車へのりB・N・R・Hへ行つた。海に景色のいい所で、海に面してゐるから正にシーサイド・ホテル。番頭は明夜は満員になるが、今夜だけならお泊りくださいといった。而も唯一室あいてゐるだけで、それも出迎へてくれた印度紳士が豫約しておいて下されたので、例ひ一夜でもゆつくり手足を伸ばして安眠する事ができたのである。Yさんの話では毎年三月五日と六日とは、何かで休みが續くさうで、従つて海水浴に来る客でホテルは満員になるのださうな。だから四日の夜等は屹度一月も前から豫約してあつたのだらう。僅に一日早かっただけでよかつた。

私は運轉手に二日間にプバナスワールとカンダギリとウダギリとブラック・バコダが見度いのだと聞いた。さうしてどの様な順序にするのが一番いいか訊いてみたら、彼は初めの三つとジャッガーナト・テムブルを先にすまし、翌日黒塔往復にしてはどうかといったので、さうきめた。

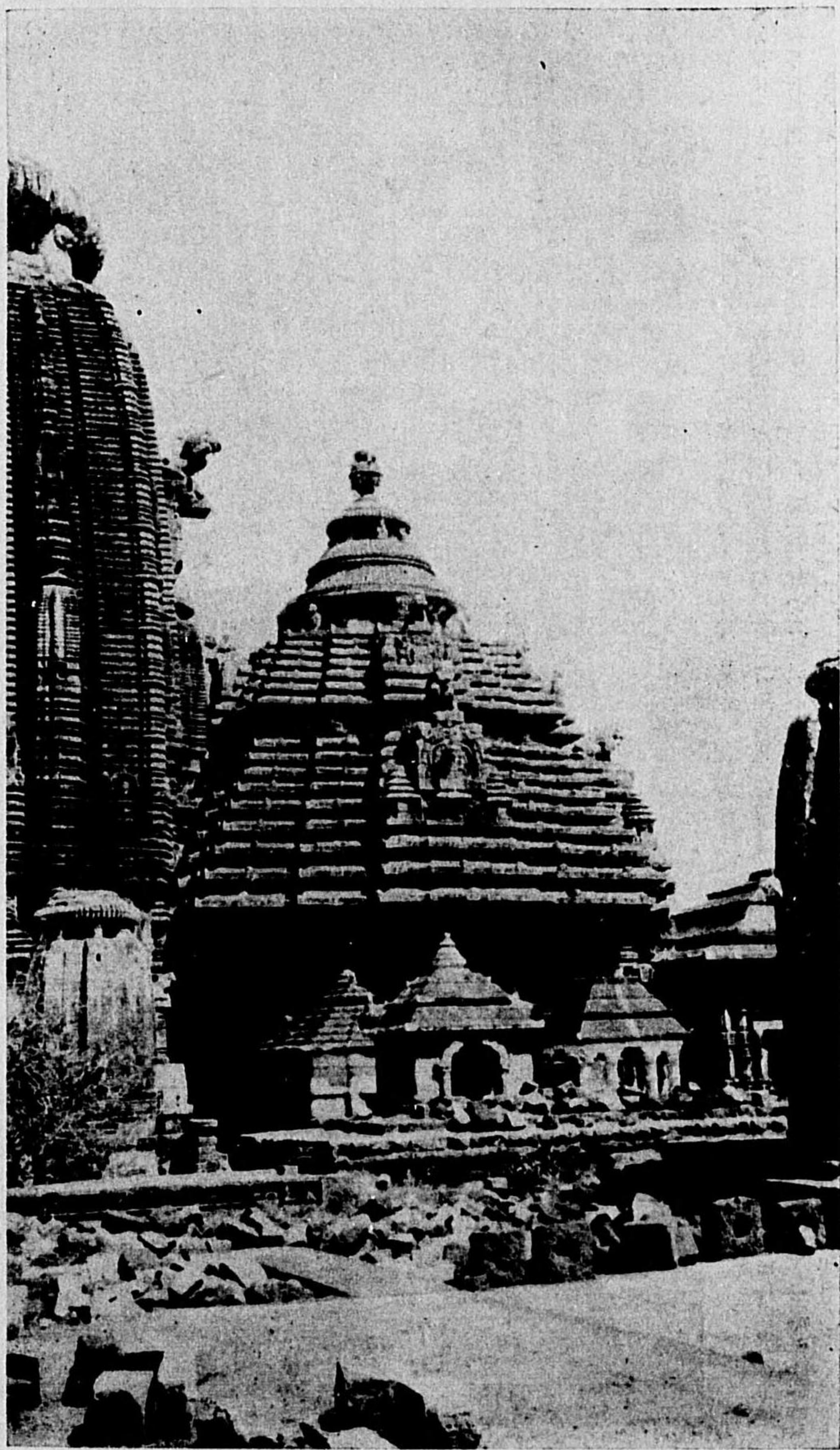
宿からプーリの町は近い。こつちから行て突き當りに有名なジャッガーナト・テムブル(Jagannath, Juggumath temple)がある。併し例の如く外からみるだけだが、正門前向て左角にある書店の様な家の

* Skt = "Lord of the Universe"



プバナスワール大堂 共一 (昭和十一年三月三日)

プバナスワールは甲谷他を距る271哩。ここにも P.W.D. のパンガローがあり、カンダギリにも R.H. があるが、共に其筋の承認を得ないと宿泊不能の由案内記に書いてある。併し驛からは僅に4哩とあるから、ゆつくり泊り込むつもりなら此驛へ下車した方が都合がよからう。併し私の様に夜汽車 (Puri Express) を利用したのでは、時間表が替らぬ限り朝の4.35 (次頁へ)



プバネスワール大 其二

(前頁より) につくのだから、早過ぎて相當にやっかいである。夫れよりは私のした様にプーリ迄行って、泊る所をきめておいて、朝食をすましてゆっくりして車で出かけてプーリへ歸つた方が萬事都合がいいと思ふ。だから後の見學者には、これをおすすめする。前置が長くなり過ぎたが、元はこの土地に嘘かほんたうか七〇〇〇の祠が神聖池を圍んで建つてゐるが、現在とはとも(次頁へ)

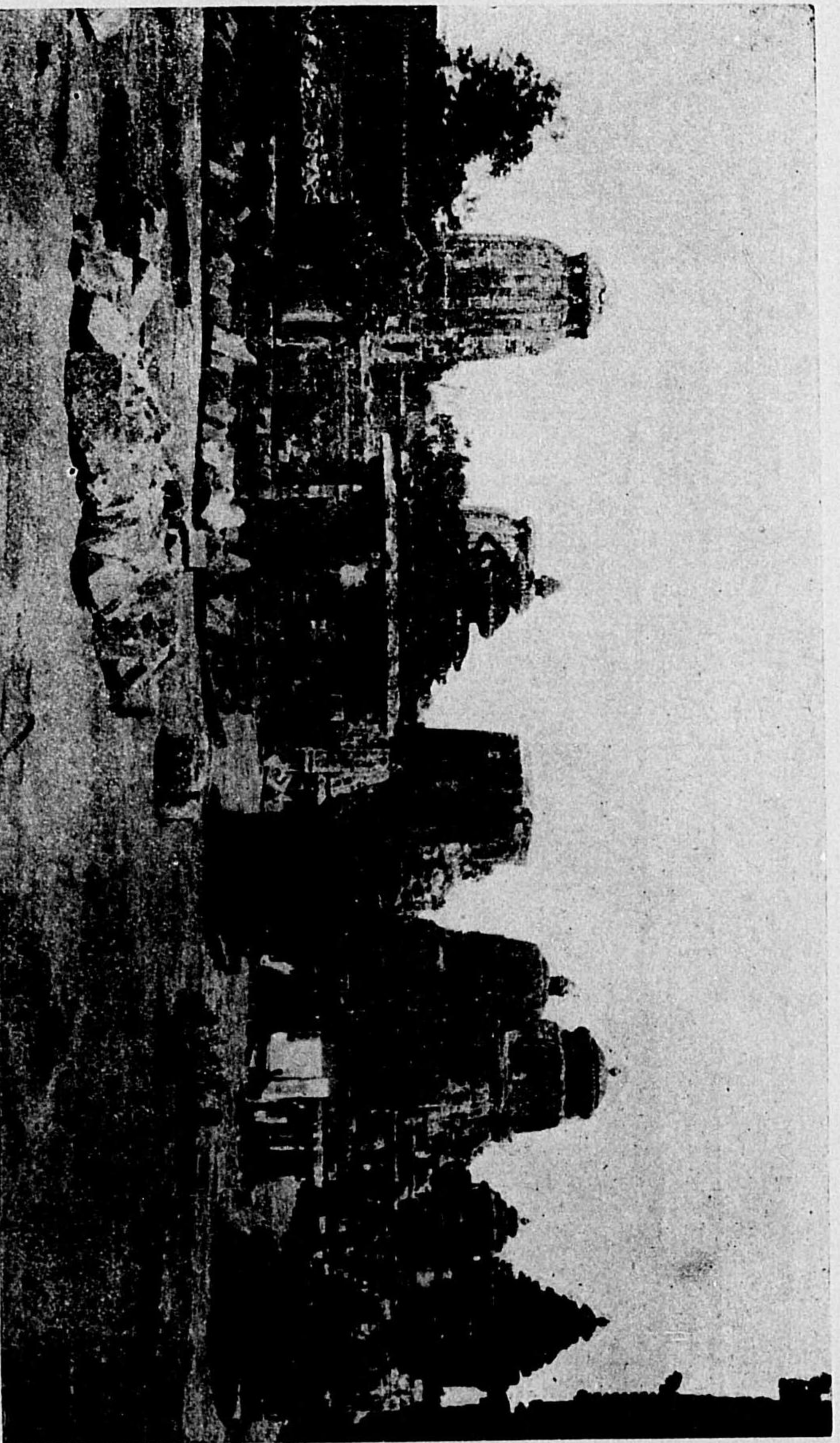
(昭和十一年三月三日)



プバネスワール大 其三

(前頁より) かくも五〇〇、その中には古いので第六、比較的新しいので第十二世紀、甚だしきは漆喰塗の似せものまで含んでゐるとある。元三千坊あったが今僅に數坊を存するのみといった調子らしいが、眞偽の程は知らない。純印度教の建築として最善なる例との評がある。印度教徒以外は一步も境内に入れないが、北側の廢祠の壁上からと、南側の外壁にある小門から半身を出し(次頁へ)

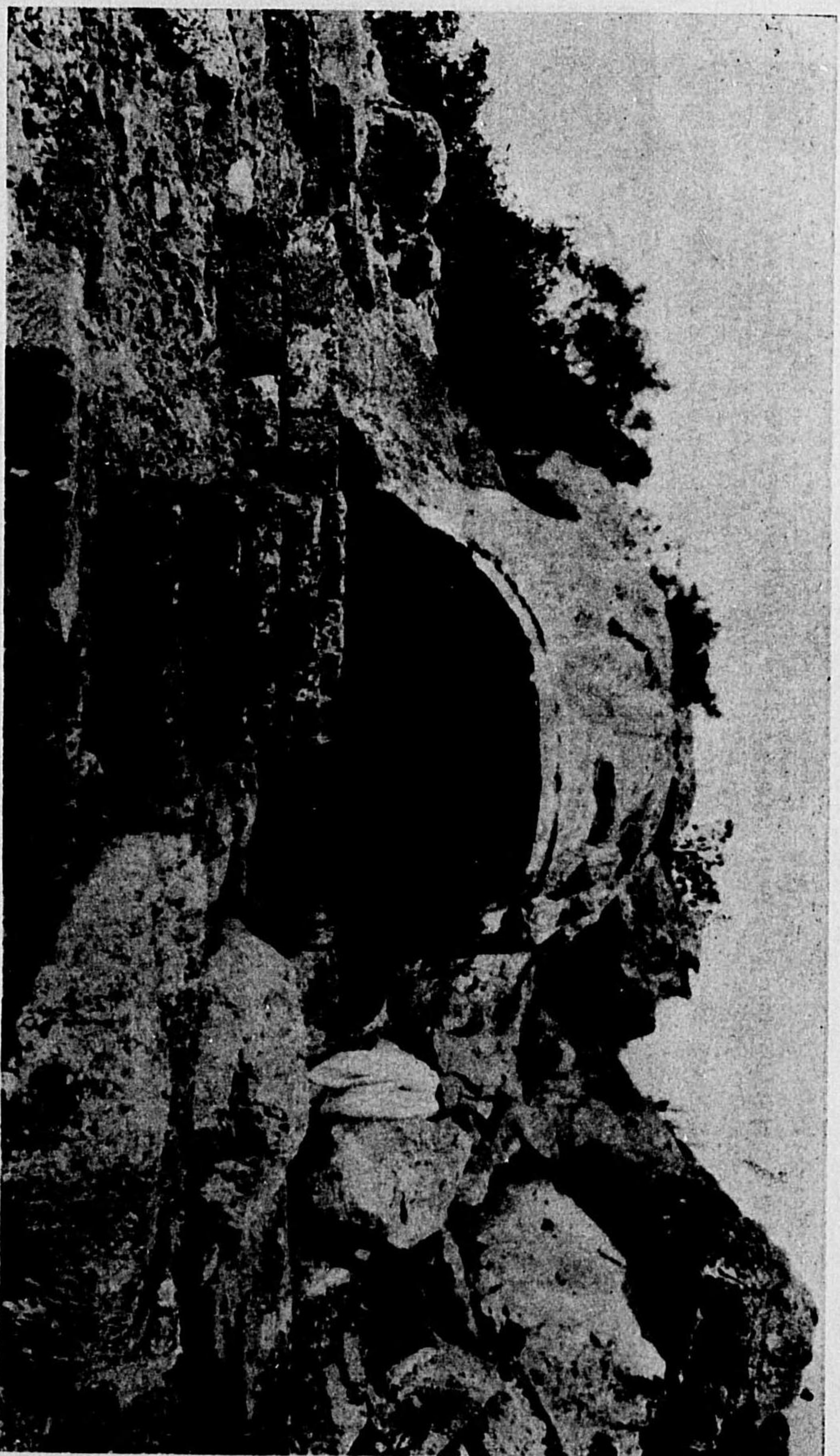
(昭和十一年三月三日)



（前頁より）
 内部がのぞける。大堂の長さ210呎、幅60—75呎、大塔高180呎といふ。大堂は高いビマナ (Vimana (Baraleval)) と其前の玄關 (Jaganohan) とより成り、其長さ160呎。この部分は其二・其三に最もよく見えてゐる。其一が最南端で、其二・其三がつぎ、其四は最北端である。

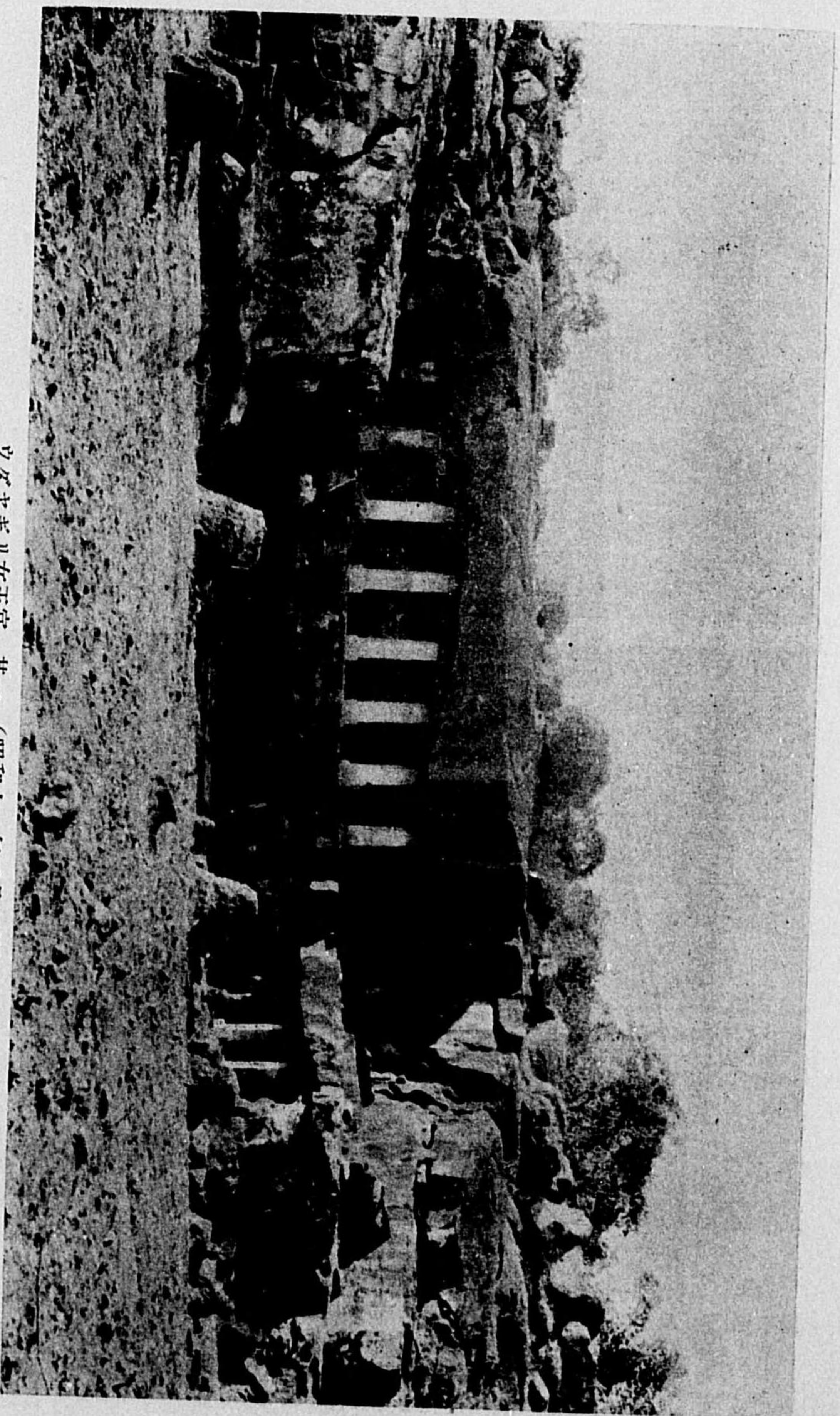


ウダヤギリ (Udayagiri) 窟院全景【昭和十一年三月三日】
 ウダヤギリの高さ110呎で西面し、カンダギリ (Khandagiri) 丘は133呎で東西してゐる。即ち相對してゐるから、ここで一日つぶさなければ、兩方の全景はうまくとれない。此日は午後行ったのだから、カンダギリ丘の上から、一ぱい目のあたつてゐたウダヤギリ丘の全景をとる事ができたのである。多くの窟院中ラニ・カ・ナウル (Rani ka Naur) と呼ばれてゐるものは東面してゐて二階になつてゐる。これは前面も廣く「女王宮」の意ださうで、有名である。此圖の中央より少し左に十ばかり階段が見えてゐるが、其終るところにあるのが虎頭の形をした變つた窟院である。



ウダヤギリの虎頭窟殿 (Tiger Cave) (昭和十一年三月三日)

前頁の解説中に記した虎頭窟殿を近く見たところ。パーグ・グムフア (Bagh Gumpua) といふ。虎の上顎の形にした窟殿で、大きく口をあいたところである。眼と鼻と歯とが刻みだしてあるところが面白い。口の幅さ9呎で、咽喉のところか丁度窟殿への出入口になつてゐる。虎の首を多くほりつけた窟殿はマヤラプラムに近きサルバンクワッパム (Salvankuppam) にあるが、この様に露出した岩を虎の頭の形につくり出したのはここばかりで、奇技で面白い。



ウダヤギリ女王宮 其一 (昭和十一年三月三日)

本名ラニ・カ・ナウル (Rani ka Naur)。案内書には Queen's Palace とある。東面せる二階造りの窟院で、正面に蒲葺があり、其前の廣場は大きき43×49呎といふ。直角に交差せる大僧坊で、上層の正面廣さ63呎、上層6本の柱及び北側下層2本の柱は後の修補。



ウダヤギリのガネシュ・グムファ二圖（昭和十一年三月三日）

ガネシュ・グムファ (Ganesh Gumpha) は前頁に掲げた「女王殿」のま北にある。前に通路があり二室より成る。正面に五本の方柱が建ててゐた筈のが、今三本残つてゐる。柱上部には女人の持送りを刻んである事、下圖に明らかである。尙ほ正面には二正の象あり、鼻にて樹の枝の様なものを持ち、美しき満開十瓣の蓮花を鼻で押へてゐる。

三階からみる事にした。これは此家がいくらかの謝禮をとつて見物させる事にしてゐるらしい。三階へ上ったところに、夫れはただ幾分高い所から見るといふだけで、やはり下の方はまるで見えず、つまり地面からよりは幾分いいといふ程度であつたに過ぎなかつた。それからどうせ通りみちだからといふので、ウォーター・テムブルとガーデン・テムブルとをみたが、前者はタンク中嶋の祠で、幾らか風景がよかつたが、後者は私にはまるで興味を惹かなかつたので、早速でてしまった。

(イ) ブバネスワール

夫れから何哩かを走つて一〇・三〇頃目的地についた。ブバネスワール (Bhubaneswar) の大堂は随分遠方から見える。グレート・テムブルといふ名が全く相應しい位に、あたりの群堂を抜いて大きい。傍らに大タンク(斜左後方のではない)がある。此神聖池の周圍には、當初七千の堂が建ち竝んでゐたさうだが、現在約五百が残つて居り、第六世紀から現今に及んでゐるといふ。

大堂(第311頁)の周圍には幅7尺の石壁を廻らし、例の如く印度教徒以外には絶対に境内に入らしめない。右側面即北側に平屋根の殿堂様なものがあり、石階で上部に昇れる様になつてゐるが、そこへ上つて境内を見下せば、其平面の概念を捕へることがきる。併し建物の細部をはつきり見様とするならば、後方を廻つて右側面即南側へ来て、眞横に開いてゐる小さな出入口から覗き込むのがよろしい。覗き込むにしても一歩も踏み込むことはできない。境内の方へ下りる石段一つふんでもやかましい。ここでは

少し位の鼻樂はちぢめはなう。

大堂はレラット・インドラ・ケサリ (Lelat Indra Kesari (617—57 (推古天皇二十五年) 齊明天皇三年)) の建立にかかり、元來ビマナと玄關とだけであつたので、形はちゃんとされてゐたが、後に正面の後方に堂を附加してしまつた (Nata- and Bhoga-mandaps)。大塔高を180呎で随分遠方から見える。其立派なことは例ふるにものがない位である。これ以外に此附近には、多くの此種の殿堂があり、何れも同様の形式であるが、これが最大であるために甚著名であり、印度アールヤ式 (Indo-Aryan Style) の代表とされてゐるのである。

(□) カンダギリ窟院とウダヤギリ窟院

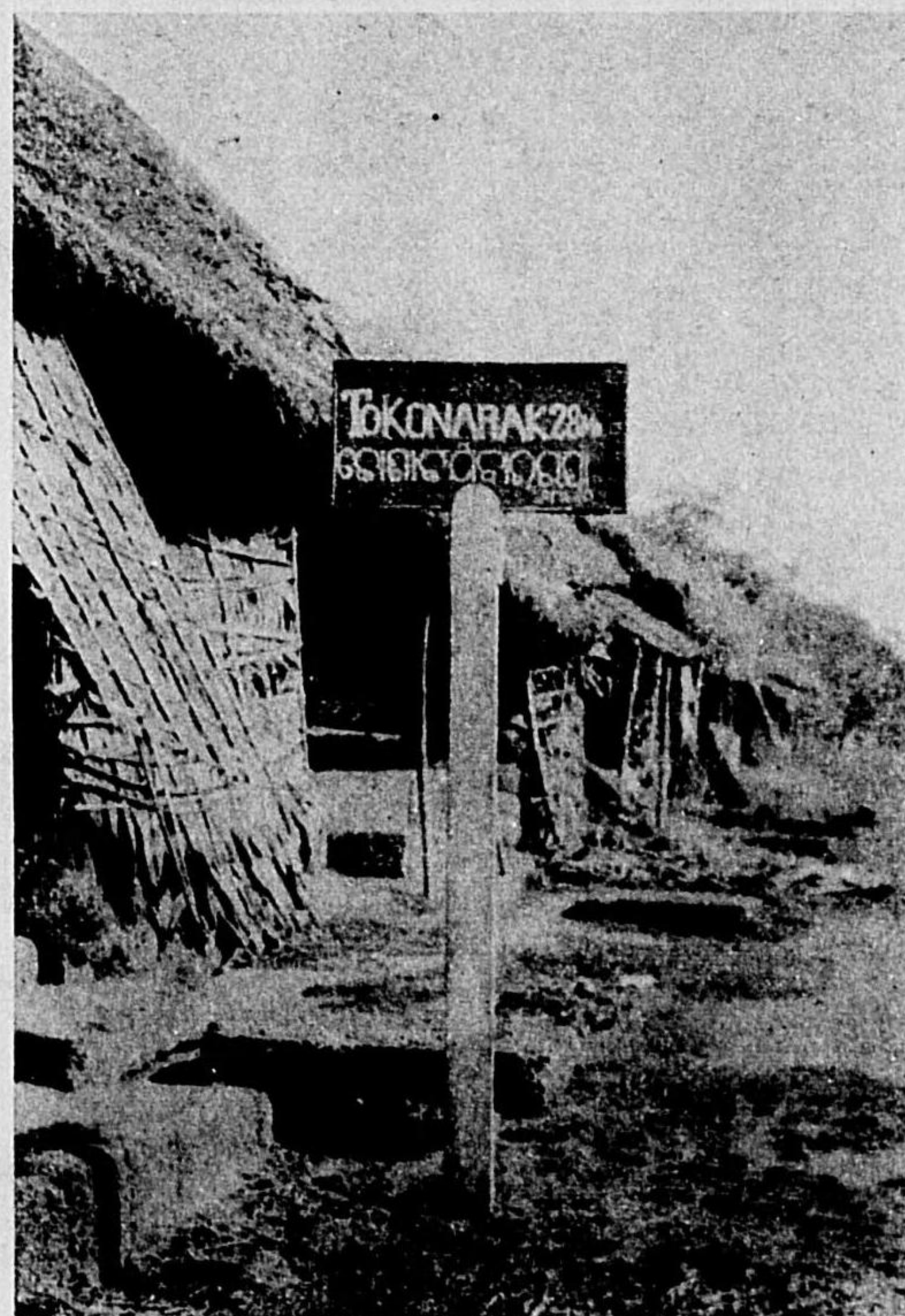
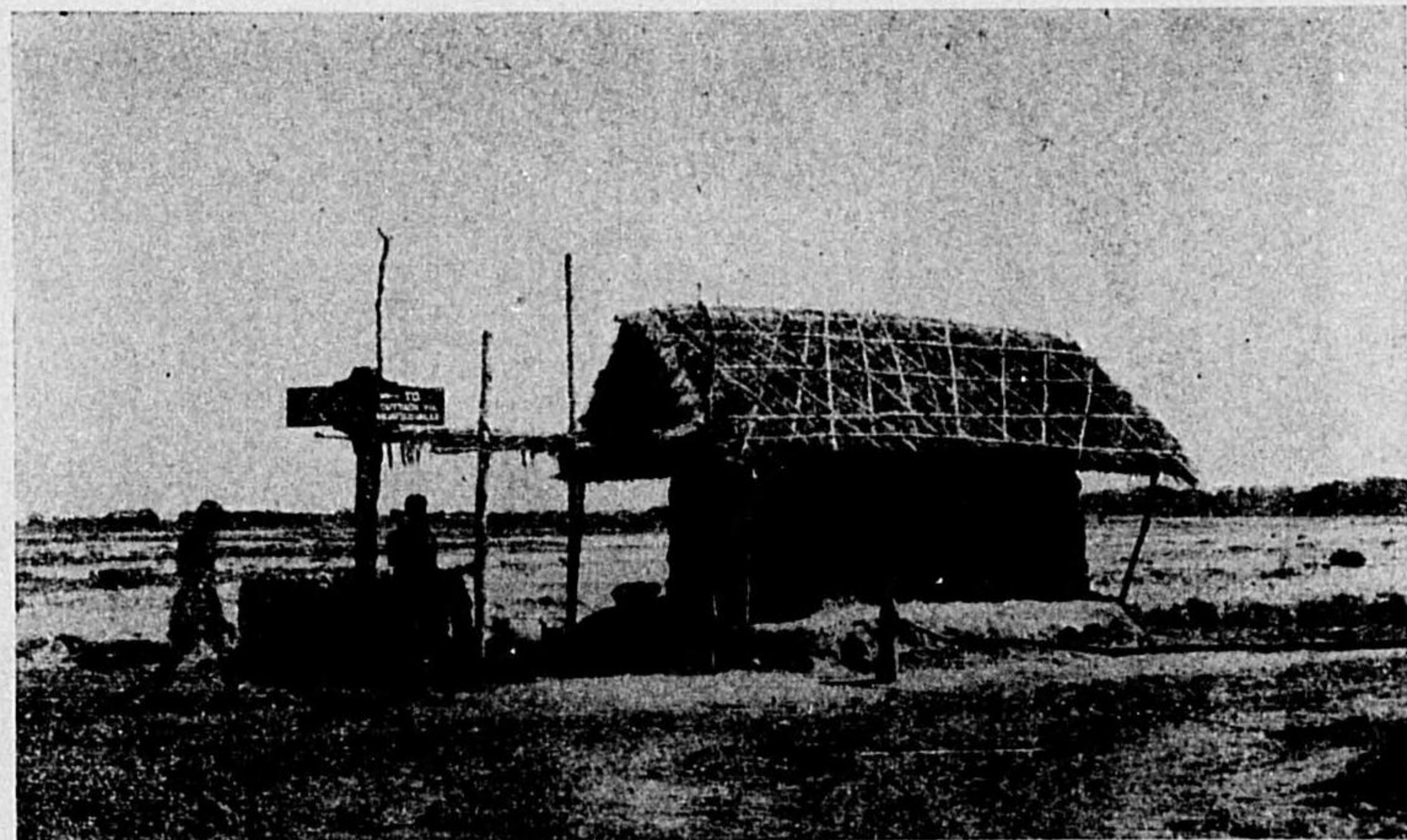
漸く一通——事實はさうの一通——の見學をすまし、更に約5哩を進み、カンダギリ (Khandagiri) とウダヤギリ (Udayagiri) 窟院のある小丘の麓に達したのは一二・三〇頃であつた。ここに R・H があつた。プ・ネスワール驛を距る事6哩といふ。丁度修理中であつたが、中央の食堂だけは使用が出来る

* There is one other peculiarity common to both Hindu and Jaina architecture in the north of India that requires notice, before proceeding to describe particular examples. It is the form of the towers or spires called Sirkharas or Vinukas, which invariably surmount the cells in which the images are placed. (Hist. of Ind. & East. Arch., Vol. 1, p. 322)

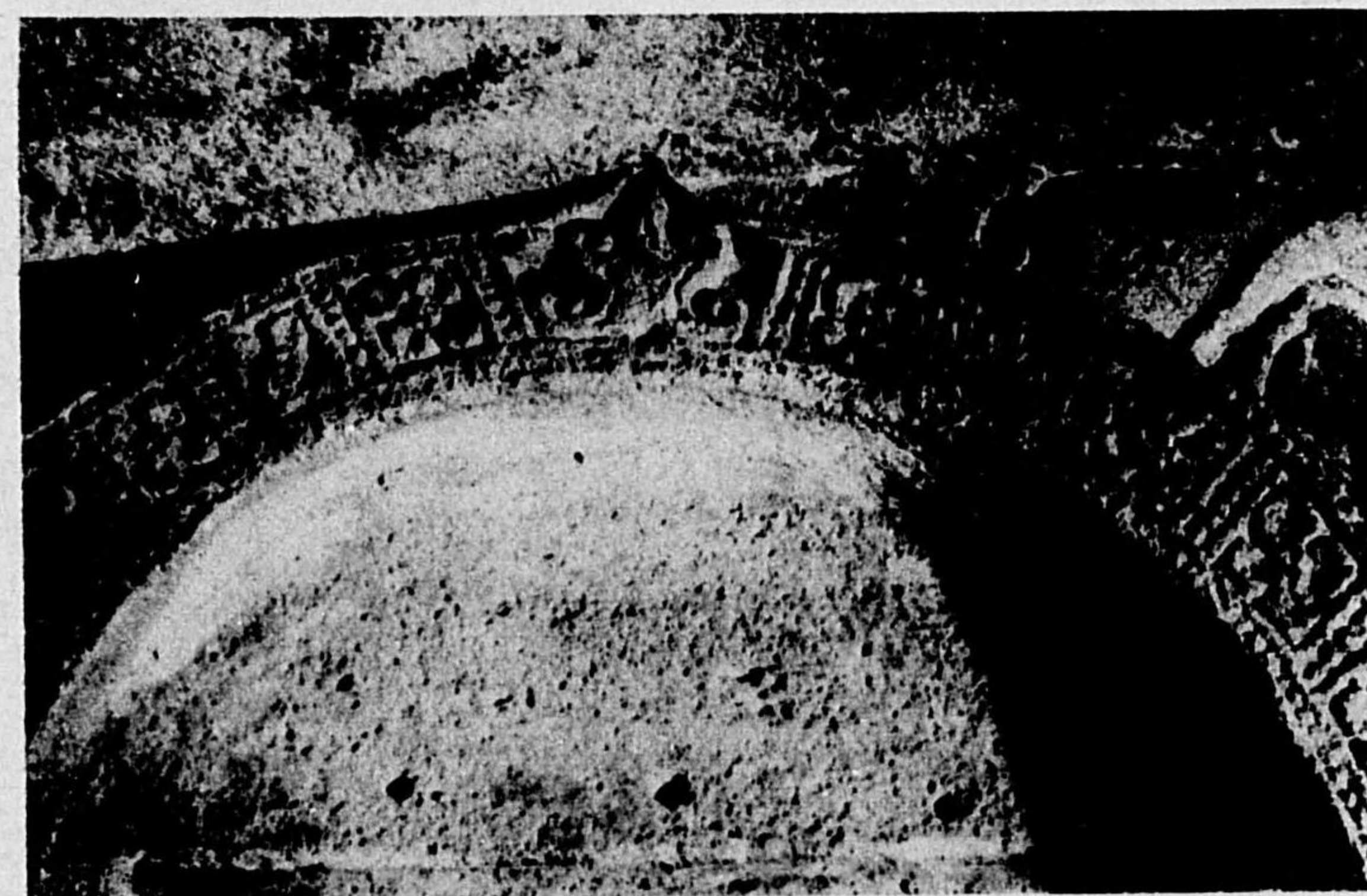
といふので、休憩して辨當をたべた。何にしろ大分暑いので、身體中汗だらけになり、始末に悪いので先づ水で身體の洗ひ拭をやり、椽で涼んで人心地がついた。此バンガロウは田舎向きの四注造の家で、少しばかり氣に入らなかつた。こんなところへ一泊したらさぞ印度氣分が味へてよからうと思はれた。短い草の生えた廣い庭を歩いて大分いい氣持になれた。夜になつてから月でも出たらさぞよからう。暮方もよからうし、夜のひきあけもよからうし、今から考へて泊らなかつた (修理中で泊る事が出来なかつた) のが洵におしい。充分休憩して一三・二〇出發。

先づ道の左手にあるカンダギリ窟院の見學から始めた。だんだんに登つて行き、遂に最も上の耆伊那堂の所へ行つたら、向ひ側のウダヤギリ窟院が一目に見えた。此朝運轉手に此等の窟院は何れの方向に面してゐるかときいたら、一は東向で他は西向きといつたので、されば東向のを午前、西向きの方を午後行くと申渡したところ、同所だからさうはいかないといつて、私の申出を一蹴してしまつた代物である。實際其通り同所で向ひあつてゐるのだが、一泊しない以上不能である。

カンダギリ丘高133呎、多くの窟院があるが、そのうち挿圖にだした一は上部軒のところに向ひ合せの三頭蛇を刻み、其上の方は恰もパールハット塔婆玉垣笠石彫刻 (後) の様に、三角形の間に埃及式蓮花を刻んだものである。さうして出入口圓半拱の中央にトライラトナの様な裝飾をつけてゐるのが、極く短い見學時間に私の注意を惹いたのであつた。ウダヤギリ丘は前者に比べると少しく低く110呎。此丘の西面にある多くの窟院中、何といつても最も立派なのは、ラニ・カ・ナウル (Rani ka Naur) 一名女王殿

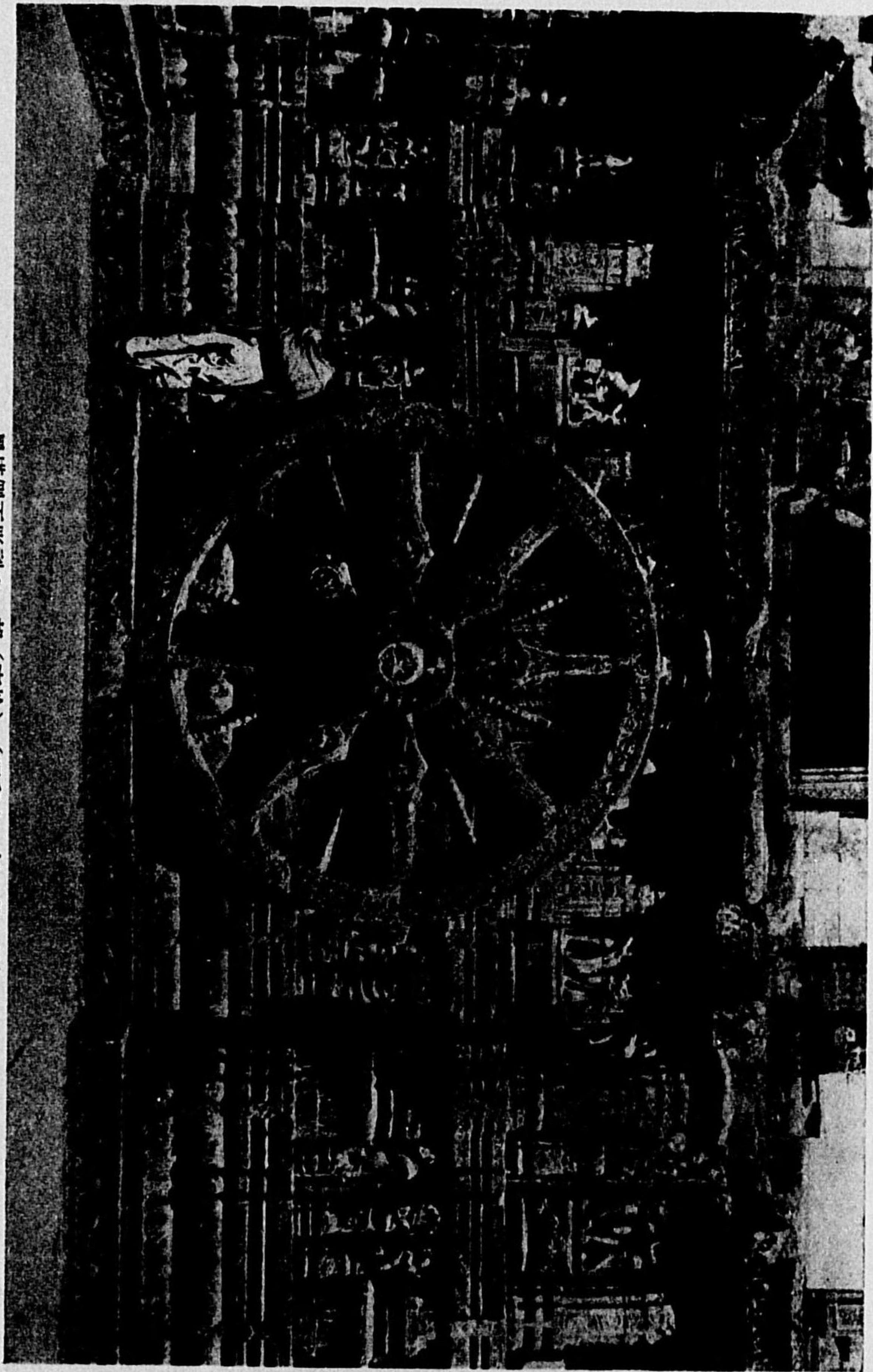


上。 プーリ郊外所見 共一
 下。 同 共二
 (昭和十一年三月四日)
 上圖は管て紹介をした自動車通行税(トール・タックス)をとる番小屋。道路に丸太をやってトウセンボウをしてゐるから、如何にしてもただで此關所を突破することはできない。下圖は寒村の建札で、ここをT字になり右へ曲るとコナラック(二八哩)へ行く。
 (昭和十一年三月四日)



上。 カンダギリ (Khandagiri) 窟院彫刻の一部
 下。 ウダヤギリ (Udayagiri) 窟院彫刻の一部
 (昭和十一年三月三日)

ブバネスワールを距る約5哩に道路を隔てて、カンダギリは東面し、ウダヤギリは西面し、多くの窟院がある。後者には虎の頭の形をしたダイガー・ケープ (Tiger Cave) だの女王宮 (Queen's Palace) だのが随分有名だから、第315—318頁に掲げ、尙ほここには佛教美術に幾分関係のありさうな文様のあるものを二種示しておいた。



黒塔側面彫刻の一部(車輪)。(昭和十一年三月三日)
コナラック(Konarak, Kuntarak)の黒塔(Black Pagoda)なる建物は、ゾラネスワールの夫れらの如き祠堂を失ひ、いはば女廟と
か外陣とかに當るところの、此種の建物に常に見出される石造り形造の建物だけが残つてゐるが、その軸部には筆紙に盡し難い美
事な彫刻がある。殊に車は徑約12尺で大したものである。建物の年代c. 1250—1280。

(Queen's Palace)と稱する二階の大窟であるが、私は寧ろ虎窟(Tiger Cave)を見た時の方がうれしかった。この窟院はファーガッソンに木版でのせてあるのを、随分前から知つてゐたが、大きな口を開いたところに日が一ぱいあたり、口の内はまっ黒に影になつてゐるところを見ることのできた。何だか大變儲けものをした様に思った。

* * *
一五・五〇全部終了、車で宿まで一走り。歸りはプーリに近くなつてから極く僅かの間だが近道をしたので、ジャッガーナート堂の前は通らなかつた。暑くて蚊がゐるのが疵である。宿屋の電燈が非常に明るいので都合がよかつた。

(ハ) ブラック・パゴダ

天井の扇風機を廻し通して漸く寝られた位、暑氣劇烈であつた。三月四日は五・〇〇起床。前日と同じく八・〇五に宿を出てコナラック(Konarak)(又カナラック(Kanarak)ともいふ)に向つた。プーリの町から24哩のところにかいふ村がありその丁字路のところに標木があて、「コナラック二八哩」と金釘流でかいてある(第323頁下圖)。ここから右折すると、急に途が悪くなるが、屈せずにつけて走ると、遂に遙か遠方に方錘状の謂はゆる「黒塔」が見える。車は目的物を距る15分のところ迄行く。そこから先は海岸だから、砂で車は進むことができない。

TO PRESERVE THIS SUPERB SPECIMEN
OLD INDIAN ARCHITECTURE
THE INTERIOR WAS FILLED
BY ORDER OF
The Hon'ble J. A. Bourdillon C. S. I.
LEUTENANT GOVERNOR OF BENGAL
A. D. 1903

コナラック黒塔修理銘(昭和十一年三月四日寫)

境内は大變に廣く、先づ前の方に門があり、その後方に殿堂があるが、肝心の内陣に當る部分は既に壞れてなく、正面の外陣(玄關)に當るところだけが残つてゐる。併しその残つたところだけでも随分立派で、細かい彫刻——ナガもありナギニもありエロもある。まあベナレス恒河河岸のネバリース・テムブルのそれ式の——が一面につけてあり、又大車輪が幾つも刻んであつて、全體が車の様に見せてあるが、その車は挿圖の人物と比べてみれば、大凡の見當はつかうと思はれる(第32頁)。だから先づ石車としては恐らく最大のもので、ハンピ(Hampi)の遺跡にあるビジャヤ・ビッタラスワミ(Vijaya Vitalaswami)堂境内にある石車(Stone Rath)等は到底足元へもよりつけぬ位である。

建物正面に修理銘がある。一九〇三年といふから明治三十六年に當るが、その時に大英斷で内部にアノコをつめてしまつたのである。さうしないと恐らくつぶれる處が確實であつたのであらう。どうせ内陣に當る肝心のところがつぶれて了つたのだから、玄關だけでは仕方がない。せめてこれだけでも助け

度いといふところから、非常手段をとつてアノコを一杯に詰めたものと推定する。こんな風だから靴をはいたまま、どこを歩かうと勝手氣儘で、足元さへ用心すればそれでよろしい。併しこの建物を二三時間で見つて了ふことは到底不可能である。前以て手續をしておいて、バンガロウへ二三日泊り込み、ゆっくりせねば駄目なことはいふ迄もない。

境内との間の低い石垣の上に座を占め、黒塔を見ながら辨當をたべたので、甚だゆつくりした氣分になつたが、何分にも暑いので弱らされた。食後にもう一度黒塔を見、それから門——多分半分壞れたのであらうが、未完成の如くであつた。——の彫刻をみてゐたら、そこにハンサの行列を見つけたので、思はぬ儲けものをした。但しこのハンサは別に花を銜えてはゐないで、ただ行列をして歩いてゐるだけだが、それでも甚だ結構である。

境内は新しい可なり大きい建物があつた。あれは何かときいたら、何も入つてゐないといふので、其まゝにしておいたところ、終りに近づいた頃にマンガは態態あの内部をみないかといったので、空っぽのものをもみても仕方がないといったら、彼はテムブルがあるといった。どうも様子が變なので行つてみたら、陳列館であつて、成程内部にはテムブルに用ひた彫刻の破片が大分列べてあつた。併し全體としては大したものではなかつた。

往路に車の停つたのが一〇・四七、歩いて目的の場所へ達したのが一一・〇五だから、つまり18分か

かつたのであつた。午後は一三・五五に全く終り、境外へ出たのが一四・〇五。つまり食事の時間を入れてざつと3時間ゐたのである。さうして一路B・N・R・H・へ一六・五五に歸着をした。だから往は車のとまる迄に2時42分かかり、復は境内をでてから2時55分ですんだのであつた。往路には寫眞をとるので道草を食つたりしたため、意外の時間を費したのであらうが、先づ往3時間・見學3時間復3時間、合せて9時間、朝8時に出かければ夕の5時には歸れる理屈である。こんなことが後の見學者の參考に幾分でも役立てば幸である。

參考のため車代と宿賃とをかいておく。BNRH・ブバネスワール往復20/0/0。ブバネスワール・カ
ンダギリ間往復20/0/0。BNRH・コナラック往復30/0/0。驛・BNRH間往復20/0/0。心附1/0/0。合計
55/0/0だが、但しこれは特別に安かつたかも知れぬ。BNRH宿料(辨當)25/2/0。宿使用人心附4/0/0。
合計29/2/0。汽車賃ホツラー・プーリ往復一等52/1/0。従僕三等運賃11/6/0。合計63/7/1。總計55/0/0
+63/7/1=118/7/1=C。¥154位のところで、汽車中二泊宿屋一泊、甲谷他からプーリへ往復し、名所舊
跡が一巡できた勘定である。

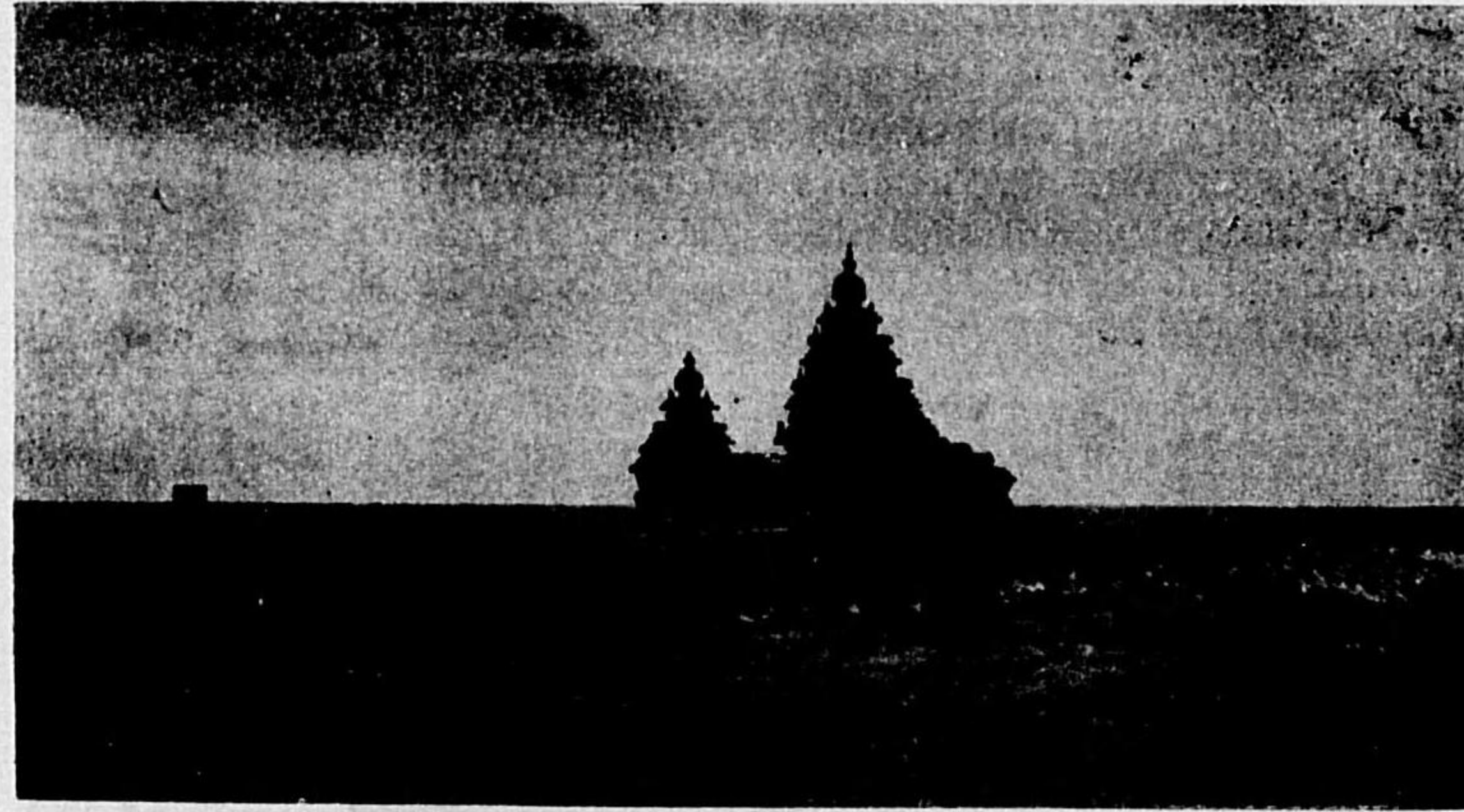
六六、マドラスからマ馬拉プラム(マハバリプラム)へ

昭和十年十二月二十三日の朝は、大曇りでまことに情なかつた。前日の約の通りマドラス市の豪商モ
ハンラルから自動車を一井の社宅へ廻してくれたので、私とワッサンとがのつたが、車の内にマドラス

大學學生なる次男坊のバブラル・モハンラル君が、黒いズボンに紫の勝ったカーマイン色の羅紗の上衣
といふ、日本では想像のつかぬ服装で乗つてゐた。私が二日間マ馬拉プラムに滞在中、接待のため一所
に行つてくれたので、車は運轉手ごと待たしておいてくれるのださうであつた。これは私にとっては洵
に棚ボタの申出だから、早速お受けしたのであつた。かういふ工合な結果になつたのは、何れもTさ
んと秘書役のHさんの特別なる高配の賚である。

マレーの案内記によると、『マ馬拉プラムへ行くのは、チングルバート(Chingleput)で汽車を下り、
自動車で19哩を走り、夫からバッキンガム・キャナルと其後方の川を渡らねばならぬが、前以て依頼し
ておけば、D・B・の番人が船の用意をしてくれる筈である。併し是非渡船の都合をせねばならぬ責任
はもつてゐない』といふ様なことが書いてあるので、折角そこ迄行きながら、渡船がないため中止す
か、左もななくば徒渉せねばならない様なことになるから、孟買の領事館から其筋へ手紙を出す事
と、序にD・B・へ二日間宿泊許可をチングルバートの收税吏に依頼をする事をお願いしたところ、後
者の方は大當りで、十二月二十三・二十四の二日間、一人でD・B・占領の權利を得たが、船の方は
行つてみた所案内記とは大違ひで、頼むも頼まないもなかつた。渡船場には332頁に示した様な揭示

* Mahabalipur, Mahavelipur, Mavallipur, Mamalaipur, Mammallapur, Malapur 等と云ふようだが、タミール語では
Mahabalipuram, Mavallipuram, Mammalaipuram 等と云ふので、この最後の語から Mammallapuram なる言葉がた
そらひである。



上。 ママラブラムのシー・テムワル
 下。 マヒサスーラ・マンダバムのヤリ柱
 (昭和十年十二月二十四日)
 上はラジャシムハの名で知られてゐるナラシムハバルマン一世 (Narasimhavar-
 man I, A. D. 690—715) の時に建築されたもので、これは露出せる岩をこの形に
 造りあげたものではない。傳説によると「セブン・パゴダ」のうち、これ一棟が残
 つてゐるのださうで、而も割合によく保存されてゐるから、風致を増すと同時に、
 大に建築上の参考になる。これも亦ドラビタ建築の好例である。
 下はマヒサスーラ・マンダバム (Mahissoura Mandapam) の正面柱の詳細で、
 ヤリの頭に柱が建つてゐる(或は柱の下がヤリになつてゐる)ものであり、ハラバ
 建築 (Pallava A.) の代表的柱の一例である。

The Travellers Bungalow
 at Mahabalipuram
 is reserved for occupation
 of Professor Syuniti
 Amanuma of the Imperial University
 of Kyoto in Japan on the 23rd and
 24th December 1935
 12/17/35
 12/23/35
 R. J. J. J.
 17/12/35
 Collector

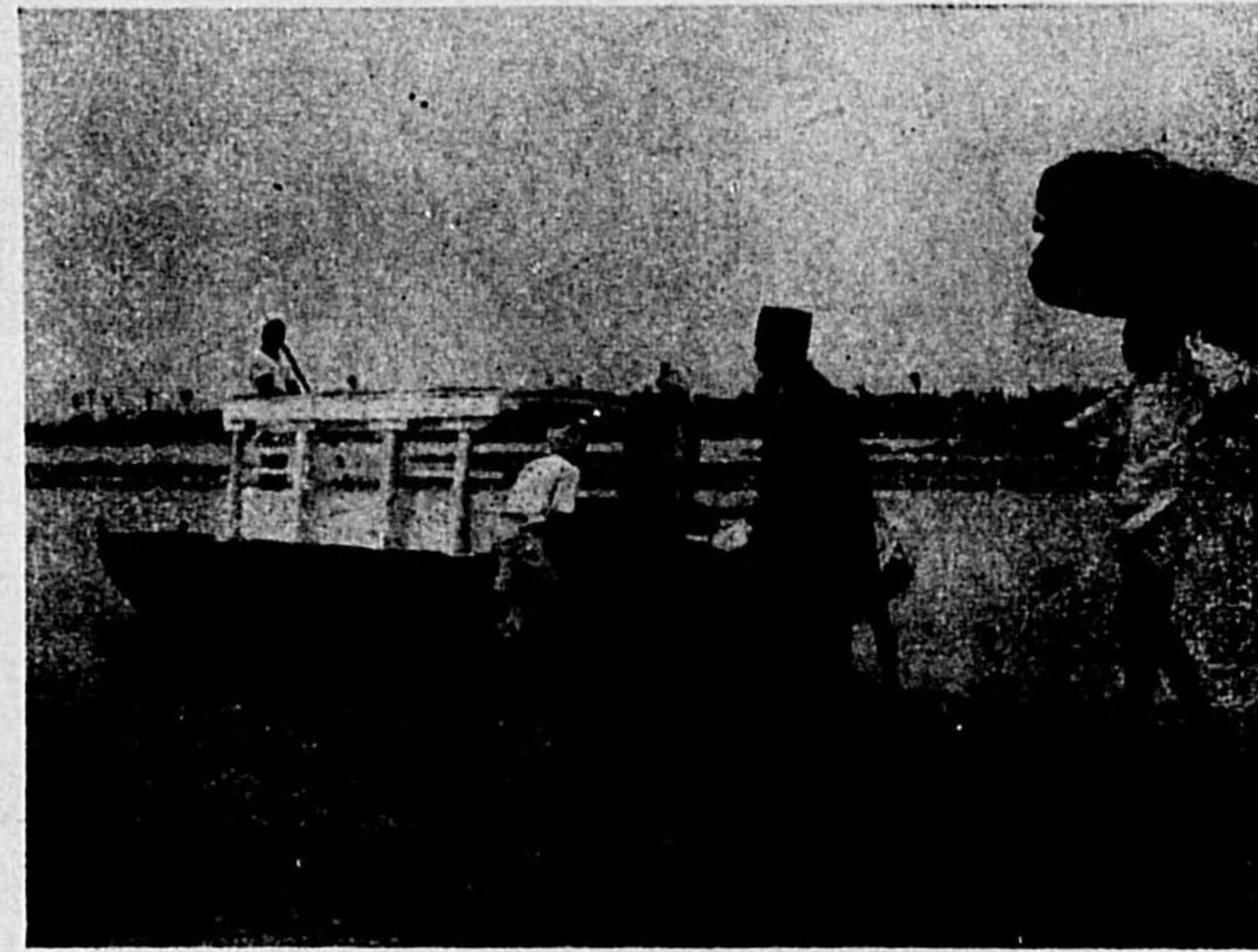


上。 ママラブラム D. B. 宿泊承認證
 下。 ママラブラム D. B. 全景 (昭和十一年十二月二十三日)

上は端書大のもので、癖のある字で古文書を読む位にむづかしいが、文は「The Travellers Bungalow at Mahabalipuram is reserved for occupation of Professor Syuniti Amanuma of the Imperial University of Kyoto in Japan on the 23rd and 24th December 1935」とあり、12月17日コレクトル(收税吏)の発行したものである。下はママラブラムに於ける D. B. の全景で、二日二晩私一行で占領したものであった。廣い構内に建つてゐて、洵に心地がよかつた。

NOTICE
THIS FERRY IS MAINTAINED BY THE P. W. D. FOR
THE USE OF THE GENERAL PUBLIC, NO CHARGE
NEED BE PAID FOR CROSSING THE CANAL, THE
FERRY WILL BE AVAILABLE FROM 6 A. M. TO 6 P. M.
ON ALL DAYS.

バッキンガム・キャナル渡船場に於ける掲示
(昭和十年十二月二十三日寫取)



ママラブラムの渡船(昭和十年十二月二十三日)

バッキンガム・キャナルを渡って、こっち側へついで、今船から荷物を揚げてゐるところ。ここから D. B. 迄可なりある。天気は曇てゐたが、ここ迄来た以上、もう大丈夫なので大安心ができた。屋形は角柱舟肘木切妻入。全體としてどことなしにノアの方舟に似てゐる。

○迄、渡船の心配はないのであるから、前からの要意は全く無用である。
渡船場に車が着くと同時に、人夫が蟬集してきた。ワッサンが夫れ等の中から二二三を撰んで船へ荷物を運ばせた。船の形は繪でみるノアの方舟のやうで、向ひ側へ着いてからバンガロー迄相當歩かされた。ついたのは正に一一・〇〇、マドラス・ママラブラム間約50

哩、途中チキカリクンドラム (Tikalikundrum) (此町は餘り小さい) 印度教殿堂をみるため、少しばかり道草を食つたが、その時間は約三十分であつた。

此日マドラス碇泊中の外船から上陸した佛人の一隊が觀光に來た。男女合せて五十名もあつたらうが、彼等はただ遺跡を歩いてゐるといふだけで、大聲をだして笑つたり騒いだりしてゐるばかりであつた。ひる頃バンガローへ來て持參の辯當を開いたが、美しく掃除してある庭へ新聞紙を丸めたのと、密柑の皮とを多分に散らして行つた。このあたり正に我國の團隊旅行者と同じであつた。相當の風采をした中流紳士の集りから、田夫野人の一隊に至る迄、折をすてたり密柑の皮を散らしたりするのが當然の様に考へてゐるところの、此頃心ある人人から公德心がゼロだといつて非難攻撃をされてゐるのは、日本人ばかりで、西洋人は皆ひらけた立派な人ばかりだと心得るには及ばぬ事實を目前に見せられたのであつた。公衆の面前だけ體裁をつくり、禮儀の本来本元の様にすましてゐるが、印度の田舎へ來て、千古の遺跡を冒瀆し、密柑の皮と新聞紙の丸めたのを庭にまき散らして歸るのが、佛蘭西人の半面であることを知り得たのであつた。

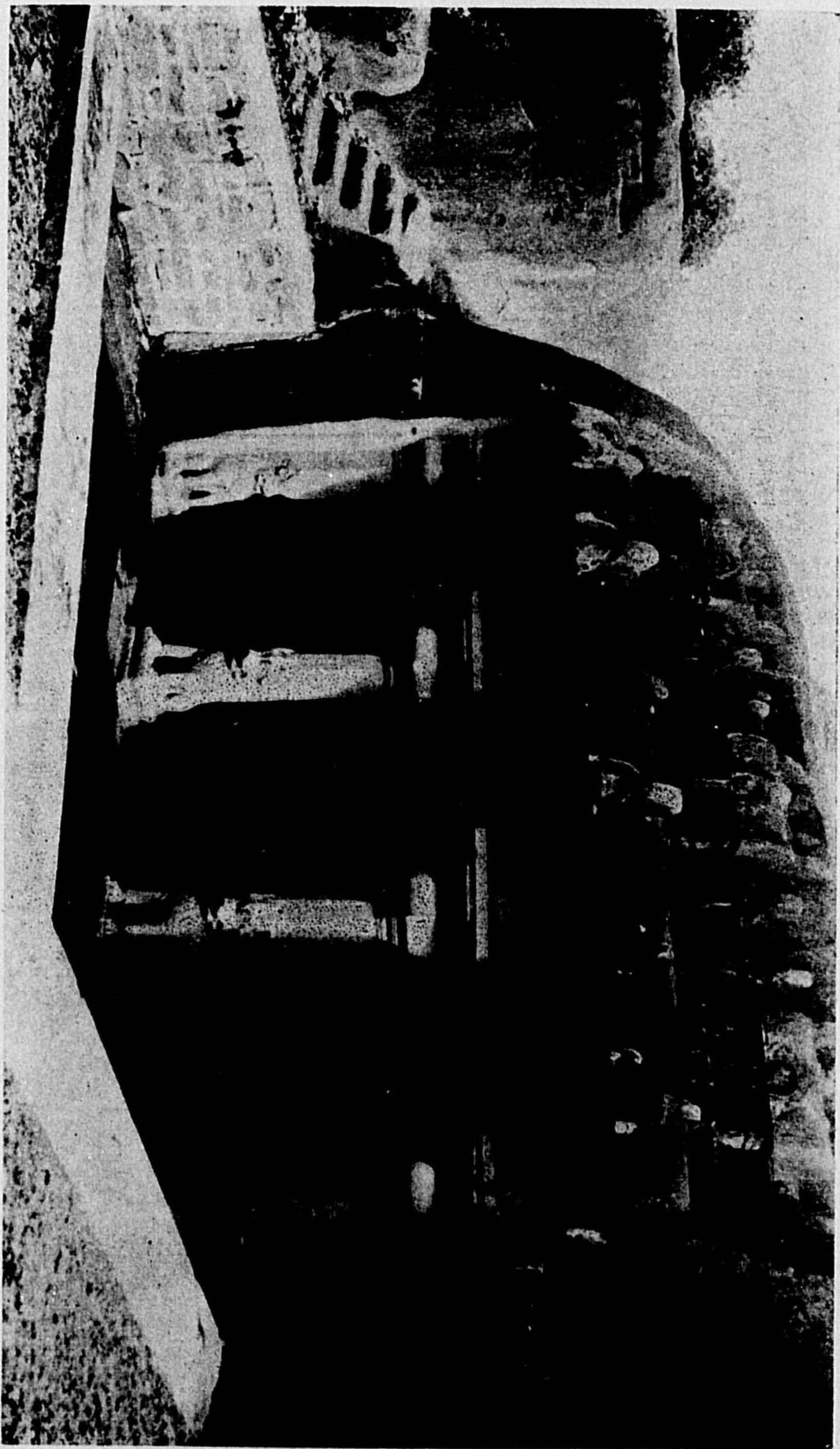
六七、ママラブラムの二日

折角楽しみにして出かけて行つた十二月二十三日は、終日天候險惡で殆んど寫眞がとれず、丁度マナマ

ツ (Manamattu) としよとに駐在の收税監査役——とでもいふのか Revenue Inspector としよ職にある——コタンダ・ラマラス (Kothanda Ramalas) といふ人が案内に来てくれた。午後は風荒く驟雨が何回も来り、何とも仕方がない手のつけられない様な天気になった。だからラマラス氏に連れて歩いて貰ふのには、少し負け惜みもあるがまあ丁度よかった。夜も蚊の大群がランプに集ったが、今迄にかく迄多數に集ったのをみたことがなかった位。さうして珍らしい(?) 事には何れもさばかりで、一疋も居なかつたところをみると、雌雄陶汰の関係か何かで、こんな事になったものか。

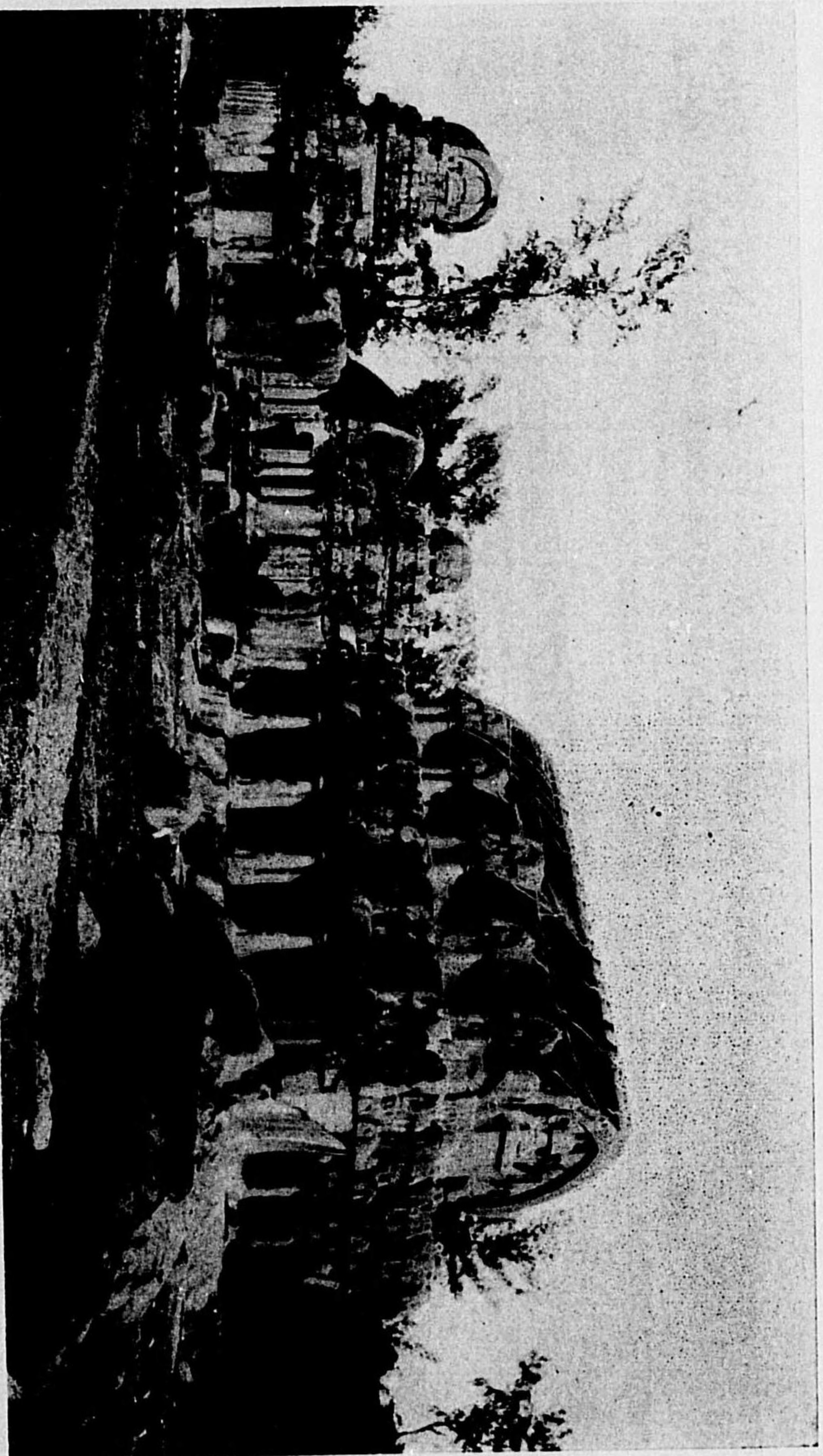
夜二回雷鳴をきいた。時には餘り雨の音がひどいので眼がさめたりした。翌二十四日は朝はやはり大曇りで、海鳴りがよびて聞こえてゐたのが少しもやまぬ。やがて抜ける様に降りだしたが、八時半頃になって一先歇んだので直に出かけ、先づ以てナガとナギニから寫真をとりだし、海岸に唯一つ残つてゐるシー・テンブル (Sea Temple) 迄出かけ、一二・二五晝食のため歸つたが、幸なことには此時まで日が照つてゐた。

食事中また大曇りにつづき大雨沛然、いつ歇むとも見當がつきかねたが、一四・三〇になり稍や小降りとなつたので、がまんがしきれなく出かけ、ファイブ・ラタス (5 Rathas) と稱する面白い建物 (には違ひないが實は自然の岩をテンプル型に彫刻をしたもの) が竝んでゐる邊迄行つて、どうかかうか薄日のあつてゐる寫真をとる事ができた。そのうち西の方が曇り出したので、五時過ぎにバンガローへ歸つた。此日も雷鳴一度、大變な濕氣で、何も彼も全部しめっぽくなつてしまった。



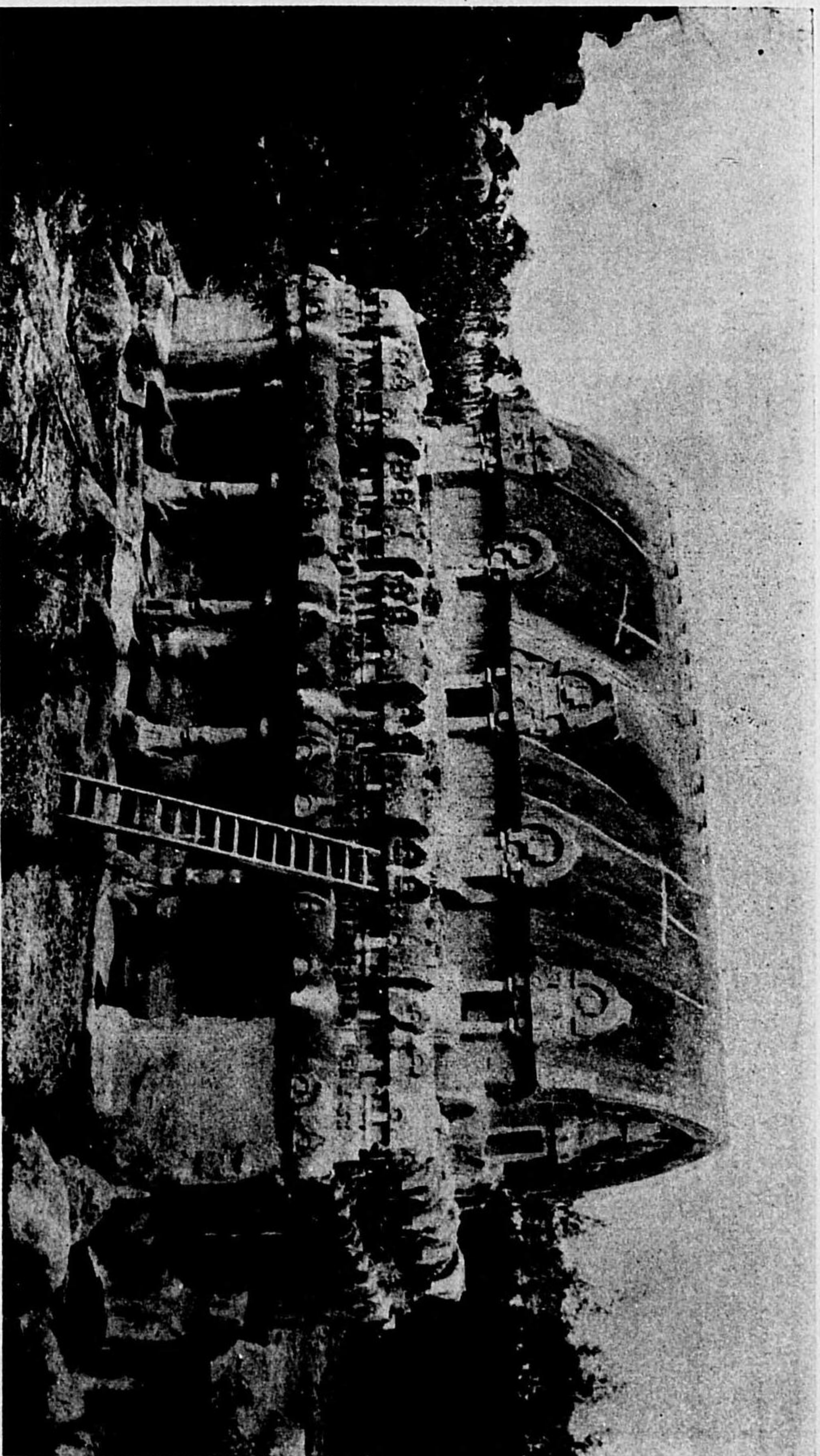
マハラトナムに於けるバラハ・マンドパム (Varaha Mandapam) (昭和十年十二月二十四日)

マハラトナムには謂はゆるマンドパムが7、テムブルが5、ラタが7、「恒河の由来」が2、其他3、合計24の遺跡遺物がある。ここに掲げたのはさう大したものではないが、バラバ (Pallava) 建築特有の柱、即ち柱の下部がヤリ (Yali) になつてゐるところがよく判るので撰んでみた。全體は露出した花崗岩をくりぬいたもの。



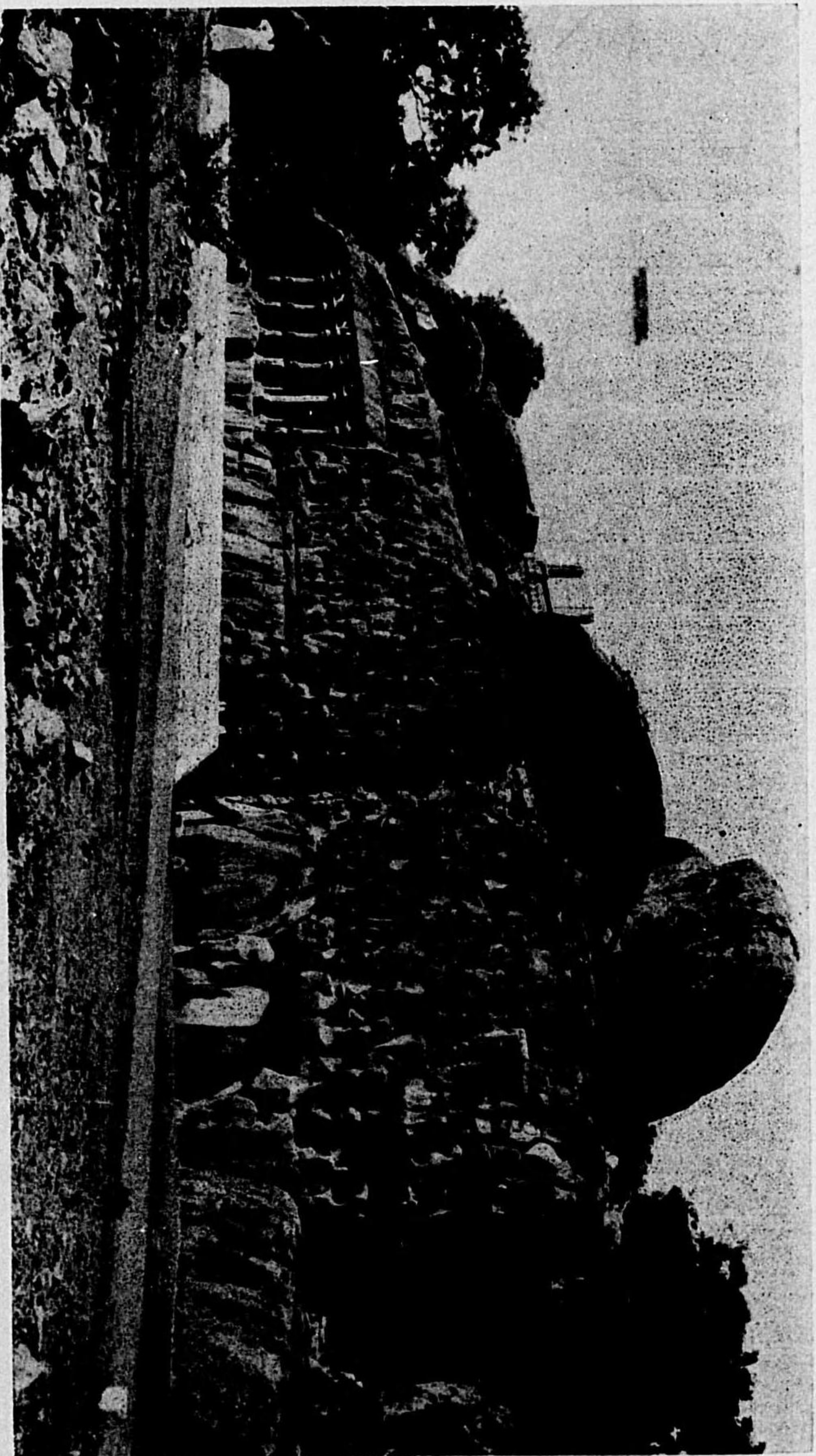
マヘンダラパールのラタ (Ratha) 全景 (昭和十年十二月二十四日)

有名な '5 Rathas' の中の4が見えてゐる。左からサルバデバ・ラタ (Saludevya's Ratha), ドラウパチ・ラタ (Draupadi's Ratha), アルジュナ・ラタ (Arjuna's Ratha) 及びベヘ・ラタ (Bhima's Ratha) で、この右にもう一つダルマラジャ・ラタ (Dharmaraja's Ratha) といふのがある。これが寫つてゐないから全景とはいへないが、先づ夫れに近いもの。總て露出した花崗岩を家型に刻んだもの。Ratha とは車 (Car) の意。約第7世紀に造られたものと考へられてゐるので、ドラビダ式最古のものとされてゐる。寫眞にないダルマラジャ・ラタはアルジュナ・ラタに似て規模の大きなもの。



ベヘ・ラタ (Bhima's Ratha) 背面 (昭和十年十二月二十五日)

前圖の右端に寫つてゐるベヘ・ラタの背面だが、外形は正面と殆んど同じで、柱は例の特徴のある、下の方が腰になつてゐるのがよく判るであらう。何しろ大きなものを一石から刻み出したのだから、大した努力である。此左にダルマラジャ・ラタが少し見えてゐるが丁度樹木があつて大部分をかくしてゐるので、殆んど判らないのは惜しい。ベヘ・ラタは外法間口約48尺奥行約25尺。ダルマラジャ・ラタ約27尺平方の大きさである。さうしてこれ等のラタは何れも殆ど同時代、而も極めて短日月の間に掘鑿されたものの如く、マヘンダラパールの間は後670 (天智天皇九年) — 700 (文武天皇四年) の間位と推定してゐる。



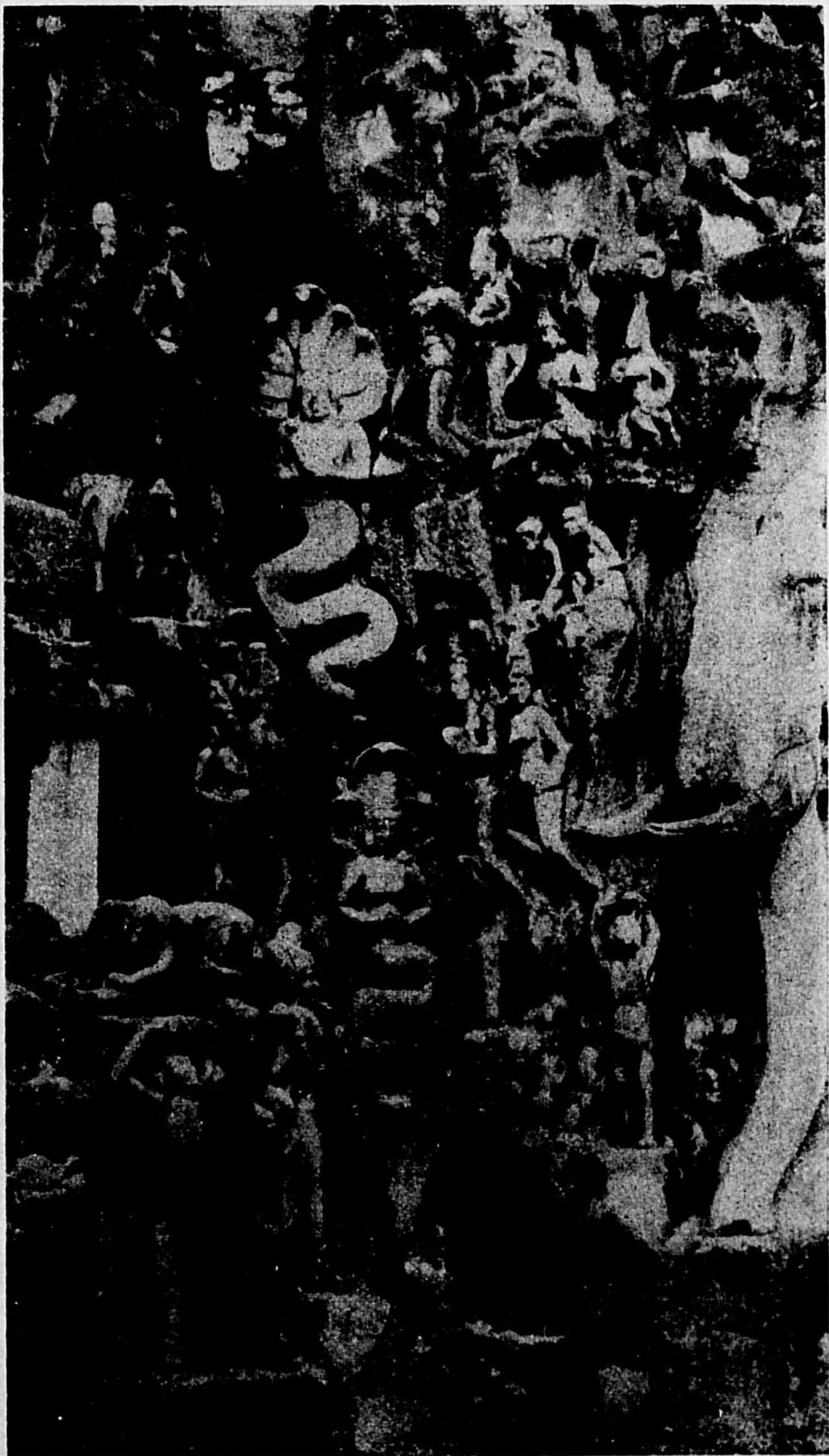
恒河の由来全景 (昭和十年十二月二十四日)

普通「アルジュナの苦行」(Arjuna's Penance)と呼ばれてゐるもの。アルジュナとは印度の抒情詩マハバラタ (Mahabharata) にでてくる主人公ださうな。作しきういひ傳へてはゐるがはつきり何だか判つてはゐない様である。又「恒河の由来」ともいふ。岩の面積30尺×90尺。岩は中央に割れ目があり、左右の二大片から成つてゐる。其中央に割れ目にナガとナギニとコアラとがほつてあり、左右兩片の牛肉彫は何れも中央に向つてゐる。向つて右の岩に大象小象がほつてあり、猫と鼠が踊つてゐたり、其他多く (次頁へ)



恒河の由来 部分 (昭和十年十二月二十四日)

(前頁より) の彫刻を以て石面を充填してゐる。第338頁の圖では中央の割れ目のところは見えでゐないが、第339頁の左の方にその部分が出てゐる。コアラの下の方が少しきれてゐるが、次頁の圖には完全に寫つてゐる。象の頭とナガの尾との間に猿が居り、その上にあるのは乾闥婆ださうである。何れも男女とか雌雄といった工合なのに、象の牙の下で猫じやを踊つてゐる猫は一足である。此彫刻の年代は確定してゐない様だが第8世紀頃といふ説がある。



恒河の由来 中央部

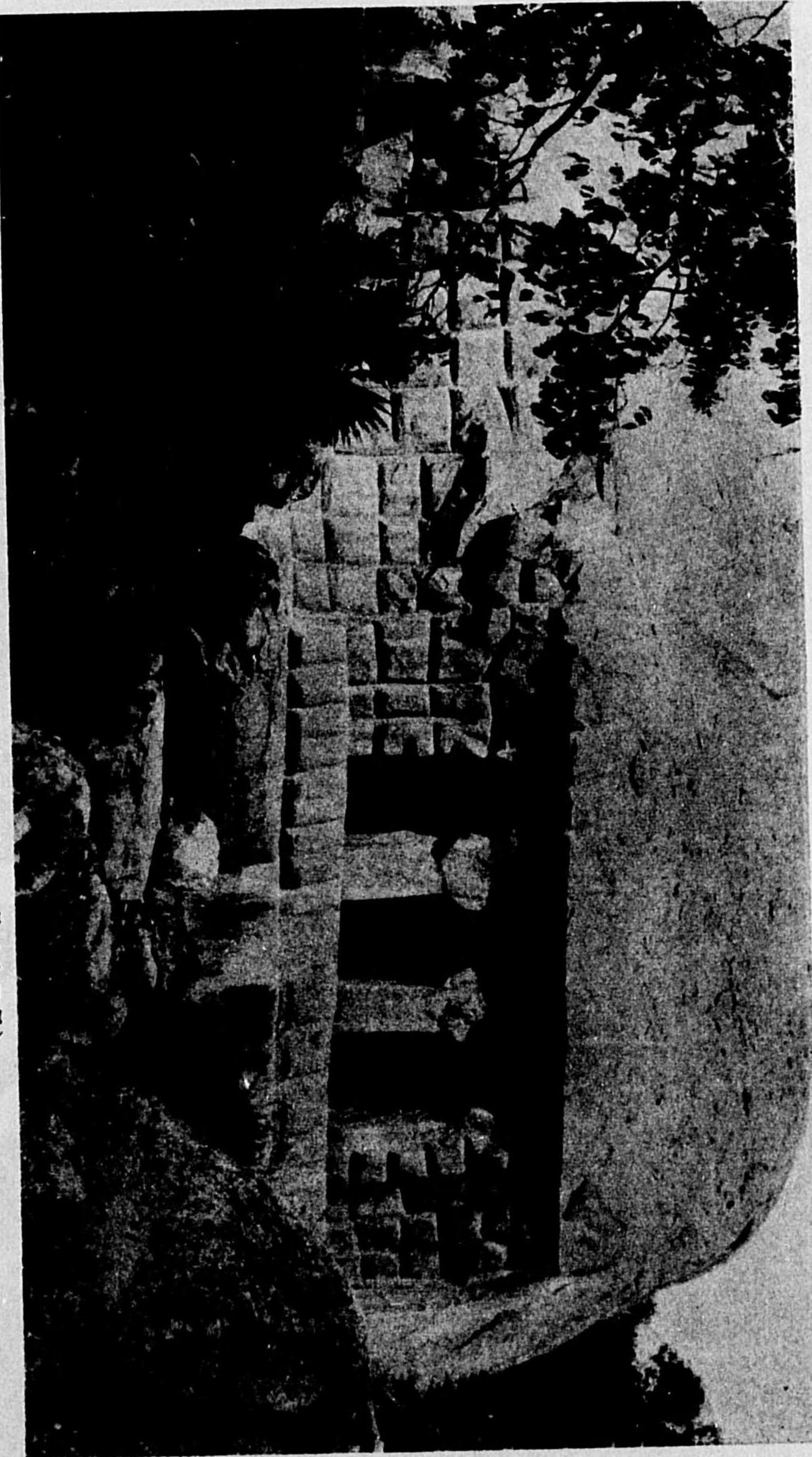
(昭和十年十二月二十五日)

大正十一年から十二年にかけて、印度を歩いた時は、到底見込がないとあきらめ、行くのをやめて以来、此次の機会には何を思いでも是非行かうと思つた願ひが叶つたのだから、このD・B・に滞在中何度も出かけた。ナガとナギニとコブラとが、順に地面から出てきた様で、とても愉快である。ナガは七頭蛇、ナギニは三頭蛇の光背(?)があり、其下のコブラは唯一の頭で、これはまだ地面から出きらない。指頭を合せ、瞑目してゐるナギニの顔が大變によろしい。左方に半分である小祠に注意せよ。これ亦ドラビタ建築の特徴をもつてゐる。

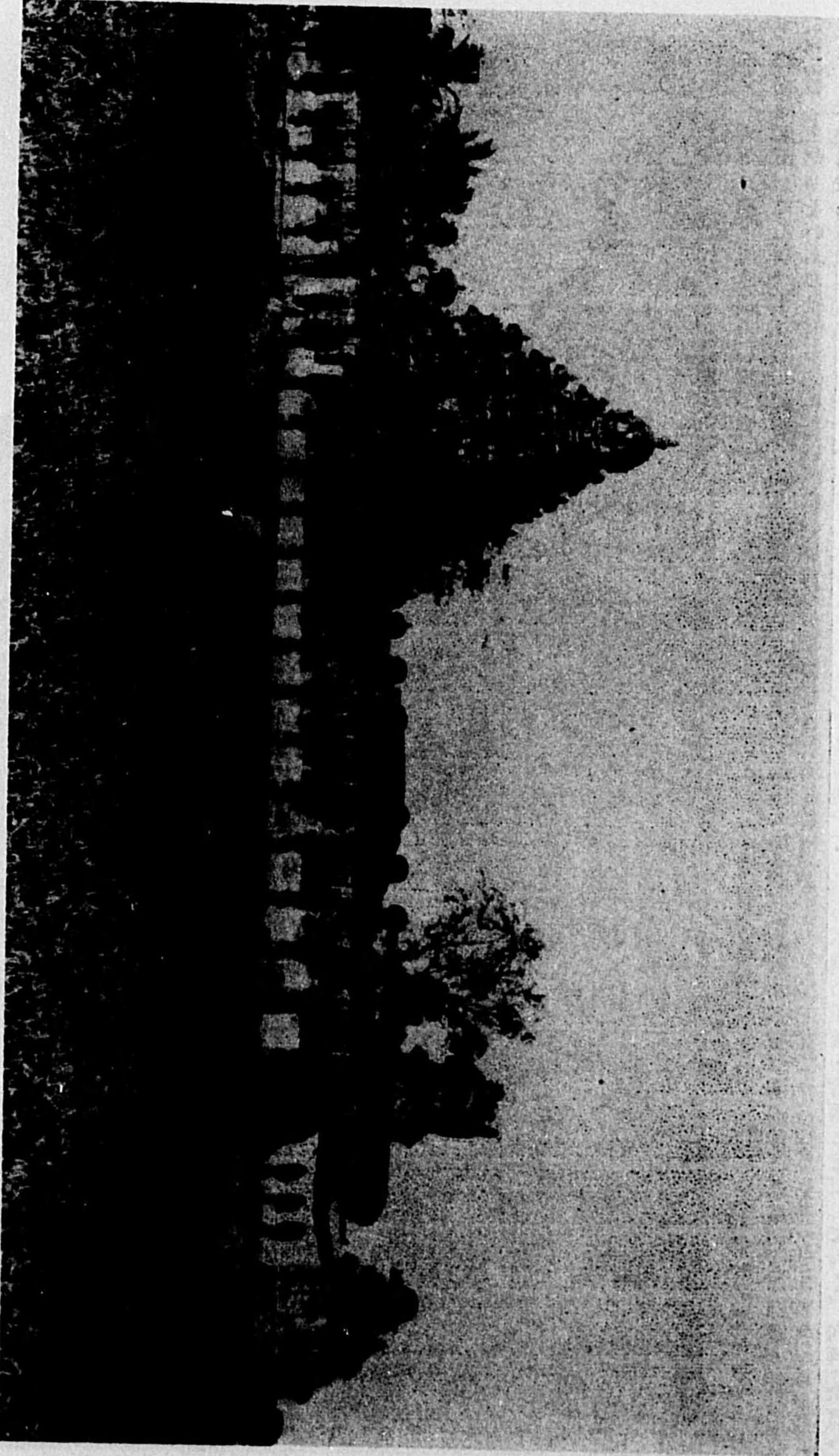


右、恒河の由来に現はれたナギニ 其一
左、同 其二
(昭和十年十二月二十五日)

大ナガの顔も大きく寫したかつたが、餘り高いので危いからやめ、下の方のナギニだけにしておいた。かつぎ(傘状部)を充分にひろげた三頭の眼鏡蛇の光背は、甚だ薄手に頗る巧に彫刻してある。兩耳に異つた耳飾の様なものをつけてゐるのにも注意すべきである。瞑目してゐる顔は實によくできてゐて、私の大寸きな彫刻の一である。



ペラアララムの未完成窟殿 (昭和十年十二月二十五日)
 掘鑿をしかけてやめにしたと思はれるもので、これによりて我我は、今から凡そ1300年前に、時の石工が如何にして露出してゐる大岩をほり出したかが列る様な気がする。先づ大體この様にして見當をつけ、コツコツと手間とひまとをかけて、不充分の道具をもつて一生懸命に窟殿を造りあげたものと見える。洵に面白いことであると思ふ。今では明らかに記憶してゐないが、この様なほりかけの三つばかりあつた様である。



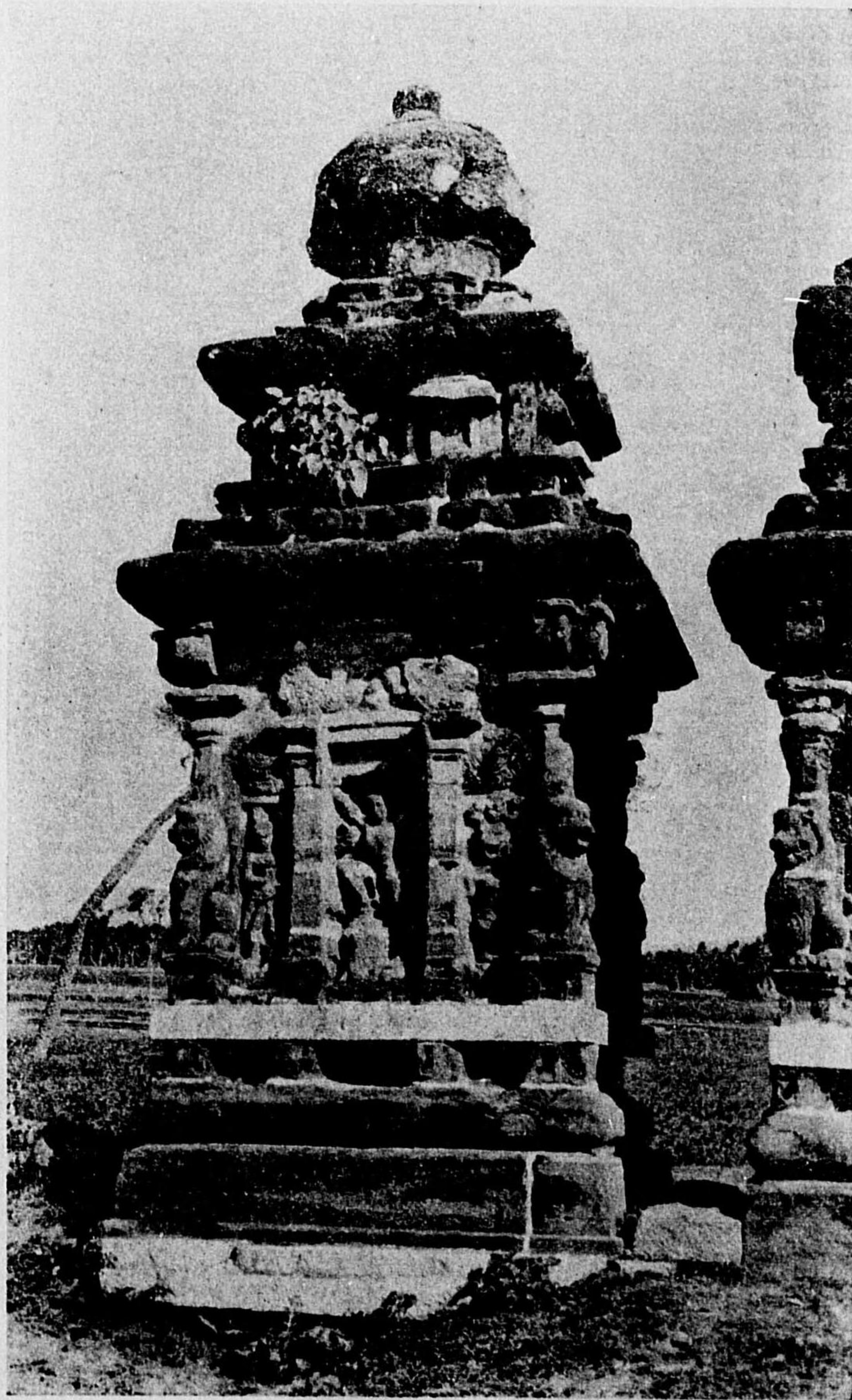
コンジューベラムのカイラサナータ廟 側面全景 (昭和十一年一月十日)
 コンジューベラム (Conjeevaram) ーにカンチプアラム (Kanchipuram) といひ、古のバラバ (Pallava) 王朝の首府であつた。此の町には多くの印度教廟があり、そのうちには随分大規模のものもあるが、我我に最も興味ある古いのは、ここに示したカイラサナータ廟 (Kailasanatha Temple) と、次に掲げたバイクンタ・ベルヌール廟 (Vaikunta Perumal Temple) である。本殿に勿論、正面及び境内に並び建つてゐる小廟は、何れもよくドラビタ式を現はしてゐる。時代は第7世紀末。(第344—345頁参照)。



カイラサナータ祠正面北端の小祠 其一

此祠は東面してゐる。さうして其前に圖の如き向拜附方一間の小祠が八棟並んでゐる。本殿四隅の片蓋柱は獅子、向拜の柱はヤリ（Yari）——ヤリといふのは何か知らないが巻いた角の生へてゐる獸形の動物である——が下方についてゐる事ママラブラムの建物に於けるが如くである（第336頁）。今此所には最北端のもの、即ち向つて右端の小祠の正面と背面とをだしておく。向拜（次頁へ）

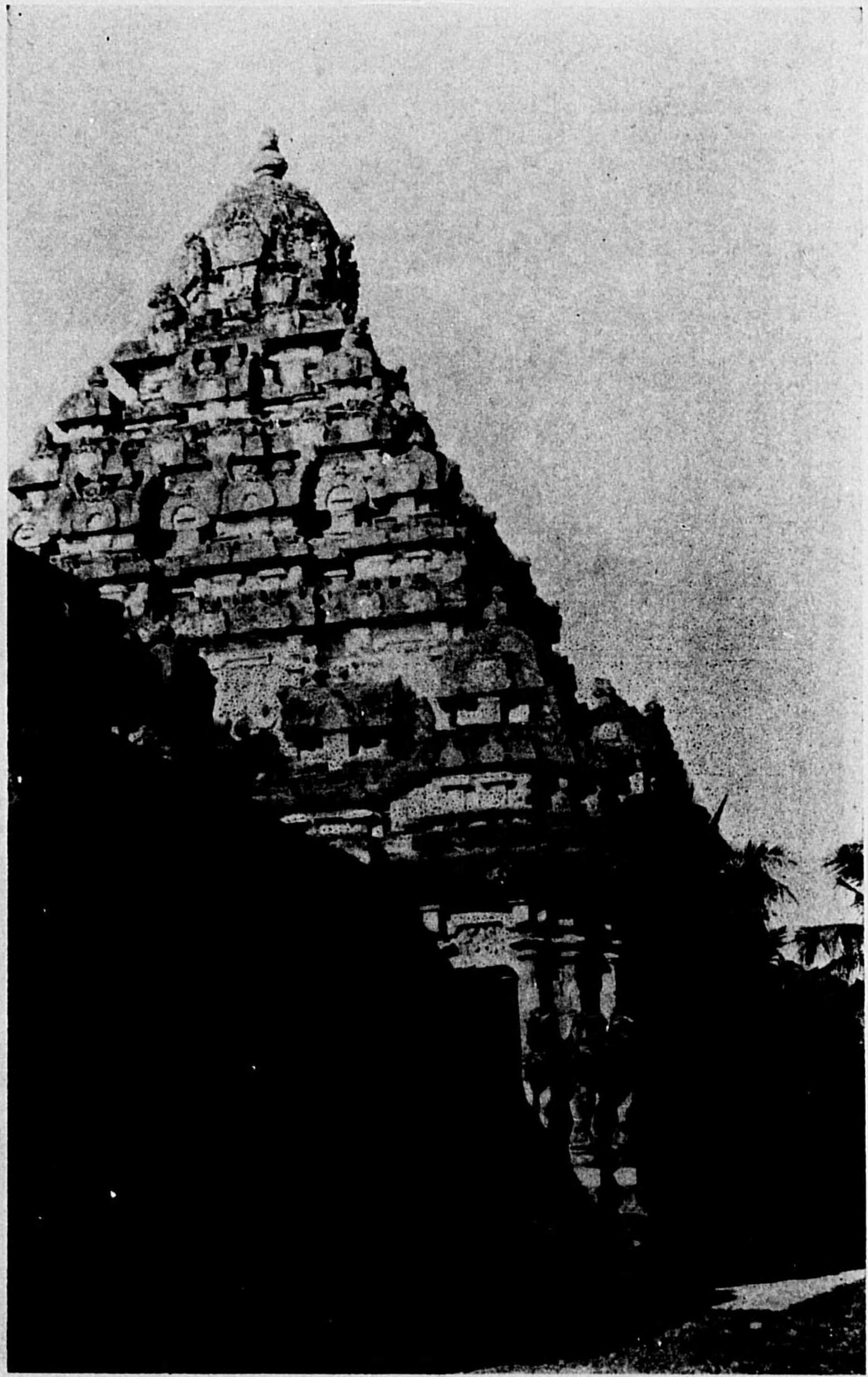
（昭和十一年一月十一日）



カイラサナータ祠正面北端の小祠 其二

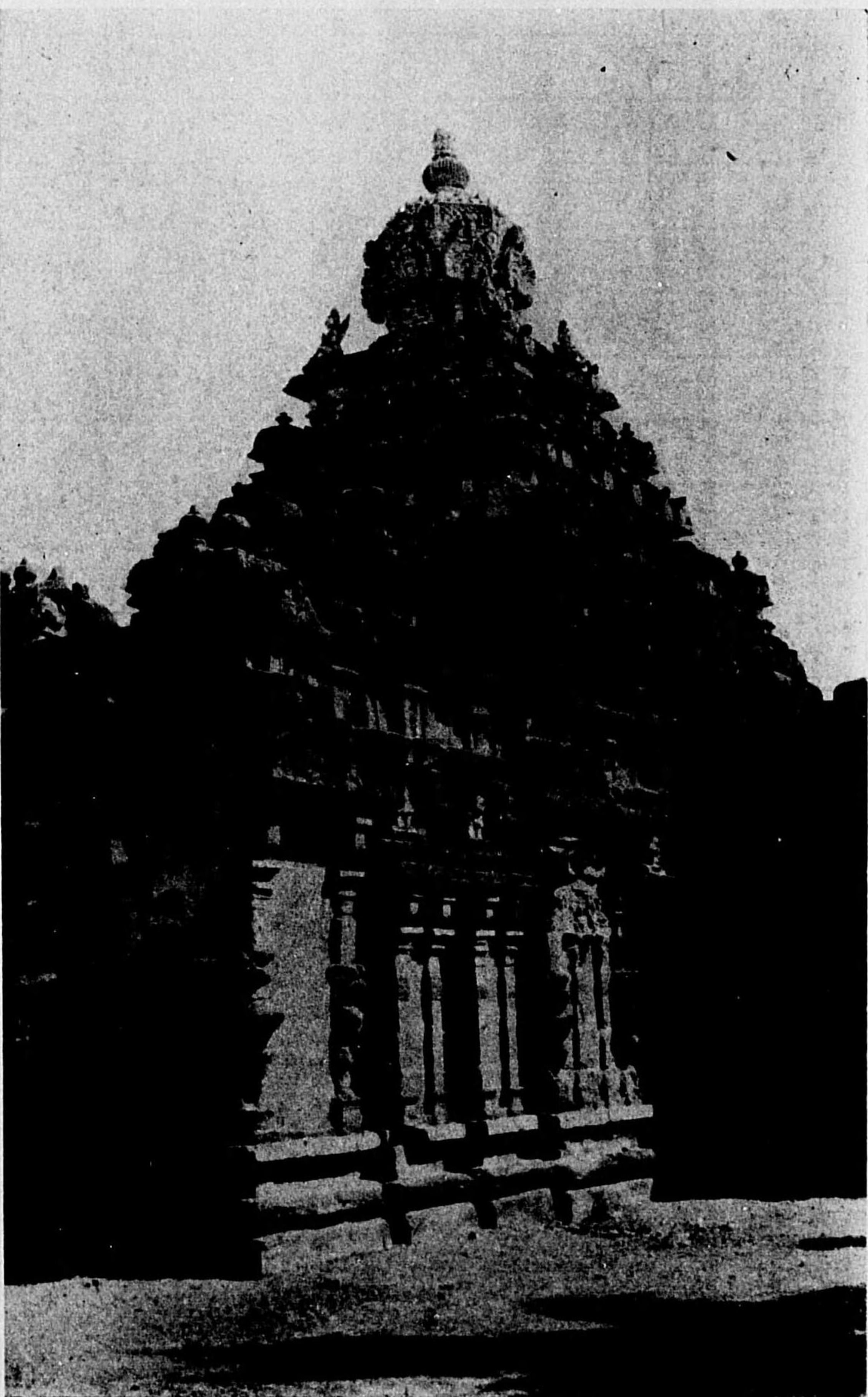
（前頁より）柱下部がヤリで、本殿四隅の片蓋柱下部が獅子である事が、この二枚の寫眞で明かであらう。屋上には八方の軒に各ベチメントを有するドームをあぐ。ママラブラムに於けるラタの如く、紛れのないドラビダ式である。後面軸部中央柱間の像はシバで、下に蹲れるは象である。

（昭和十一年一月十日）



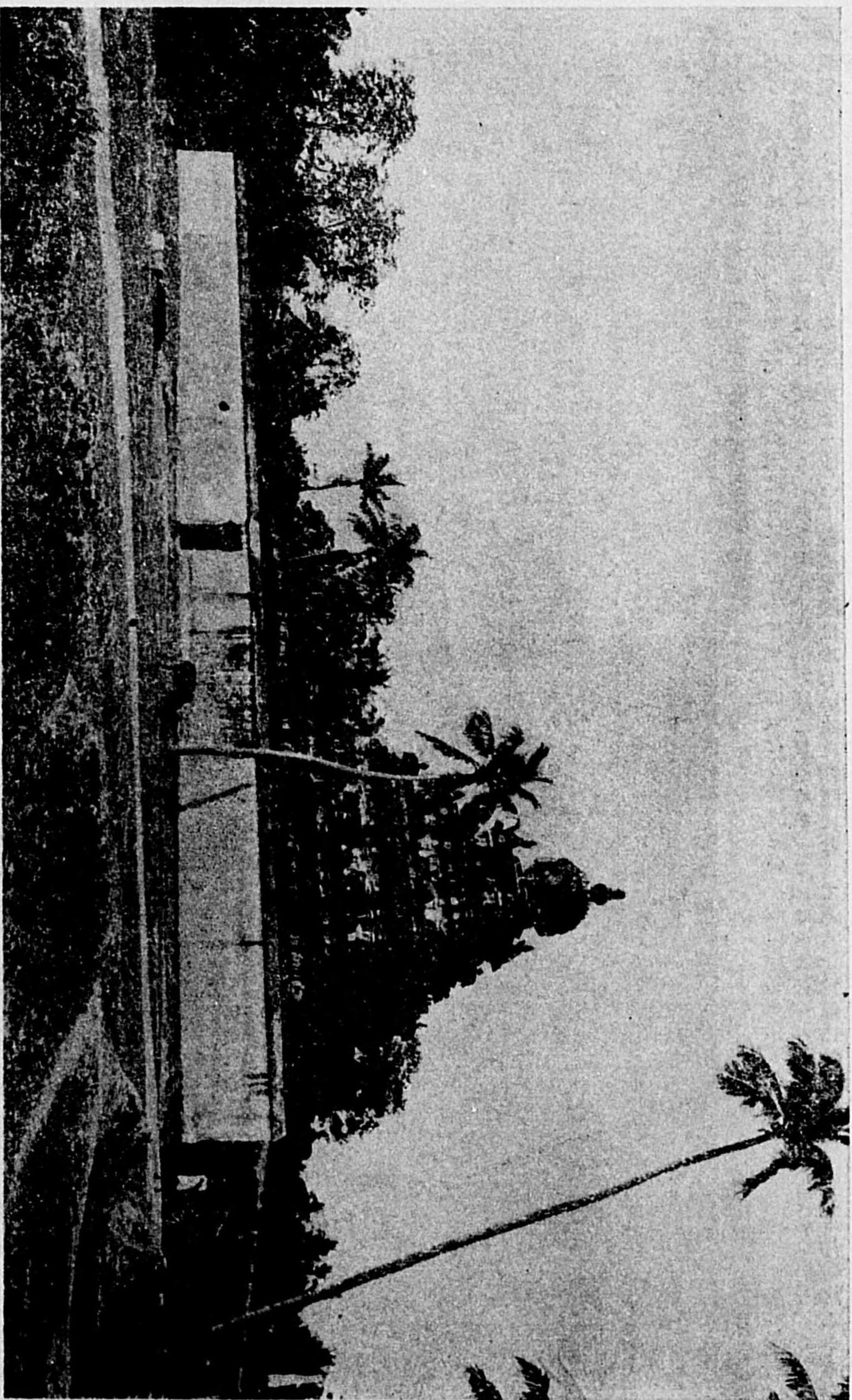
カイラサナータ祠本殿を東北方よりみる。
 本殿はやはりママラム所在のラタ式である事が、此寫眞をみただけで直に判るであらう。此側面及背面に小祠が七棟附屬してゐるが、其中の一なる東北隅のもの、即ち正面左角の、本殿と同方向に面せる小祠の隅の三本の片蓋柱に注意せよ。黒い陰の大石壁は後世前のマンダバムと本殿と連ねたものであるが、其全體の半面は、恰も我國の權現造の如くになつてしまつた。

(昭和十一年一月十一日)



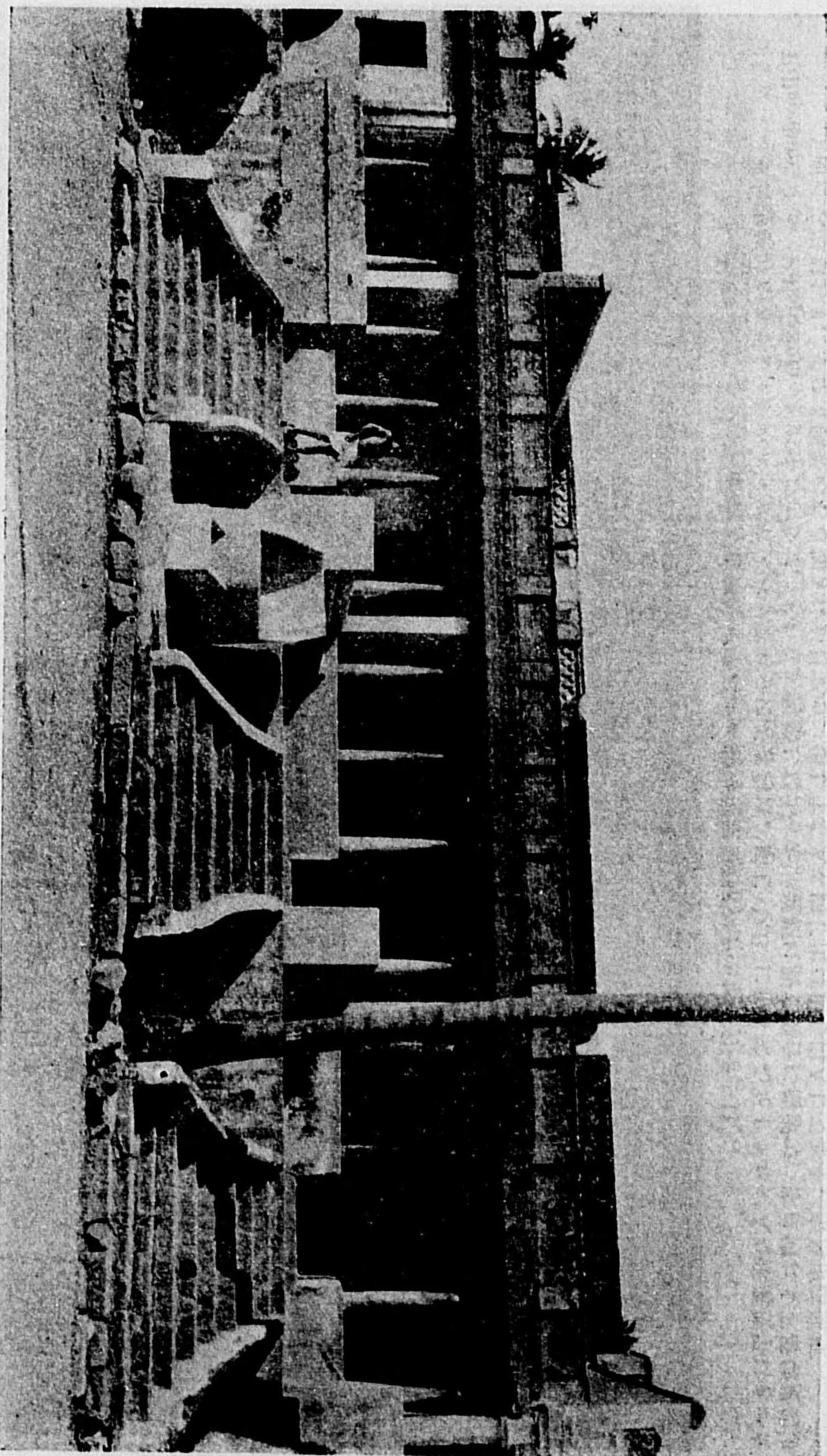
バイクンダ・ペルマール (Vaikunda Perumal) 祠本殿
 バイクンダとは毘紐天の樂土で、毘紐天は常にペルマール(偉大なる神)といふ様に命名されてゐるのださうな。だから先づこれは「大毘紐天堂」といふ様なわけであらう。此堂も亦、前例の様に見ゆるが、これはマンダバムが本堂に續いて居るから、これでは權現造といふわけには行かない。此ピラミッド型の本殿は珍しい事に四階になつてゐる。寫眞に於いてバラバ式の片蓋柱とシカラとが著しく眼に着くであらう。

(昭和十一年一月十一日)



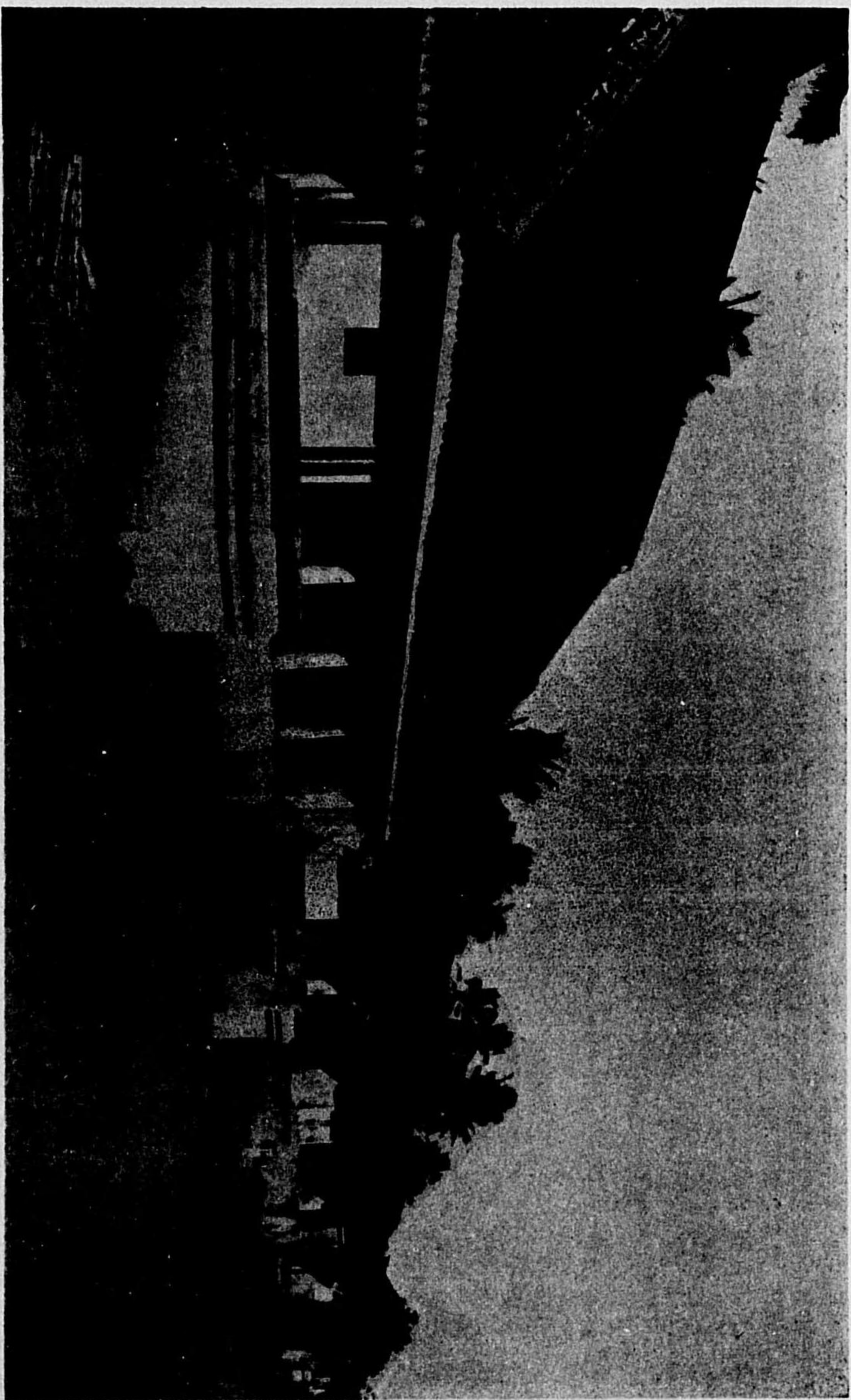
バイクンカ・ベルール祠全景 (昭和十一年一月十一日)

全景を先にだとよかったが、両方の本殿を向ひ合はした方が比較に便利だからさうした。それでこれが終りにきたのである。周囲が白い舞だから、カイラサチナータ堂に比べて相當に淋しい。併し其境内からツカカを冠せるピラミッド型のプラピダ建築が突兀として天に沖してあるところ、堂堂として洵に立派である。



コンデーベラム市の民家 (昭和十一年一月十一日)

停車場から約二哩を距つといふスリ・デワラジャ・スワミ祠 (Sri Devaraja Swami) 西門前に、この様な民家があった。長屋ではあるが、さうして住民は年中暑いのでから裸體で、お行儀は少しばかりよくないが、住宅はこの如く非常に立派である。立派といふのは材料をいふのでもなし清潔さをいふのでもない。正面には堂堂たる階段があり、出入口の前には少くとも開張の如く見ゆる四本の柱を立てたる所、ギリシヤあたりの四柱式堂 (Tetrastyle temple) を並べた様である。私がかみしたのは此の附近だけであつた。



コンジーンラム市城外ピラパルム村の民家(昭和十一年一月十一日)
コンジーンラム市城外なるムニシバル・ダク・ベンガローに近き村は、同じD.B.に泊つてゐたドラビダ人の水道技手にきいた
ら Pllapalum とか Pllapalium とか呼ぶさうで、どちらか判然しなかつた。道幅は廣く割合に清潔で、家は何れも單層切妻造り、
正面に平場があり、やはり開張のある如き柱が目立つ。但し牛も人も同じ出口から出入してゐる。奈良市法蓮町の
特殊の民家を思はせるものである。

海岸だから魚がとれるのは當然である。此邊では新鮮なる小魚の入手は、例ひ海が荒れてゐても、小川の河口位でとれるらしい。夕食は其新しい魚をワッサンがフライにしたりして、洋食を試みた。湯もあつくて澤山あり、一日中しめった身體を洗い清めて、「内外清浄」となつたつもりか何かで大に納まつた。夜に入り東方が晴れ、星が澤山出てゐた。中中いちが悪い。併し夜中何回も驟雨が來襲をした。此地方はこの頃雨期ださうで、どうも實にしつこい。印度はおそろしく廣いので、場所によりかう違ふから始末に悪い。どうも二年位印度にごろごろしてゐなければ、完全に目的は達し得ないと思はれる。翌二十五日は最後の日である。だから更に一巡し、殊に大きなナガとナギニとを實によくみた。この位よくみたら、もう心の残ることはあるまいと思つたが、扱て今になつてみると、もう一度見たくなつた。所詮凡夫はどこ迄も凡夫に過ぎない。

一一・〇〇 歸り晝食、一二・〇〇 渡川、一二・二〇 發、今度は道草を食はず、眞つ直に一四・二六マドラス歸着。直行正に二時間と六分。出發前からあれ位楽しみにしてゐたマ馬拉ブラムは、晴天と雨天裏に、孟買のTさんとマドラスのモハンラルさんとの厚意により、見學を了することができた。

六八、マドラスからコンジーンラム (Conjeeveram) (地圖) へ

昭昭十年十二月二十五日夜、マドラスを發してクンバコナム (Kumbakonam) へ向ひ、タンジョーフ (Tanjore) ・トリチノポリ (Trichinopoly) ・チンネネリを経て錫蘭嶋に渡り、引返してラメスワラム

(Rameswaram)・マツラの大堂を見學して、再びマドラスへ歸つたのが昭和十一年一月九日の朝で、此日博物館にアマラバチ塔婆殘闕の復習の見學をした。翌日汽車でコンジールベラムへ出かけた。マドラスのエグモア (Egmore) 驛からチングルバーター (Chingleput, Chenglepat, Chengalpat) へ行き、のりかへて行くのであるが、汽車の連絡がよくなって一時間ばかり乗換驛で無駄になった。

コンジールベラムの驛には、宿泊し得る待合室はあるが、これはいやだから、約十分位の距離にある D・B・へ行つた所、それは極苦手の P・W・D の I・B・であった。此では駄目だらうとあきらめたが、果して許可證がなくてはいけないうで、それがチングルバーターの收税吏の管轄に屬してゐるのであつた。最初からさういふ事が判つてゐたら、ママラプラムと同時に許可證を貰つておいたし、例ひさうでなくとも乗換で一時間も待つた間に、ワッサンを走らせれば物になつたかも知れないが、今となては何とも仕方がない。漸く氣がついて、此町にも代理人はゐるだらうから、其人で何とかなるかも知れぬと思ひ、ワッサンを使にやる事にした。

彼が出て行つたのは一二・〇〇で、歸つてきたのはやがて一三・〇〇であつた。其返事によると、收税吏の代理人は前日から隣村へ行つて歸つて來ないので、市役所へ行つて許可を得やうとしたが、市吏員には其權能がないからと断はられた。其代り市直屬の D・B・が約 3 哩の距離にあるから、そこへ行つてはどうかといふのであつた。従僕が氣がきくと萬事かういふ風に都合がよくいく。私は大に喜んで直にさうすることにきめた。

行つてみたらそこは市の郊外で、建物は森林中にあり、日あたりはよくないが、暑いところだから涼しくて非常に氣持がよく、居間・寢室・豫備室・風呂及便所と四室一組になつてゐるのが二組一棟の下にあるので、そのうちの二組を市吏員で水道掛手のドラビダ人の一家で占領してゐた。此水道掛手は若い人だが色は飽迄黒く、頗る流暢に英語を話す。さうして非常に親切で、いろいろ世話をしてくれた。ひまがあると話しにでてくる。構内に水道の配水装置何かあるが、それをみるといつて自身案内をして説明してくれた。

此日 (即ち一月十日) は一四・三〇に觀光に出かけた。私は第一にカイラサナータ・ラムンル (Kilasana-tha Temple) へ行つた。此建物は此地に於ける最古の殿堂で、バラバ建築の代表とするに足るもので

*the Pallavas possibly rose to power on the decay of the Andra power in the third century, and they seem to have secured much of the Chola country, probably before the 5th.the Pallavas extended their rule over the Bellari district and parts of Mysore; but in the following century (八世紀の事) we learn that the Vikramaditya II, the Chalukya king, about 740, defeated Nandivarman Pallava and entered Kanchi (今のコンジールベラム), bestowing gifts on the shrine of Rajasimhewara—now the Kalisantha temple—built by Narasimhavarman II. A century later they were attacked by the Rashtrakutas, and their power seems to have been broken, and they gradually succumbed to the Cholas, who re-asserted their power in the 10th century (H. of I. & E. A., Vol. I, pp. 306, 307).

ある。後に孟買市でみた新聞紙に、此殿堂で古いフレスコ畫が発見されたとあつたが、まるで知らなかつたのでさういふものに氣がつかなかつた。それから市内の大殿堂の一を見學をして夕刻歸宿をした。氣が落ついてすべて愉快に楽しく、よく來たことだと思つた。此 D・B・は Conjeevaram Municipal Dak Bungalow といふ。後の旅行者は驛へ下りたならば、直にミニシバル・ダク・バンガローへ行けといへばよろしい。別に前以て手續をしておかないでも泊れる。

何にしる此所には印度教の殿堂は多數あつて、何れも立派な大きなものばかり、さうして都合のいい事には、大概内部へ入つてみる事ができるのである。そのうちで古くて最も面白いのはカイラサナータ堂で、私をして言はしむれば、これ一つみるだけでも、ここへ來る價值は充分である。但し素人には市中にある新しいが大きなの方が見榮があつてよろしい。

夜は螢が飛んでゐた。但し僅に一疋だけである。これが一月十一日の夜のことと、それ限りみなかつた。二夜共何度もペランダへ出てみたが、一疋もゐなかつた。先年(大正十二年一月二十五日夜)錫蘭のアナラジャブラに於いてみた様な壯觀——無数の螢が飛び交はしてゐた——は到底みられなかつた。

一月十二日マドラス市へ戻り、十三日朝マドラス・セントラル驛發、翌十四日午前孟買(V・T)へ歸着したことは、既に第二回に述べた通りである。

(昭和十二年四月二十九日稿了)



甲谷他博物館出陳マツラ出土釋迦立像

(大正十二年一月十二日)

印度佛塔巡禮記

(第九回)

六九、華氏城址の塔婆玉垣

華氏城即ち古の巴連弗邑 (Pataliputra) は、今のパトナ (Patna) の近くにある。ここはいふ迄もなく阿育王の都のあったところで、法顯も玄奘も嘗て来たことがある。建築等は大幅に立派であったと見え、【法顯傳】に

城中王ノ宮殿ハ皆鬼神ヲシテ作ラシム、石ヲ累ネテ牆闕ヲ起シ、彫文刻鏤ハ世ノ造ル所ニ非ズ、今モ故ヨリ現ニ在リ

とあるのでも想像が出来るように、王宮が輪奐の美を極めたことは、到底人間業ではない、鬼神でなくてはできない位であった。それだから定めて其當時としては、設備も完全に近かつたのであらう。尙ほ同書に

阿育王七塔ヲ壞シテ、八萬四千塔ヲ作りシトキ、最初ニ作りシ大塔ハ、城南三里餘ニ在リ。此塔ノ前ニ佛跡アリテ精舎ヲ起セリ。戸ハ北ニ向ケリ。塔南一石柱有リ、圍丈四五、高サ三丈餘、上ニ銘題アリテ云ヘリ、阿育王閻浮提ヲ以テ四方僧ニ布施シ、還タ錢ヲ以テ贖ヒ、是ノ如ク三反セリト。塔ノ北三四百歩、阿育王本ト此ニ於イテ泥梨 (Nigeh) 城ヲ作レリ。泥梨城中石柱アリ、亦高サ三丈餘、上ニ師子アリ、柱上ニ銘記アリ、泥梨城ヲ作レル因縁及ビ年數ノ日月アリ。

といふ調子であるし、また【大唐西域記】にも随分詳しく載せてあるが、ここには全部省略しておく。

華氏城址はワデル (L. A. Waddell) 氏によりて發見され、調査され、【波吒釐子城址發掘調査報告書】(Report on the Excavations at Pataliputra (Patna), the Palibothra of the Greeks.) として、一九〇三年(明治三十六年) 甲谷他に於いて發行されたが、これに詳細のせてあるし、其他【印度考古局年報】(Annual Report of the Archaeological Survey of India, 1912-13) に、故スプーナー博士によりて發掘調査された記事がある。

さうしてそこから發掘された品は、今はパトナ博物館に陳列されてゐるが、最初ワデル氏が掘り出した塔婆玉垣殘闕は、今でも甲谷他博物館内にボールハット玉垣と同室においてある。一四四に掲げたのは即夫だが、ワデル氏の報告書に載せてあるのと、同じ様で少しばかり異つてゐる。此事に就いては、報告書所載の圖を復寫して【印度旅行記】に掲げ、それに解説をつけておいたが(29頁)、つまり柱が左と右と位置が替り、三本の水平貫のうち、中央にあるべき角文を有するものが一番上になり、滿開蓮花の圓文を有するものは、上のが下へおりたか、或は下のは元のままで上のが亡なつたか、何れかになり(?) (或はとりはづして倉庫へ入れてあるのか)、其上に柱の左右に突出してゐる貫と、最上部の笠石とは、同じく其場所にはなく、大分淋しくなつてゐる。

此二つが同じものか別のものか知らぬが、まさかこの様に似たといふよりは全く同型のが二つあったとは思へぬから、これは多分陳列の時、かういふ工合にかへたのであらう。昭和十一年三月初めにみた時も、大正十二年一月の時と同位置に同様においてあつた。此角文内左方の人物は、ワデルのいふ如く

佛・菩薩ではなくて、龍王 (Nagaraja) らしく、左方柱中央圓文内の子供を抱ける馬首人身の女體は、緊那羅といふことに考へられるが、ビンセント・スミス (Vincent Smith) の様な大家もそれに賛成の様だが、私はさうは思はない (『印度旅行記』第407頁)。とにかくこれは甚だ面白い彫刻で、ブダガヤの大塔玉垣圓文内にも現はれてゐるから、どうも大分愉快なのである。

七〇、スワット溪谷發見の小塔婆

印度の西北も西北もずっと西北、ベシヤワリーのまだ北の方にスワット (Swat) といふ川が、北から南に向つて流れてゐる。此川はアフガニスタンから流れて來てゐるカブル川と、ベシヤワリーの北方に於いて合流し、東に流れて信度河に注いでゐる。このスワット川の流域をスワット溪谷 (Swat Valley) といふ。この溪谷は随分長いから、どの邊からでたのか知らぬが、とにかく面白い小塔が發見されてゐる。一四五に示したのが即ち此小塔の全形である。

既に記した通り、健駄羅式塔婆の一特徴は、圓形又は方形の基壇の上に、伏鉢が建つてゐることである。タキシラのクナラ塔、タクチ・バハイ廢寺の塔、シャール・ジ・キ・デーリのカニシカ塔、少し南へよるがモヘンジョ・ダロの塔、何れもさうであつた。工藝品ではモラー・モラーツ僧坊内の小塔婆が圓形の五重の基壇の上にあつた (九九・一〇〇)。殊にこの最後のものと同形式のものを、再び此塔に於いてみる事ができるのである。基壇の上に建つてゐるのみならず、相輪の多い事も亦同様である。

讀者諸君は、タキシラの小塔及びこの形をよく研究されるとよろしい。私は本稿の終りに奈良藥師寺三重塔相輪の寫眞を掲げるつもりであるが、その時それと比較してみると甚だ面白いのである。尙ほ平頭上部に併列してゐる三角形をなせる裝飾に注意すべきである。

七一、パールハット塔婆

一八七九年といふと、明治十二年だから、丁度今から六十四年前だが、英國に於いて「THE STUPA OF BHARHUT, A BUDDHIST MONUMENT ORNAMENTED WITH NUMEROUS SCULPTURES, ILLUSTRATIVE OF BUDDHIST LEGEND AND HISTORY, IN THE THIRD CENTURY B.C.」といふ長い名の本、略して「STUPA OF BHARHUT」といふのが、印度考古局の年報として出版された。著者は例のアレキサンダー・カニンガム。それによると此塔婆は一八七三年 (明治六年) 十一月の終りに近く同氏によりて發見されたもので、當時其大部分は5呎から7呎の深さにゴミクタと一所に埋没されてゐたが、それでも一部分は尙ほ原位置にあつたさうである。其翌年二月同氏は此地に約十日間滞在し其埋没した一象限の發掘を了し、附近の住民は驚異の眼を睜り、連日數百名の見物人で賑つたが、其銘文を讀むに及んで、一層識者の間に驚きを増したといふことである。

同年三月初、カニンガムの助手ベグラ (J. D. Beglar) 氏は、玉垣全周に亙つて發掘を試み、幾多の有益なる發見が續いたので、到底短時日に成功覺束なく、遂に四月上旬を以て一先づ工事を中止せねば

ならない様になつたさうである。十一月、彼は復た助手と共にパールハットに戻り、徹底的の調査を試み、其結果として遂に東門の復原圖をつくる迄に至つたが、此時の發掘は十二月末までかかり、多大の收穫があつたさうである。パールハットを中心とし、徑10哩の圓内の村落は充分に搜索されたが、其結果は外側玉垣に屬した二本の柱が見出された。ある本生譚を刻した圓文の半分は、7哩を隔てたバタオラ (Pataora) 部落の洗濯屋が洗濯板に用ひてゐたといふ事で、目出度く發見されたさうである。

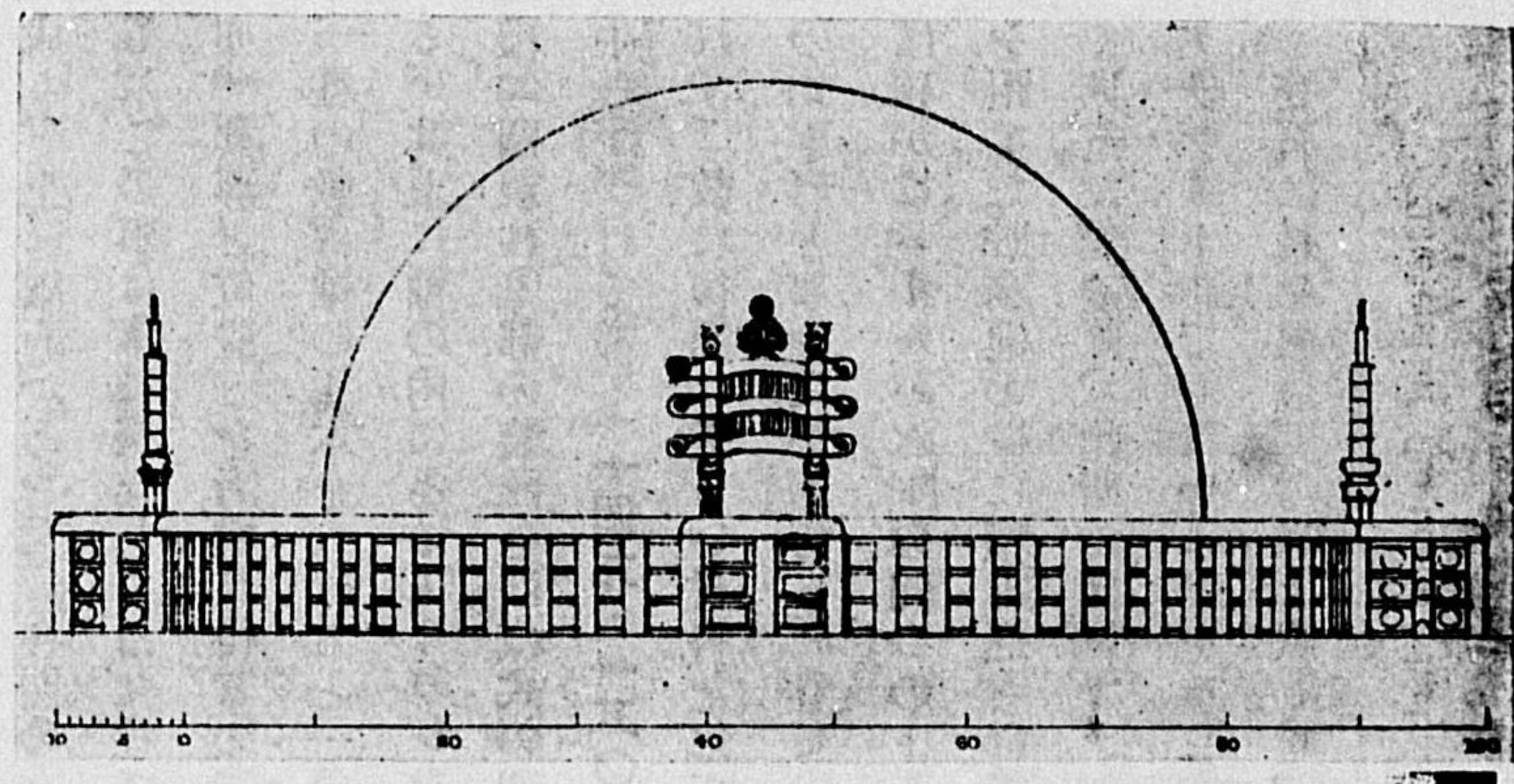
我國に於いては、薬師寺佛足石の碑を裏返して溝の小橋に用ひてゐたといふが、これは私が目撃したのではないが、大に感心させられたのであつた。所が去る大正元年十一月、初めて奈良縣吉野郡黒瀧村鳥住の寶閣寺へ、理源大師の廟塔と稱する鎌倉末の石塔を見に行った時は、寺の坊さんは元より、村の人まで誰一人これが世にも珍らしき優秀な美術品だといふことに氣附くものなく、其基壇の羽目板として用ひられてゐた格狭間を刻した石片は、取はづして半町ばかり後方に運ばれ、樵夫の薪割臺に用ひられてゐた有様であつた。この點に於いては、バタオラの洗濯屋と鳥住の樵夫と、洵によく似てゐる。ただ其異るところは、彼は7哩を隔ててゐたのに、これは僅に半町だから、差引ざつと百町位の違ひだけである。いくら優秀な美術品でも、かういふ連中であつては到底助からない。

* * *
パールハットの村は、ウチャハラ (Uchahara) の東北6哩、ジャバルプール鐵道サトナ驛 (Satna, Satna) の正南9哩、アラハバード (Allahabad) の西南120哩といふ位置にあること、一四六の如くで、

尙ほ此圖によると、孟買の東北、マウント・アブツの東、マツラの東南、サヘト(祇園精舎址)の殆んど眞南、クシナガラの西南、バトナの西南、グダ・ガヤの殆んど西といふ位置で、北緯25°の少し下で東經80°の少し右に當つてゐる。ここはバイロンプール (Bhaironpur) と呼ばれた古都のあつた所ださうで、人家落落従て人口も調密ならず、現在附近の村落は古都の一部であつたさうである。其證としては、大型の煉瓦が隨所見出されるといふも、實は此等の煉瓦はこの大塔婆から持出されたもので、證據にはならないさうである。けれどもパールハットは往昔相當の大都であつたと見られるのは、長さ1哩幅1/2哩の面積は、陶器の破片と破損した煉瓦とに覆はれてゐるのでも判るといふことである。

カニガム氏が最初此地に來た時には、二三の柱と笠石と門柱の一部とが残つてゐたこと一四九の如くであつたといふ(ピルセント・スミスの著書にも内部からみたところの複寫がのせてある)。さうして種種調査の結果、玉垣内徑88呎4 1/2吋といふ事が判つたが、塔婆其物の寸尺に就いては、何も得る所がなかつた。併し遂に玉垣内石敷の部分が10呎4吋の廣さをもつてゐることが知れたので、これによりこの石敷の終れる所は即ち塔婆基礎の周邊と見るべきである筈だから、88 4 1/2吋—20' 8" = 67' 8 1/2吋 即ち67呎8 1/2吋あつたことになるのである。さうして附近に見出される煉瓦は、12 × 12 × 3 1/2吋(單位)であつたが、厚さ5—6吋の更に大きなものもあつた。併しこの大きなのは何れも破片のみで、完全なのは一個もなかつたさうである。尙ほ面白いことには、

* The tope itself, which seems to have been about 68ft. in diameter, had entirely disappeared, having been utilized by the natives to build their villages (H.I.E.A. Vol. I, pp. 104, 105)



パールハット塔婆推定復原圖 (STUPA OF BHARHUT 附圖複寫)

四方の玉垣はサンチ第二塔(七二)の様に、四方に同じ方向に軸がでてゐるから、恰も偉大なる卍の様である(一四八参照)。さうしてサンチ第一塔にみる様な石門(六五)が、この軸の内にあるのだから、玉垣からだけでは、丁度サンチ第一塔の夫れと第二塔の夫れとを一所にしたやうなものである。其柱や貫に現はれた圖文は、實に美事で類例がない位である。

は三つに破るために、あなをあげたままにしてあるものもあるが、このことは當時のジャギルダアの祖先が、此地を領有した時中止せしめた證となすに足るといへるのである。まるで種なしにしてすはないうちに、やめたのはせめてもの幸であつたといへるのである。

此大塔が発見された當時は、漸くその位置を考へ得た位であつたが、周囲の舗装から當初塔婆が圓形の平面を有し、普通の形式のものであつた事が、半肉彫刻から推定し得たのであつた(一四七・一四八及び一四九)。即其伏鉢は半球形で平頭を有し上に相輪をあげ、各輪の周圍からは吹流しや花綵が裝飾として下がつてゐたと考へられるのである(一五一・一五二)。

玉垣は四方に門があり、圓周を四象限に分けてゐた。各象限の部分は16本の柱と3本の貫とより

上部 $13\frac{1}{2}$ 吋下部 $4\frac{1}{2}$ 吋で兩側に二段ある三角形を逆にした様な龜が、 $8\frac{1}{2}$ —9吋の間隔に塔婆の側面に配置されてゐたので、 $212\frac{3}{4}$ 呎の全圓周には、此種の龜が約120あつたことになる。さうすると一つの龜に5個のランプを置き得たのだから、照明のためには總計600個のランプを用ひ得たことになる。

發掘當時に於いては、此村は戸數200以上であつたが、全部塔婆から取つた煉瓦で建ててあつた。煉瓦の盗用は近年迄行はれたが、遂に其進行に伴ひ塔身より小箱が発見された。此小箱は舍利容器であつたことは推察されるが、ナゴッド(即ちウチャラ)王に献じたさうである。併しこの小箱は今でもラジャの所蔵であるか、何が入れてあつたか、いくら訊いても土人の答は曖昧だつたさうである。

カニングムによると、當時此地を領有してゐたジャギルダアの話に、其時から六十年前迄は玉垣も殆んど完全であつたといふことであるが、實はこれは少しく疑問である。といふ理由は、バタンマラ(Batannara)の城塞は、パールハットから採取した石材の多くを用ひて築造されてゐるが、既に200年以上を経過してゐるのでも明らかな筈である。

比較的重量の多からざる石材は搬出容易であるが、重いものは動かすににくいから、石工をして適當の大きさに壊はさしたと思はれる。そのことは破片が散亂してゐるので想像ができる。またある石は二つ又

* Jaghir, [Anglo-Ind.] The Government revenues of a tract of land assigned with the power to collect and administer; as the jaghir assigned to the East India Company by the nawab of Arcot. Jaghir-dar, n. The holder of a jaghir. (FUNK & WAGNALL'S S.D.)

成り、上に笠石があった。各門の有様は一四八の如く、トールン (Toran) は袖の内部にあったのである。この事は幸に残存してゐた柱で判るが (一四九)、甲谷他博物館内に陳列せる復原模型によりても亦、其形と位置とを考察し得るのである (一五〇)。

柱の数は袖の4本を入れると一象限に20本となる。だから四方で80本なることは當然過る位當然である。其上に袖の内にあるトールンは、八角柱を四本集めた様な形で、其上部には阿育柱頭にみる如き唐様勾欄親柱上部の裝飾と同様式の開敷蓮が4個集り、共通の方形平板をのせ、更に其上に二翼獅と二翼牛とがつけてある (一四九・一五〇)。併しながら三本の貫と其鼻及び最上貫中央の裝飾は殆んど見出されず。故に復原は乏しい材料を以てしては不充分であるが、若し揃つてゐたら、恰もサンチ大塔の夫れの如き形となつたであらう。昔て【印度旅行記】第419頁の上方に掲げた貫鼻の寫眞は、今となつてみれば確かにパールハットの四つのトールンの中のどれかだと判つたが、此はカニンガム氏が、西方約1哩を距てた貯水池の壁に積み込まれてゐたのを発見したのださうであるが、サンチの場合に比較的重なりく見えた先端は、此所ではマカラ——元は鱗かも知れないが、これはマカラであり、クロコダイルでもアリゲートルでもない——をうまく利用したため、一段の進歩を示してゐる。

笠石は長7呎以上、高1呎 $\frac{1}{2}$ 、厚1呎8吋、其接手は柄差にしてある。さうして笠石の總長は、四

* The end of the beam, which is straight and heavy in the Sanchi examples, is here sloped downwards, and a spiral is formed not unnaturally of the curled tail of a crocodile (STUPA OF BHARHUT, p. 6.)

方の袖垣の分も入れて330呎、内外面共細かい彫刻が一面につけてある。其數40個のうち15個だけが發掘されたので、全體の $\frac{3}{5}$ が亡くなつたのである。其内側には本生譚 (Jataka) 又は其他の場面を刻してあるが、外側は満開の蓮花唐草で埋めてある。

内外共下部には瓔珞と鈴とを下げてあるのが少なからず興味を惹く。といふのは、この意匠は法隆寺金堂内天蓋の下部の夫れと同じもので、彼と此とは偶然の暗合として片附けて了ふことはできないやうに思ふ。上部はナンシク窟院の塔婆平頭上部に於いてみた様に (五五)、方錐形に積んだ長方形の石を並べ、その間は埃及式蓮花で埋めてある (一四九・一五三)。

玉垣の柱は高7呎1吋、大きさは少しゴヒラで1呎 $10\frac{1}{2}$ 吋 (正背) × 1呎 $2\frac{1}{2}$ 吋 (側)、隅柱1呎 $10\frac{1}{2}$ 吋 × 1呎 $10\frac{1}{2}$ 吋、これはサンチのそれと同寸法であるが、高さに於いて1呎低い。その面はサンチ第二塔の夫れの如く (七三)、中央と上下とに圓文を刻んであるが、上下は半圓になつてゐる。各柱間には三本づつの貫を入れ、其面にも亦一個づつの圓文がある。此等の圓文内にはいろいろの薄肉彫刻を入れてある。何れも主として蓮花であるが、ジャタカもあつたり、時には珍らしく羯摩杵の原型と認められるような形もある (一五四)。

一五五は柱の一つに現はれた圓文彫刻の一つであるが、これは祇園精舎の光景である。此圓文下方に銘文がある。これは

Jetavana Anāhapediko deti Kotisantharena Ketā

とよむのだらうで、チルダーム (Childers) は

“Anāthapindikō presents Jetavana, (having become) its purchaser for a layer of kotis”

と譯してゐる。給孤獨尊者が如何にして祇園精舎を建設したかの場面を刻したもので、前景に牛車——この牛車は車の形も牛も今日印度で用ひてゐるのと全く同じだから面白い。逝多太子の時代から連綿として變化がない。併しこれ位はいはば朝めし前のことで、B・C・三〇〇〇の遺跡なるモヘンジョ・ダロからは、これも亦現今の形とまるで變らない牛車の玩具がでてゐる——があり、丁度貨幣を積んでここに着したところで、牛は車からはなしてあり、貨幣もおろしたので、車の前方は上を向いてゐる。前方には二人の男が何か小さいものを両手に一つづつ握んでゐるのは、尊者と其會計方が錢勘定をしてゐるところと解せられ、其上方には同じく二人の男子が地上に金貨を敷き詰めてゐる。左方六人の人物は祇多太子の一行、中央に土瓶か藥罐の様なものを持って立つてゐるのは尊者で、土地献上の證として太子の手に水を灑がんとしてゐるのだといふ事ださうである。この圓文の下方にもまた、埃及式蓮花が彫刻してある。

此圖中に建築が二棟ある。此等の建物はガンダ・クチ (Gandha-kuti) とコサンバ・クチ (Kosamba-kuti) の二棟ださうで、遙か後に建てられたので、布金最中には勿論在った筈はないが、それを此所に現はしてゐるのは、時代錯誤といへば確かにさうであるが、名稱を附した寺院だから特に現はしたのであらう(以上スツーパー・オブ・パールハット第八十七頁より)。

パールハットの塔婆に就いては、私は甲谷他博物館にある玉垣をみただけで、其嘗ての所在地へ行つたのではない。殊に塔婆其物は全く亡くなつたのであるが、一般の渡印者も、甲谷他博物館に於いて玉垣を一見するだけで、細かい所はまるで注意せぬ様だし、【スツーパー・オブ・パールハット】なる書物も、今は殆んど入手困難なので、大體に就いて此書からかき抜いておいたのである。

其創建の年代に就いては、カニンガムは250—200 B・C・といひ、ファーガッソンは前第二世紀の中葉(160—150 B・C・)といつてゐる。

七二、アマラバチ塔婆

パールハット塔婆の報告書出版より八年後、一八八七年(明治二十年)に、南印考古局から「THE BUDDHIST STUPAS OF AMARAVATI AND JAGGAYAPETA」 IN 「THE KRISHNA DISTRICT, MADRAS PRESIDENCY」 SURVEYED IN 1882」と題した報告書がでてゐる。一八八一年(明治十四年)十二月と一八八二年(明治十五年)一月とに、マドラス政府の命により、塔址發掘の直後にした調査に就いて記載したものの由で、今となって洵に貴重な文献である。

アマラバチ (Amaravati) の地はクリシュナ河の南岸にあり、マッケンジー (Colin Mackenzie) 大佐が一七九七年(寛政九年)に發見したさうである。今のベツワダ (Bezavada) 驛から17哩を距つといふ。此地

は其昔玄奘三蔵が行つたといふ説がある。バージエヌ(Burgess)はベツワダの西方18哩にあるダラニクタ(Dharanikota)が昔の大マインヤラ(Mahā-Andhra)國の首府だといつてゐるが、カニンガムはダラニコッタ又はアマラバチであらうとし、ファーガッソンは今のベツワダがさうだとしてゐる。

【大唐西域記】第十卷、馱那羯磔迦國(Dhanakataka)の部に

城ノ東山ニ據リ弗婆勢羅唐ニ東山ト言フ僧伽藍(Fo-p'o-shi-lo-sen-kalan (Pūvasīā))有リ。城ノ西山ニ據リ、阿伐羅勢羅唐ニ西山ト言フ僧伽藍(O-fa-lo-shi-lo-sen-kalan (Avarasīā))有リ。此國ノ先王佛ノ爲メニ建テシトコロナリ。川ヲ奠メテ徑ヲ通シ、崖ヲ疏リテ閣ヲ峙テタリ。長廊歩齋、巖ヲ枕ニシ岫ニ接レリ。靈神警衛シ、聖賢ハ遊息セリ。佛寂滅ヨリ千年ノ内ハ、歲毎ニ千ノ凡夫僧アリテ、同ジク安居ニ入り、安居ヲ解クノ日、皆羅漢ヲ證シテ、神通力ヲ以テ、虛ヲ凌イテ去レリ。千年ノ後ハ凡聖同居セシガ、百餘年ヨリ、復僧侶無シ。而シテ山神ハ形ヲ易ヘテ、或ハ豺狼ト作り、或ハ猿狖ト爲リテ、行人ヲ驚恐セリ、故ヲ以テ空シク荒レテ、閔トシテ僧衆アルコトナシ。

とあるが、バージエヌはアマラバチの塔婆が、玄奘の謂はゆる「東山寺」であるとしてゐるけれども、少しも山等はなく平地的なのは、玄奘自身そこへ行かないで、聞がきだからそれで誤つたのだと解して

* The town of Dharanikota is the ancient Dhanyakataka or Dhanyakataka, the capital of Mahā-Andhra, and lies about eighteen mile in a direct line to the westward from Bejwāda, on the south or right bank of the Krishna river, above the bed of which it is well raised. (AMARAVATI AND JAGGAYYAPETA, P. 13)

ゐる。併し實はさうではなく、玄奘は確かにここに至つて、自身史蹟を踏査したので、行かずに書いたのではない。またシウエル(Robert Sewel)は【西域記】の原文を精査して、現代の地理にあて緻密に證明をして、「東山寺」・「西山寺」共にアマラバチではないと主張した。

然るにファーガッソンはバージエヌ説に賛成し、シウエルに反対をしたが、バージエヌ説のアマラバチが「東山寺」だといふのには不賛成で、彼は西山寺がさうだといつてゐる。慈恩傳の文にはバクトリア式で建築してあつたと言ひ、健駄羅美術の影響を受けた建築及彫刻がアマラバチにあるから、それが「西山寺」であるとし、距離に誤りがあるのは、編者が誤つたのだといつてゐる。かくの如く兩説あるが、自分はシウエル説に賛成である。併し参考のために書いておくのだと、【解説西域記】のうちに著者の堀謙徳氏はいつてゐる。

【密教研究】といふ雑誌が高野山大學から發行されてゐる。其第十六號(大正十四年三月發行)の中に、「アマラバチの塔と南天鐵塔説」といふ梅尾詳雲教授の論文がのせてある。それによると、塔はキストナ河の南岸、アマラバチと稱せられる町の南西角に位する Dipal-dinne と稱せらるる丘上にある。丘の周圍は高く中央は凹みて恰も摺鉢狀をなしてゐる。もと此の所は、婆羅の林で謂はゆる平地であつたらしい。…塔はアマラバチ町の西南にあるから、普通之れをアマラバチの塔と云つてゐるが、しかしカニンガム氏の古代印度地誌によると、西紀十二世紀にオリッサの王スーリヤデーブが初めて今のアマラバチの地に町を築いたので、それまではただ婆羅林に過ぎなかつた。従つてアマラバチの名も古くは知られ

てゐなかつた。されば此の塔を古くは何れも駄那羯磔迦 (Dhanakataka) の大塔、若くは駄那羯磔迦城東の大塔等と云つてゐる。駄那羯磔迦は現今ダラーニコッタ (Dharani-Kotta) と云ひ、謂ゆるアマラプチ町の西方に位した城跡である。カンニングハム氏によると、元來、此の駄那羯磔迦 (Dhana-Kataka) なる名は Drona-Dhatu に由來したのだと云ふ。即ちある量 (drona) の舍利 (dhatu) を有する國の義で、昔この國の王が釋迦佛の舍利を得て、そのため非常に立派な制底 (Chaitya) を建てたに基くと云ふ。さうして次にいろいろ記した後に、西域記には此のア馬拉プチ塔に相當する記事を欠いてゐるが、其理由は玄奘當時の駄那羯磔迦國の首府は、今のベジュワダで、その西十七哩にある古案茶羅王朝當時の首府たるダラーニコッタ (Dharanikota) には行かなかつたであらう。といふ様なわけで、パージェス説と同じらしい。併しシウエル説では第八世紀に屬する刻文があるさうだから、「此塔は少なくとも第八世紀末迄は存在したことは事實である。故に玄奘當時に此塔は存在したので、たとひ玄奘の記事がないからと云つて此塔が已に存在しなかつた譯ではない」とある。

其他ビンセント・スミス (Vincent Smith) やコーディントン (Codrington) 等の説もいろいろあるが、其一部は嘗て紹介をしたしするから、今回は省いておく。

一五六は一八一七年(文化四年)の實測圖で、私の手許にある最古の圖である。然るに曩に引いた【密教研究】第十六號の口繪には一八一六年に於ける平面圖がのせてある。其表題に "Sketch of Deepaul-dinna at Amrawuty in its present state, March 1816" と四行にかいてある。中央に略ぼ方形の池

があり Intended Tank といふ字だけ辛ふじてよめるが、あとはどうも判然しない。周圍繞道のうち、東南の一象限に玉垣の柱が相當に残つてゐたらし、Six Stones, 20 Stones very.....等いふ字も見えてゐるが、これ等は内側の夫れで、外側の分は文字はよく讀めぬが14本と7本と、間が3本位ぬけてゐるだけで、石は明らかに見えてゐる。何分版が小さいので、折角の複製ながらはつきり判らないのは隔靴搔痒以上に遺憾である。夫れでもタンクを掘らうとしてやめた其タンクが、中央にかいてゐるのは面白い。夫れに比べてみると、僅か一年後には随分變つたことが圖上によく現はれてゐる。其東南の一象限に於ける石の數も彼此比較がでにくい。けれどもあの圖にはスケッチとあり、此には「マッケンジー大佐の實測に基き」とかいてあるのだから、一八一六年に於ける狀況より、一八一七年に於ける有様の方が、圖上からは確かであらう。それが一八八二年(明治十)になつたときは、あまりにひどくなつて了ひ、直徑162呎7吋の圓形凹所の周圍に、僅に玉垣の一部、而もほんの僅かの部分が残つてゐたのであつた。これにはカーネル・マッケンジーの名はなくて、ただ單に「一八八一年の實測に基き」とあるだけである(アマラバチ・アンド・ジャック・ギッイヤハタ) 附圖第四參照。

一八一七年の實測圖に於いて、點線の部分は總て破壊されてゐるが、それでも禮拜道の舗装も東方は殆んど完存してゐた。併し塔身は破壊して取出した煉瓦は町家の建築に、石片は寺院の修理及び新築に利用された。土王は寶探しを初め、塔身の中央から石の小箱を掘り出したさうである。其箱の内には小さい眞珠と若干の金箔等を収めた水晶の小箱があつたさうである。併しこれ等は後にエリョット (Sir

Walter Elliot) が取戻して、マドラス博物館に送ったさうだが、私はみた事がないから、今でもあるかどうか知らない。尙ほエリオットは其あとをタンクにしようと思いたが、中止したさうである。さうすると一八一六年の圖にインテンデッド・タンクとかいてあるのは、少し氣が早過るやうだが、何分調べる材料が手許にないので、よく判らない。

掘り出した土は大部分禮拜道及び外側玉垣の邊に捨てたので、ある程度迄は夫れが反て幸となり、土中に埋められたために、これ等を保護するのに大分役立ったさうである。一八四五年(弘化二年、今よ)にエリオットは更に發掘を試み、多數の彫刻した石を發見したさうである。

其後バッキンガム侯(チューク・オブ・バッキンガムとあるだけで、名は判らないが)の命により、又復ほぐり返し、遂に一八八二年には殆んど何もなくなつてしまつた。つまり一八一六年來、石片はそれに如何に立派な貴重な彫刻があらうと、そんな事は關係なしに石灰採取のために焼いて了つたが、幸に西北部の禮拜道に残存せる舗装の下に、彫刻した大理石の破片が埋没してゐたことが判つたので、外側玉垣が建設された時代より後に修理が行はれ、此塔又は附近の他塔婆に用ひてあつた彫刻の不用に歸した部分を破壊して使用した證とすることができるのである。其他いろいろの彫刻が附近から發見されたさうである。

* The Raja then began to search for treasure, and in the centre of the stupa was found a stone casket, inside which was a crystal box containing a small pearl, some small leaves of gold, &c. (AMARAVATI AND JAGGAYAPETA, p. 22.)

玉垣圓文の彫刻には面白いのが多いし、又美術上模範たり得る立派なものもあるが、一一記載の煩にたえないし、ここでは其必要を認めぬから略すとして、塔婆の形をしてゐるものに就いて一通りかいておく。一五七・一五八に掲げたのが即夫であるが、前者は全形で後者は其一部である。基部に立派な玉垣があり、塔身もまた一面に薄肉の彫刻を以て裝飾されてゐるが、かかる種類の彫刻のせいか平頭が物淋しく、上方の平板も寶篋印塔の笠の如く、もつと數多くあつた方が形がいいと思はれるし、其上の相輪も場所がないためもあらうが、小さいのが兩方に一つづつあり、例の吹流しも僅に一旋づつしかないし、どうも纏りがついてゐない。

此彫刻は一八八一年迄はマスリパタム (Masulipatam) にあつたさうで、高さ五呎八吋×幅五呎十吋で殆んど正方形。塔婆の部分高四呎 $1\frac{1}{2}$ 吋×幅四呎〇吋。周圍の玉垣は正面に出入口があり、其左右にも刻してあるのでみると、ほんとうの塔なら其四方にあつたことが容易に想像できるのである。正面には下に半圓石があり、其上に佛の座、其上に寶輪、其上に——寫眞が甚だ不明瞭であるが——轉寶輪の釋迦像が刻んである。

中央の部分の彫刻は石片によりてそれぞれ異つてゐる。例へば釋迦・龍王(佛足を禮拜せる)・多頭蛇・菩提樹・佛座と舍利容器・醉象の降伏等がある。次に注意すべきは、正面の中央、此場合にはダルマ・チャクラの上方に立てる五本の柱である。其基部は方形で上方は八角形、柱頭は四角でそれに彫刻がある。斯様な柱は實際の塔婆にも存した證としては、ジャッキアイヤペタ (Jaggayapeta) の塔婆に於いて實

物が発見されたさうである。さうして刻文により、これ等は *ayaka khambe*。——何とよむのか。字の通りならアヤカ・カムベだが——といふ名であつたさうである。

伏鉢基礎には其周圍に釋迦一代記其他の彫刻があり、其上方にも同じく周圍に方形及び圓形の平たき裝飾をつけてゐる。平頭及び其上のところは、既に記した通りである。

塔婆の左右にある輪寶柱の下部には佛座を刻し、上に二つの座褥を置き、下に小佛足石あり(この有様は正面門を入つたところに刻まれた佛座の取扱と全く同じである)柱上部に千輻の輪寶があるが、其周はトライシユラ (*Trisulas*、佛寶僧を現はしてゐるといふ)を以て飾り、美しく彫刻されてゐる。柱の左右には馬に乗つてゐる人像を刻してあるが、其中央のもの、即ち上からも下からも三つ目の馬は人面である。この人面馬身の動物は寫眞が朦朧でよく判らぬが、馬人 (*Centaur*) と馬との中間に位するもので、餘程變つたもの。先づ例の白澤の變種とも見られるので、可なり面白いのである。千輻輪寶の上で乾闥婆 (*Gandharva*) が騒いでゐるのが、少しばかり氣に入つた。此他に伏鉢の兩側及び上部横帯に降魔の様な光景を中心に、込み入つた彫刻がある。實にめまぐるしい程込み入つた彫刻である。

一五九は相輪が極端に發達したもので、不完全な一部分現れたのも數へると四十個近くある。伏鉢周圍に方形及圓形の平たき裝飾や花綵をつけたところは、既に前圖の解説に書いたし、正面に五頭蛇を刻したのも類例が多い。此五頭蛇は一個の相輪を頂き、其周縁より左右に一旒づつの吹流しがつけてある。塔の基部を反花で飾つたところに注意するを要す。

アマラバチ大塔は第二世紀の初めに創建され、其後幾多の經緯を経て、遂に地上から全く消え去つて了ひ、今はロンドンに於けるブリチツ、シユ・ミューゼウムとマドラスのマドラス・ミューゼウムに其係を存するだけである。

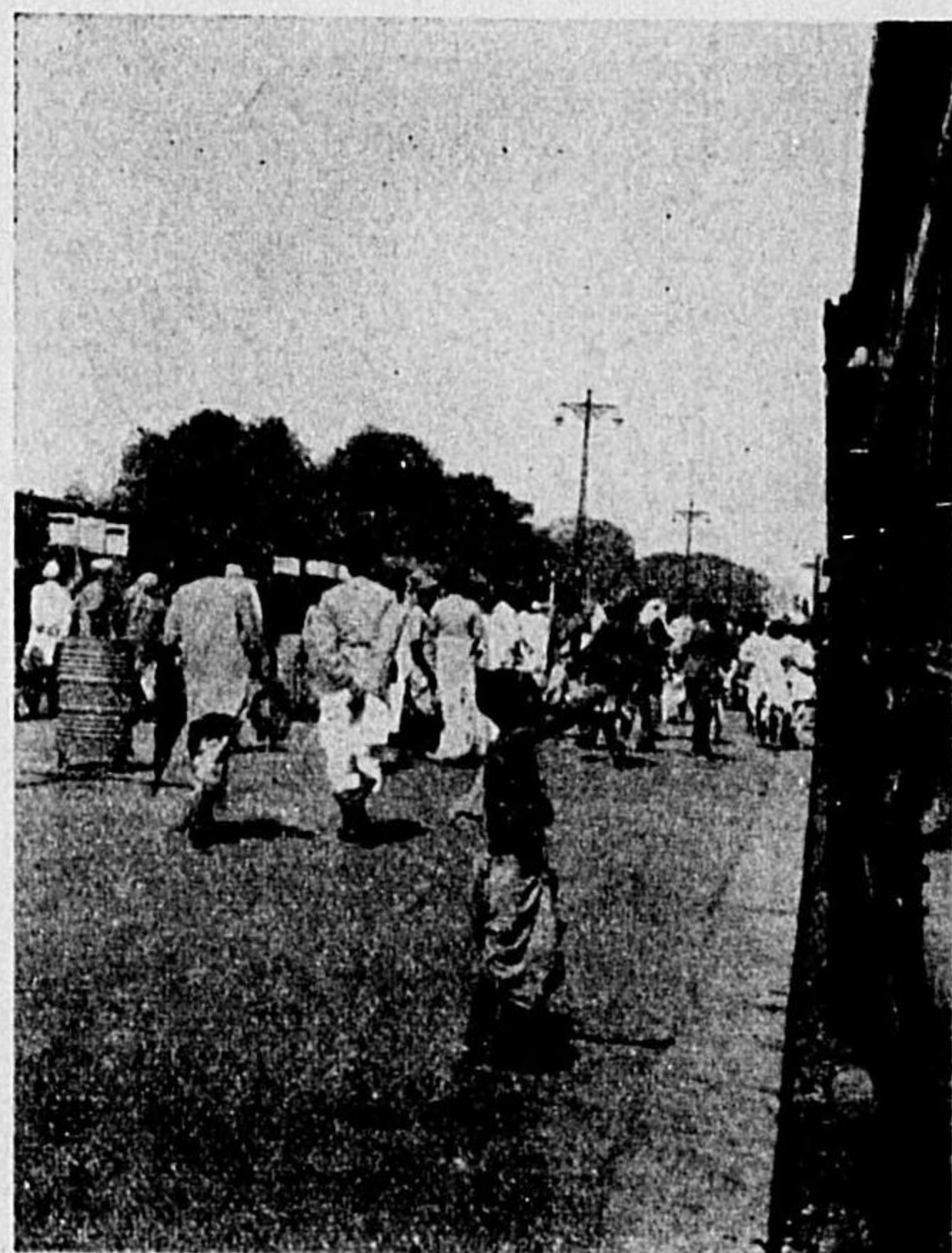
(昭和十二年五月二十八日稿了)

以上で印度に於ける私の見學した佛塔に就いては記載したつもりである。他に祇園精舍址にも奉獻小塔があるし、クシナガラには涅槃塔と荼毘塔——前者は近年再建した新しいものであり、後者は崩壊したままであるが——とがあるが、此等に就いては既に以前に夫れ夫れ記したから、今回は省略しておく。さうすると残るはネバル國の佛塔である。仍てそれ等を下巻に記さうと思ふが、旅行の許可が得にくいところであるし、どういふ方面から行くのか知らぬ人が多いだらうから、私は序に入國の順路や旅行の有様を記して参考に供すると同時に、同國の風景を紹介し、さうして同國首都にある珍しい形——といつても印度の塔婆に似てはゐるが——の佛塔と、多少其影響を一部分に受けたと思はれる印度教祠の寫眞を掲げて、一通り記載しようと思ふのである。

(昭和十二年六月五日追記)

印度佛塔巡禮記

(第十回)



サマステブル驛一景

(昭和十一年三月十二日)

七三、モカメー・ガートからラクサウル^(IV2)へ

三月十二日にはどうしてもラクサウル(Raxaul)といふ所に行かねばならぬのである。理由はネパール入國許可につき、旅券受領等の手續を要するため、ラクサウルにつく確かな日を知らせよといふ公文書が、同國政府から甲谷他總領事館へ來てゐたので、日取を充分考へて、十二日中に必ず着する旨を返事したので、汽車の事故があるか、或は私が病氣にでもなったら別だが、さうでない限り違約をして、許可を取消されたりしたら、それこそ大變だから、何を措いても日を間違はぬ様にせねばならぬ。時刻表を調べたところ、朝六・三〇にモカメー・ガート驛から連絡船にのると、汽車の郡合もうまく行き、同じ日の夕刻につけるので、後れたが最後、これが此方面からの終列車だから、この日にはつけぬことになるのである。

昭和十一年三月十一日、ナランダ精舎址の見學を終り、驛から汽車でブクチャアルプールに出で、本線に乗換へ、モカメー・ガート驛に二〇・五六着。直に待合室へ行つてみたら、ここは一二等合造なので、先づ第一に失望落膽をした。これではタキシラ驛で二度もなさない經驗をしてゐる様に、やかましくて到底寝られまいといふ豫感がした。此豫感是不幸にして大當りに當つてしまった。尤も私が此室に入った時には、誰も居なかつたので、萬一を僥倖しながら、適當な一隅を見つけて持參の輕便寢臺を

組立て、成るべく早く寝入るべく試みたが、目的を達せぬうちに最も情ない事件が起つた。

此驛は交通の衝に當つてゐると、分岐點であるのと兩方から、總て急行でも何でも汽車は停るので割合に繁昌してゐる。それが待合室に及ぼす影響も可なり多大で、人の出入が割合にある。ところどころ頃か記憶はないが、二人の印度の男が入つて來た。大きな聲で話をしてゐるので、これは困つた事になつたと思ひながらも、そのうちに出かけるだらうと思つてゐたが、中中さういふ風は見えず、遂に備附の寢臺に寢轉んで、尙ほ盛に話した。そのうち十時になつたので、ともかくも消燈をした。

消燈しても隅に陣取つた二人はしづまらない。そのうちに他の旅客が入つてきてランプをつけた、新入者は四五人ゐたが、皆極めて靜かであつた。そのうち二三・三七になつてベナレス・エキस्प्रेसがでたので、皆これののつて行てしまつたが、不幸にして騒がしいのが二人残つた。さうして少しも話をやめない。大體自分さへよければ、人はどうでもかまはないといふ考へからか、汽車中で酒宴を始めた。大聲をだして喋つたり、宿屋へ泊つては隣室に朝早く出發する客が泊つてゐると、一切頓着なしに、深更に至るまで女中相手に酒をのんだり、碁を打つたり、我儘勝手な振舞をするのは、「江山洵に美」しき大和島根の特産物とばかり心得てゐたのに、廣範圍に互り東洋に分布してゐるものと見え、恒河河畔に於いて私自身たしかに目撃したのであつた。而も特別入念の奴だから少なからず恐縮して了つた。併しやはりシンがつかれてゐるせい、寢た様な寝ない様な朦朧曖昧状態が續き、遂に夜中の一時、つまり十二日の午前一時に眼がさめたが、未だ話をやめない。そこでつけ放してあつた燈火を消